

第四章 中学校

一九四七（昭和二二）年制定の「学校教育法」により新制中学校が発足した。旧学制においては、小学校が八年制（四〇年度まで尋常小学校と高等小学校、四一年度から国民学校初等科と同高等科）で、中学校・高等女学校・実業学校から成る中等学校の多くは尋常小学校（国民学校初等科）に接続していた。また、過半数の子どもは小学校（国民学校）を出て就職しており、就労しながら学ぶ勤労青年教育機関として青年学校があった。青年学校は男子のみ三九年度から義務教育とされた。小学校の義務教育六年を終えたあとは、共通して学ぶ学校はなく、また国民学校高等科は、四一年の国民学校令では義務化することになっていたが、戦局の悪化で延期された。新制中学校は、すべての小学校卒業者を入学させる義務教育機関として創設された。また、中学校は独立校舎とすることが求められた。新制中学校は、旧制の学校のいずれをも母体としなかったから、新たに校舎を確保する必要があり、また中学校教員の免許状も創設された（発足直後には青年学校や小学校の教員が異動してその教育にあたった）。

中学校の設置は小学校と同様に市町村の責任とされ、多くの市町村は中学校の設置とのための校舎・教室の確保に苦慮した。中学校卒業者は、一九五〇年代は半数近くが就職し、残りが高等学校に進学した。五〇年代には勉強（学校）が嫌い、経済的な理由などによる長期欠席者が多く、「夜間中学校」と呼ばれる夜間学級も一部に設置された。高等学校における入学者選抜の方法をめぐって、アチーブメント・テストの扱いを含めて、五〇年代から六〇年代にかけて、中学校と高等学校との間で意見対立が続いた。

本章は「第一節 被占領期の中学校」「第二節 独立後の一九五〇年代の中学校」「第三節 一九六〇年代の中学校」の三節から構成される。各節にはその時期のさまざまな内容の資料を時系列に並べて収録した。第一節と第二節の画期は、占領が終了して軍政部が消滅するとともに、すべての市町村に教育委員会が設置された一九五二年であり、第二節と第三節の画期は、高度経済成長のもとで企業社会が成立し始めたといわれる一九六〇年である。

中 区 新 制 中 学 設 置 状 況		中 区 新 学 制 実 施 準 備 協 議 会 委 員 案	
校 名	学 区 域	生 徒 数	学 級 数
吉 田		二十二年 九一 二十三 一四 五八 二十四 一八 一〇	一六 二五 三一
和 田 山		二十二年 七〇 二十三 一一 三三 二十四 一三 八八	一五 一二 一九 二四
		使用教室	関係小学校 学級教室数
		同 部 状 況	希望意見 備 考
		1.私立中学校へ幾分入学スル見込 2.吉田ノ児童ヲ本町校ニ移ス	1.立野・元街ノ中二和田山ヲ希望スルモノアリ 2.間門校ハ磯子区ニ転入ノ者アル見込ミ 3.本牧小学校ヲ独立校ニスルタメニ小学校ヲ間門校ニ移ス

校学中野岡				校名		西区新制中学設置状況
域区校沼平・野岡・谷宮				学区域		
24 //	23 //	22 年度	年度			
350	415	383	一	生徒数		
415	383	161	二			
383	161	58	三			
1148	959	602	計			
7	8	8	一	学級数		
8	8	3	二			
8	3	1	三			
23	19	12	計			
23	19	12	教室使用			
40	39	39	学級数	関係小学校		
//	//	60	室数			
○岡野校三階ノ修築ヲ急速ニ施行スルコト ○岡野中学校ニ平沼校分教場ヲオク			希 望 意 見 備 考			

港 南	桜岡 南青年 日日野 永日下 野		南太田	大岡	時田
二十二年 度六八五	二十二年 度六八五	二十二年 度三九一	二十二年 度三九一	二十二年 度三九一	二十二年 度三九一
同	同	同	同	同	同
上二	上二	上二	上二	上二	上二
一四〇	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇	一四〇
二二	二二	二二	二二	二二	二二
五年生マデ	五年生マデ	五年生マデ	五年生マデ	五年生マデ	五年生マデ
工場ヲアケル	工場ヲアケル	工場ヲアケル	工場ヲアケル	工場ヲアケル	工場ヲアケル

計 合 区 全			校 学 中 松 老			校 学 中 西		
			域 区 校 東 ・ 松 老 ・ 松 本 一 ・ 部 戸			域 区 校 部 戸 西 ・ 前 西 ・ 台 荷 稻		
24 //	23 //	22 年度	24 //	23 //	22 年度	24 //	23 //	22 年度
1206	1402	1298	369	457	427	487	530	488
1402	1998	435	457	427	63	530	488	211
1298	435	174	427	63	37	488	211	79
3906	3135	1907	1253	947	527	1505	1229	778
25	28	27	8	9	9	10	11	10
28	27	8	9	9	1	11	10	4
27	8	4	9	1	1	10	4	2
80	63	39	26	19	11	31	25	16
80	63	39	26	19	11	31	25	16
126	125	127	42	40	42	44	46	46
		177	//	//	61	28 //	□ //	56
			○市庁舎ヲ他ニ物色シテ老松校舎ヲ中学校 ヲ舎ニ使用出来ルヤウスルコト ○当分東校内ニオク ○可成太田校ヲ南区ヘ分離スルコト ○図書館使丁ノ小学校舎使用ノ停止			○水道局ハ直チニ立退キ教室ヲアケルコト ○少クモ五室ハ直ニ空ケルコト 稻荷台校ノ増築ヲ急グコト 西前校内ニ西戸部小学校ヲオク		

校学中浜									校学中岸根									校名
全学三富杉浜 部区校岡田									全学三滝磯根 部区校頭子岸									学区域
24年度			23年度			22年度			24年度			23年度			22年度			年度
3	2	1	3	2	1	3	2	1	3	2	1	3	2	1	3	2	1	学年
三七四	四九二	四五二	一一一	三七四	四九二	〇	一一一	三七四	六四五	七二八	六〇三	二三一	六四五	七二八	一四二	一一二	六四五	生徒数
一三一八			九八七			四九五			一九七六			一六〇四			九九九			
六	八	八	二	六	八	〇	二	六	一一	一三	一〇	四	一一	一三	三	四	一一	学級数
二二			一六			八			三四			二八			一八			
二二			一六			八			(不足二二)			二八			一八			使用教室
富岡 杉田 一四室 三一学級 一二学級 二七室									磯子四五学級 旧根岸校ノ分 教場二十教 室、十学級ヲ 置キ、旧浜校 ノ分教場二四 教室四学級ヲ 置ク 滝頭三九学級 三三教室									関係小学校 学級数及室数
富岡 杉田 ナシ 二年迄									磯子 滝頭 一年及 二年ノ 八学級 十二年級									関係小学校 二部状況
適当ナル校舎ノ買収、又ハ建設方ヲ要望 シ、休校トナレル浜校ノ再興ヲ希望ス									二十二年度ニ於テサヘ関係小学校ハ二部 ヲ二年迄実施シ、二十三年度以降磯子小学 校ハ四年マデ十八学級ノ二部ヲ実施スル ニ至ル、更ニ完成年度ニ至レバ、中学サヘ 三十二教室ニ三十四学級ヲ収容セネバナ ラナクナル、独立校舎ヲ望ムコト切ナリ、									希 望 意 見

磯子区新制中学設置状況

磯子区新学制実施準備協議会委員案

校学中浦六									校学中沢金								
六 浦 大 道 釜 利 谷 三 校 学 区 域 ノ 全 部									金 沢 小 学 校 ノ 学 区								
24 年度			23 年度			22 年度			24 年度			23 年度			22 年度		
3	2	1	3	2	1	3	2	1	3	2	1	3	2	1	3	2	1
三二九	四四八	四〇三	一二四	三二九	四四八	二二	一二四	三二九	三二八	三九五	三四七	一五三	三二八	三九五	八一	一五三	三二八
一一八〇			九〇一			四七五			一〇七〇			八七六			五六二		
六	八	七	三	六	八	一	三	六	六	八	七	三	六	八	一	三	六
二一			一七			一〇			二一			一七			一一		
二一			一七			一〇			二二			一八			一二		
六 浦 大 道 釜 利 谷 三 校 学 区 域 ノ 全 部 釜利谷 一二学級 六室									金 沢 小 学 校 ノ 学 区 四〇学級 一八室								
六 浦 大 道 釜 利 谷 三 校 学 区 域 ノ 全 部 釜利谷 一二学級									金 沢 小 学 校 ノ 学 区 五年マデ 二部ノ 必要アリ								
① 初年度ニ於テ過半学級ノ二部、二年度以降大半学級二部教授ノ余儀ナキニ至ル、而モ大道学校ノ校舍ハ極メテ不完全ナル仮建築及□(一文字または二文字判読不能)ヨリノ転用校舍ニテ二千数百ノ学童ヲ到底収容シ得ルモノニ非ズ、以上ノ理由ヨリ早急ニ一校舎ノ新築又ハ転用ニヨリ大浦小学校復活ヲ要望スルコト切ナリ									① 二十二年度末マデニ独立校舎設置ノ必要アリ								
② 二十二年度ハ六浦中学校ニ大道小学校ノ分校ヲ併置シ四年以下十四学級ヲ置ク									② 附近ノ施設ヲ借用シテ二部授業緩和ヲ図ラレ度シ 〔牛込臨海園ノ校舎借用〕 四谷 〃 ニヨリ六教室								

同 校学中四第	同 校学中三第	同 校学中二第	区川奈神立市浜横 校学中一第	校名		神奈川区新制中学設置状況	神奈川区新学制実施準備協議会委員案
				学区域	生徒数		
白幡小学 校の学区	子安小学 校の学区	浦島小学 校の学区	幸ヶ谷 栗田谷 齋藤分 三ッ澤 の各小学 校の学区	二十二年度 六四三	二十四年度 一、五三九	二十二年度 一二	二十二年度 一二
三八六	三〇三	五七三		二十二年度 七	二十四年度 一五	二十二年度 七	二十四年度 一五
八九六	一、〇〇三	七七六		学級数	使用教室	関係小学校	同上
七	五	一〇		学級数	使用教室	関係小学校	同上
一五	一七	一三		学級数	使用教室	関係小学校	同上
七	五	一〇		学級数	使用教室	関係小学校	同上
一五	一七	一三		学級数	使用教室	関係小学校	同上
七	五	一〇		学級数	使用教室	関係小学校	同上
一五	一七	一三		学級数	使用教室	関係小学校	同上
三二	三九	二六		学級数	使用教室	関係小学校	同上
二九	二九	三四		学級数	使用教室	関係小学校	同上
四年	五年	二年		学級数	使用教室	関係小学校	同上
位置 白幡小学校	位置 子安小学校 浦島中学校へ一部を委託す	位置 浦島小学校 子安中学校の一部委託を受く	位置 幸ヶ谷小学校 二十三年度三ッ澤校新築移転 に伴ひ栗田谷校舎に移転	希望意見			

磯子区学校制度準備委員会は上記の通り決定報告致します。併し右は中学校の目的及教育効果の点より見て不十分なることは言ふ迄も無きところであります。更に中学校設置が小学校児童の犠牲に於て実施されたもの故、一日も早くこの状態が解除されるの要があります。

以上中学校、小学校何れの面よりしても切に切に独立校舎新設の要望をするものであります。

同 第五中学校	
神橋小学校の学区	
四四六	
九二五	
八	新制中学校の職員室を含まず
一六	
八	
一六	
二四	
二六	
三年	
位置 神橋小学校	

神奈川県新制中学校設置状況					神奈川県新学制実施準備協議会委員案				
校名	学区区域	生徒数 二十二年度	学級数 全上	使用教室	学年級数	関係小学校	室数	同部状況	希望意見
青木	幸ヶ谷 三ツ澤 栗田谷 齋藤分 神橋 池上 の各小学 校の学区	一、〇八九	一八	一八	九〇	七五			第一案 三菱青年学校使用 第二案 現幸ヶ谷小学校に置く 幸ヶ谷校は栗田谷校へ移転 但し一、二、三年は幸ヶ谷校に残置する 右第二案の場合は齋藤分小学校は神橋校に移転
浦島丘	子安 浦島 白幡 の各小学 校の学区	一、二六二	二二	二一	九七	九七			位置 浦島小学校 一、浦島小学校は同中学校の余剰教室を利用

- 一、浦島丘中学校の二十四年度の生徒数は二、六七五、学級数は四五、使用教室は四五
- 二、必要の場合は県立第二中学校に若干生徒を通学せしむる
- 三、青木中学校の二十四年度の生徒数は二、四六四、学級数は四二、使用教室数は四二

講三

潮田		分校	生麦		寺尾		末吉		豊岡		市場	校名	生徒数		学級数	使用教室	学年	希望意見
全区域	潮田下野谷ノ	域	生麦岸谷校ノ		東台旭校ノ全		末吉校全区域		豊岡、芦穂		市場、矢向	校全区域						
三八五			二九六		二八八		二三二		二六〇		三二八		一年					
		六二二											二年					
		七二											三年					
七		一二	五		五		四		五		六							
八		一三	六		六		五		六		七							
下41 職13 21-17		生29 講四14	岸18 15		旭東1330 1023		末38 95		芦豊1229 619		矢市2528 1528		関係小学校 学級数及室数					
六年迄		五年迄	二年迄		三年迄		五年迄		六年迄		五年迄		同上 二部状況					
(下野谷小学校二併設)		(生麦小学校二併設)	(岸谷小学校二併設)		(東台小学校二併設)		(末吉小学校二併設)		(豊岡小学校二併設)		(市場小学校二併設)		希望意見					

鶴見区新制中学校設置状況

鶴見区新学制実〔施〕準備協議会案

学中岡都	学中川俣二	学中島川	学中谷ヶ土保	校名	保土ヶ谷区新制中学設置状況 保土ヶ谷区新学制準備協議会委員案
小都 区学 域校岡	小二 区学俣 域校川	四市峯星川 小学沢川島 校区域	三今岩保土 小学校井崎ヶ 校区域谷	学区 区域	
三二一二年 年生年生 生 一 九八七 一〇〇	三二一二年 年生年生 生 一 三三三 八四五	三二一二年 年生年生 生 一 五五五 一四九	三二一二年 年生年生 生 一 四四四 九〇四	生徒 数 二 十 二 年 度 二 十 四 年 度	
九六	八五	239 二七 一四	128 二四 一二	学級 全上 数	
		14	12	使用 教室	
二二 〇学級 教室	一八 一四学級 教室	二五六 三二一 二 三三〇二	五五 七七 二 六二七	関係小 学級数 及室数	
六年迄	六年迄		ダメ	全 二部 状況上	
二俣中学二全シ	当初ハ併設トシ独立中学 望ム ノ新設ノ速クナラン事ヲ	川島町所在関本電機ノ建 物ヲ使用シ独立中学トシ タシ	岩井町原所在ノ石油工学 ノ建物ヲ使用シ独立中学 トシタシ	希 望 意 見	

附記

保土ヶ谷区トシテハ左ノ建物ヲ買収シ保土ヶ谷中学川島中学ノ二中学ヲ独立スルノ外手段無シ

岩井町原所在 石油工學院 (保土ヶ谷中学)

川島町所在 関本電機工場 (川島中学)

尚買収ニ当ツテ其ノ費用ノ一部地元負担ノ已ムナキニ至ルモ之ヲ敢行シニ中学ノ独立ヲ切ニ希望ス
右採択ノ後ト雖モ市ニテ別設ノ計画ヲ実施セントスル場合ハ必ズ区協議会ヘ合議ノコト

注 横浜市史資料室所蔵の簿冊「岡野一年目」(長谷川雷助旧蔵資料)に収録されている。ところどころに手書きの書き込みがあるが、保土ヶ谷区の「保土ヶ谷中学」「川島中学」の「使用教室」「関係小学校学級数及室数」欄を除いて収録していない。これらの欄については、空欄に手書きで数字が書き込まれており、それを収録した(ただし手書きで書き直した箇所が多く、確定的な数字かどうか判断としない)。

二 川崎市教育委員会『学校施設荊茨の道』抜粋

学校施設荊茨の道

川崎市教育委員会

第二編 新制中学校の発足

〔前文略〕

一 小学校を圧迫した中学校

①大師中学校は元大師家政女学校六教室及小学校を借受け為に小学校は二年迄の二部を余儀なくされ、川中島中学校は川中島小学校に同居、理科、工作の室を間仕切した部屋を使用し、物置を校長室にする等の措置をとった。小学校は四年迄一四学級の二部授業実施となった。

②又臨港中学校は桜本小学校を使用。此の建物は焼失を免れたけれども警備隊の兵隊がいたり、終戦后机、腰掛、建具、硝子とを盗まれ荒廃した教室に授業を継続して行かなければならなかった。だが、小学校は生徒増は少く二部授業まで行はなかったのはせめてもの幸いであった。

③中原中学校は、中原小学校のボロ教室八教室を借受けて出発、職員室は昇降口のコンクリートの上に机を置き実に惨めな日常を送っていた。

④稲田中学校は登戸小学校八教室を使用。為に登戸小は従来二部授業など行っていたことがないのに六学級二年迄二部授業となった。

⑤柿生中学校も同様、柿生小より四教室を借用間借り生活により発足したのである。

二 ボロ建物利用の中学校

①田島中学校は元東渡田小学校焼失校舎の跡に焼残ったバラックの雨天体操場と元青年学校の銃器室があったのを間仕切をして四教室をつくり、銃器室を職員室として発足した。当時建築材料は乏しく、予算はなく、為に雨漏りは

するし、天井はなし、全市中最も酷いボロ校舎であった。後に文部省で六三制建築予算獲得の為の資料として新制中学困窮の光栄(?)ある代表に選ばれて昭和二十三年十一月時の文相高瀬荘太郎氏が視察に来られたこともあった。

②富士見公園の中に戦時中警備隊がいたバラックの兵舎みたいな建物と公園事務所とがあった。此のボロ建物を利用して出発したのが富士見中学校である。一時は時めく競輪場の車券売場か何かに改装されて後取毀しになったのであるが此の警備隊の兵舎を二教室に仕切り又公園事務所の薄暗い中に三教室を造ったけれども、戦災で住宅を焼失した家族が事務所に居住し校舎内に一般人が生活し、学童と一つ屋根に行動を共にするといふ有様であった。

③学ぶに家なく居るべき処に迷ったのは御幸中学校である。当時池貝鉄工場の倉庫があったが、鉄器具機械が充満しどうしようもない、他に適当な建物もなく結局この建物を教室に仕切るより外に手はなかった。此の倉庫を買収し模様替を施して、どうやら使へるようになったのが昭和二十二年九月である。その間一学期生徒は溝の口の高津中学校建物を借用電車通学したのである。

④玉川中学校も同様に哀れをとぐめた学校の一つである。小学校のところで述べた玉川小学校が借用していた東京造器株式会社の寮の別棟を更に借受け教室などとは思ひも及ばない襖のない押入つきの部屋のボロ畳の上で、又畳もない隙間だらけの床の上に坐っての授業という姿で発足した。

⑤高津中学校は溝の口、日本光学北工場内にある買収建物を改造し一応間仕切だけをして授業を実施床もなければ天井もなかった。適当な広さの教室のよいうな部屋で勉強するといふ形であったのである。後日天井も床も張りはしたが中廊下の寒い北側の校舎は今尚雨の日曇りの日は電灯照明がなければならず一日中陽の入らぬ教室なのであるが、此の建物は現在に至っても見捨てることが出来ず使用している次第である。

⑥現在の西中原中学校当時大戸中学校として発足した。此の学校は、前に橘中学校が使用していた。老朽バラック校舎を大戸青年学校が使うといふ経緯を辿り、命数の尽きた校舎に鞭打って発足した。尚此の建物は新築西中原中学校が完成した。今日に於ても今も大戸小学校二部緩和に重大な使命を果たしているのである。

⑦夫々の学校が夫々苦心している中に住吉中学校も同様に出発して行った。最初不二越精機株式会社青年学校建物五教室を借用していたが次年度には未完成ボロ工場内の土間の上に机を置いて授業をするなどの非常な困窮状態が続いたのである。

三. 軍用建物仮校舎使用

南部戦災地区の生徒数の多いところに建物がなく、生徒の比較的少い北部地区に余剰建物があるのだから皮肉である。昭和二十年、二十一年にかけて確保し青年学校を収容していた元軍用建物が期せずして、新制中学校として使用価値を増大して行った。元東部六十二部隊本部建物は宮崎中学校に登戸第九陸軍研究所建物は、生田中学校に、六十二部隊北廠舎は向丘中学校といふ看板を替へたのである。だが宮崎中学校は部屋の数は余分にあるが教室には小さく、中廊下北側は寒い仮校舎であり、生田中学校は、後日模様替をする迄は、コンクリートの上に間仕切りしただけの天井もない建物であった。向丘中学に至っては、廊下に相当する部分が土間であり、廊下側の窓も仕切りも何もないところから出発して行ったのである。床を張り、仕切りをし、傘をささないで便所へ行けるようになったのは、翌昭和二十三年も終りの頃であった。

〔「四」以下略〕

注 川崎市教育委員会『学校施設荊莪の道』の第二編の「一」から「三」までを抜粋した。発刊の日は不明で、冒頭の「刊行について」の日付は一九五二年八月。

三 新制中学校設置に関する意見書（横浜市戸塚区）

新制中学校設置に関する意見書

戸塚区

一、戸塚区全域が農村地帯である関係上、現在小学校経営に於てすら通学距離遠隔の為、区内九校の内豊田、岡津、川上、本郷、中和田、瀬谷の六校までが夫々一乃至三の分教場を有してゐる状態にあるので、独立中学校設置の為小学校を統合する事は絶対不可能である。

二、戸塚区の当初の案に依れば、大部分が併設となつて居るけれど、岡津及び泉の両校は各建物が同一敷地内にあるだけで、全然別個のものである。

中和田、大正の二校は夫々軍の建物ノ転用が確定的となつて居り本年度中にも独立の見込がある。

戸塚、本郷、瀬谷の三校は夫々学区内に軍其の他の遊休建築物があるので、之を払下乃至は借用して理想的の独立校舎とする決意である。

三、右の事情を諒とせられ、緊急遊休建物の入手と若干の改造に断乎たる手を打つていたゞくやう市御当局の英断を切望すると共に地元としても若干の負担と人馬の労を惜まぬ決意を有するものである。

備考、各校別の詳細なる意見書は別紙の通りです

以上

注 横浜市史資料室所蔵の簿冊「岡野一年目」（長谷川雷助旧蔵資料）に収録されている。

四 新制中学校発足時の公立中学校長の決意書

民主国家平和日本を再建すべき基盤をなす新教育制度の魁である新制中学校の発足に当り吾等はその初代学校長としての聖なる任務に就いた。其の任たるや重且つ大 其の榮譽たるや至高である。

新教育制度の実施に当って外は先に米国教育視察団からの懇篤な報告を受け次いで米第八軍司令部民間情報教育部からの熱心な指導があり内は政府始め県並に市町村当局の絶大な努力と二百万県民の強力な支援のあったことを感謝するものである。

吾等はこれ等の厚意と指導と期待とに對して毅然たる信念と至純な愛と渾身の勇とを傾けて創業の任に当らんことを誓ふものである。

昭和二十二年四月二十六日

神奈川県公立中学校長一同

注 大和市教育研究所蔵の簿冊「教育資料（文書類）」に収録されている。

五 中学校設置報告（津久井郡青根村）

発第六二号

昭和二十二年五月二十日

神奈川知事 内山岩太郎殿

津久井郡青根村長 井上盛雄

中学校設置について

標記の事について学校教育法第二十九条第三十条第四十条の規定により左記の通り報告致します

記

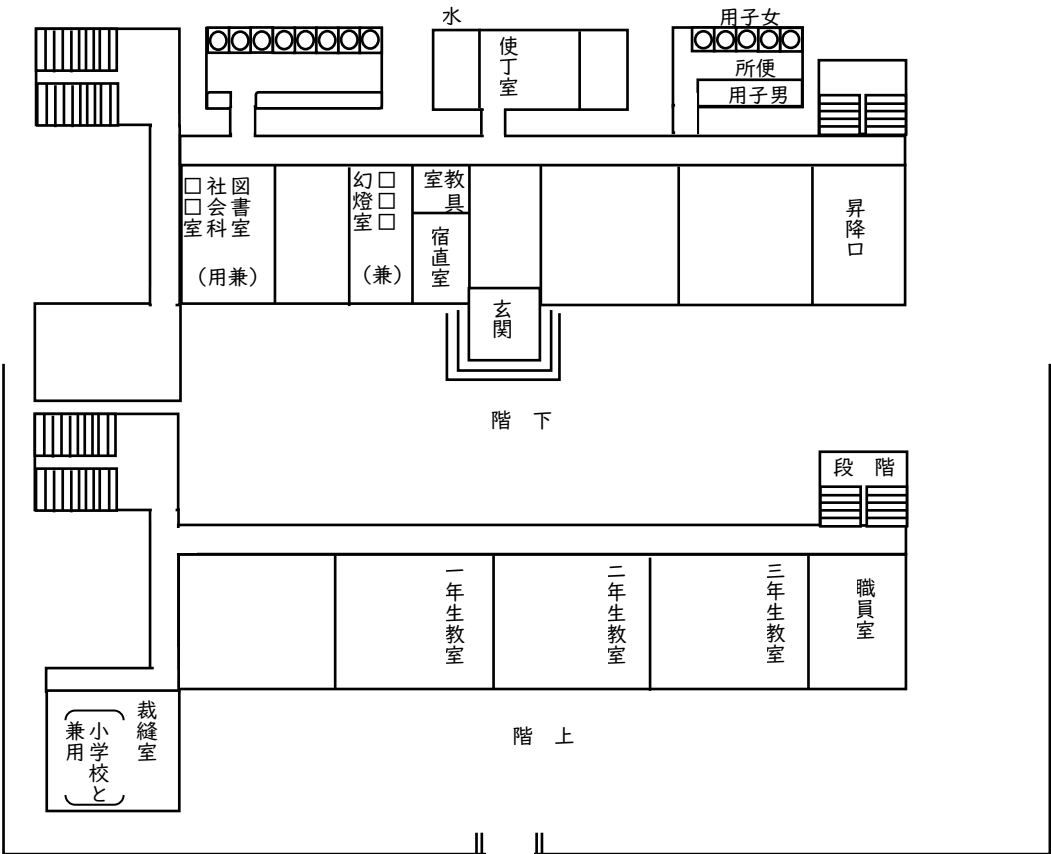
- 一、中学校名 青根村立中学校
- 二、学校の位置 津久井郡青根村字駒入原一三三一番地
- 三、予定敷地平面図 国民学校併置に付き指示により平面図省略す
- 四、予定敷地の地質及飲料水 前項全様併置付き省略す
- 五、予定敷地取得又は借入の方法並に予算書 敷地は村有地にして金銭の収支なし
- 六、校舎の予定配置図 別紙の通り
- 七、就学生徒数及学級編成（性別、学年別）別紙の通り
- 八、市町村の地図（学校の位置及字通学区域）別紙の通り
- 九、中学校設置に関する市町村会の議決書 昭和二十二年五月十九日村会議決書写の通り
- 十、其他（学校組合規約、委託関係） 隣村牧野村の一部大川原、長又の二ヶ部落及山梨県南都留郡道志村字月夜野一ヶ部落別紙図面の区域よりの委託を受く

(六) 校舎予定配置図 1/300

備考 1 空欄ハ小学校用

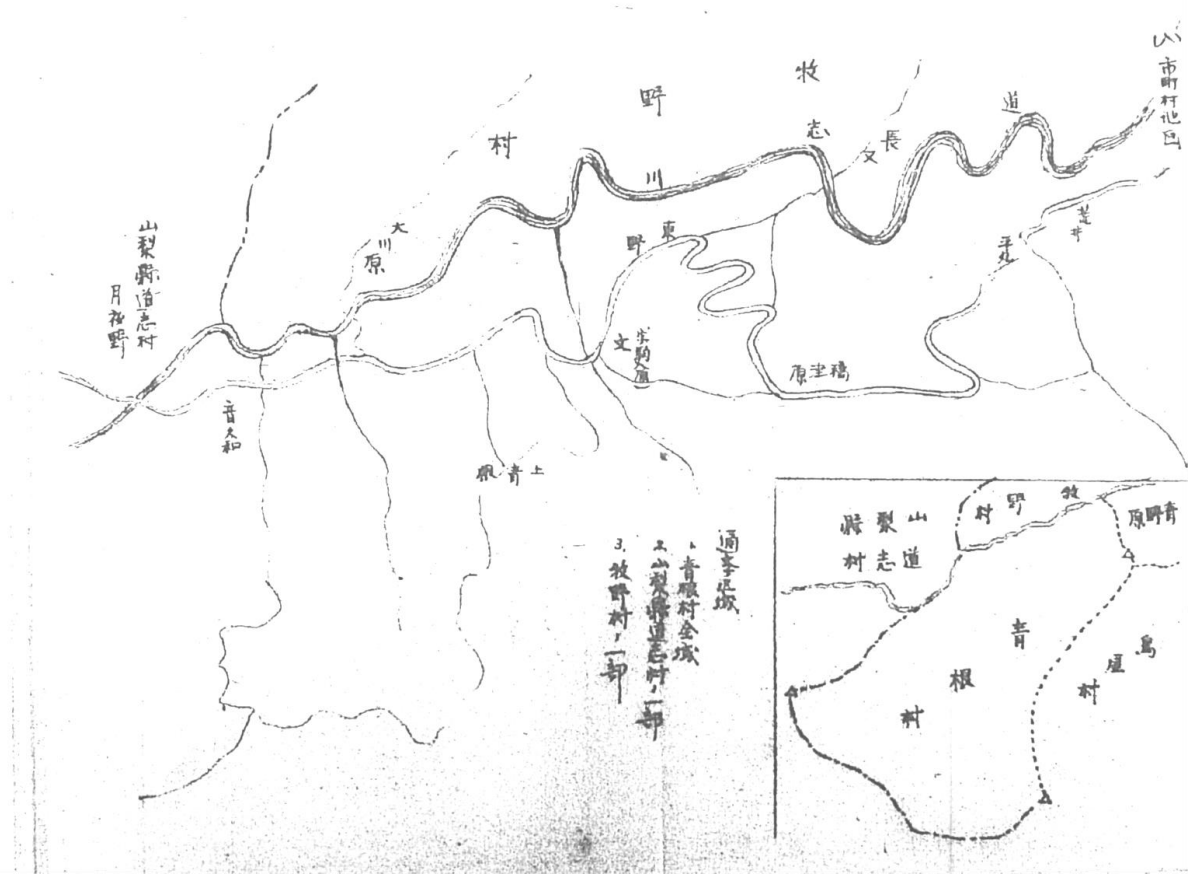
2 教室数 普通教室 3

特別教室 3（小学校と兼用）



計		級学三		級学二		級学一		学級
								学年
女	男	女	男	女	男	女	男	第一学年
二七	二七					二七	二七	
一六	一六			一六	一六			第二学年
一四	三〇	一四	三〇					第三学年
五七	七三	一四	三〇	一六	一六	二七	二七	計
一三〇		四四		三二		五四		合計

(七) 就学生徒数及学級編成



(八) 市町村地図

村会議決書

議案第一七号

青根村立中学校設置について

六、三、制度実施に当り青根村立小学校に併置するものとする

昭和二十二年五月十九日提出

同日原案可決

青根村長 井上盛雄

注 相模原市立公文書館所蔵の簿冊「昭和二十二年 学事書類 青根村役場」に収録されている。

六 平塚市立太洋中学校『学校要覧』

昭和22年6月		
学 校 要 覧		
平 塚 市 立 太 洋 中 学 校		

学 校 現 状 一 覧

一、学級と職員

(昭和二二、六、三〇現在)

学級数			職員数			職員資格			
四	一	年	二	二	年	計	八	現員	不足数
二	六	計	一	五	級対職員	師卒	二	青師卒	専卒
六	八		一、三	五		大卒	一	計	八

二、生徒数

生徒数			学級生徒数			選択科目生徒数			
二〇〇	一	年	一〇四	二	年	計	五二	最高	最低
三〇四	五	計	五一	平均	商業	一〇八	工業	家庭	計
五二	五〇		五四			一四二			

三、学校予算

七〇四六三円	教 育 常 費	
八八四〇円	諸 給	内 訳
四二二二三円	需 要 費	
一九四〇〇円	施 設 費	特 別 教 育
一四三四〇〇円	臨 時 費 育	
一四三四〇〇円	需 要 費	内 訳
二一三八六三円	合 計	

四、設備

(1) 運動場 無し 校舎西側の焼跡を運動場に計画目下整理中
(2) 校舎 別表図表の通り(縦四間 横三間) 二教室(縦二間 横三間) 四教室

元工員寄宿舎 狭隘にして授業に困難 工夫創意により辛じて授業を〔以下判読不能〕

校舎校地獲得に就而の運動は目下強力に展開準備中

机 腰掛(六〇) 石油箱を代用 不足分は一括市にて注文中

黒板 職員の作成せるものにて代用す

教卓 無し(注文中)

揭示板 職員及生徒(修理部)の応急製作せるもの

教具 無し 逐次整備中

運動具 無し

図書 無し 學校文庫を計画(年一万円程度)

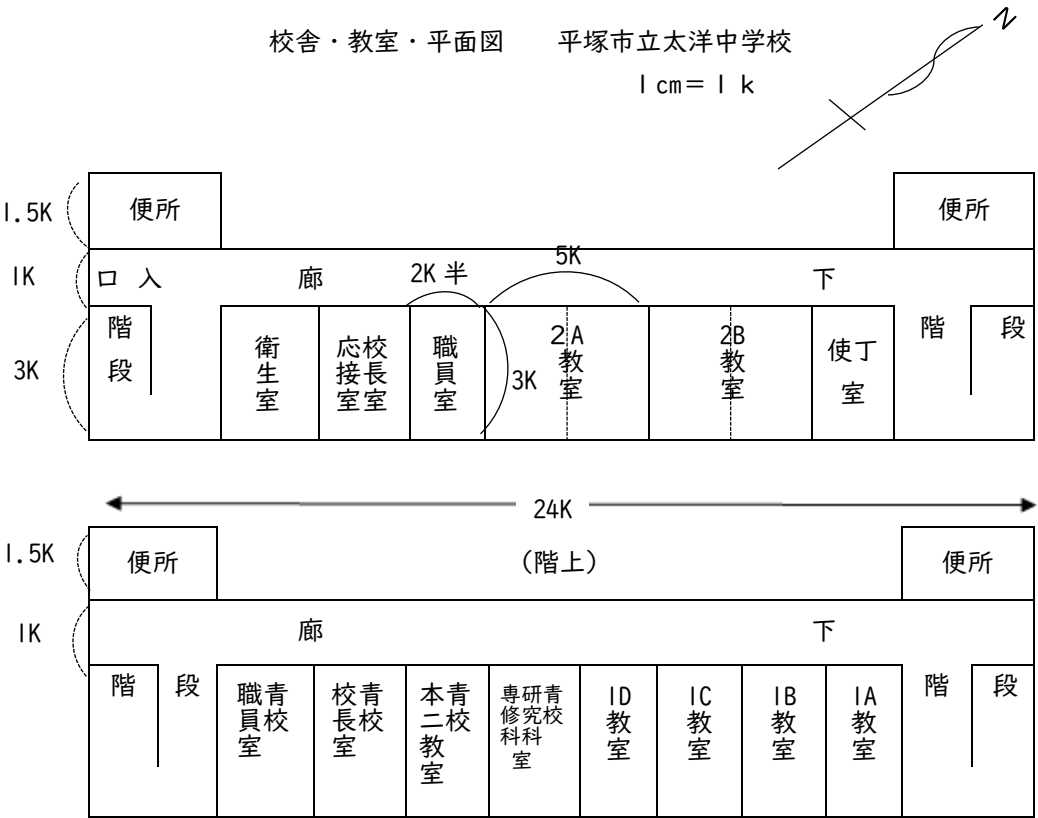
衛生資材 不足

清掃用具 一通り備う

養護婦 無し

(4) 衛生

職員現住所 平塚市立太洋中学校		
1	小永井 信吉	平塚市新宿
2	草山 大藏	平塚市平塚
3	米田 壽松	平塚市新宿
4	熊坂 忠	平塚市平塚
5	府川 浅壽	平塚市須賀
6	藤田 勉	中郡大磯町高麗
7	熊本 みよ子	平塚市平塚新宿
8	今福 啓二	平塚市平塚新宿
9	谷口	高座郡茅ヶ崎町
10	相原 富美江	平塚市須賀



学級編成 学級担任表							
学 級	編成	生徒数		職 業 科			備考
				商業	工業	家庭	
1 年 A 組	男女	男 26 女 24		11	15	24	熊坂 忠
1 年 B 組	男女	男 25 女 25		8	17	25	府川 浅壽
1 年 C 組	男女	男 25 女 25		3	22	25	藤田 勉
1 年 D 組	男女	男 25 女 25		12	13	25	熊本みよ子
2 年 A 組	男女	男 30 女 22		13	17	22	米田 壽松
2 年 B 組	男女	男 31 女 21		7	24	21	今福 啓二
計	6	男 162 女 142		54	108	142	6

外 渉	育 体 生 衛	理 経	務 庶	務 教	昭和二十二年 度 事 務 分 掌 太 洋 中 学 校
○ 草山 府川 熊坂 藤田 米田	○ 藤田 熊本 駿東	○ 米田 藤田 今福 熊本	○ 熊坂 草山 府川 今福	○ 草山 米田 熊坂 府川	
父兄会ニ関スル件 教育後援会ニ関スル件 教員組合ニ関スル件 共済組合ニ関スル件 教育会ニ関スル件	生徒身体検査ニ関スル件 救急看護ニ関スル件 衛生看護ニ関スル件 体育行事ニ関スル件 大掃除・清掃ニ関スル件	予算ノ編成ニ関スル件 市役所関係会計ニ関スル件 地方事務所関係会計ニ関スル件 出張旅費ニ関スル件 備品ニ関スル件 消耗品ニ関スル件 図書及教具ニ関スル件 配給ニ関スル件 会費・其他ノ費用ニ関スル件 校舎・教具等修理ニ関スル件	学校日誌ニ関スル件 往復文書ニ関スル件 公報・法規類纂ノ件 職員勤務状況ニ関スル件 履歴書ニ関スル件 諸願届書、除服ノ件 各種証明書ニ関スル件 生徒出席統計ニ関スル件 案内状、接待ニ関スル件 当直配当ニ関スル件	教育全般ニ関スル件 授業時間割ニ関スル件 授業・教育研究ニ関スル件 儀式・学年ニ関スル件 学級・学業及修養ニ関スル件 職員作業簿、其他ノ帳簿ノ件 学籍簿・出席簿、其他ノ帳簿ノ件 入退学ニ関スル件	
名簿、会費徴集簿	身体検査表及統計表 器具、薬品台帳 体育行事記録綴	会計簿、其他 出張票議簿 台帳 図書台帳 配給控簿	学校日誌 發送受付文書綴 勤務状況控 履歴書綴 届書綴 証明書綴 出席統計表 有志名簿 配当表	教育ニ関スル事項 時間割表、補欠簿 研究綴 式次第綴 自治委員任命 作業日誌 関係諸帳簿 入退学者名簿	
草山 府川 熊坂 藤田 駿東 米田	熊本 駿東 藤田 藤田	米田 米田 熊本 熊本 藤田 熊本 今福	草山 今福 草山 草山 草山 府川 熊坂	草山 熊坂 米田 府川 熊本 熊坂 草山	

外国語	家庭	工業	商業	体育	工 図 作 画	音 楽	理 科	数 学	社 会	習 字	国 語	教科目	教科研究主任及部員 〔昭和二三・五・二〇〕
藤田	駿東	米田	今福	藤田	熊坂	熊本	府川	熊本	熊坂	草山	米田	主任	
熊坂	熊本	草山	米田	府川	今福	駿東	熊本	府川	府川	熊坂	藤田	部員	
									国史ヲ含ム			摘要	
体育部		芸能部		科学部		社会部			文芸部			部別	
体育音楽 体育全般		手芸 工作 習字 図画		算数 理科 研究		郷土 社会 地理 歴史			紙芝居 新聞研究 俳句 外国語			内容	
藤田		駿草 東山		熊熊 本坂		府川			今米 福田			部員	

日	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	一一	一二
五月	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月
六月	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木
七月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
八月	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火
九月	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金
十月	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日
十一月	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水
十二月	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金
一月	年	始	休	業	3	始	業	始	業	始	業	始
二月	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木
三月	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金
摘要												

昭和二十二年年度計画表

平塚市立太洋中学校

二五	二四	二三	二二	二一	二〇	一九	一八	一七	一六	一五	一四	一三
日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火
	検査	身体						父兄会 総会				
水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金
金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日
		中			暑	終業式	校内外 大掃除	習	練	泳	水	
月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水
式業始												
短			暇								休	
木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土
	皇霊祭 秋季											球技 大会
土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月
校内外 大掃除							□□会					
火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木
木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土
					終了式 ²						自由研究 成果発表	
末		年										
日	土	金	木	水	火	月	日	土	金	木	水	火
水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土	金
木	水	火	月	日	土	金	木	水	火	月	日	土
度		年		卒業式 修了式	校内外 大掃除							自由研究 成果発表

	授 時 数	授 日 数	□ □ 数	週 計		三 一	三 〇	二 九	二 八	二 七	二 六
	一 二 二	二 三	二 四	四		土	金	木	水	火	月
						大校 掃内 除外			遠 足	春 季	
	一 四 三	二 五	二 五	四			月	日	土	金	木
									大校 掃内 除外		
	八 六	一 七	一 七	三		木	水	火	月	日	土
								暇			休
	二 四	六	六	一		日	土	金	木	水	火
											除 掃
						業		授		縮	
	一 四 二	二 五	二 五	四			火	月	日	土	金
										大校 掃内 除外	
	一 四 六	二 六	二 六	四		金	木	水	火	月	日
								日業作耕農			
	一 三 四	二 四	二 五	四			日	土	金	木	水
								大校 掃内 除外			
	一 〇 二	一 八	一 八	三		水	火	月	日	土	金
								業		休	
	一 一 四	二 一	二 一	三		土	金	木	水	火	月
						大校 掃内 除外					
	一 三 〇	二 三	二 四	四				日	土	金	木
									大校 掃内 除外		
	九 八	一 七	一 八	三		水	火	月	日	土	金
						業		休		未	
	一 二 四 〇	二 二 五	二 二 九	三 七							

		授業時間表 (太洋中学校)											
		曜 時	月		火		水		木		金		土
一 A	1	職業		理科	熊坂	習字	草山	数学	藤田	音楽	熊本	国語	藤田
	2	外国語	谷口	国語	藤田	理科	熊坂	職業		理科	藤田	職業	
	3	国語	藤田	数学	藤田	数学	藤田	職業		理科	熊坂	理科	熊坂
	4	数学	藤田	外国語	谷口	外国語	谷口	国語	藤田	社会	熊坂	体育	熊坂
	5	理科	熊坂	音楽	熊本	社会	熊坂	理科	熊坂	図工	熊坂		
	6	理科	熊坂	体育	熊坂	体操	熊坂	自研		図工	熊坂		
一 B	1	職業		国語	熊本	社会	府川	国語	熊本	図工	府川	社会	府川
	2	国語	熊本	数学	熊本	理科	府川	職業		数学	熊本	職業	
	3	外国語	谷口	習字	草山	外国語	谷口	職業		社会	府川	数学	熊本
	4	数学	熊本	理科	府川	国語	熊本	音楽	熊本	理科	府川	国語	熊本
	5	社会	府川	体育	府川	図工	府川	理科	府川	外国語	谷口		
	6	音楽	熊本	社会	府川	体育	府川	自研		体育	府川		
一 C	1	国語	藤田	外国語	谷口	職業		社会	熊坂	数学	藤田	社会	熊坂
	2	数学	藤田	理科	熊坂	職業		国語	藤田	国語	藤田	国語	藤田
	3	理科	熊坂	理科	熊坂	理科	熊坂	数学	藤田	理科	熊坂	習字	草山
	4	理科	熊坂	国語	藤田	数学	藤田	外国語	谷口	外国語	谷口	体育	藤田
	5	音楽	熊本	図工	藤田	音楽	熊本	社会	熊坂	職業			
	6	図工	藤田	職業		体育	藤田	自研		体育			
一 D	1	数学	熊本	理科	府川	職業		社会	府川	外国語	谷口	音楽	熊本
	2	社会	府川	理科	府川	職業		数学	熊本	理科	府川	国語	熊本
	3	国語	熊本	外国語	谷口	数学	熊本	外国語	谷口	習字	草山	理科	府川
	4	理科	府川	国語	熊本	理科	府川	体育	府川	数学	熊本	理科	府川
	5	図工	藤田	音楽	熊本	体育	藤田	国語	熊本	職業			
	6	図工	//	職業		体育	熊本	自研		国語	熊本		
二 A	1	社会	米田	数学	米田	国語	米田	数学	米田	国語	米田	職業	
	2	数学	米田	外国語	谷口	社会	米田	外国語	谷口	外国語	谷口	職業	
	3	職業		理科	今福	図工	今福	理科	今福	理科	今福	国語	米田
	4	体育	米田	職業		図工	米田	社会	米田	体育	米田	音楽	米田
	5	理科	今福	国語	米田	音楽	米田	国語	米田	数学	米田		
	6	習字	草山	社会	米田	体育	米田	自研		社会	米田		
二 B	1	社会	今福	国語	今福	外国語	谷口	外国語	谷口	国語	今福	職業	
	2	理科	今福	理科	今福	国語		国語	今福	社会	今福	職業	
	3	職業		数学	米田	図工	米田	数学	米田	数学	米田	社会	今福
	4	外国語	谷口	職業		図工	今福	理科	今福	体育	今福	体育	今福
	5	数学	米田	社会	今福	習字	草山	社会	今福	理科	今福		
	6	国語	今福	音楽	今福	体育	今福	自研		音楽	今福		

注 平塚市立太洋中学校所蔵の簿冊「学校沿革誌 平塚市立太洋中学校 昭和22年度～36年度」に収録されている。
「職員現住所」の一覧表中の各住所の番地の記載は省略した。

七 中学校設置のための寄付金募集

昭和二十二年九月一日

茅ヶ崎町長 添 田 良 信

生徒保護者殿

中学校設置寄附金募集について

昭和二十二年新学期に依る町立中学校四箇所設置予算は百三十五万三千六百一十円に達し 内六十万円は財源欠亡〔乏〕のため 寄附金を以て之に充当することに町会に於て議決されました

寄附金の募集方法については 教育常任委員会にて協議の結果六十万円の内三十万円は 中学校生徒千五百五十人より一人一ヶ月十五円宛寄附金募集し 残額三十万円は 町内特志者より 寄附金募集することに決定されましたから 物価騰貴経費多端の折柄誠に恐縮の次第ですが事情御諒察の寄附金醸出方御願いたします

注 福岡明允氏所蔵の簿冊「昭和二十二年／全二十三年度 新制中学校の教育 茅ヶ崎市立第二中学校」に収録されている。寒川文書館で写真版を閲覧。

八 中学校校舎建築許可申請書
川発第一三三号

戦災地（仮設）建築許可申請書

建築地地名番号	神奈川県津久井郡川尻村川尻二一五八番地
建築物の用途	川尻中学校々舎
建築を必要とする理由	申請 要旨 増築
建築主の住所氏名	初等中学校新設ノ為校舎増築ヲ必要トスルモノ
代理人住所氏名	神奈川県津久井郡川尻村村長 金子鉄之助
工事請負人住所氏名	未定
申請年月日	昭和二十二年九月五日

神奈川県知事 内山岩太郎殿

(一) 事由

本学校組合は、従来地域的に、又生徒数から見ても経営上組合立とするを可とし、青年学校は川尻、湘南、三澤の三ヶ村組合立であつた関係上、新制中学校建築は経費の点に於て一ヶ村では将来経営困難であるので現在迄新学制度実施準備委員会の協議を基として、ここに、川尻、湘南の二ヶ村で学校組合を設置した

現在生徒は川尻一五五名、湘南六〇名で計二一五名を、戦時中、工場に転用していた校舎三教室を補修して使用してゐるが職員室と不足の三教室も小学校舎を使用してゐるような状態で、ために小学校は二部教授をする有様であるから、この際、校舎一棟四教室を増築して教育の万全を期したので新学制度の趣旨を徹底し財源は補助金の外寄附金を一般民から仰ぎ建築しようとする次第である。

注 相模原市立公文書館所蔵の簿冊「昭和二十二年 中学校々舎新築ニ関スル書類綴川尻村役場」に収録されている。

九 中学校編成予定および中学校青年学校教員定員予定

中学校編成予定表

市町村名	校名	一年		二年		三年		計		教員数			
		生徒	学級	生徒	学級	生徒	学級	生徒	学級	校長	教員	事務員	計
鎌倉市	鎌倉市第一	二二二	4	一〇九	2	五〇	1	三七一	7	一	八	一	一〇
〃	鎌倉市第二	三六七	7					三六七	7	一	一	一	一三
〃	鎌倉市第三	二六五	5	一〇九	2	五〇	1	四二四	8	一	一〇	一	一二
〃	鎌倉市第四	一六五	3	七二	2	六五	1	三〇三	6	一	六	一	八
藤沢市	藤沢市富士見	五六四	11	四四二	8	二七九	5	一二八六	24	一	三一	一	三三
〃	藤沢市鶴北	四八五	9					四八五	9	一	一四	一	一六
〃	藤沢市片瀬	二五六	5			二五六		二五六	5	一	七	一	九
〃	藤沢市六会	一六三	3			一六三		一六三	3	一	三	一	五
大船町	大船	三五七	7	一五五	3	一三一	3	六四三	13	一	一七	一	一九
片瀬町	片瀬	一四四	3	五三	1	一六	1	二一三	5	一	五	一	七
深澤村	深澤村	一〇〇	2	六三	1	四〇	1	二〇三	4	一	四	一	六
茅ヶ崎町	茅ヶ崎第一	四七八	10	二〇三	4	六八	2	七四九	16	一	二二	一	二四
〃	茅ヶ崎第二	〔一八四 一八七〕	4	〔一一九 一二三〕	2	〔四六 八〇〕	〔2〕 1	三九〇	〔8〕 7	一	九	一	一一
〃	茅ヶ崎第三	二二九	4	一一一	2	六〇	1	四〇〇	7	一	八	一	一〇
寒川町	寒川町	二四五	5	一七四	4	四五	1	四六四	10	一	一二	一	一四

渋谷町	綾瀬町	大和町	//	//	//	//	//	//	//	//	//	相模原町	海老名町	有馬村	御所見村	小出村
渋谷町	綾瀬町	大和	相模原町新磯	相模原町大澤	相模原町麻溝	相模原町田名	相模原町大野第三	相模原町大野第二	相模原町大野第一	相模原町旭	相模原町座間	相模原町上溝	海老名町	有馬村	御所見村	小出村
二一六	一八四	二五八	一二九	一〇四	一三五	一三五	一〇〇	一五〇	八六	二一一	二〇九	二二九	二三〇	一三一	一二九	一三〇
5	4	5	3	2	3	3	2	3	2	4	4	5	4	3	3	3
	一二六	一五〇	七一	九二	五九	一〇一	四七	六四	四四	一二九	一六二	九二	一二九	六三	一六三	七〇
	3	3	2	2	2	2	1	2	1	3	3	2	3	1	3	2
〔以下判読不能〕	六五	五〇	二七	二〇	四五	六二	一九	四三	一五	四六	二八	五〇	一〇六	三一	一一四	六〇
	2	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	2	1	2	1
	三七五	四五八	二二七	二一六	二三九	二九八	一六六	二五七	一四五	三八六	三九九	三七一	四六五	二二五	四〇六	二六〇
	9	9	6	5	6	7	4	6	4	8	8	8	9	5	8	6
	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
	一〇	一一	六	五	六	七	四	六	四	九	九	一〇	一〇	五	八	六
	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
	一二	一三	八	七	八	九	六	八	六	一一	一一	一二	一二	七	一〇	八

中学校青年学校定員予定講習割当

号	中学校定員予定			講習割当		
	校名	学級数	定員	藤沢	旭	青年学校定員(校長を含む)
一	鎌倉市第一	六	一一	六		一
二	〃 第二	四	八	四		
三	〃 御成	四	八	四		
四	〃 腰越	四	八	四		二
五	藤沢市第一	二二	三二(一)	一六		
六	〃 明治	六	一一	五		二
七	〔〃〕 鵜沼	三	六	四		
八	〔〃〕 片瀬	七	一一	六		
九	〔〃〕 六会	五	一〇	四		二
						四
一〇	大船町大船	一〇	一七	八		三
一一	深澤村深澤	三	六	三		四
一二	茅ヶ崎町第一	七	一二		七	五
一三	〃 第二	五	一〇		四	
一四	〃 第三	六	一一		四	

注 福岡明允氏所蔵の簿冊「昭和二十二年／全二十三年度 新制中学校の教育 茅ヶ崎市立第二中学校」に収録されている。寒川文書館で写真版を閲覧。

三三	三二	三一	三〇	二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二	二一	二〇	一九	一八	一七	一六	一五
家政第一青	渋谷町渋谷	綾瀬町綾瀬	大和町大和	〔〃〕 大野南	〔〃〕 大野北	〔〃〕 旭	〔〃〕 大澤	〔〃〕 上溝	〃 田名	〃 麻溝	〃 新磯	相模原町座間	海老名町海老名	有馬村有馬	御所見村御所見	小出村小出	寒川町寒川	〃 茅ヶ崎
	九	八	八	六	七	七	四	六	五	三	四	九	九	五	八	四	九	一一
	一五	一四	一四	一一	一三	一三	八	一一	一〇	六	八	一五	一五	一〇	一四	八	一五	一九
三	六	五	六															
				四	五	七	三	六	四	四	四	六	七	四	五	三	五	六
三三	四	四	四	五		六		七				五	四	三	三	三	六	
二二	五	五	五	四		五		五				五	五	五	五	四	五	

注 福岡明允氏所蔵の簿冊「昭和二十二年／全二十三年度 新制中学校の教育 茅ヶ崎市立第二中学校」に収録されている。寒川文書館で写真版を閲覧。

茅ヶ崎市立第二中学校教育資金特別寄附一覧				
部 落	寄附金額	人 員	平均額	領収日
西久保	4880 円	124 人	39. 円 35	6 月 2 日
矢 畑	4020	87	46. 21	8. 6
円 蔵	3845	167	23. 02	9. 8
下町屋	5130	95	54. 00	9. 10
柳 島	11630	213	58. 36	9. 10
浜之郷	3410	71	47. 18	9. 12
松 尾	1780	25	71. 20	9. 26
新 田	1457	27	53. 96	9. 26
今 宿	3820	42	90. 95	10. 2
中 島	6241	123	50. 74	10. 7
萩 園	12110	197	61. 47	10. 10
合 計	58323	1171	49. 81	

(昭和 22. 10. 14 現在)

一〇 茅ヶ崎市立第二中学校教育資金部落別寄附金額

一 窓ガラスの盗難被害

昭和二十二年十一月十八日

鎌倉市立第一中学校長 萩原正安

鎌倉市長殿

盗難ノ件

表記ノ件 左記ニ依リ報告 イタシマス

左 記

品目 窓ガラス 十六枚

月日 昭和二十二年十一月十七日午後九時半―十八日午前七時

場所 南側校舎二階西ヨリニ教室

(注) 十八日九時警察二届ケ所要ノ檢視ヲ受ケマシタ

注 鎌倉市教育センター所蔵の簿冊「教育史資料 九 鎌倉市教育研究所」に収録されている。

<S.23年調査>

中学生の生活に関する調査

生活調査（2月23日 月曜日調査）

土（2月21日）・日（2月22日）における遊び・勤労・勉強の調査

1. 遊びの調査 調査人員 1男 234 2男 162 1女 274 2女 115

種類

	1 男		2 男		1 女		2 女	
順位	種類	数 (%)	種類	数 (%)	種類	数 (%)	種類	数 (%)
1	野球	89(28.2)	野球	63(33)	読書	70(25.3)	お手玉	35(33.0)
2	読書	67(21.5)	ピンポン	31(16.2)	お手玉	44(15.7)	ピンポン	17(16.5)
3	ピンポン	47(15.1)	映画	22(11.5)	バレーボール	37(13.4)	読書	15(14.6)
4	映画	22(7.3)	読書	20(10.5)	ピンポン	28(10.1)	バレーボール	9(8.7)
5	トランプ	21(6.8)	ふざけっこ	20(10.5)	おにごっこ	21(7.5)	石けり	4(3.9)
その他		65(20.9)		35(18.3)		76(27.5)		23(22.3)
選択数		21		16		30		21

土曜は雨

場所

	1 男		2 男		1 女		2 女	
順位	場所	数 (%)	場所	数 (%)	場所	数 (%)	場所	数 (%)
1	自分の家	85(34.7)	自分の家	58(36.9)	自分の家	144(56.9)	自分の家	62(67.4)
2	学校	49(20)	学校	29(18.5)	学校	28(11)	学校	10(10.9)
3	近所の家	37(15.1)	道路	17(10.8)	友人の家	20(7.8)	道路	6(6.5)
4	友人の家	18(7.3)	友人の家	14(9)	近所の家	20(7.8)	近所の家	5(5.4)
5	道路	15(6.1)	映画館	11(7)	道路	16(6.1)	野原	3(3.3)
その他		41(16.7)		28(17.8)		25(9.1)		6(6.5)

時間

時 学 年	0.5	1	1.5	2	2.5	3	3.5	4	4.5	5	5.5	6	6.5	7	7.5	8	8.5	その他	一人 平均
1 男	22	24	24	26	24	26	10	14	4	11	1	11	3	2	4	-	2	28	2時間
2 男	20	14	19	16	12	10	7	3	4	13	-	4	-	2	8	2	1	27	2.5
1 女	74	35	35	28	30	10	5	7	2	4	1	3	-	-	2			38	1.4
2 女	24	25	17	4	4	2	3	1	1	3								31	1.0

女性は遊ばない

2. 勤労調査

種類

	1 男		2 男		1 女		2 女	
順位	種類	数 (%)	種類	数 (%)	種類	数 (%)	種類	数 (%)
1	おつかい	140(41.7)	おつかい	43(18.7)	炊事	171(31.4)	炊事	76(41.5)
2	掃除	65(19.4)	まきわり	38(16.5)	掃除	156(28.7)	掃除	35(19.1)
3	まきわり	48(14.3)	掃除	34(14.8)	おつかい	107(17.7)	おつかい	27(14.8)
4	畠の手入	23(6.4)	畠の手入	27(11.7)	子守	36(6.6)	子守	19(10.4)
5	炊事	18(5.7)	炊事	20(9.)	家事	19(3.5)	せんたく	8(4.4)
その他		41(12.2)		68(27.6)		55(10.2)		18(9.8)

時間	時 学年	0.5	1	1.5	2	2.5	3	3.5	4	4.5	5	5.5	6	6.5	7	7.5	8	8.5	一人平均
	1 男	41	27	46	30	26	13	4	6	1	10	1	1	-	1	2			2.8 時
	2 男	14	18	17	15	20	5	11	11	6	7	3	5	-	7	-	3	2	2.6
	1 女	35	43	38	41	23	14	12	10	2	20	2	11	2	-	3			2.1
	2 女	6	8	17	10	12	11	3	6	1	10	-	7	-	-	2	4	1	2.6

時刻	学年 時刻	1 男	2 男	1 女	2 女
	午前	82	58	80	33
	午後	75	36	84	29
	夜	9	3	10	4
	一日	64	37	92	36
	その他	9	28	8	13

3. 勉強の調査

種類 (学科別)	順位 学年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
	1 男	英語 63 27%	数学 119 21%	国語 104 19.2%	社会 62 11.5%	理科 32 6%	図画 29	作文 18	工作 18	工業 16	珠算 11	自由 10	習字 3	音楽 3
	2 男	国語 65 11.5%	数学 44 21.6%	英語 21 10.3%	珠算 19 9.3%	社会 14 8%	理科 14	図画 11	工作 6	工業 6	商業 2	習字 2		
	1 女	国語 154 26.2%	英語 147 22.1%	数学 106 16.7%	社会 52 8.2%	工作 31 5%	家庭 30	図画 29	習字 25	理科 12	作文 11	珠算 10	音楽 10	自由 8
	2 女	国語 92 35.1%	数学 36 14.6%	英語 21 10.4%	家庭 18 8.8%	社会 17 8.3%	図画 17	工作 12	習字 9	珠算 3				

時間	時 学年	0.5	1	1.5	2	2.5	3	3.5	4	4.5	5	5.5	6	6.5	7	7.5	8	一人平均
	1 男	49	42	33	29	27	11	7	5	4	10	1	1	3	1	2	8	2.1 時
	2 男	59	27	7	14	8	5	2	1	2								1
	1 女	42	45	42	39	39	24	8	7	4	2	3	2	2	2	7		2
	2 女	19	30	14	19	11	6	1	1	1	1	2	-	-	1	7		2.5

時刻	学年 時刻	1 男	2 男	1 女	2 女
	午 前	73	25	69	25
	午 後	42	23	66	25
	夜	104	82	132	60
	その他	20	32	7	5

自 習 の 程 度	・自分でやる			・教わる		
	1男(239)	178	74.4%	1男 54	(兄弟 25 父母 15 近所の人 9 友だち 2 先生 2 学生 2 叔父 1)	兄多し
	2男(162)	94	58.6%	2男 31	(兄弟 20 父母 3 近所の人 2 友だち 51 先生 3 [以下判読不能])	
	1女(274)	154	56.2%	1女 112	(兄弟 64 父母 31 先生 7 妹 3 叔父 3 友だち 2 近所の人 2)	
	2女(115)	72	62.6%	2女□□	(兄弟□□ □□□□ □□の人 2 □□□□ 先生 2 級友 1)	

文化環境調査 昭和 23 年 2 月 12 日実施

1. 机の数の調査

項目 \ 級	I A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	計	%
専用充足者	20	16	13	14	13	21	10	19	17	8	19	170	33.8
兼用も合せての充足者	31	28	30	23	30	32	28	28	24	18	24	296	58.8
調査人員	46	47	48	46	43	44	48	47	46	44	44	503	

2 A	B	C	D	E	F	G	計	%	累計	%
10	16	7	3	16	13	13	78	29.3	248	33.6
24	32	16	13	22	30	16	153	57.5	449	58.3
40	49	35	36	31	38	37	266		769	

注意点

1. 勉強するには時間の食い違いがあること
2. 記載に不正確なものあり

1人机1脚なきもの 1年41.2% 2年42.5% 合計41.7%

項目 \ 級	I A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	計	%
机無きもの				2		1		1	4	1	4	13	2.6
二人でも一脚なきもの	1	4	3	8	6	5	5	5	8	5	5	55	10.9
二人で一脚あるもの	3	11	8	12	7	7	11	12	11	9	15	106	21.1

2 A	B	C	D	E	F	G	計	%	累計	%
		1	1				2	0.7	15	1.9
6	3	7	6	3	1	6	32	12.0	87	11.3
11	6	14	14	8	4	15	72	24.1	178	23.1

注意を要す(個別に)

注意を要す(個別に)

可なり

職業別 机数
人数 (専用兼用合計せる数)

級 項目	I A	B	C	Ⓓ	Ⓔ	F	G	Ⓗ	I	J	K	計
農業		6	2	6	14	9	4	1	11	31	35	119
		5	3	12	19	11	7	2	12	36	46	153
つとめ	77	83	62	57	78	61	100	61	67	54	30	730
	54	74	51	67	78	47	111	71	74	83	41	751
商業	43	61	35	45	26	32	25	23	1	16	17	324
	40	51	38	47	27	31	25	29	3	23	19	333
その他	44	10	59	35	16	40	46	20	20	13	18	321
	47	14	59	46	18	46	29	26	26	17	16	344
計	164	160	158	143	134	142	175	105	99	114	100	1494
	141	144	151	172	142	135	172	128	115	159	122	1581

2 A	Ⓑ	Ⓒ	Ⓓ	Ⓔ	F	Ⓖ	計
78	50	12	40	23	25	18	246
98	31	23	30	20	14	28	244
3	77	17	28	16	31	27	199
2	55	20	45	21	18	28	189
7		26	16	17	12	18	96
11		29	9	18	11	26	104
2	30	25	17	21	63	30	188
9	22	23	30	33	47	35	199
90	157	80	101	77	131	93	729
120	108	95	114	92	90	117	736

上記が机数

下記が勉強する人数

全体的に見るとさしたる

不自由なく見ゆるも個別

的に調査すると注意を要

するものあり

○□により差あり

職業別の差大ならず

1年農業は少し

2. ラジオに関する統計

級 項目	I A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	計	%
農業		2 2	1 1	3 4	3 5	3 4	2 2	1 1	5 6	7 8	10 14	37 47	78.7
つとめ	13 20	17 21	11 16	16 19	17 23	16 17	21 30	20 24	19 28	21 23	14 17	185 238	77.7
商業	10 12	18 18	7 10	11 12	6 7	7 8	6 6	8 10	0 1	5 7	4 5	82 96	85.4
その他	9 14	2 6	12 21	10 15	4 6	12 18	9 12	9 12	6 11	4 6	7 7	84 128	65.6
												388 509	76.2

2 A	B	C	D	E	F	G	計	%	累計	%	職業別（その他が少い □□多し
23 32	7 10	6 7	11 12	7 7	6 4	8 11	68 83	81.9	105 130	80.7	商業、農業よし
1 1	18 22	8 9	7 17	10 10	8 8	8 11	66 76	78.9	245 314	78.0	□により特に少いものもある
3 5		9 10	5 5	6 9	4 4	7 7	34 40	85.0	116 136	85.3	
1 5	5 8	5 8	6 12	8 13	14 18	11 12	50 76	65.8	134 204	65.7	
							212 275	77.1	600 784	76.5	

3. 辞書辞典に関する統計（有無）

	I A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	計	%
農業		2 2	1 1	3 4	5 5	3 4	2 2	1 1	4 6	6 8	9 14	36 47	76.5
つとめ	20 20	21 21	16 16	18 19	23 23	15 17	29 30	23 24	27 28	22 23	15 17	229 238	96.2
商業	12 12	16 18	10 10	12 12	7 7	8 8	6 6	10 10	1 1	7 7	5 5	94 96	97.9
その他	13 14	5 6	20 21	12 15	6 6	13 18	11 12	10 12	10 11	6 6	6 7	112 128	87.5
												471 509	92.5

2 A	B	C	D	E	F	G	計	%	累計	%
16 32	8 10	5 7	10 12	7 7	2 4	5 11	53 83	63.8	89 130	68.4
1 1	18 22	8 9	11 17	8 10	8 8	5 11	59 76	77.6	288 314	91.7
2 5		8 10	5 5	3 9	3 4	6 7	27 40	67.5	121 136	88.9
2 5	6 8	7 8	6 12	8 13	14 18	11 12	54 76	71.1	166 204	81.3
							193 275	70.1	664 784	84.7

相当数のものが何かしら
持っていることが分る
種類は記入不備
頁数は記入不備の為
特に算出せず
文化程度がかなりメて
いる
農一番低
つとめ、商よし

ラジオの統計より辞書辞典類の方が文化環境をよく表はす
ラジオは経済環境的な意味も多分に含むらしい

図鑑類は記入に間違ある為算出せず
読書の購入入は数量不明の為算出困難
読書傾向はある模様なるも未だ時日を要す 今後の問題。
参考書類は比較的さきに□□

家庭衛生状況一覧表

昭和23年2月調査

学級	調査人員	住 居				畳数	飲 料 水						洗面用具		浴場設備
		自家	借家	間借	同居		井戸	共同井戸	水道	共同水道	モライ水	其ノ他	洗面器	手拭	
IA	47	22	24	0	1	852.0	25	17	9	0	0	0	98	304	19
B	48	37	10	1	0	998.5	33	9	5	0	1	0	117	326	34
C	51	35	12	4	0	1032.0	31	17	5	2	0	0	130	325	28
D	49	23	22	1	3	832.5	33	15	4	0	0	0	98	296	27
E	45	24	13	4	4	874.5	32	7	3	7	0	0	78	266	29
F	46	28	13	2	3	918.5	21	13	9	3	0	0	97	282	26
G	48	20	17	7	4	926.5	23	14	4	6	1	0	117	287	23
H	48	25	21	1	1	936.0	31	13	8	1	2	0	89	245	29
I	46	24	17	2	3	989.5	30	6	8	2	0	0	131	348	26
J	42	29	9	1	3	873.0	30	4	7	1	0	0	178	270	25
K	46	31	14	0	1	1004.5	32	12	4	3	0	0	104	254	30
計	516	298	172	23	23	10237.5	321	127	66	19	4	0	1237	3203	296
%		57.8	33.5	4.5	4.5	1人ニツキ 3.1	59.8	23.1	12.3	3.5	0.7	0	1人ニツキ 0.37	1人ニツキ 0.77	57.4
2A	43	36	5	0	2	983.0	37	5	2	0	1	1	83	244	38
B	43	25	14	3	1	750.5	27	13	3	1	1	0	91	261	20
C	37	24	11	2	0	664.0	25	9	3	1	1	0	77	200	21
D	36	24	4	4	4	693.0	22	12	3	1	1	0	75	220	21
E	40	27	13	0	0	658.5	32	6	1	1	2	1	81	188	27
F	40	26	11	3	0	739.0	29	8	2	0	4	0	84	235	24
G	41	21	16	0	4	937.5	26	11	3	1	1	0	104	216	30
計	280	183	74	12	11	5425.5	198	64	17	5	11	2	595	1564	181
%		65.4	26.4	4.2	3.9	1人ニツキ 2.7	66.7	21.5	5.7	1.7	3.7	0.7	1人ニツキ 0.29	1人ニツキ 0.77	64.6

藤沢市立第一中学校

学級	家 族 数			家庭内 ノ病人	父母の有無				備考
	総数	大人	小人 15 才以下		父母健 在/モノ	父ヲ欠 クモノ	母ヲ欠 クモノ	父母共 ニ欠モノ	
1A	300	161	139	9	41	3	0	3	
B	296	194	102	6	36	9	1	2	
C	324	184	140	10	41	9	1	0	
D	335	188	147	11	41	4	2	2	
E	289	170	119	6	37	3	5	0	
F	336	190	146	8	35	9	2	0	
G	282	151	131	0	36	9	1	2	
H	290	156	134	5	43	2	3	0	
I	275	169	106	5	39	6	0	1	
J	284	156	128	7	38	3	1	0	
K	304	181	123	2	36	7	3	0	
計	3315	1900	1415	69	423	64	19	10	
%		57.3	42.7	2.1	82	12.4	3.7	2	
2A	321	227	94	4	34	6	2	1	
B	305	192	113	2	32	9	2	0	
C	250	168	82	6	31	5	1	0	
D	255	181	74	11	31	2	2	1	
E	287	164	123	7	28	8	4	0	
F	315	213	102	8	35	2	2	1	
G	291	206	85	4	30	7	1	3	
計	2024	1351	673	42	221	39	14	6	
%		66.7	33.3	2.1	78.8	13.9	5	2.1	

数学学力テスト

昭和23年2月10日施行

調査人数 1年 518

2年 276

	IA	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	1年 平均	2A	B	C	D	E
男	86.5	63.8	71.5	63.8	64.2	61.7	70.7	84.2	69.4	62.0	50.0	68.9	18.3	54.8	41.1	24.8	37.7
女	70.0	51.8	51.0	58.4	52.5	49.0	54.4	50.0	62.0	53.4	49.0	53.8	42.5	51.6	27.8	23.7	32.0
男女	73.4	56.6	60.5	61.0	59.3	56.1	63.5	69.0	66.0	60.6	54.4	61.4	28.0	53.3	34.4	24.4	35.6

F	G	二年平均
27.9	40.8	34.2
9.1	27.1	32.1
22.5	36.2	33.3

国語ト知能テスト
相関係数
0.64

(一 年)

得点	%	問題	解答者 %	二学期 %
100	18.9			
75	34.4	1. 振子の 問題	73.5	10.1
50	23.4	2. $3\frac{1}{2}-0.4$	62.2	16.8
25	15.4	3. %の問題	20.8	27.3
0	7.9	4. 滑車の回 転の向き	65.6	

(二 年)

得点	%	問題	解答者 %
100	6.9		
80	9.4	1. $(-1)(+1)(-1)(-1)$	43.2
60	10.5	2. 合力	51.8
40	15.9	3. $3\frac{1}{2}-0.4$	37.0
20	31.2	4. $4.5\div\frac{9}{16}$	24.6
0	26.1	5. %の問題	7.6

学校環境調査(2) 昭和二十三年二月末日現在

家庭における位置

性別 種別	男	女	計
世帯主	14	7	21
準世帯主	3	0	3
世帯舅	3	2	5
計	20	9	29

藤沢一中

現在の居住

性別 種別	男	女	計
自家	11	4	15
借家	2	2	4
間借	2	3	5
同居	4	0	4
その他	1	0	1
計	20	9	29

通勤に要する時間(片道)

性別 種別	男	女	計
30分以内	7	8	15
30分—60分	5	1	6
60分—90分	4	0	4
90分以上	4	0	4
計	20	9	29

注 塚越氏所蔵資料。計算の結果が記載されている数値と異なる場合があるが、そのまま記載した。

新制中学と

定額郵便貯金

新聞壁貯蓄
第2号

▽新制中学の建設 六、三制の実施と、これに伴う新制中学の建設の問題は教育百年の大計として、関係当局及び父兄の方々の常に苦心し、且つ努力致して居る所であります。

本市に於ても、新制中学の建設は、四校にのぼり、これに要する経費は本年度一三〇〇万円で、そのうち二三〇万円は国庫補助により、残額はあげて地方負担となつて居るのであります。此の充足の為に市に於ても、資金の借入れ（起債）に全力をそそぎ、尚足りない所は、市民の皆さんに寄附をお願いしている状態であります。

▽資金借入の要領 六、三制に要する所の資金借入先は、大蔵省預金部であります。その財源は皆さんの貯蓄殊に郵便局に預入された資金を以て其の財源とするのであります。そこで政府に於ては、起債の順調と、資金吸収の目的を以て「六、三制貯金」なるものを案出し、一般に宣伝致して居ります。

本市に於る当面の起債額として、二三〇万円が予定されて居ります。其の要領は三月一日より三十一日迄に市内各郵便局に預入された定額郵便貯金（額面一口百円以上、一年据置、三分利）は、すべて証書に「六、三制貯金」の標示をして、これによつて集つた資金は、あげて新制中学の資金として小田原市が借入れることができるのであります。

▽貯金のおすゝめ 折角発足した新制中学を何時迄も小学校等に同居させておくことは、教育上、種々の支障があるばかりでなく、文化小田原の恥辱であります。

これは父兄の方々始め市民の皆さんの熱意により、民主的に解決されねばならない問題であると信じます。

以上のように、貯蓄殊に郵便定額貯金の増加は六、三制の実施、言い換ふれば、新制中学の建設を、それだけ促進する結果をもたらすのであります。

この意味に於て、新制中学建設の爲め、そして又、不時の災厄に備えて郵便定額貯金の預け入れをお薦め致し、且つお願いする次第であります。

この貯金学校を建て橋をかけ（当選郵便標語）

小田原市貯蓄推進委員会

注 小田原市立中央図書館所蔵の「二十二年二十五年度 教育委員会及其ノ他会議記録 学務係」に収録されている。

一四 「新制中学生徒が何故質問をしないかの調査」
新制中学生徒が何故質問をしないかの調査

足柄下郡学校組合立吉濱中学校

1. 調査した目的

生徒がそれぞれの機会に質問を発することによつて理解の程度・能力を教師は察知し学習指導とか学習効果判定上に資することが多い。特に質問の少ない本校の生徒は学習上に自発性（自主的学習態度）が乏しく平素の学習指導上教師としても研究する問題が少なくないと思惟されるので（質問を何故しないか）の動機を診断しこれが教育指導に考慮を加えるべき対策を講じたい

2. 調査をした項目

A. 知能検査（昭和22年11月施行済、但し本年度の一年生徒143名は近日に施行の予定）詳細省略

B. 質問についての調査

1. 調査人員 男 103人 女 111人 計 214人（吉濱中学生徒）

2. 調査年月 昭和23年5月

3. 問題「何故質問がしにくいのか」

3. 何故質問をしないかの調査方法

1. 質問紙に次の様な事項を印刷して生徒一人一人に配布し

2. 教師が調査の目的、解答の仕方についての説明

3. 無記名で集計は性別にした

4. 質問調査内容、はづかしいから、人がじろじろと見るから、勇気がない、人に何か言はれる、間違うと困るから、言う事柄がわからない、よい質問ができない等

調査人員 男 103 女 111 計 214

調 査 項 目	男	女	計	%
1 はづかしい	32	41	73	34 %
2 人がじろじろと見る	29	24	53	35 [25]
3 質問する勇気がない	22	46	68	32
4 人に何か言はれる	23	30	53	25
5 間違うと困るから	47	45	92	43
6 言ふ事柄がわからない	20	14	34	16
7 よい質問が出来ない	39	22	61	29
8 質問をしたくない	16	3	19	9
9 どもる	6	1	7	3
10 他生が笑ふから	1	1	2	0.9
11 身体がふるえるから		2	2	0.9
12 その他	3	6	9	4

所 感

1. 統計上から間違うと困るからが92人で43%を示して最高の比率である。これはよい質問が出来ない（29%）とか、はづかしい（34%）と関連すること、質問に対する解答を教師から受けるのに若し質問がまと外れで間違うと気まづい思いをするといふ不安、羞恥心、虚栄心のあることは否定できない
2. 羞恥心が多いこと、女子にその傾向が強い
3. 質問する勇気がない、受身で能動的でないところが非常にある証左である
4. 教師の前では口を極度にきかない傾向がありこれは教師としても反省する必要がある

注 神奈川県立公文書館に所蔵されている（松本喜美子資料）。

一五 マックマナス「神奈川県教育委員会月報に寄す」

神奈川県教育委員会月報に寄す

神奈川県民事務部民間教育課長 R. F. マックマナス

足柄下郡古濱中学校は、町民が進歩的且つ有能な校長や教職員に指導されて真に子供の教育に興味を持つようになればどんなことがなしとげられるかという顕著な例であるというのが本県民事務部民間教育係官の意見である。

町民は立派な建物と多くの施設を提供した。校長と先生達は新しい建物と施設に应ずるために進歩的な教育組織を確立した。

その学校管理は男女共学、生徒個々の毎日の時間表、ホームルーム、スタディホール、カリキュラム修正計画、職員教科担当の専門化、その他多くの進歩的な問題を包含している。

学校や町について私が最も強く印象づけられたことは、町民・校長及び先生の態度である。この人達は皆広い心を、即ち教育の新しい理念を研究・分析・実験しようとする意欲を持っている。このような態度は努力の如何なる分野においても、いやしくも進歩を遂げようとするならば絶対に必要である。

民衆は閉ざされた心——単に新しきが故に如何なる新しい考え方をも拒否する——の反映である非知性的態度を余りにも屢々とり勝ちである。多くの人々がかかる態度であるならば、少しの進歩をもすることは出来ない。歴史の黎明から現在に至るあらゆる文明の進歩は広い心を持った人々に帰し得るのである。

私は神奈川県中学校高等学校の校長及び先生が少くとも一日、このすばらしい中学校を訪問するよう強くおすゝめする。

For the Kanagawa Ed. Dept. Monthly Bulletin.

5 July 1949

It is the opinion of the KCAT Civil Education Officer that the Yoshitama Junior High School in Ashigara Shimo Gun is an outstanding example of what can be accomplished when the people of a community, led by a progressive and able principal and school faculty, are vitally interested in the education of their children.

The people have contributed a fine building and many facilities. The

principal and teachers have established a progressive education system to go along with the new building and facilities.

The school administration includes such progressive projects as co-education, individual student daily schedules, homeroom system, study hall, curriculum revision planning, specialization of teachers' assignments, and many others.

The thing that impressed me most about the school and the community was the attitude of the people, principal, and teachers. They all had open minds, a willingness to study, analyze, and experiment with new concepts of education. Such an *attitude* is absolutely necessary if progress is to be made in any field of endeavor.

Too often, people are prone to take the unintelligent attitude that reflects the closed mind, the refusal even to consider any new ideas simply because they are new. When such an attitude prevails no progress can be made. All advances in civilization, from the dawn of history to the present, can be attributed to people who possessed open minds.

I strongly recommend that junior and senior high school principals and teachers in Kanagawa Prefecture plan to spend at least one day visiting this outstanding junior high school.

注 『かながわ教育』第三号（一九四九年八月）の巻頭記事。

一六 深沢中学校建設「請願書」

請 願 書

深沢中学校建設期成会

深沢中学校建設請願書

当深沢地区は今日幸にも文化都市大鎌倉の一部市域として市民生活の恩沢に浴し寔に光榮の至りと感激して居りまするが唯遺憾に堪えぬことは合併当時の第一条件である深沢中学校建設の一事が未だに実現しないのみならず殆んど全くそれが実現の端緒をも見ていないと云ふ事であります かくては折角の吾々の文化都市鎌倉への参加合併も其の本来の根本的趣旨を失ひ文化教育の前途に暗澹たるものを感じざるを得ず 吾々はその公約の一日も速き実現を千秋の思いを以て待ちそれに対する責任のある当局の誠意と努力とを堅く信じて疑はぬものであります 現在の深沢中学校は新学制の発足と共に已むを得ず小学校々舎の一部を以て充當開設されたのでありますが生徒総数一九〇学級五を擁しながら職員室兼図書室を加へて使用室数僅かに六室特殊研究室の設備全くなく又設置したくも不可能の實情にあるのであります 即ち講堂もなく余分の教室も有たぬ小学校の多大なる犠牲によつて辛じて発足したのでありますから現在中、小学校共に満足な教育を施す事が出来ず謂はば中、小互に相害ひ結局共倒れに終らんとするの狀態にあるのであります 若しその儘で推移すれば当地区の教育は日と共に低下し破壊せらるべきことは炬を視るよりも瞭であつて現在に於てすらかくの如し、しかも其の上当地区は近く就学児童生徒数が中、小共に増加せんとする情勢にあるのであります して地区の發展に伴ふ一般転入家族の増加による入学児童の増加に加えて目下着々として大拡張の途上にある大船工場の工職員家族の転入は本年度二百世帯を予定され来るべき新学期に於ては更に新入学者の増加を予想さるるのであります 願はくばこの一刻の猶予をも容さぬ危機に想倒され一日も早く具体的方策を樹立せられ新校舎建築工事に着手せられん事を衷心懇願してやまぬ次第であります 政府は今般臨時国会に於て十五億円の教育予算を可決し、さらに通常国会にはさらに数十億の予算を計上する由 やがては当市への交附も当然これあるべく吾らは仮令僅々数百万円の少額にしる先づ以て優先的に当地区中学校建設費の一部として充當せらるべきことを合併当時の確約に鑑みて衷心希望しました信じて疑はぬ

ものであります 吾々は今般全地区市民の総意を一九として深沢中学校建設期成会を結成し市会並に教育審議会等の諸賢殊に市当局の御理解と誠意とに訴へ吾らの多年熱願する処の公約に基く中学校建設の儀を急遽実現せられん事を深く深く懇願する次第であります

冀くは吾々の真意の存するところとその苦衷とを御諒察下され御当局並に諸賢の御協力と御鞭撻によつて御審議御協賛あらんことを重ねて請願申上ぐる次第であります

昭和二十四年十二月五日

深沢中学校建設期成会長

石 井 一 三

鎌倉市教育審議会々長

関 口 泰 殿

注 鎌倉市教育センター所蔵の簿冊「昭和二十四年 審議会綴 教育課」に収録されている。

注 横浜市史資料室所蔵の簿冊「岡野の四年目」（長谷川雷助旧蔵資料）に収録されている。

状況						成績						学		昭和二十四年度
早退	遅刻	忌引	席欠		出席	月	評価	標目				科教		
			事故	病気				国語						
						九		力能む読く早らがなし解理				習字		
							賞鑑と解理の学文							
						十		力能るす現表を己自に的果効てつよにとこく書				社会		
							力能るす現表を己自に的果効てつよにとこす話							
						十一		解理				日本史		
							現表							
						十二		度態				数		
							基の等会社・治政・済経・理地・史歴							
								解理と識知の念概諸的な礎				理科		
							力能るうしなを考思的な判批、力能るい用を法決解題問							
								得習の能技的民公重尊のと利権と要必の人他				音楽		
							解理							
欄信通		学習成績評価 5Ⅱ普通よりずっと上位。4Ⅱ普通より上位。3Ⅱ普通。2Ⅱ普通より下位。1Ⅱ普通よりずっと下位にあるもの。 特別教育活動						度態				図工		
								能技						
								力能るす用応に決解題問をれそし解理を係関				保健体育		
								能技の定測算計						
								慣習るす用使を能技的学数に確正ていおに面場際実				必修		
								解理の念概諸的学科						
								力能るうしなを考思的な判批、力能るい用を法決解題問				職業		
								〔るあか合場るいてつもは徒生の三・二〕力能的造創						
								慣習るす用使を識知的な学科ていおに面場際実				家庭		
								解理的知の楽音						
								賞鑑の楽音				外国語		
								作創の楽音						
								〔楽器・唱歌〕奏演						
								賞鑑の美						
								解理の術技礎基						
								現表な的造創						
								解理の念概諸の生衛と康健						
								慣習るす行実を項事な要必上生衛上康健						
								度程上向能機動運の体身						
								加参のへ技競動運						
			識知な的術技				実							
			技実											
			解理的済経的会社				選択							
			識知な的術技											
			技実				家							
			解理的済経的会社											
			解理と置位の庭家るけおに会社的主民的代近				庭							
			度態いしま望のへれそと想理の活生庭家											
			技実るけおに活生庭家				外国語							
			力能む読らがなし解理											
			能技す話											
			力能るす現表を己自てつよにとこく書											
			力能るす解理を語言たれさ話											

学習成績評価
5 普通よりずっと上位。4 普通より上位。3 普通。
2 普通より下位。1 普通よりずっと下位にあるもの。
特別教育活動

====小学区制早わかり====				
			大学区	小学区
な 高等 影響をうけるか 学校入学志望の生徒は直接どん (生徒の不幸)	1	ある小数の生徒は自由に学校をえらぶ事が	出来る	出来ない
	2	一ヶ所に志願者が集中するから多数の不合格者が	出来る	少い
	3	浪人するものが	出来る	少い
	4	全般的に収容力があつても	入学試験をする	しないでもすむ
	5	のびのびとした学習生活が	出来ない	出来る
	6	入学試験準備を	する様になる	しないですむ
	7	性格的、身体的な不健康に	おちいる	おちいらない
	8	失敗者は劣等感を	深くする	ごく少い
	9	不良化傾向を	増大させる	な い
利 父兄の安心不安心負担、子女 害 身心保護に関する事(父兄の)	1	試験地獄を	再現する	なくなる
	2	入試に対する不安を	増大させる	減少する
	3	子女の健康、性格等での心配	大きい	少い
	4	失敗した場合、処置に	困難	失敗が少い
	5	通学距離が	大きい	最短距離
	6	交通費の	増 大	無又は小
	7	通学途上に於ける不良化防止	困 難	な い
中 中 学校小学校の教育に与える影響	1	受験準備教育を誘致する	おそれあり	な い
	2	記憶偏重 詰込教育が	多くなる	な い
	3	生活指導が	出来なくなる	出来る
	4	個性適応の教育が	出来なくなる	出来る
	5	進学希望者と然らざる者との間に好し [ママ] からざる関係	生じやすい	生じない
	6	男女共学も破かいされるおそれが	あ る	な い
	7	功利的利己的な人間が自然と	出来る	社会的人間が作られやすい
	8	新しい中学校の真生命を	破かいされる	のばす事が出来る
高 高 等学校の教育に与える影響	1	等質の生徒が	集 る	集らない
	2	学校差が	増大する	平均化される
	3	特権意識が	助長される	解消する
	4	非民主的思想が	助長される	民主的意識がのびる
	5	等質のため社会性の養成に	不都合	好都合
	6	男女共学の不可能な場合が	おこる	おこらない
	7	地域の社会教育学校の	実現薄弱	強力に実現出来る
	8	父兄と学校との関係が	な い	緊密である
	9	父兄教育の充実に積極的に努力する時が	一時的である	永続的である
	10	一二の優秀な学校は出来るが	平均水準は下る	平均水準高まる
	11	中学校と高等学校とは中等学校であるが この二者は	連絡しにくい	連絡しやすい

社会的影響	1	入学の結果に対し	疑問を生ず	生じない
	2	教育に対する見方が	功利主義となる	正しい見方をする
	3	教育が虚栄心や、名誉に	利用される	されない
	4	一般社会の民主思想の発展を	妨害する	助長する
	5	立身出世主義の人間が	作られる	良い民主的社会人が作られる
	6	交通難の	激化	緩和
	7	憲法、教育基本法、学校教育法の精神に	遠ざかる結果を作る	石〔ママ〕の精神を忠実に守る様になる
	8			

注 横浜市史資料室所蔵の簿冊「岡野の四年目」（長谷川雷助旧蔵資料）に収録されている。

- 一九 アチーブメント・テスト実施の決定（県教育委員会会議録）
一 委員長 開会を宣告す

午後六時三十五分

横浜市教育委員会との協議により県委員会の態度としてアチーブメント、テストについて採決に入る旨を宣す。

加藤委員より「協議会で決定したことをそのまゝ本会議で採決してはどうか」との動議を提出

- 一、委員長 アチーブメント、テストを実施するか、しないかについて採決

賛成三（加藤、黒土、河田） ----- 実施する

反対三（平野、久保田、吉田） // しない

- 一 委員長 アチーブメント、テストは実施することに決定する旨を宣す

続いて指導要録にアチーブメントテストの結果を記載するかしないかについて採決

賛成一（黒土） 記載する

反対三（加藤、河田、吉田） 記載しない

棄権二（平野、久保田）

- 一、委員長 アチーブメント、テストの結果は指導要録に記載しないことに決定の旨を宣す。

続いて高等学校側から選考上判定に苦しむ者についてアチーブメント、テストの結果を中学で見せるか「ママ」ことゝするかしないかについて採決

賛成四（河田、加藤、黒土、吉田）（見せる）

棄権二（平野、久保田）

- 一、委員長 高校側から結果を聞かれたときは中学校側はその結果を見せることに決定した旨を宣す。

一 委員長 選考上判定に苦しむという者の範囲を定めるか定めないかについて採決

選考委員に任せる事に賛成四

棄権二（久保田、平野）

- 一 委員長 選考委員に任せることに決定

- 一 委員長 以上をもつて本日の議題全部を議了した旨閉会を宣す
午後六時四十五分

注 神奈川県立公文書館所蔵の簿冊「昭和25年（度）教育委員会々議録 教、総務課／秘書室」に収録されている。一九五〇年二月一〇日の定例会の資料。

二〇 学習指導案（海の科学）

海の科学

Ⅰ 単元設定の理由

生徒の科学的知識 技能 態度の養成発展は生活環境中の具体的事実に於て興味と疑問と研究意欲に基き科学することによつて得られるものである。

そこで生徒の状態と地域社会の課題と科学教育の目標から次の理由によつて「海の科学」を設定したのである。

イ 海が地域社会の経験領域中にある

ロ 海に対して興味と関心を持つている

ハ 未知の世界を探究せんとする意欲がある

ニ 地域社会の食生活に関係が深い

ホ 単元として広い分野を持つている

ヘ 地域社会の特殊性を認識することができる

ト 地域社会の特殊性（産業上 観光上）を研究することができる

以上の理由から海の現象とその影響 社会生活の現実と発展との実態を継続的に研究させることによつて科学的な諸能力を得 合理的な生活を営む態度を養わせようとするものである。

別項の単元の排列によつて 理科 社会科 家庭科相協力して継続的に観察調査 採集 実験 記録を指導し これを科学的に処理し考察して金沢海岸地帯の地形的特質と水産資源の開発状態を知り地域社会の健康生活 経済生活 文化生活に対する調査研究の結果から改善の必要性を地域民に提供し 更に地域民よりの要求なり問題に依じてこれを究明していききたい これはやがて学校がこの地域の文化並に産業発展の指標となり中心となつて行くことであつて現代教育の望ましい姿であると思う。

かくして産業と生活のより充実発展に貢献し 海国日本の将来を期し科学教育振興の一助として本単元を設定したのである。

2 単元設定の目標

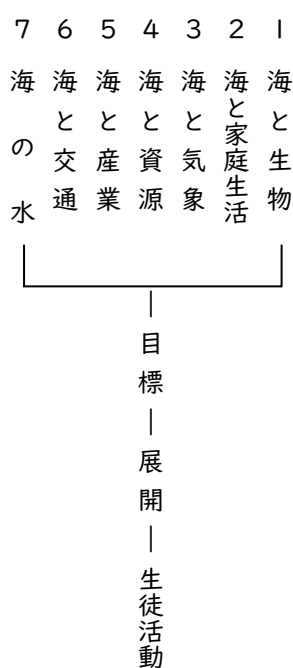
- 自然に親しみ 自然の調和と恵みを知り自然を愛好する気持を養う
- 科学的な観方 考え方 処理の能力を養う

- 科学的な労作に興味と価値を見出す
- 科学することの楽しさ 苦しさ 尊さを味わせる
- 物事の本質を観 真理に従い 真理を探究せんとする態度を養う
- 合理的な健康生活を営む能力を養う
- 郷土の自然現象と社会生活との関係を理解する
- 郷土の生活変遷を認識し生活改善の資料を得る
- 郷土の産業の実態を知りこれが改善の資料を提供する
- 郷土の課題解決に協力する
- 生活の合理化と文化の向上をはかる

3 単元の構成

科学教育の目標とあり方 生徒の興味 地域社会の課題等から多数の研究問題をとりあげ その中から適切な問題を選択してその経験領域を七つに分けて構成した。

- 本単元は理科 社会科 家庭科の関連カリキュラムとも言えると思う
- 全体構造の一部である
- 単元の展開は学習指導要領に準拠してある
- 経験分野



4 単元学習の方法

A 学習方法

- 継続的である
- 研究計画と方法を協議する

- 学級全員で研究する場合
- グループ別研究をする場合
- 特別研究活動とする場合
- 個人研究をする場合

B 学習の場

- 金沢の海及海岸地帯（三浦半島沿岸を含む） → 採集 観察 調査 記録
- 学校 及 家庭 → 整理 処理 検討 読書
- 教室 → 発表 実験 作品展示 考察 評価 発展

単元の目標と展開						
単 元	目 標			展 開		
	理 解	態 度	能 力	一 年	二 年	三 年
海と生物	○成長、構造、生活機能 ○同化作用、繁殖 ○環境との相互関係	○注意深く正確に観る ○根気よくしとげる ○実物事実を尊重する ○作品の価値と興味	○飼育し観察する ○採集して標本を作る ○分類する	海の生物を飼育したり採集して標本を作ろう	魚類の運動や分布の状態を調べよう	海の生物の構造と生活状態を調べよう
海と家庭生活	○環境と生活 ○保健生活 ○産業の実態	○食生活を科学的にする ○生活改善	○調査と処理	水産物について調べよう	水産業について調べよう	海岸地帯の生活を調べよう
海と気候	○陸と海との相違 ○海の現象 ○地理的環境	○環境の変化に対する適応 ○災害に対する工夫対策	○正しい測定 ○精しい観察 ○結果の処理	郷土の気候を観測しよう	海流と潮流を調べよう	海洋国日本の気候上の特徴を調べよう
海と資源	○実態と利用状態 ○変動とその原因	○愛護育成 ○開発する ○業者の意見をきく	○調査と処理	郷土の海の資源を調べよう	海とその利用を調べよう	水産資源の重要性を調べよう
海と産業	○水産業と地理的条件 ○水産業と社会的条件 ○水産業の過去と現在	○工夫改善 ○業者の意見をきく	○数量的に観る	郷土の水産業を調べよう	水産加工業を調べよう	水産業の発達と社会生活について調べよう
海と交通	○発達と文明 ○原理、構造、機能 ○現状	○改善進歩 ○専門家の意見をきく	○資料を集める	船はどのように進歩してきたかを調べよう	海の交通通信はどのように進歩してきたかを調べよう	船とその機械について調べよう
海の水	○海水の性質 ○海水の成分 ○海水の作用	○本質を観る ○疑問を起す	○科学的な処理 ○分析する	海水の作用とその影響を調べよう	波の運動と海水の動きを調べよう	海水の性質を調べよう

第 二 学 年

Dコース 社会科学習指導案

指導者 岩 井 澄

- Ⅰ 単 元 船の変革について
- Ⅰ 単 元 の 観 方 海上交通の発達には実に現代の驚異である。船は大洋をして陸とし、我々の生活の向上に大いなる役割をはたして居る。だがわれわれの日常生活はあまりにも其の恩恵と関係して居る為に、かえって其の重要性の正しい認識が困難なくらいである。外国との文化の交流や貿易を盛にする事はやがて世界全人類の提携即ち国際平和の旗印ともなるのがある。しかし現実にはこれに反してこれが国家間の誤解や争いを除くことに対して十分な効力を発揮出来なかつたと云う事は事実であつたのです。今日の発達した船の歴史をたどつて見ると古代と現代との時間的へだたり以上に現代の船が如何に進歩したものであり、如何に人間生活に其の影響の大であつたかを知る事が出来ると思う。
- Ⅰ 展 開 計 画
- (1) パナマ運河とスエズ運河の開拓の歴史 …………… 二 時 間
- (2) 運河はどの様に利用されて居るか …………… 一 時 間
- (3) 古代の海上交通 …………… 三 時 間 (本時始)
- 。 どうして海を利用する様になつて行つたか
 - 。 どうして船というものを先人が考へ出したか
 - 。 郷土では船を何に利用されて来たか
- (4) 船の歴史 …………… 四 時 間
- (5) 船舶の名称 …………… 一 時 間
- (6) 新航路の発見 …………… 二 時 間
- (7) 陸と海との交通 …………… 二 時 間
- Ⅰ 準 備 教 師 学習指導要領、教科書、船のデカメロン
- 生 徒 教科書、研究物、参考書
- Ⅰ 本 時 の 目 標 昔の海の交通状態を理解させ、現代の交通機関の発達がいかに進歩して居るかを内省させ乍らわれわれはどんな大きい恩恵をうけて居るかを再認識させたい。
- Ⅰ 学習指導過程
- | 予想される学習活動 | 指導要領 |
|--|--|
| 1. 海水浴等の海を対照とするリクレーシヨンの生徒に最も近い話をしながら本時の雰囲気を作る。 | 1. 何んで海を走る事の出来る船が出来る様になつたのか。どうして船が出来たか疑問を起させる。 |
| 2. 研究発表する
生徒と生徒と自由な討論をする。 | 2. 古代の海上交通について研究発表をさせる。 |
| 3. 地域社会の昔の海と船はどうであつたかについて調べる。 | 3. 地域社会の昔の海と船の質疑応答 |
| 4. 有史後はどうなつて行つたか。
(次への連絡) | 4. 有史以後はどうなつていつたかを思案させる。(次への連絡) |
- Ⅰ 効 果 判 定 。
- 生徒は船がどうして起つたかを認識し、先人の努力を知る事に依つて有史後は船はどう変化して来たかについて学ぼうと云う努力的態度を新にしたか。

第 二 学 年															
I コース 理科学習指導案	指導者 角 守 増 夫														
I 単 元	海は如何に利用されているか														
I 単 元 の 観 方	<p>最近三日間の海産物の摂取の状況を調査してみると魚類九三%海苔七八%わかめこんぶ四二%という様に食膳の大部分は必ず海産物が占めているという状況であります。尚 I コース二八名の将来を見通して金沢の在り方を推論した結果は水産漁港五四%、観光地帯三五%、其他七〇%が示されたのであります。</p> <p>現在の利用度のみでなく将来性ある地域の特殊性からもこの地域と海とは離れない条件にあることが確認されます。以上此土地と海との関聯を述べたが、海に含まれている塩は特に日常生活と緊密な関係が深く、且海洋資源として重要物質の一つである。そこでこの生活科学に結んで物質の化学的知識の基礎及塩の本質を考へてみるも極めて意義深いと思つて設定した。</p>														
I 展 開 計 画	<p>1. 海流のあるわけ 三 時 間</p> <p>2. 塩 五 時 間 (本 時) 第三時間目</p> <p>3. 陸と海との構成 二 時 間</p> <p>4. 海風と陸風 二 時 間</p> <p>5. 汐の干満 四 時 間</p> <p>6. 海 の 波 二 時 間</p> <p>7. 海水の圧力 二 時 間</p> <p>8. 海 の 色 二 時 間</p>														
I 準 備	<p>A. 実験材料</p> <p>塩酸、二酸化マンガン、硝酸銀、ナトリウム、アルコール</p> <p>B. 実験器具</p> <p>小刀、ピンセット、捕集瓶、硝子管、フラスコ、試験管、サジ、其他</p>														
I 本 時 の 目 標	<p>塩の性質から起る諸現象をもとにしてその働きや此等と類似の作用をなすと思う物質薬品を検証してその原因の根拠を握み、物事を正確に眺め、正しい理論の通つた結果の道程を身に植えつけ、その事実や理論を推理応用する力を養いたい。</p>														
I 学 習 指 導 過 程	<table> <tr> <th>学 習 活 動</th><th>指 導 要 領</th></tr> <tr> <td>1. 塩の成分を色々に検証してみる</td><td>1. 塩の合成分解を指導する。</td></tr> <tr> <td>2. 塩をつくる</td><td>2. 物質で特に結合、反応の強いものについて</td></tr> <tr> <td>3. 塩の性質として</td><td>3. 作用のつよいものの働き</td></tr> <tr> <td>1) 塩の出来やすいわけ</td><td>4. 物質と物質の合成とその働きを復習する。</td></tr> <tr> <td>2) 塩漬、食塩水、液体塩素漂白粉を作る。</td><td>5. 物質の有毒性について知らせる。</td></tr> <tr> <td>4. 塩の消毒、殺菌に依る色々の種類を集める。</td><td></td></tr> </table>	学 習 活 動	指 導 要 領	1. 塩の成分を色々に検証してみる	1. 塩の合成分解を指導する。	2. 塩をつくる	2. 物質で特に結合、反応の強いものについて	3. 塩の性質として	3. 作用のつよいものの働き	1) 塩の出来やすいわけ	4. 物質と物質の合成とその働きを復習する。	2) 塩漬、食塩水、液体塩素漂白粉を作る。	5. 物質の有毒性について知らせる。	4. 塩の消毒、殺菌に依る色々の種類を集める。	
学 習 活 動	指 導 要 領														
1. 塩の成分を色々に検証してみる	1. 塩の合成分解を指導する。														
2. 塩をつくる	2. 物質で特に結合、反応の強いものについて														
3. 塩の性質として	3. 作用のつよいものの働き														
1) 塩の出来やすいわけ	4. 物質と物質の合成とその働きを復習する。														
2) 塩漬、食塩水、液体塩素漂白粉を作る。	5. 物質の有毒性について知らせる。														
4. 塩の消毒、殺菌に依る色々の種類を集める。															

注 神奈川県立総合教育センター所蔵の『昭和二十五年三月九日 研究概要並に学習指導案 横浜市立六浦中学校』。

I 中学校卒業生進学並に就職調査

昭.25.3.31 現在

二 中学校卒業生進学・就職調査（一九五〇年）

種別 地区	進 学 状 況									
	公 立						私 立			
	通 常		夜 間		定 時		通 常		夜 間	
	志	決	志	決	志	決	志	決	志	決
横 浜	3,919	3,196	967	688	46	24	929	888	43	41
横スカ	1,393	1,378	80		1		77	73	8	7
川 崎	1,063	1,057	299	193	28	28	134	130	34	33
三 浦										
高 座	1,917	1,918	115	59	66	23	377	353	17	15
中	1,424	1,414	105	55	142	48	104	101	7	5
足柄上	594	557	47	8	33	5	△132	▲137		
〃 下	1,055	985	85	42	42	12	289	267	1	1
愛 甲	325	324	8	6	44	18	27	19		
津久井	257	257	17	17	45	45	24	24	4	4
計	11,947	10,886	1,723	1,068	447	203	2,093	1,992	114	106

種別 地区	就 職 状 況									
	公務員		会社等		商店等		家 事		其 他	
	志	決	志	決	志	決	志	決	志	決
横 浜	553	114	2,869	1,084	1,106	724	2,013		299	
横スカ	29	14	1,029	597	227	190	544		177	55
川 崎	67	22	1,048	514	155	121	495		222	200
三 浦										
高 座	70	28	701	177	309	144	1,568	1,635	248	205
中	78	27	448	101	366	192	1,252		97	133
足柄上	17	3	259	146	28	16	272		124	81
〃 下	108	22	280	64	169	109	425	365	33	33
愛 甲	22	7	98	43	111	100	461		61	44
津久井	9	7	100	34	43	33	221	339	27	23
計	953	244	6,832	2,760	2,414	1,629	6,951	2,338	1,288	774

卒業生数	横 浜	11,946
	横スカ	3,573
	川 崎	3,532
	三 浦	
	高 座	5,453
	中	4,985
	上	1,454
	下	2,685
	愛 甲	1,213
	津久井	879
	計	35,720

卒業生数		35,720		志望数ニ対スル%	卒業生数ニ対スル%
進 学		志望数	決定数		45.4%
	通 常	14,040	12,979		
	夜 間	1,837	1,174		
	計	15,877			
			14,153	86.5%	39.6%
	定 時	447			
就 職			203	44.9 [1.23]%	0.56%
		18,438			51.5
			7,745	42%	21.6%

Ⅱ 高等学校卒業生進学並に就職調査 昭. 25. 3. 31 現在

校数		53 校		卒業生数	4,433		
進学状況					就職状況		
公私	過程別		志望数	決定数	種別	志望数	決定数
公立	全日	通常		538	公務員	(297)	197
		夜間		9	会社等	(1,147)	541
	定時			0	商店等実務	(102)	73
	計			547	家事従事	(368)	354
	私立	全日	通常		688	其他	(206)
夜間				50		(2120)	
定時			3	計	2,276	1,321	
計			741				
其他			4		志望数	決定数	志
合計		1,998	1,292		1,998		

◎備考 特に高校においては3月31日
現在では中間報告的集計である。

	志望数	決定数	志望ニ対スル%	卒業数ニ対スル%
進学	1,998			45%
		1,292	65%	29.1%
就職	2,276			51%
		1,321	58%	29.6%

指導部調査課 (25.5.10)

注 神奈川県立公文書館所蔵の簿冊「昭和25年(度) 教育委員会々議録 教、総務課／秘書室」に収録されている。1950年5月10日の定例会の資料。合計の数値が計算の結果と異なる場合があるが、そのまま記載した。

二二 新制中学校新規卒業者雇用対策協働要領
二五下厚第一〇二号

昭和二十五年四月七日

足柄下地方事務所長

各 町村長 殿

新制中学校新規卒業者雇用対策について

最近の経済界の激働〔働〕により失業問題はいよいよ深刻化し、これが年少労働者に及ぼす影響も大きく、ことに新制中学校新規卒業者の就職は極めて困難な現状にあり、これを青少年問題の一環として積極的に解決せねばならぬ重要性にかんがみ、この度神奈川県青少年問題協議会において別紙の通り実施基本要領の決定をみたので貴職におかれても特別の御配慮をお願いいたしたい。

新制中学校新規卒業者雇用対策協働要領

一、目的

最近の経済界の激働〔働〕により失業問題はいよいよ深刻化し、年少労働者に及ぼす影響も大きく、ことに新制中学校新規卒業者の就職は極めて困難な現状にあり、これが解決のいかんは年少労働者の人格を破壊しわが国再建のために障害の重大原因ともなることにかんがみ、ここに職業、労働行政機関を中心として関係機関、民間団体と県民との協力態勢を確立し、これが解決のため、積極的活動を展開する。

二、方針

児童委員はその地区の最寄公共職業安定所及び労働基準監督署と密接な連絡を保ち、その管轄区域内の工場事業場等の使用者で適当と思われる求人一件以上を開拓すること。

三、実施期間

昭和二十五年四月一日より六月三十日までの三ヶ月間とする。

四、実施機関

神奈川県、児童相談所、地方事務所
町村、児童福祉司、児童委員

五、実施方法

1 宣伝について

- (一) 県に於いては新聞、ラヂオ、県広報、街頭放送（駅構内、映画館劇場等の放送を含む）等の報道機関の協力を求めるほか、ポスター、リーフレット等による宣伝を行うが、町村においても右に準じて可能な範囲に宣伝すること

- (二) 町村はあらゆる会合の機会を利用して本件の趣旨を積極的に周知宣伝すること

2 求人開拓連絡について

- (一) 児童委員は、その管轄区域内の工場事業場等の使用者に対し本件の趣旨を周知し、求人の開拓を積極的に行うこと この場合年少労働者の雇用について深い理解のある使用者であることが最も望ましいことであることはいうまでもない

- (二) 求人申し込みがあつた場合は所定の「求人通報票」にその内容を具体的に記載し、町村を経由して最寄公共職業安定所へ送付すること

- (三) 町村は2の(二)により児童委員より「求人通報票」の送付があつた場合は次の様式による「求人台帖」に記録のうえ最寄公共職業安定所へ送付すること

番 号	求 人 者		所在地	求 人 数	職 種	雇用条件	取扱児童委員名
	受 理 月 日	事 業 名					
			男				
			女				
			計				

- (四) なほ児童委員はその管轄区域内の工場事業場の雇用趨勢について公共職業安定所の運営上参考と思われる情勢を提供し援助すること

3 就職後の補導について

- (一) 児童委員はその管轄区域内の新制中学校卒業者中就職者を次の様式により調査し、就職後の補導を行うこと

氏名	年令	住所	就職先	所在地	事業名	職種	労働条件
----	----	----	-----	-----	-----	----	------

(二) 補導中問題を発見した場合は児童福祉司と連絡して、適切な早期の措置を講ずること

4 未就職者について

児童委員は、その管轄区域内の新制中学校卒業者中、未就職者を次の様式により六月三十日迄に調査し、最寄公共職業安定所と連絡し極力職業の斡旋に努めると共に一方事情により生活保護法の適用を考慮し、経済的援助を与へる等保護の措置を講ずること

氏名	年令	保護者名	学校名	住所	希望職種	記録
----	----	------	-----	----	------	----

5 悪質使用者について

年少失業者の就職困難な現状に乘じ、悪質な使用者、労働ブローカー等が潜行し、児童福祉法、労働基準法、職業安定法に違反する行為があるから右の悪質者を発見した場合は、関係機関に通告すること

注 箱根町教育委員会所蔵の簿冊「昭和二十五年 度 学 事 書 類 仙石原村役場」に収録されている。

二三 中学校建設促進の請願（鎌倉市）

鎌倉市立第一中学校建設促進請願について

四月二十七日市議会定例会に於て別紙の通り市教育常任委員会の決定事項を採択し市当局に於ての処置を適当と認むる旨自治法第二百二十五条により送附がありましたので供覧いたします

二五鎌議発第四六号

昭和廿五年五月廿三日

鎌倉市長 磯部利右エ門 殿

鎌倉市議会議長 榎本義信

鎌倉市立第一中学校建設促進請願について

標記について、本年四月二十七日の本市議会定例会に於て別紙の通り教育常任委員会決定報告事項を採決致しましたから、貴職に於て処置することが適当と認めますので自治法第二百二十五条により別紙送付致します。

追而 この処置の経過及び結果については御報告あるよう致されたい

教育常任委員会決定報告事項

一中建設の請願について

一、一中建設については本年度予算にも既に計上してあるので補助金起債等財源が確立して居りましてこれを着工するには異存はない

一、一中だけでなく本年度建設計画にある三校にそれぞれ一中に準じて建設準備委員会を設置し建設促進も強力に図ることとする

一、この委員会のメンバーとして教育常任委員が中心となつてP・T・A関係の委員や建設、内政各常任委員、更らに地元有力者も加り委員の数は七名として強力な会を設置する

一、附帶的にそれに関連して

鎌倉高等学校建設促進委員会が別個にあるがこれを解消して右に準じ新に建設促進委員会を設置して強力にする

以上

請願書

鎌倉市議会議長

榎本義信 殿

昭和二十五年三月廿日

鎌倉市立第一中学校P・T・A.

鎌倉市材木座

■■■■番地

会長

日比野清次（銀行員）

明治■■■■年■■月■■日生

鎌倉市長谷

■■■■番地

第一中学校建設促進委員長 今村義郎（歯科医）

明治■■■■年■■月■■日生

藤沢市南仲通二丁目■■■■番地 委員 萩原正安（校長）

明治■■■■年■■月■■日生

鎌倉市大船町

■■■■番地

委員 星野秀治（副校長）

明治■■■■年■■月■■日生

鎌倉市大町

■■■■番地

副委員長 奥津芳之助（薬剤師）

明治■■■■年■■月■■日生

鎌倉市立第一中学校建設に関しては、昭和二十四年二月第一中学校々舎建設促進委員数名を以て貴議事に歎願致しました通り同校父兄としましては昭和二十二年四月四日付で新学制実施準備協議会議長具申の線に沿へ第一中学校々舎建設は二十三年度中にも実現する事を期待して参りました事は御高承の通りであります。然るに二十三年、二十四年、共真に己むを得ない客観状況により遂にそのことなくして経過し第一中学校第一回生は遂に最悪条件下で卒業することとなりました。これは単に中学校側教育に多大の不利・不便をかけてゐる許りでなく第一小学校側に於いても幾多の問題を包蔵して今日に到つた事は明らかであります。

私共父兄はこの窮状を見るに忍びず、二十四年度は民間事業として校舎建築を具体化せんとして一ケ年間その為に心血をそそぎ幸いにも、各方面からその熱意と企画を高く評価され着々具現の域に近づきましたところ最近に至り臨時国会並に二十五年通常国会で義務教育の為の校舎建設補助が復活する様に聞き及び、之亦各方面の御厚意により第一中学校建築費予算計上の段取りにまで立到りました事はまことに感謝に堪えません。

就いては第一中学校校舍建築の今日までの経緯にも鑑み右様の順序による市事業としての校舍建築こそは第一小学校三千第一中学校一千の父兄はもとより市民全般多年の熱願であります事を御理解いただき、此の度こそはつきり実現させていたゞきたいと願ふものであります。

この為速に貴議會を主体として第一中学校建設促進委員会（仮称）を設立せられ、土地問題・資金問題、その他実行につき父兄 一般市民・学校職員の総意を反影せしめらせ、一日も早く具体化への一步を踏み出されんことを懇願してやみません。右重ねて請願致します。

紹介議員

（順序不同）

西川 吉雄	坂本 仲三	臼井 豊次	山田 勝治	石渡 喜市	青木 元二	馬場 糸藏	八尾 正家	藏並 長勝	小倉 正夫	鈴木 誠治	久保田 貞次	山田 尚
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	------

注 鎌倉市教育センター所蔵の簿冊「昭和二十五年度 学事書類 二冊之内第二号 教育課」に収録されている。

高校普通科入学希望 25年7月

二四 横浜市内各中学校の高校普通科入学希望者数

<div> <div>高校</div> <div>昨年度募集人員</div> <div>中学</div> </div>	希望丘	翠嵐	緑ヶ丘	立野	平沼	鶴工	鶴高	戸塚	桜丘	横高	合計	中学校		
												在総籍数	三年籍数 在	入生徒数と 三年生比
	275	385	200	110	400	150	330	200	300	250	2600			
六浦	124										124	1090	378	38.4
金沢	117										117	1225	390	30.0
浜	139									16	155	1035	344	45.0
計	380									16	396	3350	1112	35.6
日吉台		26									26	260	95	27.0
城郷		40									40	437	149	27.0
新田		16									16	322	111	14.4
中川		6									6	323	115	5.2
都田		11									11	522	165	6.7
山内		12									12	320	106	11.3
田奈		14									14	455	146	9.6
谷本		29									29	472	156	18.6
中山		25								5	30	517	175	17.1
大網		25									25	681	175	14.3
六角橋		104									104	764	262	29.7
栗田谷		181			7						188	1568	514	36.6
計		489			7					5	501	6641	2169	23.1
根岸			46							1	47	621	228	21.6
岡村			34		1					2	37	906	279	13.3
大鳥		1	111	7							119	931	300	29.7
計		1	191	7	1					3	203	2458	807	25.1
平楽				69						1	70	1139	393	17.8
港	1		33	98	2						134	1126	358	37.4
吉田	3	1	6	38	48	1					97	699	227	42.7
計	4	1	39	205	50	1				1	301	2964	978	30.8
岡野	3	5			107				3		118	1257	424	28.6
西				2	124				1	1	128	1435	456	28.1
浦島丘		7	1		86						94	1132	334	28.0
老松	3	2	1	1	139		1			2	149	1210	423	36.2
神奈川					105						105	1040	335	31.3
計	6	14	2	3	561		1		4	3	594	6074	1972	30.1

第4章 中学校

豊岡					1	11	51			8	71	866	315	22.5
汐田					1	105					106	1302	495	21.4
市場					1		97			3	101	1104	361	28.0
寺尾	1						130				131	904	275	47.6
末吉						58	6				64	741	226	28.3
生麦						6	55				61	918	293	20.8
計	1				3	180	339			11	534	5735	1965	27.2
戸塚								139			139	1398	498	27.9
中和								13			13	502	177	7.3
本郷								29			29	464	126	23.0
岡津								23			23	293	101	22.6
大正								19			19	331	116	16.4
原								11			11	193	63	17.5
計								234			234	3181	1081	21.6
保土ヶ谷		3			5				108		116	1206	153	25.6
岩崎					1				182		183	1275	411	44.5
鶴峯					1				82		83	853	275	30.1
瀬谷									8		8	414	132	6.1
宮田											0	461		0
計		3			7				380		390	4209	1271	30.7
南	1								1	114	116	1137	311	37.3
第一港南										36	36	470	140	25.0
第二港南										43	43	520	176	
蒔田			2		4					94	100	1209	377	26.5
共進			1	3	1					78	83	1432	507	16.4
計	1		3	3	5				1	365	378	4768	1511	25.0
合計	392	508	235	218	634	181	340	234	385	404	3531	39380	12566	28.1

注 横浜市史資料室所蔵の簿冊「岡野の四年目」（長谷川雷助旧蔵資料）に収録されている。「入学生徒数と三年生比」が計算の結果と一致しない場合がある。また「三年在籍数」の合計は、計算すると「12566」となり、その数値で比率を算出すると、「28.1」ではなく「27.4」となる。

二五 学習検査運営審議会の設置

学習検査について

学校教育課

学習検査は中学校が自校の生徒の学習結果を検査すると云う立場から出発し、それを客観化するために出来るだけ客観性のある問題によつて行うものである。と云う目的に対し誤解を受けぬよう高等学校入学者選抜とは全く独立したものであることにつき一般の認識を得たい。昨年度の実情に鑑み、本年度のためには一日も早く研究協議を行い、円滑な実施の運びになるようにと去る三月県下各地区中学校長代表を中心とした準備会を設け、その準備会の意見に徴して昭和二十六年度学習検査審議会を設ける方針で出発し右準備会を第三回まで開催したが横浜市教育委員会と根本的打合せをした上で出発すべきであるとの結論に到達したので横浜市教育委員会事務局との打合せの結果

一、県・横浜市夫々独自に審議会を構成し問題を作製〔成〕する

二、県・横浜市両審議会は密接に連絡を保ちその作問並に実施についても相協力して目的達成に進む

等の諒解のもとに県は横浜市を除いた県下全地域を対象に審議会を結成することとして準備会を解散した。

このような経緯から、次のような構成による学習検査運営審議会を構成し問題作成並にその標準化の仕事を委嘱する。

本年度は県下の中学校につき第二学期間に全学年に亘つて一回づつ学年毎に日を別にして実施する。

学習検査運営審議会

一、性格 教育長の諮問機関とする。

二、目的 学習検査問題を作成する専門委員会の構成方針を研究教育長に答申する。

学習検査の実施を円滑にする。

三、構成

中学校長	八名（川崎、横須賀、高鎌、愛甲、足柄上、足柄下、中、津久井）
中学校教諭	八名（全右）
教員組合	三名
国大教授	三名
教育研究所	二名
県教委事務局	九名
二市七出張所	九名

注 神奈川県立公文書館所蔵の簿冊「昭和25年（度）教育委員会々議録 教、総務課／秘書室」に収録されている。一九五〇年五月一〇日の定例会の資料。

二六 「中等社会科 技能の評価」

中等社会科 技能の評価 — 地図の取扱いを中心として —

佐 宗 米 男

本稿は本年一月二十六日、本校社会科研究部に於ける研究発表の際の要点である。現在は社会科に限らずどの教科でも、生徒の基礎的知識や、技能及び態度が身についていないとよく云われている。本校に於てもこのような問題に着眼し、先ず評価の問題を取りあげて研究した。

ここでは技能の評価のうち、「地図の取扱い」という問題について述べてみたい。それはこの問題が、他の成績品一般の評価にも相通ずるものがあるだろうと思うからである。

一、中学校社会科学習と地図

中学校社会科学習単元で、「わが国土」「都市と村」、「世界の農牧生活」等が直接地図と関係を持ち、「近代工業の発達」、「交通機関の発達」等においても、地図の取扱いなしには学習成果をあげることはできない。地図を取扱う技能に熟練しておれば、問題を解決する際、その問題をより具体的に科学的に理解することができ、地表の諸現象を簡明に、しかも興味深く把握することができるのである。

二、地図に関する技能評価の基準

すべて評価をする際、基準がなくしては適確な評価はできないであろう。そこで本校においては、過去の評価に基づいて、昭和二十四年度第一学期はじめ、次に掲げる一表を計画した。これにつき、社会科研究部員で熱心な議論がなされたが、理想が必ずしも実行されるものでなく、結局実状に即して低い基準のもとに実験することとなった。この基準の適否は、後述の実験の結果が証明したわけである。

中心目標として各学年次のような線で基準をもつこととした。

第一学年は、「郷土」、「日本」を通じ、親しみやすい地図を使用して、地図の取扱いに是非共必要と思われる基本的要素の習得に重点をおき、学習活動を通じて地図の取扱いになれさせるように努める。

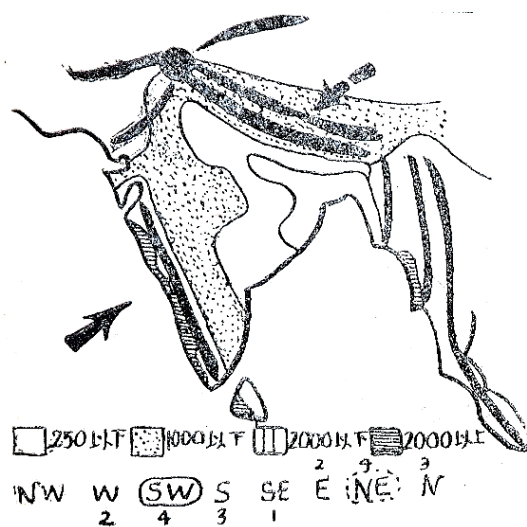
第二学年は世界を中心として、地図を有効に利用し、くふうする技能に重点をおき、これを単元学習を通じて訓練し、地図の取扱いに熟練させるように努める。

第三学年は、地理的要素を含んでいる単元が少いから、われわれが実社会にあ

つて地図を利用する場合と同じ立場で、地図を学習活動の上に必要に応じて活用させるように努める。

以上の重点を先ず決定して、評価の分類を行い、目標に即した地図の作業の標準を、読図・作図・表現の三区分から割出したのが次表である。

第1図 インドの風向と年雨量



読図のテスト

三、評価の実際

前項において述べた評価の基準によって実施したテストと作品の評価の実際について、次にその例を示すこととする。

1、テスト式問題

(イ) 読図

◎方向と単一読図

例1、次の地図はインドの図である。(第1図)

↓↓印は風の吹いてくる方向 — は山脈 □内は年雨量である。

問1 夏の季節風の方向を下記方向 NW — Nのうち、適当なもの一つに夏の風は○で、冬の風は○で記入しなさい。

問2 形や風の方向をよく読みとつて、雨量図を完成しなさい。

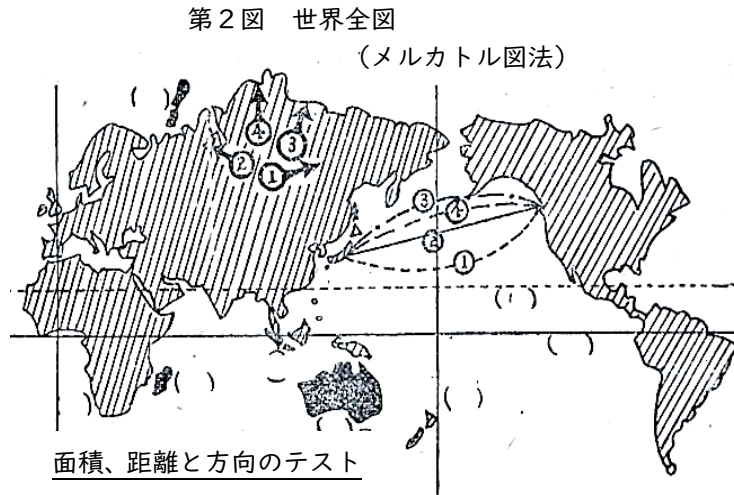
問題の説明

学年		1	2
単元		1. わが国土 2. 都会といなか	1. 世界の農牧生活 2. 近代工業の発達
評価の基準		【地図の取扱いに慣れさせる】 1、地図に親しみ、興味をもつたか 2、読図の基本的技能が得られたか 3、郷土や日本の略図を描くことができたか 4、平面的にくふうできたか 5、友だちの地図の批評ができるようになったか	【地図の取扱いに熟練させる】 1、主な図法・地図の種類別作図法ができたか 2、用途に応じ、適当な地図が描けたか 3、地図をごく簡略化して描くことができたか 4、二つ以上の地図を対比的に読むことができたか
評価の区分	読図	方位・距離・面積・縮尺・自然文	土地利用・地形・自然と人文の対比
	作図	模写・方眼図・拡大図・白地図・原図・郷土及び日本の略図	図の主要部・世界の略図・簡略図・分布図・地域区分図・立体図(模型図)
	表現	地形・土地利用・諸分布の彩色方法 鮮明 正確	簡略 正確 迅速 応用 くふう
	使用	二五、〇〇〇分の一 五〇、〇〇〇分の一 藤沢近傍 神奈川県 日本各地 日本近傍	日本本 世 主要図 六州 世 界

地図に関する技能評価の基準

藤沢一中・社会科研究部

- 風向は得点数による。(図中の数字)
 - 雨量は正確数による。(四ヶ所)
 - 全般としては、表現の評価の資料とする。
- 註一 単一読図とは一枚の地図を読む技能であり、対比読図とは二枚の地図を比較対称〔照〕して考察し、読みとる技能である。
- 例2、次の図はメルカトル図法による世界の略図です



(第2図)

↑は方向、いろいろな線は海上航路、黒くぬつてあるのは島です。

問一 航路(横浜—シヤトル)四本のうち、最短距離の航路を○でしるしなさい。

問一 黒くぬつてある島の中で、面積の広いものの順に()内に番号を記入しなさい。

問一 図中、緯度・経度のうち、次の項目に適するものを図中()内に左記記号を記入しなさい。

- イ、一八〇度線
- ロ、〇度線
- ハ、北回歸線
- ニ、赤道

問題の説明

○評価はすべて四点採点法による。(図中○内の数字)

(ロ) 作 図

作図の評価は、略図・見取図・模型等を描く能力、作る技能をテストして、案外良好な結果を得たが、こゝには実例を省く。

(ハ) 表 現

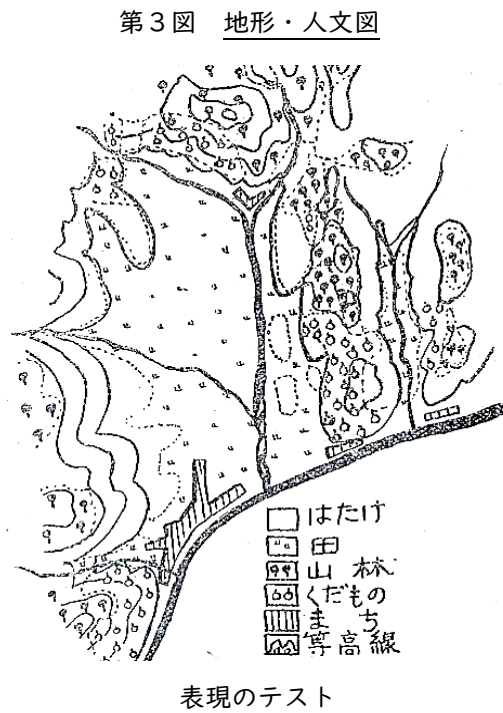
こゝでは、よく用いられる自然及び人文景觀図の彩色表現のテスト式問題を出してみた。第3図は都合上自然と人文の二図を一緒にしたが、別に描く事が必要である。

例 次の地図は地形(人文)図です。いろいろくふうして着色しなさい。

問題の説明

次の四つの着眼点により採点した。

- 鮮明に描かれているか。
- 正確であるか。
- くふうして描いてあるか。
- 簡略化されているか。



2、作品の評価

日本の気候図について、ヒントを与えず、一斉作業により描かせた評価の結果は、五段階の実例を示すことが最もわかりやすいが、こゝにはA級に相当する実例をもとに説明する。(第4図を参照されたい)

問題の説明

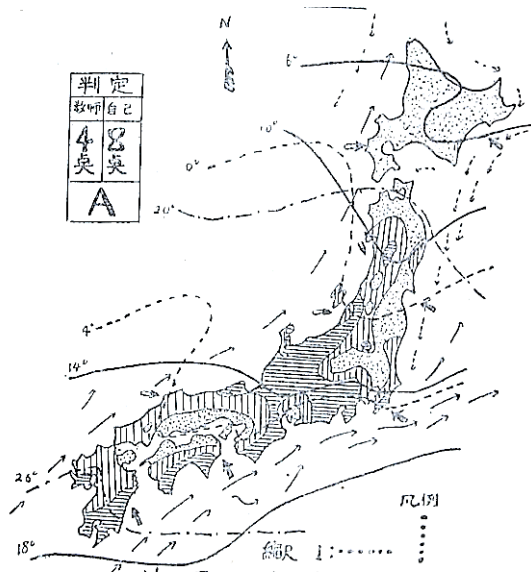
○まず、生徒の自己評価のできるように次の八つの着眼点を示して採点させる。

- 1、雨量
- 2、気温
- 3、風向
- 4、方位
- 5、題目
- 6、縮尺
- 7、海流

四、実験結果の考察

以上のような方法で行った実験の結果は次の表のようになった。

第4図 日本の気候



作品の評価

- の七項目が記入してあるか。8、日本全国の位置が正し「い」か。
この結果を採点して、自分の地図に記入し教師に提出させる。
○教師は総合的に評価をする為に次の四つの着眼点をもとに採点する。
1、合理的に彩色しているか
2、夏冬を有効に表現しているか
3、図が簡略化して描けているか
4、正確に描けているか
○図中□内が十二の着眼点に合致した数である。即ち（ ）内は自己評価
四（七・八）点………A 三（五・六）点………B 二（三・四）点………C
一（一・二）点………D 〇点………E
として評価する。
○第3図は模範図である。
註：なお、紙数の関係上例題は制限されているので、詳細は本校社会科研究
部著、明治図書出版の「社会の評価」を参照されたい。

実験期間——昭和廿四年四月十二月
対象人員——四百六十名
数字はパーセント

地図に関する技能判定の結果

表現		図作		図読				区分 学年	判定結果
地文関係	自然関係	見取図	略図	対比の地図	単一の地図	符号や縮尺	位置や方向		
8	38	4	0	2	16	2	11	I	A
8	52	8	2	6	20	3	6	II	
10	33	9	2	24	20	3	16	I	B
16	20	21	14	27	26	8	14	II	
20	15	17	14	22	20	25	20	I	C
14	12	35	18	31	25	33	30	II	
28	8	32	17	18	16	32	22	I	D
30	10	23	54	19	19	54	30	II	
34	8	67	67	34	28	38	31	I	E
36	4	13	32	17	8	4	20	II	

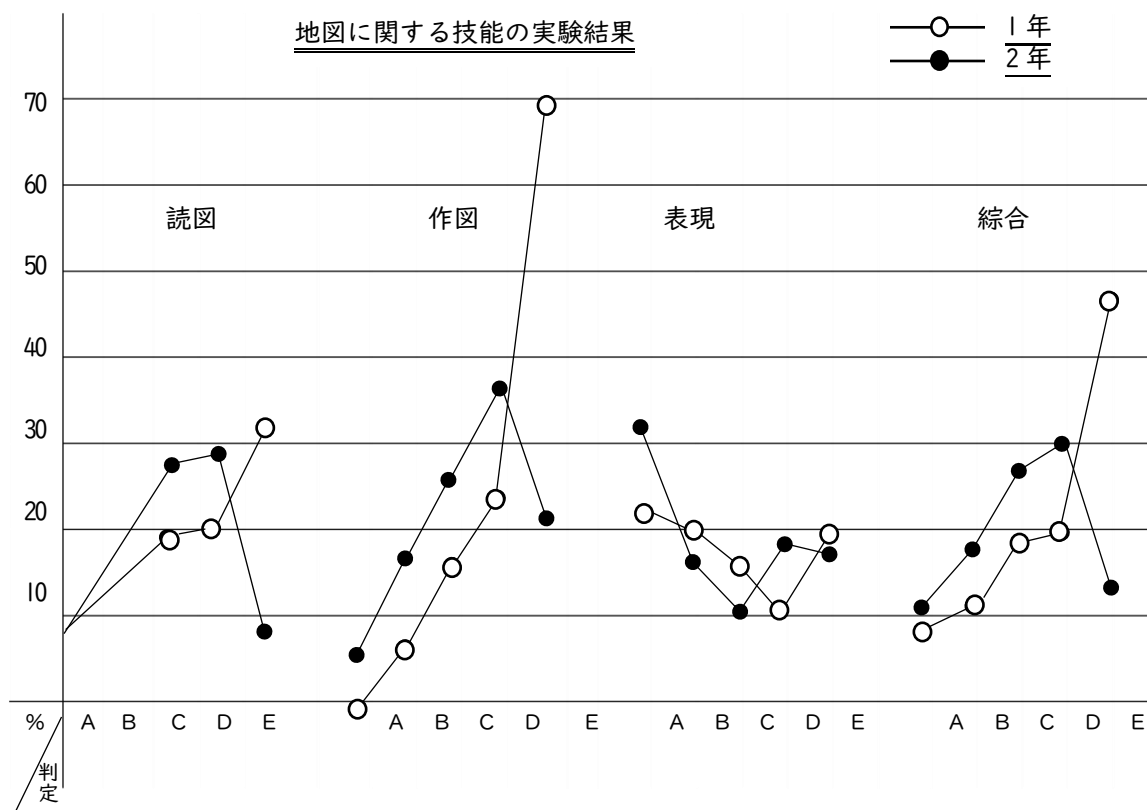
右の表を総合的に、次のグラフによって考察してみたいと思う。

1、読図

基礎的な読図が案外にできていない。即ち符号さえも十分読みとれていない状態であり、位置や方向のごく基本的な読み方でさえも、グラフの如く尻上りの状態を示した。一葉の地図を読む技能は、やはり二年生において向上を認めるが、二葉以上の地図を比べて読みとる技能は、一、二年生とも低調であった。読図の低劣なことは、とかく模写に走る傾向にあることでもよくわかる。

2、作図

一、二年生ともにきわめてわるい。しかし二年生に対して、一年生と同一形式



で評価した場合には、さすがに大きな差を認めるが、二年生の基準のもとでは、やはり作図能力は、すこぶる低調とみてよい。

3、表現

鮮明な表現を主とし、そこにくふう創造性を重視した。地形図は人文図に比して、まったく逆のカーヴをもっている。すなわち、地形図に対する技能が優れているのである。これは、地形図に接する機会の多いことを証明しているのである。読図・作図に比すれば表現の結果は良好であつたといえる。

4、総合結果と反省

二年生の評価の結果が大体において正常の回線に近いものを出しているのに比して、一年生が非常に未熟であり、まったくの逆上りのカーヴを示している。二年生は級が極度に減少し、一年のそれと対照的である点に、進歩を認めた。要するにわれわれの作つた基準は、前にも述べたように、極めて低いものであると思つたが、この基準に対してもなお、前途程遠い結果を得たのである。しかし、この結果に基づいて、この基準を変更しようとは、われわれは考えない。その理由としては、地理的要素を含んだ単元を学習する場合、どうしてもこれだけの技能は必要であること、教師自身が指導に対し関心が薄かつたこと、問題の出し方が不完全であつたこと、地図を持つている生徒が全体の三分の二位であつたこと等をあげたい。従つて、われわれは今後もこの基準をさげることなく、指導を適切に加えて向上させるつもりである。

五、結論

評価はともすると教師のカンに走りやすいものであるが、何とかして客観的な評価の方法を見出したいという意欲に燃えてとりかかつたこの実験も、思うような結果が得られなかつた。しかし、この実験の結果からも、教師はいたずらに理論や理想にのみとられず、生徒の実態をよく把握して地味に研究していくべきであることを強く感じる。技能の評価においても、あらわれた現象に捉われることなく、内容に重点を置くべきであると思う。われわれのこうした意欲と経験とに、御批判と御指導がいただければ幸である。

(藤沢市・一中・教諭)

注 『かながわ教育』第一四号(一九五〇年七月)。

二七 高校入試選抜方法に関する関東地区の中学校長会の申合せ

高校入学選抜方法に関する関東地区の申合事項

全日本中学校長会第二回札幌大会に於いて研究協議題として高校入学選抜に関する問題が真剣に研究協議されたが高校入学選抜の方法は、明日の中学校教育の性格を決定しやがては民主主義国家の興廃にかかる極めて重大な問題であるのでその後の処理に関して、この問題の責任発表県である埼玉県の招請によつて関東地区の緊急協議会を十月九日日本教育会館で開催して次の事項を申合せた。この問題はすでに神奈川県に於いては解決され三ヶ年に亘つて実施し極めて良好な結果を得ているので、参加者は二十七年高度高校入学選抜を期してそれぞれの地区で完全に処理解決するの決意を堅くした。

Ⅰ 確認事項

- (1) 講和後の大「平洋時代」に新生する日本の基盤をなす国民教育の重心となる新制中学の教育は生活教育の徹底を期さなければならぬ。
- (2) 然るに最近の高校入学選抜方法が過去の試験地獄再現の徴候をみせて来た。
- (3) このままで行くなら新制中学教育は高校受験の準備校となり終つて大多数の生徒は犠牲になる。

2 申合せ事項

A 根本策

- (1) 六・三・三の教育提携の実践を各地域毎に活発にして青少年一連の教育目標と内容と方法を相互に理解する。
- (2) 漸次一高校一学区（普通課程）とする六・三・三の教育ピラミッド「ママ」の建設につとめて地域文化の向上を期しながら高校入学希望者の完全入学を目的として無用な入学競争の弊を排除する。
- (3) 同種別の高等学校の施設内容等を同一水準に向上させるよう努力し不等「当」な学校差を除去する。

B 緊急策

- (1) 各地域の高校入学選抜方法の協議に当つては方法以前の根本問題について充分な討議を行つて、その根本の線から逸脱しないこと。
(通牒は命令ではなくて、示唆であることを憶えて、宿命的な考えを持たないこと。)

いと同時に徒らに、いわれなきメンツや、感情に捉われなくて、真実の教育をくずさない方法を工夫する）

- (2) 即ち新制高校の教育は準義務教育であつて、本来選抜テストを必要としな

いものであること。
志願者が超過する場合は中学に於いて進学指導を行うと共に進学学区を設けて完全入学を目指すこと。

- (3) なほ超過する場合は極めて少数であるが、そのために全志願者を試験地獄におとし、中学教育全体を邪道に追い込むような選抜テストは絶対に行わないこと。

○ 一切の選抜試験に似た方法を排して中学校三ヶ年の指導要録を参考に選抜を行うこと。

（指導要録に記載する学業成績は正常分配曲線による）

○ 超過する少数者をやむなく落す場合は、その少数者に限つて標準テストによる評価を志願者の在籍する中学校長から提出してその参考に資するなど各地域毎に準備教育を伴わない方法を工夫する。

以上の事項はそれぞれ都県の教育委員会に要望すると共に、これが実現方に関して校長会自ら万善「全」の処置を講ずること。

注 横浜市史資料室所蔵の簿冊「岡野の六年目 其の一」（長谷川雷助旧蔵資料）に収録されている。

二八 足柄上郡各中学校研究題目
昭和二十六年各研究題目
中学校

校名	研究題目
三保	教科研究（山村に於ける理科教育）
寄	ホームルームの研究 カリキュラムの編成
上秦野	教科研究（音楽科）各教科のカリキュラムの作成と実際指導の方法
中井	特別教育活動
湘光	教科研究（英語科） 図書室の経営
松田	品性教育
山北	教科研究（社会科）
共和	教科研究（保健体育科） 郷土研究、最小学校としての中学校教育の研究
清水	教科研究（図工科）
北足柄	教科研究（数学科）
南足柄	学校図書館 視聴覚教育
文命	視聴覚教育の実演授業
西相	教科研究（職業家庭科）

注 松田町立松田小学校所蔵の簿冊「足柄上郡教育会 昭和18～ 足柄上郡小学校教育研究会綴 昭23～40 松田町立松田小学校」に収録されている。

二九 警察署長が見た「中学生の希望」

警察署長が見た「中学生の希望」

少年の心理を充分に把握していなければ、補導の完型は期せない。県下中東地区警察署に於ては、管内の中学生から、意向の聴取の「を」試みた。

一、日時 昭和二十六年三月十五日

二、対象 中郡高部屋村中学校三年男女生徒（本月末卒業予定のもの）

男生徒 五十三名

計九十六名

女生徒 四十三名

三、場所 中郡高部屋中学校三年教室

四、調査の内容 無記名で男女両生徒共、質問内容は同じ

(1) 一番ほしいもの

(2) 好きな本

(3) 遊び

(4) 今の世の中は（現在の世相に対する感想）

(5) 一番大切な人

(6) 偉いと思う人

(7) 将来に対する希望

以上七項目をガリ版印刷して一人一枚宛配布した。

五、回答の状況

(1) 全然記入しないもの

男生徒 二名

女生徒 なし

(2) 一部記入のないもの

男生徒 十八名

女生徒 七名

(3) 各項目中記入のない欄下最高のもの

今の世の中

将来に対する希望

の二つであつて現在の世相が少年の気持を暗くし、少年に希望がなく漫然と毎日を通して状態をうかがい知ることができる。

したがつて希望が無いところには学業の成績も向上しない。

今の子供の能力は低下しているといわれる原因も、ここにあるという事が推察で

きる。

補導に際して、少年に希望を持たせなければならぬという事が、強く叫ばれているのもかような処に原因していると思う。

(1) 各項目別集計表
(一) 一番欲しいもの

種 類	衣 類	お 金	家 具	本	職 業	ミ シ ン	履 物	食 糧	楽 器	手 提 鞆	運 動 用 具	人 か ら の 信 用	良 い 友 だ ち	自 転 車	靴	学 用 品	財 産	腕 時 計	機 械 類	旅 客 機	机	無 記 入	計
男生徒 回答数	七	一一	一	九	一			二	一	一	一三	一	一	一		一	三	一	一	一	一	九	六八
女生徒 回答数	二〇	一二	一二	一二	五	三	三	一	一	一												一	六三
計	二七	二三	三	二一	三	三	三	三	二	二	一三	一	一	一		一	三	一	一	一	一	一〇	一三一

註

回答人員に對し、
計が多くなつて
いるのは、一人一
題について回答
したの三を記入
したのもあつた
ためである。

(2) 好きな本

本 の 種 類	童 話 本	レ ミ ゼ ラ ブル	世 界 名 作 選 集	中 世 時 代 に 書 か れ た 本	冒 険 小 説	漫 画	自 由 学 校	ぼ つ ち や ん	ス ポ ー ツ の 本	参 考 書	探 偵 小 説	農 業 の 本	父 を ば 招 け	小 説	偉 人 伝	中 学 時 代	雑 誌	文 学 的 な 本	經 済 学 の 本	少女小説	少女の友	小学生の友	家の光	女学生の友	時代小説	無 記 入	少女世界
男生徒 回答数	四	一	二	一	二	一	一	一	一四	一	一	二	一	二二	一	一	四	三	一							四	
女生徒 回答数									一					八	三			五	一	一八	四	三	一	一	五	一	一
計	四	一	二	一	二	一	一	一	一五	一	一	二	一	三〇	四	一	四	八	二	一八	四	三	一	一	五	五	一

計	学 習 年 鑑	中 学 ニ ュ ー ス	源 氏 物 語
六 八			
五 五	一	一	一
二 三 一	一	一	一

計	家 族 団 欒	無 記 入	羽 根 つ き	摘 草	百 人 一 首	室 内 遊 戯	お 手 玉	音 楽	映 画	海 の 遊 び	小 鳥 を 飼 う	登 山	鬼 ご っ こ	か る た 会	釣 り	旅 行	将 棋	読 書	運動Ⅱ野球、卓球、 バレー、水泳、 バスケット、 テニス、其他、箱	工 作	種 類
六 八		一 〇									一	二	一	一	三	二	一	八	三七	二	回 答 数 男 生 徒
六 三	一		一	一	二	一	二	一	二	一		一			一	一		六	四二		回 答 数 女 生 徒
一 三 一	一	一 〇	一	一	二	一	二	一	二	一	一	三	一	一	四	三	一	一 四	七九	二	計

(3) 遊 び

(4) 今の世「の」中

内 容	男生徒	女生徒	計
混乱している	二二	七	二八
落付いて勉強できない	一		一
正直でありたい	一		一
子供の遊び場がない	一		一
凶悪犯罪が多い	七	一四	二一
道徳的に乱れている	一	三	四
青少年犯罪が多い	三	一	四
就職難である	一		一
明かるい世の中である	一		一
火事が多い	二		二
民主主義が徹底している	二		二
押売りが多い	一		一
物価高である		二	二
複雑している		二	二
不良学生が多い		四	四
不良学生が多い		三	三
悪人が多い		一	一
危険な事が多い		一	一
くだらない小説が多い		三	三
おとなが苦しい者に対 して理解がない		一	一
品物が豊富である		一	一
無 記 入	一一	四	一五
計	五三	四六	九九

(5) 一番大切な人

人名、職名、続柄等	男生徒	女生徒	計
両 親	一九	二二	四一
先生（教師）	五	八	一三
村 長	一		一
マツカ「」サー元帥	二	一	三
吉田総理大臣	五	四	九
警 察 官	四	三	七
トルーマン大統領	一		一
世の中で役に立つ人	四	二	六
国 会 議 員	四		四
兄 弟	一	三	四
主 人	一		一
父	一		一
友 だ ち	三	一	四
天 皇		一	一
私たちを幸福に してくれる人		一	一
母		一	一
医 者		二	二
自 分		四	四
国を治める人		三	三
無 記 入	九	三	一二
計	六〇	五九	一一九

ワ シ ン ト ン	両 親	キ ユ リ ー 夫 人	水 泳 代 表 選 手 古 橋 等	湯 川 秀 樹	母	仁 科 芳 雄	リ ン カ ー ン	偉 い 人 は な い と 思 う	警 察 官	ト ー ル 「 ル ー 」 マ ン 大 統 領	福 沢 諭 吉	野 口 英 世	慈 善 家	国 会 議 員	世 界 を 明 か る く 平 和 に し て く れ る 人	天 皇	潔 白 な 人	総 理 大 臣 そ の 他 大 臣	世 の 中 に 役 に 立 つ 人	マ ッ カ ー サ ー 元 帥	人 名 或 は 職 名
				四			一〇			九	三	一〇				四		一二	一	一八	男 生 徒
一	三	一	一	五	一	一	六	一	二	八	一	一	一	二	一	一	一	七		一〇	女 生 徒
一	三	一	一	九	一	一	一六	一	二	一七	四	一	一	二	一	五	一	一九	一	二八	計

(6)偉いと思う人

計	無 記 入	ダ レ ス	ネ ー ル	大 下 弘	エ ヂ ソ ン	二 宮 金 次 郎	犬 養 健	先 生	ヘ レ ン ケ ラ ー
九 八	三	一 三	一	一	八	一	一		
五 九								一	二
一 五 七	三	一 三	一	一	八	一	一	一	二

(7) 将来に対する希望

計	無 記 入	文 学 家	優 しい 家 庭 の 主 婦	政 治 家	立 派 な 一 生 を 送 り た い	家 の 為 に 働 く	社 会 の 役 に 立 つ 人 に な り た い	洋 和 裁	歌 手	子 供 の 遊 び 場 所 を 作 っ て や る	実 業 家	職 人	ス ポ ー ツ 人	平 和 な 国 を 築 く	日 本 の 講 和 と 平 和 を 望 む	商 業	意 思 を 強 固 に し た い	就 職 し た い	人 か ら 信 用 さ れ る 人 に な り た い	農 業	事 務 員	両 親 を 幸 福 に し た い	希 望 内 容
五一	一三								一	一	一	一	一	八	一	二	二	三	一〇	三	二	二	男 生 徒
四〇	二	二	一	二	一	五	九	一〇										三	二		一		女 生 徒
九一	一五	二	一	二	一	五	九	一〇	一	一	一	一	一	八	一	二	二	六	一二	三	三	二	計

(国警神奈川県本部防犯統計課の資料による。)

注 『かながわ教育』第24号(1951年5月)。

三〇 クラブ活動における「自然科学部」の実際（藤沢市片瀬中学校）

一、はじめに

二、自然科学部について

三、自然科学部の活動目標

四、自然科学部の組織と内容

五、活動計画

六、「科学士」とは？

七、自然科学部研究カードについて

八、スライドの製作

九、まとめ

一、はじめに

先日行われた研究発表会で、私共は、クラブ活動について発表を行った。特に理科的なクラブ、即ち「自然科学部」の活動の実際についてである。今から五年前、荒れすさんだ校舎の中より第一番に生まれ出たクラブは自然科学に関するものであり、年々その組織と内容が強化されて今日に及んでいるのである。新しい理科室の完成された今日、歩み来た苦難の道をふりかえり、将来への計画を夢見ることは私たちの大きな仕事であり、極めて意義深いものがあると考え、簡単ではあるが筆をとることとした。

二、自然科学部について

そもそも学校の創立当初よりこんな名前のクラブがあつたわけではなく、生物、電気、化学等をより一そう好む者たちが、グループを作つて、放課後のひと時を楽しんでいる中に自然と組織立つたものの必要を感じ、だんだんと大きく成長して行つたものである。だから、自然科学部(N.S.D=Natural Science Department)はその中にいくつかの小さなグループ(之を課とよぶ)を含んでおり、今後、どんどん新しいグループが、増加する傾向にある。そこに私たちの学校に於ける自然科学部発展の特徴があるわけである。

三、自然化「ママ」学部の活動目標

科学は生活を支配し、文化生活は、合理的な科学生活に立脚する私たちの生活環境はすべて科学によつて包囲され、私たちは常に無数の疑問を提示されている。故に一步一步自然界の疑問を解決し、広大なる自然に接近することは要するに真

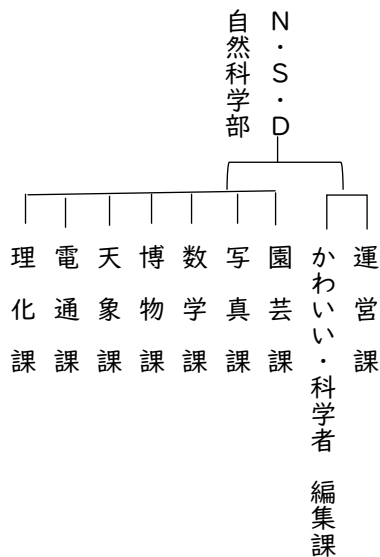
実を愛し自然の真理を唯一の研究対象とする私たちの使命であり最も公平にして自由なる社会への貢献であると信ずる。それが今すぐ生活に役立つかどうかという事は別問題にして、物事の不思議を正確に究明し解決する態度、これを養うことが、いつかは、日常の科学生活に役立つことである。

私たちは地味な態度で、永続的に研究して行きたい。そして常に何事に於ても疑問をもつような人間でありたい。―以上を自然科学部の目標としてかゝっている。

四、自然科学部の組織と内容

自然科学部は現在、二つの特殊な部門と、七つの研究的な部門とに分れ構成されている。

部門



而して各課の課長、及び班長は、運営会議によつて選出決定される。(大体三年生より)

次は二、三の課について内容を記してみよう。

(A) 運営課とは？

会合日―不定期

構成人員―各課顧問教師、及び自然科学部長、並びに各課長、副課長全員
会合場所―運営本部(理科準備室)をこれにあてている。

仕事―役員選挙、行事計画の立案決定、予算会議、その他、自然科学部運営上必要な事柄の審議

(B)「かわいい科学者編集課」

会合日—不定期

構成員—各課顧問教師及び自然科学部長、並びに各課長、副課長、更に各課の各班長（一、二、三年よりの代表者の意）

仕 事—自然科学部の機関法「誌」「かわいい科学者」を編集し発行する仕事を行う。

かわいい科学者とは？—

私たちの学校の生徒は皆「自由研究の手引」（小生作る、孔版印刷（二十八頁）片瀬中学校理科研究会発行、改訂版二十六年四月刊行という疑問集のパンフレットを持つていて、授業とクラブを問わず研究レポートを实によくまとめて出してくれる。中には非常にすぐれた内容のものもある。校内の研究発表会を持つて、それらを広く紹介すれば良いのであるが、仲々その機会がないので、本にしようということになり、自由研究重視の目的で研究収録を年二回孔版印刷で発行することとした。編集から製版・印刷・製本に至るまで一切の仕事を理科担任の私たちとN・S・Dの部員の手で一致協力、第一号は昭和二十三年一月に刊行され九十二頁、ささやかなる雑誌ではあるがN・S・Dの機関法「誌」として、「かわいい科学者」なる書名をつけた。その後定期的に号をまし、中には専門家に印刷面のごく一部を手伝ってもらったものであるが、とにかく現在では第九号の完成も真近であり、第一〇号の編集にもとりかかっている。

自分の研究物が孔版であれ、活版であれ、本になる事の喜びは大人も子供も同じ事である。生徒たちは、今度こそよいものを調べあげて掲載してもらおうとはりきるのとは当然のことと思う。

本研究法「誌」は出版部数平均一〇〇部（第七号は約五〇〇部印刷で之は例外—後述）で原則的にN・D・S（S・D）部員並びに本校生徒に実費で配布、数冊を研究参考資料として近隣校に贈呈している。なお、P・T・Aの熱烈的な要望と後援により、第三号は陛下に、第四号は皇太子殿下に献上申上げた。

以上のようなわけで、この課の必要性は、ますます重要視されて来た。「かわいい科学者」の編集方針もはつきりときまっているが、ここでは省略させていただく。

○活版印刷「江の島号」（第七号）に「ママ」について

私たちは、天下の景勝として知られている江の島をもつと科学的に研究調査す

べく、機会ある毎に植物（海浜植物や海草）採集・貝類・魚類の採集標本作製・地質・化石研究等を行つて来たので、開校四年目の現在では相当な資料が集つていた。更に毎年夏に江の島で行われる小、中、高校合同の「臨海実習」は資料を豊富にさせたのである。いつかは、この研究も「かわいい科学者」にまとめて刊行しようと計画していたが、江の島に徹底的に科学のメスを入れるには、どうしても社会科学方面の研究も必要となり、中学校に於ける理科と社会科は共に共通する点が多いので、人文科学部の社会科郷土調査班の者たちに呼びかけたのである。所が、郷土調査班は毎年毎年、夏と冬の二回ずつ江の島を中心に来遊客の調査（之を観光調査といい、市観光課の重要資料となつていた）をはじめ、商店街のこと、島の地理的研究、交通量の調査、名勝、史跡の調査、みやげもの等について非常に多くのレポートを完成してしたので、「江の島」の本の刊行を容易にさせてくれたのである。尚経費面で市観光課の絶大な援助があつた事は忘れてはならない事である。（本特集号は「かわいい科学者」第七号として発行されて「た」ものである）

私たちは、この「江の島号」を作つてから理科と社会科はいつも一体に研究活動を行つていかなければいけないと思つた。之は尊い両者融合の記録の第一歩である。

既に同誌は各方面に行きわたつていたので、大方の人は目を通された事と思う。或人はこの本を読んで、先生が研究したんではないかと言う。とてもない奴だと言いたくなる。先生は勿論手伝つた。しかし、内容の本体は生徒の自由研究にある。編集委員が生徒から選ばれ、土曜日の研究日を使つて幾度か会議が開かれた。私はその都度、助言を与えただけである。写真版のも一〇数枚にのぼるが、之はN・S・Dの写真課員が先生と協力して撮影した賜である。計画をしてから九ヶ月、何と刊行の日が待ち遠しかつた事か。印刷所から校正刷がどいた時、編集した生徒、原稿を書いた生徒たちはわつと職員室に寄つて来て自分たちの文章が、表が、絵がどんなにうつつているかを楽しそうに見た。「。」そうして文のいまわし方、編集方法のよしあし等をあとで話し合つていた事を覚えていた。

何が「江の島号」を生んだか。それは普段のたえまない郷土研究熱、それが社会科方面の力をえて更に盛り上がったのだ。そこまで到達するには、やはりN・D・S（S・D）クラブの各課が活発に動いていたからであり、「理科を興味深く」

という授業方針がどこかに生きていたからかもしれない。

(C) 園芸課

草花の栽培、植物の生理実験等

(D) 写真課

撮影、現像、引伸等の理論と実習

(E) 数学課

計算力の向上、図形の考察、高等数学の研究等

(F) 博物課

動植物岩石の採集(取) 生物の飼育栽培採集標本の交換、夏の臨海実習等

(G) 天象課

星座、天気図の研究、天体観測等

(H) 電通課

電気知識の修得、器具の取扱、ラジオの組立

(I) 理化課

物理、化学方面の基礎的原理、器具の基礎操作、各種の基本実験

五、活動計画

紙面の都合上、ここでは博物課と電通課について、活動計画をのべてみよう。

〔博物課〕〔目標〕自然に親しむには最も好適なクラブであり、従つて之を希望する者も又多い。動物や植物の世界をのぞき、その真実の姿を研究すると共に、古生物の世界へも手をのばして行こうとするものである。広い知識と自然探究の精神の涵養こそ、私たちの最も要求しているものなのである。そのために次の四項目を掲げる。

(1) 郷土の生物の分類、生態、形態、生理学的諸研究

(2) 郷土の大地の表面及び内部構造にもとづく諸研究

(3) 古生物と郷土史との関連研究

(4) 採集諸標本の整理並びに地方学校と標本交換。

博物課行動予定

月	目 標	予 定
三月 ～ 四月	水ぬるむ 春ともな れば	○植物採集会 ○春の昆虫採集会 ○部員大募集開始 (四月) ○生物の生育に関する実験研究 ○採集要領 の講義 ○昆虫の一生継続観察始まる ○小川の生物 の運動法 ○食用野草試食会
五月 ～ 六月	新緑から 梅雨へ	○鳥の巣箱製作 ○海岸生物にしたしむ ○ホテルの 光 ○夏鳥の研究・飼育 ○いろいろな微生物の研究 ○カとハエとノミ退治の科学 ○アサガオの芽とつる と花の色
七月 ～ 八月	山は招き 海は呼ぶ	○N・D・S〔S・D〕キャンプ生活実施 ○臨海実習に 参加(海浜生物) ○夏の昆虫採集会 ○海藻採集会 ○クモの研究 ○社会生活をする動物の研究 ○高山 植物研究会 ○虫干しの科学
九月 ～ 十月	天高く 馬肥ゆ	○植物採集会 ○化石並地質研究 ○果物の研究会 ○研究作品展覧会 ○生物の巣採集会 ○月見の科学 (秋の生物について) ○きのこ採集会と標本製作コン クール
十一月 ～ 十二月	お正月を 待つ 街と村	○植物の冬支度(野山の木々)―紅葉と落葉 ○動物の冬眠等 ○正月用品の研究 ○食品の加工状態の研究(つけものを含む)
一月 ～ 二月	いろり こいしき頃	○採集標本の整理 ○交換準備 ○春の息吹を探る ○科学者伝記輪読会 ○冬眠の研究 ○冬芽の観察 ○科学幻燈の会 ○かわいい科学者編集会議に参加 ○科学士認定試験実施(後述)

(註) 卒業生、並びに適当な講師を随時招聘して活動に活気をつける。

〔電通課〕〔目標・概要と行動予定〕

此の課の元来の目的は無線工学にあるがその目標に達する前に「電気とは何か」（静電気を除く）ということに生徒が興味を持つて段々に入つて行くようにし、然る後に無線工学を会得するようにしている。過去に於ては別に系統立てて、進んで行く方式は用いず、自分の好きなことをやつて来たが最終段階に於ては、一部分のみ詳細に知り、他部門は全然解らずに來てしまうような傾向にあつた。そこで本年度は其の点の是正を目的とした「ダイヤリングコース」と「ママ」いうものを設け、これにしたがつて進んで行くことにした。

（図参照）

先ず一番外側のリングは一年生の時に修得するコースである。二番目は二年生のコース。三番目は三年生、となつてゐる。先ずこのコースの使い方であるが、一年で入部すると一コースのうちどれか一つをとる。例えば、ラジオ（一）を取つた生徒はそれが終るとラジオ（二）を次に模型となつて最後に真空管を終了すると、第二の円に入る。この電鈴を取つた生徒はモールス・真空管となつて電池で終るのである。即ちダイヤルは時計の方向に廻ることになる又各種目の実験研究期間は一月を原則としている。一コースなる故、一年では一月月不足するが実際の活動期間は一般は一月月位である故、一コース不足していた方がよいと思う。

次に二年になると、六コースになるが、一コース二ヶ月の予定で少し深く入つて行くことにしている。

第三円の三年であるが、一二年で大体基礎が出来上つてゐるし、又独立性も持つてゐるため、特にテーマをあたえず、自分で目標を持ち、実験と理論との両面から一つのまとまつた研究を一ケ年に行うようにしている。

さて、中心部であるが、これは後続部員の研究熱を旺盛にするためと、又今までの研究をまとめる意味に於て何か一つの研究物を作成し、卒業して行くようになつてゐる。

仕事の内容を二、三記して見ると、例えば、「配電工事コース」一年では

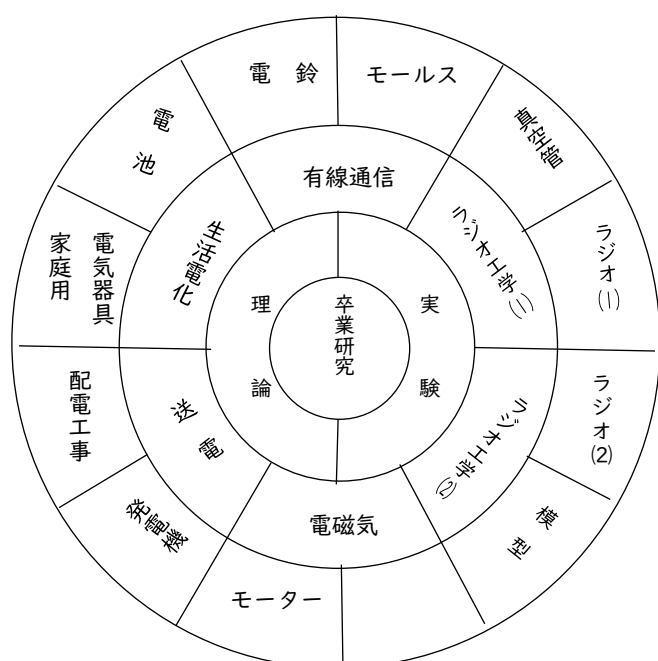
- ①電線の結び方、止め方は、どうなつてゐるのだらう、しらべよう
- ②自分で電線を張つてみよう
- ③天井にのつてよく見よう

又、「真空管コース」（一年）では、

- ①古い真空管の内部をしらべてみよう
- ②真空管の標本を作つてみよう
- ③真空管の種類と用途をしらべよう

二年の送電「コース」「ママ」では、

- ①発電所についてしらべよう
 - ②どんなふうにして自分の家に電氣が来るかしらべてみよう
 - ③トランスの原理を考えよう
 - ④自分でトランスを作つてみよう
 - ⑤発電所を見学して来よう
 - ⑥発電所から家庭までの電線の道を示す模型を作つてみよう
- 等々である。



六、「科学士」とは？

妙な名前と誰しも思うが由来はこうである。

(由来)

科学士とは本校独特の創案であつて、自然科学部員の中、自分の所属する課の研究課程を完全にマスターした者のみのとりうる一種の名誉称号である。「」尚、自然科学部員の外にも適任者がおれば与えられるが、そういう事はめつたにない。そもそも科学士称号設定の当初は、自然科学部の機関誌「かわいい科学者」に優秀な研究を再三掲載し、科学に対する研究熱が旺盛なりと認められた者に対し、奨励の意味で自然科学部長並びに顧問の先生から送られたものであつた。しかし、それでは仲々判定に困難をきわめ、該当者も続々出来る仕未「未」となつたので、科学士称号の権威を尊重する意味に於て、最初にのべたような方法に変更したわけである。

換言すれば「科学士」とは、自然科学部員に対し旺盛なる研究熱の醸成に役立ち自主的な研究意欲の発散を奨励し、部員全体に自覚と進展の気運を助長し、受賞者にとつては、更に自己の実力を培養させ、後輩を指導すべき責任感を生ぜしめ、卒業後に於ても各方面で、自然科学を探究する事に大いなる希望を抱かしめる点——に於て、大いに効果のある称号と考えられる。事実、科学士で、上級学校進学後、科学の分野に於て、立派な活躍をなしておる例は多々あるのである。

前にもちよつとふれたように、原則として毎年二—三月にこの科学士称号の授

与が行われることになつており、このため、各種共、「卒業論文、

(又は研究物)の提出、並びに科学士認定試験が実施される。程度は中学校理科三年修了程度のもので、課によつては更に高度の問題が出題される。

「科学士」を授与されたものは、バッチを交附され、機関誌「かわいい科学者」に氏名が記入される。バッチは襟又は胸につけることになつてゐる。

Fig. 26



バッチ田各図案
(× 1.5)

七、自然科学部研究カードについて

クラブ活動の性質上、その時間に於ける生徒の出席を教師がとるのもおかしい事であるし、とらないということも好ましくない。そうかと云つて顔だけ出しておれば出席となるという事も、研究

活動を活発に行なおうとする主旨に徹底を欠くことになる。之は中学校のクラブ活動が特別教育活動に所属しているためにおこる一種のなやみともいえる。

そこで、最近考案したのが、次に示す「自然科学部研究カード」であり、部員は全部をもち、有効に研究活動を実施した者のみ、出席有効証明印が各課長により捺印される仕組になつてゐる。この制度に関しては今後研究の余地が多々あると思うが、何れ改めて行きたいと考えてゐる。

(註) 教師が生徒の出席状態を知るためには課長よりの報告をうけて手帳に記録をなす

八、スライドの製作へ

前述した「かわいい科学者」江の島号は紙面の都合上、豊富なる写真、解説図がのせられなかつたので、「目で見る江の島」として幻灯スライドを作ることに生徒も私たちも気運が一致して来た。市販されている物にも同類はあるがうつしてみると極めて粗雑であり、教材にはならぬ。折角、社会科と融合しあつたのであるから完璧なものを試作しようというわけである。専門家を招いて研究会がいく度が開かれ、昨年の夏休みを使つて、生徒と共に江の島のスライド作製のり出した。修学旅行に來られる数多くのお友達に天下の江の島をくまなく事前に紹介するために、そして私たちの江の島研究を一層充実したものにするために、生徒たちは明るい希望をもちつづけて来た。「」最近次のような内容をもつて一組完成し、生徒も先生も自分で作つたものに対し、熱心に幾度となく鑑賞したのである。それにつけても興味深く学習をする習慣を身につけた生徒たちは本当に幸福であると私はいつでも思うのである。

(内容の一部) 題「名勝及び史跡 江の島」

- 地理、歴史上の江の島
- 地質学的に見た江の島
- 観光地としての江の島
- 史跡めぐり
- 熱帯植物園
- 江の島園
- 江の島の風俗
- 商店街とみやげもの

以上を四二枚に収め一組になっている。
九、まとめ
自然科学部の内容について、いろいろ述べて来たわけであるが、紙面の都合で、意の如くその全貌を云いつくせなかつたのは残念である。とにかくこのクラブ活動一つをとって試みても、私たちの前途には、当面した研究課題が山と積まれている。

それは私たちの力で解決するには、あまりにも多すぎるのではなからうか。]

多くの学校では、クラブ活動に於て私たちの参考にすべき事柄を幾多実施され、多大の効果をあげられていることと思う。それらは何れも、遠慮なくとり入れさせていただき、運営面の改善、内容の向上に、努力して行くつもりである。

注 神奈川県教育委員会指導部編『昭和26年度 中学校研究集録』三一―三六頁。

○交通機関

第 枚目
年 月 日迄

N. S. D.
研究カード
No.

自然科学部 課
氏名

片瀬中学校自然科学部 印

使用法

○クラブ活動の時は、いつもこのカードを持っていない。

○クラブの時間にこのカードを忘れたものは先ず欠席とみなすかもしれません。

○その時間にやつた事柄についてカードに書込み原則として作品と共に時間の終りに、課長又は先生の検閲を受け捺印してもらつて始めて出席とみとめられるのです。

○クラブ活動の時間中 何もしない者、途中でサボル者、出席はしているが、このカードに捺印が非常に少ないものは、適当な時期に課長より退部を勧告されることがありますから注意して下さい。

○このカードが一杯になったら 新しいものを課長に申出て 交付を受けて下さい。

○定められたクラブ活動の時間外に一人以上でクラブ活動としての研究を行った場合もこの研究カードは立派に使用出来ます。研究作品を課長又は先生に示し、捺印をしてもらいなさい。

○学期末に先生から呈示を求められたらいつでも出して下さい。

N. S. D. 課 氏名

NO	研究題目	研究方法	研究場所	所要時間	共同研究者氏名	出席有効証明印	月日
1							
2							
3							
4							
5							
6							
7							

博物課
課長之印

Fig 27

- 283 -

三一 真鶴中学校「学校図書館研究会の報告」

学校図書館研究会の報告

真鶴中学校

神奈川県教育委員会足柄下出張所、足柄下郡教育会、真鶴中学校の三者共催で、学校図書館研究会が本校に開かれた。指導者として加藤出張所長、山本指導主事、斎藤指導主事のおいでを願ひ参加者は足柄下郡、小田原市内の中・小学校より計四十五名、その他本校会員及び町当局者等の多数を迎え、盛大にして有意義な研究会であつた。先づ自由参観の公開授業から始められ、次いで三クラスの実演授業、研究発表、最後に研究協議会を発売に行つた。ここでは、研究協議会において討議された四問題について報告したい。

問題一、分類の色分けについて、十進分類法と共に一定した色別を用いる必要があるかどうか。

(答) 長所―色別を用いることは、分類に生徒を親しませることができ、特に小学校では有効である。

2本の整理が一見して判明する。また誤て書棚におかれた場合も発見しやすい。

短所―ラベルの色彩があせやすい。

2分類してラベルを貼るに、ちよつとわずらわしい。

問題二、図書館と学級文庫との関係はどうしたらよいか。

(答) 中学校においては、学級文庫は図書館に包含されるべきである。その理由は、学級では財源的能力から蔵書数を多くし得ない。また一方に偏しやうい。小学校の特に低学年においては、身近に図書があることが児童の親しみをよぶ。また絵本は表紙絵が大切で、この陳列法は考えられねばならぬので、学級文庫の存置もよいだろう。しかしその本はその学年に属すべきものである性質からして、四年にその学年が進級したからとて、進級学年に持つて行くべきではなく、旧学年の教室に残し、ゆずりわたすべきである。

問題三、図書館を利用した研究は図書の抜きがきになりやすい。研究過程を個々に指導すべきであるが、時間的にまた仕事の上で種々の困難をとまなう。この間において最も効果的に能率的に指導するにはどうしたらよいか。

(答)―ぬきがき肯定論Ⅱ研究の一段階としては、ぬきがきを許すべきである。

しかし長くこの段階にとどめておくべきでなく、次の段階に早く脱皮させるべきである。

2ぬきがき否定論Ⅱぬきがきは何も身につかず、その扱いのため授業時間もさかれ、授業能率の上からみておもしろくない。

3その他の立場

イ、研究課題の出し方をくふうする。

ロ、資料としての蔵書の程度を考え、生徒に理解可能なものを蒐集する。

問題四、「図書館科教育」を教科に融合させ各教官がこれを指導し、かつ最も効果をあげるための具体的方策は何か。

(答)―図書館を十分に利用するには、各教科において図書館への理解が行われなければならない。従つてその一部において図書館科は必然的に行わなければならない。

2全教師の図書館に対する理解が必要。

3教科をどのようにまたいかなる点で融合させるか、くふうする。

協議会における問題は、あらかじめ各校から提出していただいたのであるが、時間ぎりぎりまで活発な討議をして右の四問題しか扱えなかつた。右の答も、結論的なものを記載しただけであつて、参会者の熱意あることばのあふれた会の雰囲気は、御想像ねがうよりほかない。

最後に、この協議会の結果における二指導者の意見を総合して列举させていた

一、図書館は常に一つの施設であり、これをもつて学習のすべてが解決せられると早まつてはならない。

二、図書館経営の前提に、図書館の確立が必要である。

三、読書指導の鍵は、読書に向つて動くところにある。興味は方向性を持っているが持続性はない。他の強い興味により動かされまた動かし得る。そこで調和ある読書指導が重要である。

四、青少年文化を愛する教師でありたい。

五、学校図書館が普及してきた現在、図書館の新教育における位置づけを考える。六、学習指導面に図書館の必要を身にしみて感じているか、ここに指導法の研究分野がある。

七、本校（真鶴中学）のように、くふうして図書館をつくれれば場所がなくてでないということはない。

八、教師のすべてが、図書館科の課程をおさめていなくてはならない。

なお、真鶴中学における「図書館単元」と「単元目録」とをこの報告のあとに添えさせていただきたい。

学校に於てカリキラムを効果的に展開し生徒の教養を得させるに必要な図書資料を集め、気持のよい環境のもとにおいて、もつとも使い易いよう分類整理しておいても、図書館への関心を高める機会に恵まれなかったり、取り揃えられた資料を上手に利用する方法を知らなかったり、図書館教育の指導が不徹底であるならばどうであろうか。せつかくの資料も学習に役立てず、古今東西の知識にふれ教養を高めることもできなくなつて「つて」しまう。そこで本校においては次にかける単元を設定した。

すなわち図書館教育の目的として

(1) 図書及び図書館利用の技術を習得させ、資料設備を自由に効果的に使えるよう習熟させる。

(2) 図書館利用の技術態度を身につけることによつて自発的学習を養成する。

(3) 図書を愛し、よい図書を選択し、よい読書の習慣を養成する。

(4) 図書館はそれ自体一つの社会協同体であるこの場に於てよい市民性を涵養する。

(5) 将来読書の習慣を身につけ、公共図書館その他のよき理解者、よき利用者としての素地をつくる。

以上の目的で別表の如き単元をそれぞれ最も単元と関係ある教科とその単元へ融合させる方法と、一部はホーム・ルーム、更にスターデイ・ホール等で取扱うことにしてある。

もち論、図書教育は機会あるごとに反復指導しなければならないので、機会をとらえ何時でも扱うが基本的扱いの時と場所を示したものである。

図書館科単元表

四、 図書の 目録	三、 図書の 分類	二、 図書の 組織 と規則	一、 図書の 近への 親類	範囲	
				指導内容	第一学年
①目録の意義 ②目録の種類と 効用 ③目録の使い方 ④本校の目録	①分類の意義 ②NDCと書架 配列の理解 ③請求番号、巻 冊番号、複本 記号 ④本校の分類と 書架配列	①図書館の施設 利用法 ②図書館資料の 種類と配列 ③図書館規定の 理解 ④図書館倫理の 遵守	①「図」書館へ案 内 ②図書資料の話 ③分類、書架配 列の話 ④図書館のきま り作法、利用 法	教科	単元
国語	国語	社会 各教 科 社会 生活 およ び H R	(入学当初に おいて図書係 が指導)	時数	
て図書館につい	て図書館につい	学校や家庭の 生活(学年あるい は単元の始め において指導) 学校や家庭の 生活(第一期)			
3	5	1 1 1 1			
②目録作成演習	①目録法の概略	③図書倫理の 向上	②図書、備品の 愛護	①図書館施設の 効果的使用に ついて	指導内容
国語	国語	H R	職業	教科	第二学年
読書の技術と 改善	読書の技術と 改善	経営 (第一期)		単元	
2	2	1		時数	
		③図書倫理を 向上させるに は	②図書規定の 検討	①理想的な図書 館の設計	指導内容
		H R	社会	図工	教科
		展 民主々義の発 (第一期)	生活の設計	文化遺産	単元
		1 1 3	2	時数	第三学年

五、 書物の 構造と 愛護	六、 読書法	七、 百科事 典	八、 特殊参 考資料	九、 われら の図書
①文化財としての 図書の意義 ②図書の公共性 ③図書の物的構 成 ④図書の取り扱い 方	①読書の意義 ②図書の選択 ③図書の読み方 ④余暇の利用 ⑤読書衛生	①百科事典の意 義 ②百科事典の引 き方 ③本校の百科事 典	①特殊参考資料 の種類 ②参考資料の使 い方	①われらの図書 館
社会 職業	国語 H R	社会	科教 科	H R
学校や家庭の 生活 手技工作	余暇の利用に ついて (第二学期)	学校や家庭の 生活	(学年または 単元の始めに 指導)	(第三学期)
2 1	3 1	2	2	1
①図書の形態的 構成 ②印刷技術の方 法と活字、判 型 ③図書の修理	①研究のための 読み方 ②ノートを取り 方 ③文献目録の作 り方 ④読書会	①百科事典の構 成 ②百科事典の利 用	①特殊参考資料 の意義 ②特殊参考資料 の利用	①「われらの図 書館」
職業	国語 科教 H R	社会	科教 科	H R
手技工作	要約と抜粋の 作り方 (適宜指導) (第二学期)	都市や村の生 活はどのよう に変わったか	(学年または 単元のはじめ に指導)	(第三学期)
6	3 1 1	2	2	1
①図書の修理と 簡易な製本	①読書日誌	①世界の主な百 科事典 ②日本の主な百 科事典 ③百科事典の活 用	①どんな特殊参 考資料が必要 か ②特殊参考資料 の活用	①学校図書館を 育てる人々 ②図書館を運営 する人々 ③と任務 ④と経理 ④われらの図書 館
職業	H R	社会	科教 科	社会 H R
手技工作	(第二学期)	文化遺産	(適時指導)	民主主義の発 展 (第三学期)
5	1	2	2	3 1

注 『かながわ教育』第三〇号（一九五一年一月）。

単 元 目 録 表

[理科] 単元Ⅰ. 空気はどんなものか		
分類番号	書 名	備 考
400	科学の教室	気圧
400	科学の国へ	気圧、空気の組織
420	はじめての物理学	物質、空気の重さ
430	日常科学	空気の組織
(以 下 略)		
[職業] 郷土の水産を基として水産一般について研究しよう		
分類番号	書 名	備 考
450 U	海洋学	海の研究
660 T	小さな水産学者	魚の習性
090 A	わが郷土神奈川	水産の部
660	海の魚、河の魚	魚の習性
(以 下 略)		
[社会] 単元 近代工業 小単元 近代工業はどのような にして始まったか		
分類番号	書 名	備 考
209 K	世界文化史	産業革命、我国の近代工業
210 K	明治維新	同上
308 I 1	新しい日本と世界	同上
308 I 4	新しい日本と世界	同上
308 I 6	新しい日本と世界	同上
280 O	ぼくらの西洋史	同上
209 K	文化のあけぼの	同上
290	世界地名事典	同上
360 S	機械をつくる人々	近代工業に於ける生産面の特色
250 S	アメリカの生活	近代工業の発達とその利益
660 O	美しい暮らしの手帳	同上
(以下略)		

本校の単元目録
「学習にサービスする図書館」と云う事を少しでも具体化する一方法として本校で採用したものに書冊式単元目録がある。これは各教科担当の教師が各学年のそれぞれの教科の単元をアレンジし、各学習の際に参考とし得る書名を記載したもので、各教科の教師が責任をもつて作り上げたもので、単元の変化のない限り半永久的のものとなる。尚毎月新購入の書籍が増加するが之はそのつど教科への関係図書はピックアップされ、単元目録の各項のスペースに新にアレンジされていく。之は図書館に一揃、各教師が一揃、ずつを所持している。もち論これに対する長短の批判はあるものと思う。次にその一例を示す。

産業、経済

	戸数	%
専業	18	4.1
第一種兼業	373	85.9
第二種兼業	43	10.0
計	434	100.0
自作	263	60.6
自作兼小作	105	24.1
小作兼自作	40	9.2
小作	26	6.1
計	434	100.0

経営耕地面積別

	戸数	%
3反未満	77	17.7
3反～5反	110	25.3
5反～10反	196	45.2
10反～15反	42	9.7
15反～20反	7	1.6
20反～30反	2	0.5
30反以上	0	0
計	434	100.0

農器具台数

犁	碎土機	水田除草中耕機	噴ムキ	人力脱コク機	動力脱穀機	もみすり	唐箕	万石	なわな	製筵キ	莠毛取キ	藁切キ	精米キ	精麦キ	精粉キ	押麦キ	製茶キ	製口キ	扇風キ	いも切キ	電動キ	発動キ
5	12	57	33	183	7	6	156	3	55	2	124	40	23	2	5	2	1	1	1	20	71	1

作付面積

耘別	春～夏									秋～冬					
	水稻	陸稻	甘藷	とうもろこし	あわ	大豆	その他	そさい	計	大麦	小麦	裸麦	馬れい藷	そさい	計
面積	一一一	三六六	一五八	一一二	一七八	一七二	九七	一五一	一三四五	二九八	八九九	八二	一一七	一四	一四一〇
%	八・三	二七・二	一一・七	八・三	一三・二	一二・八	七・三	一一・二	一〇〇・〇	二一・〇	六三・八	五・八	八・三	一・〇	一〇〇・〇

煙 草

	戸数	面積	反当収量	反当価格
昭 25	48	48 反	239k	31,000
26	56	85 //	(210)	43,000
(27)	61	90 //		

黄蜀葵

	戸数	面積	反収	反収入
昭 25	32	13 反	224	17,990
26	37	14 //	(230)	(17,250)
(27)	(37)	(14)		

蔬菜採耘

	戸数	日本ホーレン草	反収価格	胡瓜	反収価格	その他
昭 25	10	3 反	18,140	2 反	40,000	1 反
26	60	43 反	10,500	14 反	25,000	5 反
(27)	60	43 反				16 反

畜産業

	戸数	頭数	備考
乳牛	75	87	一頭一日平均二貫二九四匁一〇〇円 乳牛の中一七頭搾乳一ヶ月一七〇貫
役乳牛	87	72	
馬	14	14	
豚	48	54	
羊	9	16	
山羊	152	183	
家兎	38	63	
アンゴラ	142	508	
鶏	172	535	
七面鳥	1	3	
アヒル	1	2	

養蚕業

	桑園面積	戸数	掃立卵量	収蚕高	百反当収蚕	一反当収益
春蚕	五四〇反	二〇二	四一一三 g	二七七九	六、七五六	一四、二七三
初秋蚕	〃	一二九	一六三四	九三一	五、六九七	
晩秋蚕	〃	二三七	三五四八	二五四六	七、一六三	
計			九二八五 g	六二五六	六、七三八	
	7600,000 円					

林 業

	針葉樹	闊葉樹	混合	その他
村有林	700 反	15500 反	2000 反	
民有林	4464 //	14997 //	1171 //	149 反

産 物

	白 炭	黒 炭	木 材	竹	しいたけ
昭 24	9,859	44,715	3200 石	1600 束	80 貫
25	10,989	72,117	3840 石	950 //	150 //
26	576	13,324	5300 石		

食 糧 配 給

	完全保有	準保有	転落	消費
戸 数	43	21	380	71
人 口	257	81	2540	221

人口動態（昭 25）

出生 98 死亡 41 差引増 57 } 全体から
 転入 100 転出 217 減 117 } 60 減

ラジオ聴取台数

321 台（普及率 63.56%）

新聞読者数

朝日 41 毎日 30 読売 75 神奈川 9 農業 0
 経済 4 中学生 6 小学生 5 合計 170

生活扶助

26 戸 86 人 （最近増加の傾向あり）

女が生計の中心となるもの 54%
 老人、18 才以下 // 33%
 そ の 他 13%

衛生面

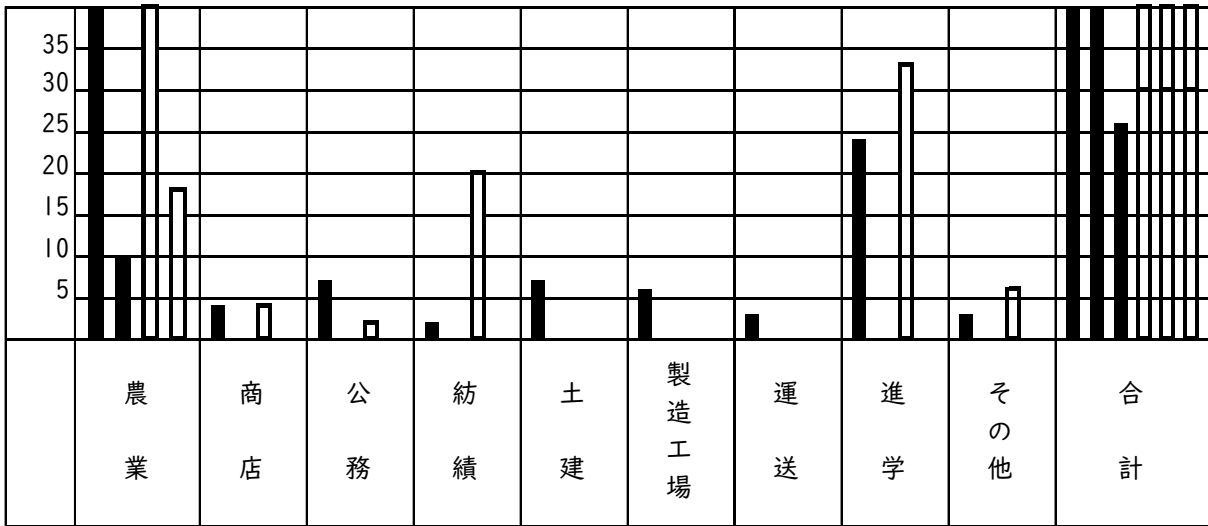
25 年度伝染病発生

男 赤 5 疫 2 } 計 9 医師 産婆 売薬店
 女 痢 痢 2 } 1 1 2

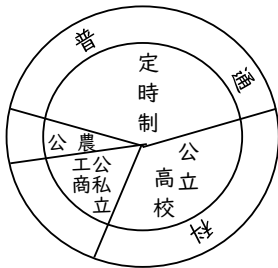
卒業生年度別進路状況

計	17	20	24	22	29	42	34	38	227	備 考
その他		2		2		3	2		9	自家従事者の中日雇につく者が多い 年々就職希望者が増加しつつあり
進 学	3		6	1	6	17	9	5	57	
運 送			1		2				3	
製造工場					3		3		6	
土 建	3				1		3		7	
紡 織		4	1	5	1	4		7	22	
公 務			4	1	2				7	
商 店	1	1	1	1	2			2	8	
農 業	10	13	11	12	12	18	17	14	107	
職種別 性 別 年 度	男	女	男	女	男	女	男	女	計	
	22		23		24		25			

就 職 状 況



進 学 状 況

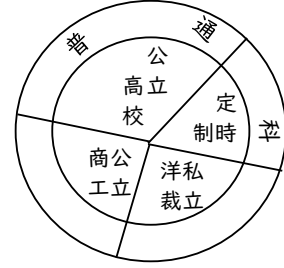


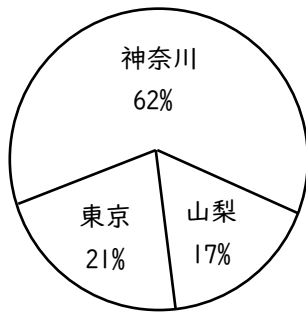
(男 24)

普	8 (33.3%)
定	11 (45.8%)
工	5 (20.8%)
農	1 (0.4%)

(女 33)

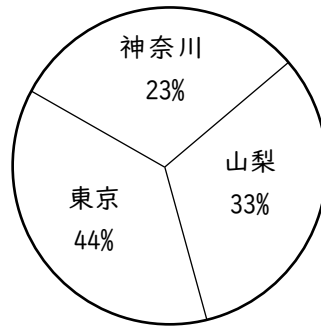
普	14 (42.4%)
定	5 (15.1%)
家	6 (18.1%)
商	8 (24.2%)





(男子)

神奈川	15人
東京	5人
山梨	4人



(女子)

神奈川	8人
東京	15人
山梨	10人

卒業生家事従事者の他職希望調査

希望なし	希望あり	計
74人	27人	101人
73.2%	27.7%	

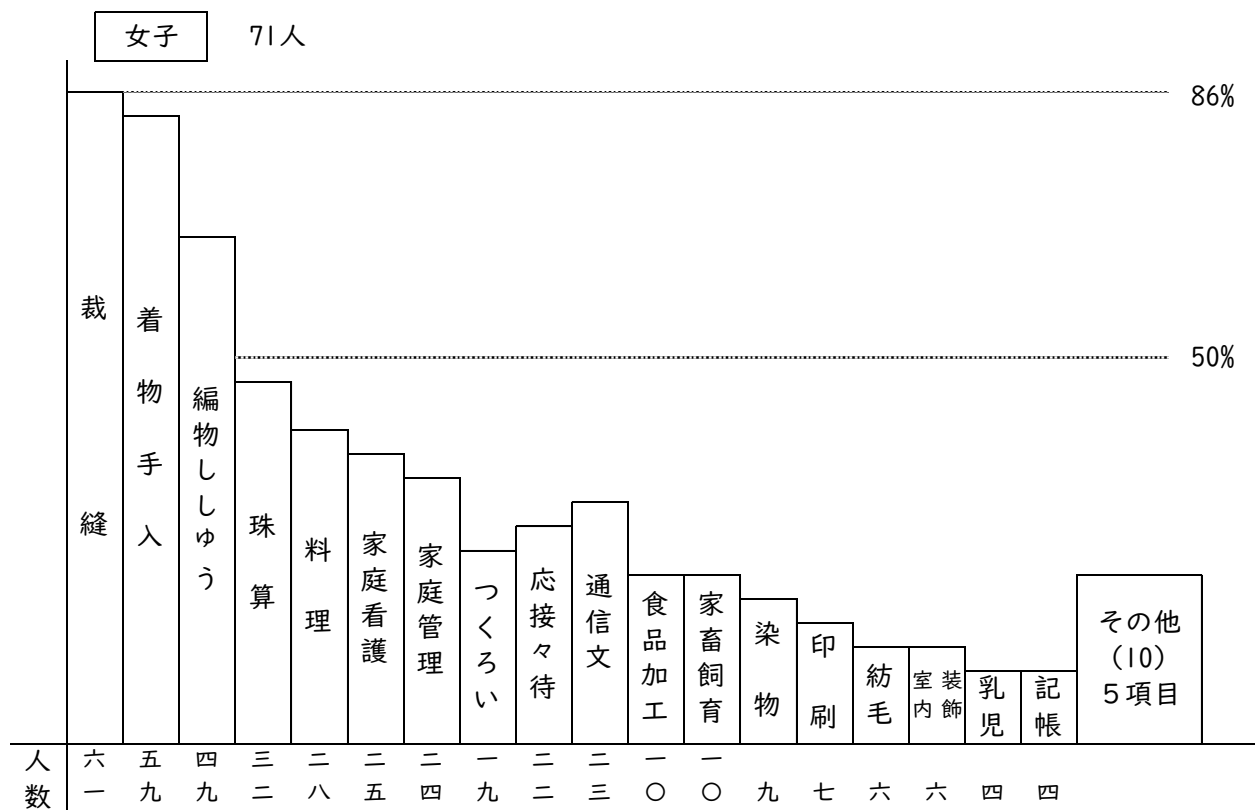
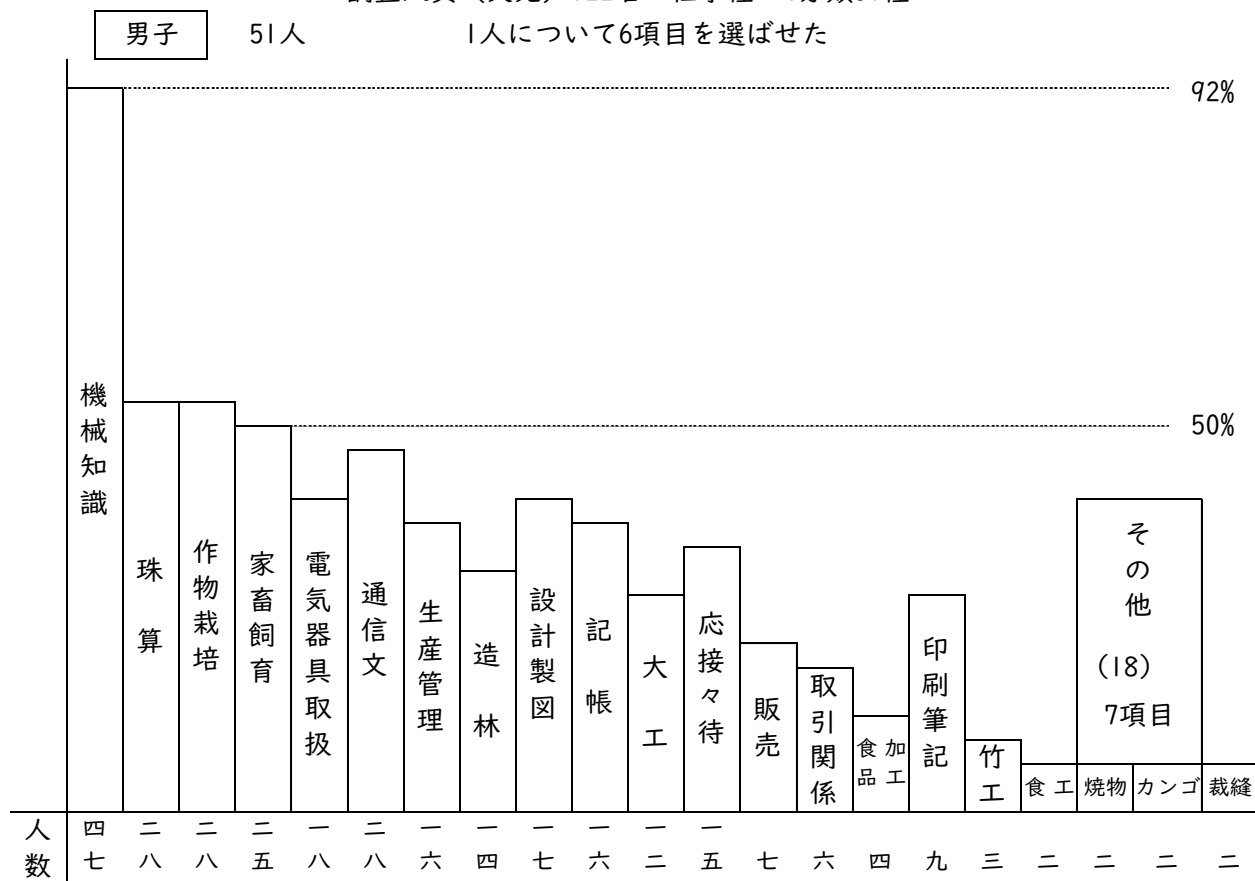
同 上

希 望 職		希 望 地 方	
商 業	8	東 京	10
工 業	8	立 川	3
洋 裁	8	八王子	9
通 信	6	横 浜	4
美 容	2	郡 内	1
計	32		27

生徒に身につけさせたい基本的技能に対する父兄の希望調査

調査人員（父兄）122名 仕事種 4分類51種

1人について6項目を選ばせた



注 相模原市立公文書館所蔵の小冊子『職業家庭科研究発表会 1951.12.15 牧野村立牧野中学校』の5～10頁。同校は「立派な生産人になろう」を教育目標に掲げ、第七学年（中学校第一学年）から工業、商業、農業（栽培・飼育）、洋裁、和裁、英語の選択コースを設けている。

職業家庭科年次計画指導案					
Ⅰ 男必修農（栽培）コース					
単元名		作物を作ろう		配当（５４時間）	指導者 佐々木茂
単元設定理由	主要作物の栽培を学習させる事により栽培の知識技術を会得し家庭の農事作業に従事し、手伝う事により増産をはかり家庭経済に貢献すると共に勤労愛好の精神を養うため				
目標	１．主要作物のいね麦と豆野菜いも類の栽培を理解させる ２．家庭作業に協力する習慣をやしなう ３．自然に親しんで仕事をする事の楽しさを味あわせる			資料	
学習要領		配当時間	展 開		
１．日本の稲作		２	１．世界の諸民族の常食はどんな物か ２．作物の栽培と土の關係に付いて ３．作物栽培の要点		
２．丈夫な苗（稲作）		５	１．稲の種類 ２．どんな種もみを作ったらよいか ２．種まき ３．手入れ		
３．夏の野菜		４	１．野菜はなぜ必要か ２．植付 ３．追肥 ３．仕立方 ４．病虫害防除		
４．豆類		４	１．大豆 小豆 菜豆 豌豆〔豌豆〕豆 ２．土中の微生物 ３．緑肥		
５．米の増産		６	１．田畑の地力のたかめ方 ２．稲の生育 ３．管理		
６．菜と大根		５	１．菜や大根の種類 ２．種まき ３．間引 ４．病虫害防除		
７．秋蒔野菜		４	１．播種期の研究 ２．カブ 油菜 ３．ねぎの植付 ４．ほうれん草		
８．取入れ		４	１．稲刈 ２．稲こきの発達 ３．作柄		
９．麦作		６	１．どんな麦を作るか ２．麦の病害予防 ３．まき方 ４．肥料 ５．管理		
１０ 野菜の貯蔵		４	１．生のまゝの貯蔵 ２．加工貯蔵		
１１ 苗床		６	１．苗床の必要性 ２．温床に付いて ２．冷床に付いて ４．苗床かんり		
１２ さつまいも じゃがいも		４	１．いも栽培の必要 ２．さつまいもの苗床作り ３．じゃがいも作る、		

職業家庭科年次計画指導案		1年女子 必修	指導者 佐藤節子
単元名		乳幼児の世話	配当時間(18)
単元設定の理由	乳幼児保育の科学的知識を与える事は乳幼児を健康で明るく育てるのに大切である故 指導したいが、丁度子供特に女子の遊びを観察すると良くまゝごとをし、大体は母や姉になりたがる。これは将来母たる天分を優しく表しておるものだと思う。此の様な天性を利用し乳幼児保育の科学的知識を自然に与えて置くと共に、自分の小さい時をさとらせ母親の労苦に感謝の念をもつ様にし多忙な母の手助をよろこんでする心がけを養いたい		
目標	1) 簡単な子供の世話の仕方について理解する。 2) 進んで弟妹の世話をする様な態度を養う。 3) 弟妹の世話を便〔更〕に進めて毛糸織物について研究し習得させる。		資料・器具 人形、玩具 基礎編見本
学習要項	時間	展 開	
乳幼児の世話	八	1) 着せ方 2) 負い方 3) 抱き方 4) ねかせ方 5) 遊ばせ方	
毛糸織物	一〇	1) 毛糸編物の特長 2) 毛糸について 3) 糸の太さと編棒との関係 4) 網目の加減 5) 基礎編 6) 仕上げ保存 7) 応用編 イ) 赤ちゃん足袋 ロ) 帽子	

注 相模原市立公文書館所蔵の小冊子『職業家庭科研究発表会 1951.12.15 牧野村立牧野中学校』の21・24頁。

三三 職場からみた中学校教育の調査

職場からみた中学校教育の調査 (一)

資料
—主として中学校卒業者の生活態度の
評価について、中間報告— 調査課

- 一、調査の目的 中学校卒業生(義務教育修了者)が、就職した職場においていかに迎えられ、いかに観察評価されているかを調査し、中学校教育に従事されている方々に、指導上の参考資料を提供しようとする。
- 二、調査の対象 昭和二十四五年度の中学校卒業生を採用した会社工場等を対象とし、県職業安定課にて、調査可能と認めた所を、安定所別(地域別)、規模別(従業員数)別「ママ」に二六四ヶ所を抽出した。(第一表)
- 三、調査の方法 調査課にて、職業安定課、会社、工場、中学校等の意見を聴取して作成した調査票を、安定所の協力をえて昭和二十七年二月上旬配布し、二月下旬安定所毎に回収した。
- 四、調査項目 (一)生活態度の観察評価、a、個人的な生活態度 b、社会的な生活態度、c、職場生活の態度、の三視点より十八項目について、①できている、②普通、③できていない、の三段階に評価すると共に、評価の所見を具体的に調査した。
- (二)参考として調査した項目 ①職場で必要とする基礎学科、②定時制高校通学について、③採用時重視する条件、④職場と中学校の連絡について、⑤産業教育振興法産業教育審議会について等の意見を調査した。
- 五、結果の概要 調査の結果については、未だ十分な分析を終わっていないので、集計結果のみを掲げることとした(第二表―第六表)
- 六、本調査について 本調査は、中学校卒業生を対象とする他の調査すなわち職場から見た中学校教育の調査(二)(個人票による調査)、高校入学者に実施した各種テスト調査、等の一環をなすもので、これら三調査の結果をまつて、中学校教育について一つの考察をしていただこうとするものである。本調査の結果についても問題は多くあることと思うので読者諸賢の御批判をねがいたい。

(篠崎記)

第一表 調査票配布状況および回収状況

配布回収 規模（従業員数） 安定所			配布数				回収数				回収率 %
			計	500 以上	499人 -100人	99人 -15人	計	500人 以上	499人 -100人	99人 -15人	
1	横	浜	33	6	9	18	28	7	9	12	84.8
2	鶴	見	21	4	7	10	7	3	1	3	33.3
3	戸	塚	20		2	18	4		2	2	20.
4	川	崎	77	15	12	50	13	8	3	2	16.9
5	横	須賀	35	2	7	26	23	1	5	17	65.7
6	藤	沢	19	1	5	13	19	1	5	13	100.
7	平	塚	13	1	2	10	11		1	10	84.6
8	小	田原	10	1	4	5	9	1	4	4	90.
9	厚	木	9		1	8					
10	松	田	20	1	2	17	7	1	2	4	35.
11	相	模原	7	2	2	3	4	1	1	2	57.1
計			264	33	53	178	125	23	33	9	47.3
業 種 内 容	製造工業		226	29	49	148	113	19	31	63	50.2
	卸・小売業		23			23	2			2	8.7
	運輸通信業		3	2	1		3	2	1		100.
	サービス業		6	1	1	4	6	1	1	4	100.
	建設工業		1			1					
	農業		1			1					
	公務		4	1	2	1	1	1			25.
	計		264	33	53	178	125	23	33	69	47.3

第二表 中学校卒業者の評価(A) 上段は回答数()は%を示す

観 点	評 価 項 目	計			製 造 工 業			製造工業以外			備 考 (無回答数)
		出来 ている	普 通	出来 ていない	出来 ている	普 通	出来 ていない	出来 ている	普 通	出来 ていない	
個 人 的 な 生 活 態 度	(1)道徳的な態度は (正直さ、善悪の判断等)	23 (18.4)	99 (79.2)	3 (2.4)	21	89	3	2	10		
	(2)中庸のとれた判断 (思想的の面)	15 (12.1)	94 (75.8)	14 (12.1)	14	84	15	1	10		1
	(3)健康に注意することは	34 (27.2)	89 (71.2)	2 (1.6)	30	81	2	4	8		
	(4)清潔整頓に留意すること	24 (19.2)	76 (60.8)	25 (20.0)	20	70	23	4	6	2	
	(5)計画的に生活する態度は (時間・金銭の使用)	15 (12.1)	83 (66.9)	26 (21.0)	15	73	24		10	2	1
	(6)余暇を利用する点は (読書・娯楽・スポーツ等)	47 (38.2)	62 (50.4)	14 (11.4)	43	57	11	4	5	3	2
社 会 的 な 生 活 態 度	(1)礼儀の正しさは (長上・友人に対して)	20 (16.4)	66 (54.1)	36 (29.5)	18	60	32	2	6	4	3
	(2)義務や責任をはたす 心がけは	18 (14.5)	88 (71.0)	18 (14.5)	16	81	15	2	7	3	1
	(3)他人の意見を聞き入れる すなおさは	36 (29.0)	80 (64.5)	8 (6.5)	31	75	6	5	5	2	1
	(4)規律を守る点は	31 (24.8)	83 (66.4)	11 (8.8)	29	74	10	2	9	1	
	(5)奉仕的な心がけは	7 (5.6)	81 (64.8)	37 (29.6)	6	71	36	1	10	1	
	(6)公衆衛生を重んずる態度は	13 (10.7)	87 (71.3)	22 (18.0)	10	78	22	3	9		3
職 場 生 活 の 態 度	(1)自分の仕事を進んで理解 しようとする態度	44 (35.2)	61 (48.8)	20 (16.0)	42	52	19	2	9	1	
	(2)積極的に働く点では	32 (25.6)	72 (57.6)	21 (16.8)	32	61	20		11	1	
	(3)仕事上の創意工夫の心がけ は	7 (5.6)	72 (57.6)	46 (36.8)	6	64	43	1	8	3	
	(4)仕事の計画性は (仕事の段取り等)	8 (6.4)	77 (61.6)	40 (32.0)	8	66	39		11	1	
	(5)機械器具を大切にすることが けは	16 (12.8)	84 (67.2)	25 (20.0)	16	75	22		9	3	
	(6)仕事を正確にやりますか	21 (17.1)	93 (75.6)	9 (7.3)	18	84	9	3	9		2

第二表 中学卒業者の評価（B）

観 点	評 価 所 見	
	評価良好と認めた意見（同一意見数）	不良と認めた意見（同一意見）
個 人 的 な 生 活 態 度	余暇利用に割に良好である (14)	計画性がない (7)
	淳朴で大きく道をふみ外すことはない (3)	判断力がない (5)
	思想的には憂慮すべき点はない (3)	清潔整頓には留意しない (5)
	個人的な問題はよく注意している (2)	道德観念に乏しい (4)
	健康に留意する点はいい (2)	考え方が一方的で極端に走る (3)
	健康的な活動性が目につく (2)	自律性がなり (2)
	正直である (2)	自由放任の思想が強い (2)
	しつかりしている (1)	衛生観念ない (2)
	言行共にのびのびしている (1)	人間は平凡である (2)
	将来の計画を考えるようになって来た (1)	雑談が多い (2)
		学力低下 (1)
		不正直 (1)
		落着かない (1)
社 会 的 な 生 活 態 度	意見はすなおに聞く (4)	礼儀作法悪（教養・儀） (27)
	議論は得意で意見ははっきり主張する (2)	責任遂行の積極性がない (6)
	挨拶等は割に正しい (1)	公衆衛生の観念が乏しい (7)
	友好的である (1)	奉仕的・犠牲的精神を欠く (5)
	責任感礼儀やや向上 (1)	卑屈で意見注意等に悔悟の色がない (3)
		エゴイズテックである (3)
		規律ある生活が出来ない (2)
		理屈が多く行動が伴わない (1)
職 場 生 活 の 態 度	態度が熱心で誇をもつて働いている (13)	仕事の欲がない（積極性なし） (27)
	作業態度に好感がもてる (3)	言われた範囲でしかやらない (10)
	責任範囲内では積極的に仕事する (3)	仕事を工夫する態度・熱意がない (01) [ママ]
	機械器具の取扱はよい (2)	計画性がない (7)
	正確な仕事をする (2)	物品を大切にしない (5)
	仕事に興味を持っている (1)	年令的に見て職場生活の態度を強く要求する
	上達が早い (1)	方が無理である (4)
		正確さがない (3)
		責任感がない (2)
		研究心に乏しい (1)
		合理化まで行っていない (1)
		慎重さがない (1)
		職場生活と私生活を判別出来ない (1)
		労働観が確立されていない (1)

第三表 職場で特に必要とする基礎的教科名

(回答数および%を示す)

教科名 計	国 語	社 会	数 学	理 科	保体 健育	図 工	職家 業庭 〔含算 珠〕	英 語	精道 神徳 教育 教育	常識 教育	習 字
統 計	37	41	73	45	11	22	23	16	7	1	1
%	13.4	14.8	26.4	16.3	4.0	8.0	8.3	5.8	2.2	0.4	0.4
製造工業	33	35	69	41	10	21	18	15	7	1	0
製造工業 以外	4	6	4	4	1	1	5	1	0	0	1

第四表 訓練施設の有無・夜間学校通学の賛否

(回答数および%を示す)

賛否 施設の 有無	賛成	不賛成	計
計	72 58.5%	51 41.5%	123 100%
有	16	9	25
無	56	42	98
製造 工業	14	6	20
有	51	40	91
無	2	3	5
製造 工業 以外	5	2	7
有			
無			

(A) 賛成の主な理由 (同一意見数)

- 1、本人の学力人格の向上のため (10)
- 2、本人の意思尊重 (7)
- 3、時間は活用すべきである (4)
- 4、向学心、職場の理論的熱意が助成される (4)
- 5、目標があると悪にそまぬ (2)
- 6、中堅作業員養成のため (2)
- 7、社会国家的見地から (1)

8、通学している者は職務が忠実だから (1)

9、本人の自発的向学心を満たすため (1)

10、職務に精出するようにする (1)

(B) 不賛成の主な理由

1、時間的に余暇がない (17)

2、健康上肉体上悪影響 (6)

3、会社に施設があるから (6)

4、作業態度、能率に影響する (□)

5、職場に融和しない (1)

6、労働を第二義的に考える (1)

7、年令的に悪影響を受け易い (1)

8、規律が守れない (1)

9、素直さがなくなる (1)

(C) 条件付で賛成

1、見習期間のみ(3年—4年) (1)

2、現在の職を生かすならば (1)

3、多数でなければ (1)

4、本人の健康を害さぬならば (3)

5、早退等の時間の関係があるので仕事に
支障がないように出来れば (4)

第五表 採用時に重視する点

回答数（ ）は%を示す

目標 順位	思 想 方 向	家 庭 事 情	性 質	健 康	素 行	技 術	学 力	通 勤 関 係
1	20 (17.8)	3 (2.7)	15 (13.3)	16 (54.0)	7 (6.2)	1 (0.9)	5 (4.4)	1 (0.9)
2	11 (9.7)	4 (3.5)	40 (35.4)	30 (26.6)	10 (8.9)	5 (4.4)	9 (8.0)	3 (2.7)
3	9 (8.0)	11 (9.7)	18 (15.9)	11 (9.7)	34 (30.1)	7 (6.2)	11 (9.7)	12 (10.6)
4	18 (15.9)	24 (21.3)	18 (15.9)	5 (4.4)	7 (15.0)	7 (6.2)	13 (11.5)	11 (9.7)
5	12 (10.6)	11 (9.7)	6 (5.3)	4 (3.5)	28 (24.8)	13 (11.5)	25 (22.1)	14 (12.4)
6	14 (12.4)	25 (22.1)	10 (8.9)	2 (1.8)	7 (6.2)	16 (14.2)	16 (14.2)	29 (20.4)
7	11 (9.7)	23 (20.4)	4 (3.5)		4 (3.5)	31 (27.4)	27 (23.9)	13 (11.5)
8	18 (15.9)	12 (10.6)	2 (1.8)		6 (5.3)	33 (29.2)	6 (5.3)	36 (31.8)

第六表 感想・希望等

- (A) 中学校教育に関する感想（同一意見）
- 1、職業教育よりもむしろ基礎的教育を望む (16)
 - 2、道徳教育の強化（教養を高めよ） (15)
 - 3、公共的な社会生活の態度を養成せよ (4)
 - 4、奉仕的犠牲的な精神を養成せよ (3)
 - 5、着実な熱意ある努力家を作れ (3)
 - 6、産業教育の振興に養成する (3)
 - 7、考え工夫する力を養つてほしい（観察力・反省力） (3)
 - 8、責任感ある人間を作れ (2)
 - 9、精神の健康も考えよ (2)
 - 10、理解力を養成せよ (1)
 - 11、準備教育（社会に出るための）を具体的に (1)
 - 12、片やらぬ教育を望む
- 13、主体性の確立を望む (1)
- 14、教員の工場見学実情講義を希望する (1)
- 15、厳格な教育を望む
- 16、物品を愛護する精神を養成せよ (1)
- (B) 産業教育振興審議会に望む
- 1、審議会は地域の特性を生かすよう。
 - 2、文部省側からのみでなく労働省側からも振興策を講ずべきである。
 - 3、労働省の主管する技能者養成所が学校教育法第83条各種学校の認可をも受けている場合には産業教育振興の本義から見て、国庫補助を実施せられたい（第3条第16条関係事項）

注 『かながわ教育』第36号（1952年5月）。

第二節 独立後の一九五〇年代の中学校

一 PTAの学校への寄附

P. T. A 父兄の熱意 十九万円の増額成る 先生方も奮起する

右につきPTA予算会計部長 山田浅一氏は語る。

今回の本校PTA会費増収のため深い御理解をもつて御協力下さいました会員の皆様及び炎暑を侵して尽力された役員の皆様に対しまして先づもつて深甚なる感謝と敬意を表する次第であります。

PTA活動の源泉は子供を中心とする先生方の慈愛に充ちた熱意と溢れる親の愛情との結合体であることはもとよりであります。「ママ」何と申しましても経済を超越した運営は成り立たないのでありまして、次に本校PTA予算について概要を述べ御参考に供したいと思ひます。本年度は市の予算二二万円とPTA予算の三七万円が生徒六百人を擁する本校の総予算であります。もとよりPTA予算の使途については自から限界があり市費支弁の分野に使用さるべきでないことは当然であります。戦災から立ち上つた当市は校舎建設に主力を注ぎ一般経常費にまでも及ばない状況においては或程度PTA予算をもつて補わねばならないと云うのが現状であります。翻つてPTA予算を眺めましたときに前年度の四四万円が繰越金その他の関係で本年度は三七万円に減少したため予算編成に非常な苦辛をしたのであります。絶対額の不足は如何とも為し難く、このまゝ推移するときは一日、一時間なりとも足踏みを許されない生徒に及ぼす影響甚大なるものがあると思ひまして遂に会費の増収運動を薦意し父兄の皆様へ訴えて御協力を願うことになつた次第であります。幸にして月額一万九千円年度内一九万円約五割の増額となりましたことは子供達のためにまことに喜びに堪えません。この金の使い方については皆様の御好意に應えるべく慎重に審議しました結果、図書室設備費に七万円教科指導費に五万円を始めとして重真「ママ」的追加予算を見たわけであり。因に他の中学校の予算に比較すればまだまだ程遠いようであり。倍が当地区の文化的社会的向上を期待して次代を背負う子弟教育のため他学区に倍する御理解と御援助を願つて止まないものであります。良い先生が欲しい、良い学校が欲しい、良い教材が欲しい等々子を持つ親の欲望は隙「際」限が「あ」りません。がこのうえとも皆様の絶大なる御支援をお願い致しまして御報告を兼ね御挨拶

を終ります。

最後に太平洋の生徒の皆様へ一言したいことは、君達は実に良い先生を持つてゐる。君達の幸福のために生命を惜しまない立派な父兄を持つてゐる。市は君達の為に立派な校舎を建てゝくれた。PTAは君達のために立派な図書室を作ろうとしてゐる。教材も整えたいと思つてゐる。君たちの周囲の凡ゆる人達は君達の成功を願つてゐる。勉強は君達自身のためにするのだが、その勉強のために家庭や社会が大きな犠牲を払つてゐることを心に刻み込んで将来に大きな希望を持つて勇敢で而も善良な自己完成のため今日の勉強に益々精進されることを願つて止みません。

注 『太平洋新聞』第8号（平塚市立太平洋中学校新聞部、一九五二年九月二〇日）。

二 理由別長期欠席生徒数（一九五二年度）

昭和27年度理由別長欠者数（中学校）

（昭和27年4月～昭和28年3月）

区 分 別 市 郡 別	A 本人によるもの										B 家庭によるもの										A+B		F 存 生 徒 数	E F × 100 %
	1 本人 の 疾 病 異 常	2 勉 強 ぎ ら い	3 め づ ら れ る 友 人 に い じ	4 が 学 品 が ない	5 衣 履 物 が ない	6 学 校 が 遠 い	7 そ の 他	C 計		C E × 100 %	8 無 理 家 庭 の 解	9 家 庭 の 災 害	10 家 族 の 疾 病 異 常	11 出 せ な い 教 育 費 を	12 「 注 参 照 」	13 そ の 他	D 計		D E × 100 %	E 合 計				
横 浜	203 178	212 143	4 4	7 4	6	2 1	35 20	469 350	819	45	157 200	2 10	30 90	45 66	118 117	63 103	415 586	1001	55	884 936	1820	42186	4.3	
横 須 賀	44 28	59 24	2		1	1	2	108 53	161	44	37 46	6 4	5 11	7 19	28 14	7 18	90 112	202	56	198 165	363	10751	3.4	
川 崎	52 58	92 38			1	3	15 7	162 104	266	49	40 52	2 2	11 21	6 13	41 44	24 27	122 159	281	51	284 263	547	14222	3.8	
平 塚	14 18	16 7		1			2	31 27	58	54 [51]	11 13	1	5	2 9	3 6	1 4	18 38	56	46 [49]	49 65	114	3016	3.8	
鎌 倉	11 6	9 2					2 1	22 9	31	51	4 3	1	5	2	5 2	2 6	13 17	30	49	35 26	61	3439	1.8	
藤 沢	12 14	22 9	1		1		1	35 26	61	63	6 5	2	1	3	7 4	1 5	18 18	36	37	53 44	97	4404	2.2	
小田原	17 22	20 3					1	38 25	63	48	14 24	3	4	8	3 6	6 48	21 48	69	52	59 73	132	4595	2.9	
茅ヶ崎	3 1	3 1	1				5	6 8	14	37	2		1	3	3 7	2 5	8 16	24	65 [63]	14 24	38	2337	1.5 [1.6]	
三 浦	12 11	35 10	1		1		2	51 23	74	48	20 12		2	9	13 8	6 4	50 30	80	52	101 53	154	3679	4.2	
高 座	19 25	31 15	2	1	1	1	3	58 41	99	43	25 32	2 2	3 6	5 10	12 21	10 10	52 81	133	57	110 122	232	9008	2.6	
中	24 37	39 21		3		2	5	63 66	129	44	25 39	4	9	3	20 24	8 13	69 96	165	56	132 162	294	9607	3.1	
足柄上	15 15	8 4	1			2	1	26 20	46	50 [51]	13 11	2 2	1 3		3 7	1 2	20 25	45	50 [49]	46 45	91	4370	2.1	
足柄下	9 9	12 2					2 1	23 12	35	35	10 16		3 2	4 4	9 6	3 8	29 36	65	65	52 48	100	4124	2.4	
愛 甲	10 11	12 5					3 3	25 19	44	50	8 10		2	4 7	2 6	1 4	17 27	44	50	42 46	88	3842	2.3	
津久井	2 2	2					1	4 3	7	21	6 3		2 6	1 3	1 5		10 17	27	79	20 23	34	2616	1.3	
合 計	449 435 884	572 284 856	9 7 16	9 7 16	9 4 13	9 1 10	64 48 112	1121 786 1907	1907	46	373 466 839	16 27 43	75 167 242	91 154 245	268 277 545	129 215 344	952 1306 2258	2258	54	2073 2092 4165	4165	122,196	3.4	
全長欠者に 対する%	21.2	20.6	0.4	0.4	0.3	0.3 [0.2]	2.7	45.8			20.1	1.1 [1.0]	5.8	5.9	13.1	8.2 [8.3]	54.2				100			

注 相模原市立公文書館所蔵の『昭和二十八年 式号 庶務書類 青根村教育委員会』に収録されている。区分の12は「家計の一部又は全部を負担せねばならない」。

三 神奈川県教育委員会『中学校教育課程―試案―』

昭和 28 年 4 月
中 学 校 教 育 課 程
(教科の一般目標)

―試 案―

神奈川県教育委員会

ま え が き

県教育委員会に於ては、各教科についての指導目標を設定するために、神奈川県公立学校教育課程審議会、中学校分科会、カリキュラム専門委員によつて、研究調査を進めてきて、ここに一応のまとまりを得たのであるが、今再び見直してみると、種々不満を感じる点が少くない。思うにこの仕事は短時日に出来るような性質のものではない。

この、県委員会において設定したものと、各地域や学校でつくられるものは、先後、上下の関係はなく、相互媒介の働によつて、共によりよいものにして行くべきものであると思う。

よつて現場においては、これを十分活用すると共に、実践に照しての、意見や資料を沢山提供されることを期待してやまない。それによつて、更に修正を加え、一層洗練されたものにし、本県の中等教育の振興に資したいと念願している。

尚この指導目標設定上の基本方針として、特に考慮したのは次のような点である。

1. 学習指導要領に準拠し、本県の現状に即した要求水準を、学年的段階に応じて示すようにしたこと。

2. 目標を具体的に示し、単元構成や教材選択の基準を提供すると共に、教師の教育活動や生徒の学習活動などを指導し、規正する指標を示し、尚指導結果を評価する観念を明らかにするようにした。

○

この指導目標を使用するにあつては、次の事項に留意されたい。

1. ここに示した目標は、本県の標準的水準と考えられるものであるから、学校により、生徒により、これ以上に到達することも、又これまで及ばない場合もあり得るわけである。これを画一的なものと考えすることはよくない。

2. 各教科共、その学習領域を、いくつかの分野にわけてあるが、この区分が最良のものであるとは言えない。又全教科を同じ立場で区分してあるわけでもない。唯目標をわかり易く示す便宜のためであるので、この区分にとらわれないようにしたい。特に実際の指導にあつて、この区分によつて単元を構成するのがよいということはない。

3. 二教科以上にわたつて、重複して出て来ている事項があるが、実際の指導は適当に取捨し、調整して取扱われない。

4. この指導目標をいかに具体化してゆくかは今後の研究にゆづることにする。

中学校教育課程（一般目標）―試案―

目 次〔略〕

【国 語 科】

I 国語科一般課目

言語は互いに意志を通じ合つたり、考えを進めたり、また文化を獲得したり、創造したりするのに、欠くことのできない役目を持つている。

このようなはたらきを持つ国語を正しく効果的に使つていくための理解力と、表現力とを養い、言語生活の理想を高めていくところに国語学習の本質的な意義がある。

しかし国語の学習指導は、全体の教育の一環として、個性の伸長・社会性の涵養・職業的能力の育成に寄与するように常に心がけていくべきである。

このような立場で、中学校の国語科学習指導に当つては、次の四目標を達成す

るように計画されなければならない。

1. 聞くこと……社会生活上自分に必要な情報や知識を得るために、他人の話をよく聞く
 2. 話すこと……自分の意志を伝えて他人を動かすために、いきいきとした話をする
 3. 読むこと……情報や知識を得るため、経験を広め教養を高めるため、娯楽と鑑賞のために、広く読む
 4. 書くこと……自分の考えをまとめたり、他人に伝えたりするために、はつきりと、正しく、わかりやすく、しかも独創的に書く
- 習慣と態度を養い技術と能力をみがくこと

Ⅱ 国語科の具体目標

中学校は義務教育の完成の段階であるから日常生活に必要な言語を理解し、使用する能力ができて高い言語文化を享受する基礎をつくるために、次のようなことを目標とする。

1. 改まった場合のあいさつや紹介ができる。
2. 筋のおつた興味のある報告ができる。
3. 原稿を見なくても簡単な形式ばらない話をするができる。
4. 会議に参加して、責任が果せる。
5. 電話やマイクフォンなどが使用できる。
6. 会話を興味深くじょうずに進めることができる。
7. 劇や映画のよしあしがわかる。
8. ラジオの番組から価値のあるものを選んで鑑賞することができる。
9. 必要な新聞や雑誌が読める。
10. 現代文学を読んで楽しむ。
11. やさしい文語文を読むことができる。
12. やさしい漢文体の文章を読むことができる。
13. 読書の習慣を身につける。
14. 辞書や参考書の利用ができる。
15. 目的に応じて、よい本を選びだすことができる。

16. 目録や索引の使い方がわかり、図書館を利用することができる。
17. 当用漢字別表の漢字の読み書きが完全にできる。その他の日常必要な当用漢字が読める。

18. 実用的な手紙や、社交的な手紙が書ける。
19. 簡単な詩や論文や物語を作ることができる。
20. 文集や学校新聞などが作れる。
21. 履歴書や届書などが書ける。
22. 硬筆や毛筆で整った字が書ける。
23. 口語のきまりがわかる。

中学校生徒の主要な言語経験

1. 聞くこと
 1. 人の話をよく聞く。
 2. 報告や説明を聞く。
 3. 講演を聞く。
 4. ラジオを聞く。
 5. 電話を聞く。
 6. 劇を鑑賞する。
 7. 映画を鑑賞する。
 8. レコード（たとえば詩の朗読や物語など）を鑑賞する。
2. 話すこと
 1. あいさつや紹介をする。
 2. 会話をする。
 3. 話合いをする。
 4. 会議に参加して意見を述べる。
 5. 報告や発表をする。
 6. 劇をする。
 7. マイクフォンを使用する。
 8. 詩を朗読したり、物語を話したりする。
3. 読むこと
 1. 新聞を読む。

2. 雑誌を読む。
3. 研究書を読む。
4. 文学作品（たとえば小説・物語・伝記・戯曲・詩歌など）を読む。
5. 掲示や広告を読む。
6. 手紙を読む。
7. 書類を読む。
8. 図書館を利用する。
9. 辞書や参考書を使う。
4. 書くこと
 1. 日記や心覚えを書く。
 2. 創作をする。
 3. 社交的な手紙を書く。
 4. 実用的な手紙を書く。
 5. 掲示やポスターを書く。
 6. 届書やその他の書類を書く。
 7. 文集や学校新聞を編集する。
 8. 会話の記録を取る。
 9. 話をききながら要点を書き取る。
 10. 物語を読んで要点を抜き書きする。
- Ⅲ 各学年の具体目標
 - 第一学年
 - Ⅰ. 聞くこと
 1. 集まって話を聞く場合の礼儀や態度に慣れる。
 2. 伝言や用件を確実に聞きとる。
 3. 発表や報告の内容を、もれなく聞きとる。
 4. 話す人の気持がどこにあるか聞きわけける。
 5. 主眼点と末節、中心と付加的部分とに注意する。
 6. 三十分ぐらい続く長い談話や講演でも終りまで聞く。
 7. 楽しい話合の仲間入りをする。
 8. 会議や討論の場のふんい気を見のがさない。

9. 小さな集まりなどで、相手の話ぶりを批判する態度を作る。
10. 学校放送を聞いて楽しむ。
11. 文学作品をすなおな感動をもつて聞く。
12. 余暇を利用して、ニュース映画・文化映画などを見る。
2. 話すこと
 1. 話し相手に悪い感情を与えないように絶えず注意する。
 2. 相手に対する適確な応答のしかたに慣れる。
 3. 相手を考えて、その場に適切な話題を選ぶ。
 4. 話題をなるべく広く求めるようにする。
 5. 電話やメガホンなどを使う場合、なるべく要領よく話す。
 6. 話の要点をよくつかんで、それをはずさないようにする。
 7. 放送などの際を利用して、自分の声について反省する。
 8. 早口や口癖などの欠点を直すように努める。
 9. ことばが一本調子の朗読にならないようにする。
 10. 身ぶりや声の使い方の変化をくふうしてみる。
 11. 覚えた語をできるだけ多く使う。
3. 読むこと
 1. 掲示や広告などを読んで正しく内容をつかむ。
 2. 新聞や雑誌などから話題になるような部分を読みとる。
 3. 日記や伝記・記録などを正しく順を追って読む。
 4. 読書案内や序文や注意書の使用に慣れる。
 5. 国語の辞書や漢字の辞書の使用に慣れる。
 6. 受けとつた手紙の正しい扱い方、読み方に慣れる。
 7. 物語や小説の筋をつかむ。
 8. 脚本や台本を興味深く読む。
 9. 韻文のリズムを味わう。
 10. 感想や随筆などを読むことに興味を持つ。
 11. 説明的な文の要点をつかむ。
 12. やさしく現代訳された古典を読む。
 13. 効果的な文章表現の技術に、注意して読む。

14. 好きな作品の内容を詳しく読む。
15. 余暇を楽しい読書にも使うような態度や習慣を養う。
16. 学級文庫などで喜んで読書するような習慣をつける。
17. ローマ字文に慣れる。
18. 当用漢字別表の漢字を、完全に読むことができ、その外の当用漢字の読みに慣れる。

4. 書くこと

1. 親類や友人に気がるに手紙を書く。
2. 体験したことについて率直な感想を書く。
3. 欠席届や願書類を自分で書く。
4. 生活日記・学級日記・観察日記などを進んで書く習慣をつける。
5. 会議などの書記になって、記録することに慣れる。
6. 報告文などを箇条書きにする要領を覚える。
7. ポスターやプログラムなどの書き方について理解する。
8. ノートの要領のよい使い方に慣れる。
9. 役に立つ部分の抜粋を作ることに慣れる。伝言のメモをしたりする。
10. 自分の書いた文章を直す習慣をつける。
11. 創作に興味をもつ。
12. 適当な語いを使うようになる。
13. 個人やグループや学級の文集を作る。
14. 当用漢字別表（字体は当用漢字体表による）の漢字を誤りなく書くように努める。
15. 必要な場合に、ペンや毛筆を使つて書く習慣をつける。

第二学年

1. 聞くこと

1. 未知の人の応対の場合に不快な感じを与えないようにする。
2. 伝言などを正確にメモする習慣を身につける。
3. 報告や説明などを箇条的に整理して聞く。
4. 話す人の言っている筋をたどりながら、内容を考えて聞く。
5. 筋のこみいった話を落着いてよく聞く。

6. まとま〔二〕た講演や講義をよく聞きとる。
7. 人生や思想などを主題にした話を聞いて理解する。
8. 話合いの主題の流れを見て、話合いに積極的に参加する。
9. 話の調子・高さ・速度などに注意する。
10. 教養を高める放送を深い同感をもつて聞く。
11. 朗読を鑑賞しながら聞く。
12. 劇や映画の正しい見方がわかる。

2. 話すこと

1. 未知の人にも親しみをこめた応待をする。
2. 相手の関心や興味を考えて、それに合うように話を運ぶ。
3. 話の進行に適する発言をする。
4. 改まった場合での話ぶりに慣れ、会の進め役になる。
5. 声の調子や速度が場面によく合っているかどうかを反省する。
6. 正しい根拠に基づく責任ある話をする。
7. 拡声器などによつて、声の抑揚高低などのくふうをする。
8. 相手をひきつけるためにはどんな技術があるかを考える。
9. 朗読やせりふの事をくふうする。
10. 効果的な音声表現について研究し理解する。
11. 覚えた語を使うことによつて、いつそう語いを豊かにする。

3. 読むこと

1. 規約や揭示文などを批判的に読む力を伸ばす。
2. 新聞や雑誌などの中の重要な記事を拾つて読む習慣をつける。
3. 日記や伝記・記録などについて、記事の内容を確かめながら読む。
4. 読書案内や序文や注意書・目次・索引などを利用する。
5. 各種の辞書や参考書の使いわけができる。
6. 社交的な手紙を読み、相手の心持をつかむ。
7. 物語や小説の背景などに注意して読む。
8. 脚本・台本・シナリオの読みに慣れる。
9. 韻文の鑑賞に慣れる。
10. 感想や随筆を読んで内容について考える。

11. 説明的な文を詳しく読む。
12. 注釈を利用したりしてやさしい古典の物語を読む。
13. 文章の構成や修辭に注意して読む。
14. 文学作品の内容を深く味わって読む。
15. 楽しみのための読書の能力を伸ばす。
16. 図書館などで良書を選択して読む。
17. ローマ字で書かれた書物を自由に利用する。
18. 当用漢字別表以外の主要な当用漢字が読める。
4. 書く「ママ」こと

1. 社交的な各種の手紙に慣れる。
2. 意見や感想を要領よく表わす能力をつける。
3. カードや書類などに、正しく書き入れる習慣をつける。
4. 各種の図表の作成に慣れる。
5. 詳しい記録でも、要点の抜き書きでも必要に応じてする。
6. 掲示や告示文の書き方に慣れる。
7. 標語やポスターなどの効果的な書き方をくふうする。
8. ノートの速書きができる。
9. メモを正確に速くとることができる。
10. 文法的な正しさに注意して、校正、訂正、加筆などをする。
11. 余暇を利用して創作をする。
12. 自分の使った語いについて反省する。
13. 学級新聞を編集する。
14. 当用漢字別表の漢字を適切に使う習慣をつける。
15. ペンに使い慣れる。必要な場合に毛筆で書く。

第三学年

1. 聞くこと

1. あいさつ、紹介などに、相手の心をそらさない、好ましい聞きぶりを身につける。
2. こみいった実務上の用事などをまちがいに聞きとる。
3. 相手が何を言おうとしているかを自分自身の立場をはつきりさせながら

聞く。

4. 話す人の議論の根拠を吟味しながら聞く。
5. 要点をすばやくつかみ、それに合せてことばを聞きとっていく。
6. 演説などを聞いて理解する。
7. むずかしい話題に進んで参加しようとする。
8. 会議や討論の目的にそれないように話の進行を調節する。
9. あいまいな言い方や主旨にあわないことばを指摘する。
10. 放送のプログラムの選び方・作り方を考える。
11. 朗読のしかたが、それぞれの内容に即していたかどうかについて考えてみる。
12. 映画や劇のよしあしについて意見を持つことができる。

2. 話すこと

1. 社会的な各種の場面の発言に慣れる。
2. 自分の感情に支配されないで冷静に話を運ぶ。
3. 聞く人に応じて話しぶりを変える。
4. 自分が責任者となつて会を進める。
5. 一定時間に一定の内容を過不足なく話すようにくふうする。
6. 論理的な内容をどう進めるかくふうする。
7. 効果的な表現に必要な補助的手段を使う。
8. 公の場合にも型にはまらぬような表現をくふうする。
9. ユーモアを交えて話す。
10. 身ぶりや表情と声の一致した自然な話ぶりを身につける。
11. 正しい語を選び不適切なものを避ける。
3. 読むこと
1. 広告や規約などの内容を読んで批評する。
2. 新聞や雑誌などの効果的な活用のかたを知る。政治・経済・文化などの記事に関心を持つ。
3. 日記や伝記・記録などについて、その時代や生活を考える。
4. 読書案内・韻文・目次・索引・図表など自由に活用する。
5. 各種の辞書や参考書を使いこなす。

6. 実用的な手紙や届書その他書式を理解し、用件を正しくつかむ。
7. 物語や小説に作者の考え方がどう生かされているかを考えて読む。
8. 脚本・台本・シナリオなどの演出について研究する。
9. 日本の代表的な韻文を鑑賞する。
10. 感想や随筆を読んで研究する。
11. 研究や論文などの読みに慣れる。
12. 内外の古典に関心を持つ。
13. 文法的な構成、日本語の特性などに注意して読む。
14. 現代文学のおもしろなものを選んで鑑賞する。
15. 生活を豊かにするにふさわしい読書の態度を身につける。
16. 図書館などの読書や書物選択の態度・習慣を身につける。
17. ローマ字を自由に読むことにより国語の文法や音韻に関する知識を増す。
4. 当用漢字の大部分が読める。
18. 書くこと
 1. 注文・催促・問合せなど実用的な手紙の書き方を身につける。
 2. 発表には資料をじょうぶんに生かして責任ある文を書くようにする。
 3. 履歴書・届書・証書など諸形式に慣れる。いろいろの場合のくふうができる。
 4. 記録の作製に慣れる。
 5. 各種の議題や協議題の起案に慣れる。
 6. 宣伝文や広告文などの書き方を理解する。
 7. 紙の使用、用具の利用、字配りなど効果的な表わし方をくふうする。
 8. 縦書き・横書き・ローマ字書きなど必要に応じて自由に書く。
 9. メモなどをもとにして普通の文章を組み立てる。
 10. 表記法を理解し活用する。
 11. いろいろな創作活動で楽しむような習慣をつける。
 12. 語いを豊かに使いこなして、個性味のある文を書くようにする。
 13. 新聞・雑誌などの編集について、ひととおりの理解を持つ。
 14. 当用漢字別表の漢字を使いこなす。

15. 毛筆・鉄筆・ペンなどで実用に即して効果的に文字を書く。

【社会科】

I 社会科の一般目標 理解

- (1) 民主主義がわれわれの生活の幸福にどのような意味をもっているかの理解。
 - (2) 民主主義を現代のわが国の政治的・経済的・社会的活動に具体化することが、どんなに重要であるかの理解。
 - (3) 現代の政治的・経済的・社会問題がどのような歴史的背景をもつて今日に及んでいるかの理解。
 - (4) われわれの社会生活が、自然環境とどのような関係をもつて営まれているかの理解。
 - (5) 各地の文化、たとえば言語・宗教・芸術・風習・衣食住の様式などにはいろいろの違いがあるが、その底には、共通は人間性が横たわっていることの理解。
 - (6) 各地の人々の相互依存関係がどんなに重要であるかの理解。
 - (7) 政治がわれわれの生活と直接結びついているものであること、および公明な選挙がわれわれの社会をよくしていく要件であることの理解。
 - (8) 日本の窓としての本県の国際的位置・歴史・自然およびこれらに結びついて発達した自然産業・工業・貿易・観光などの大要についての理解。
 - (9) 本県が解決すべき社会課題は極めて多種多様であることの理解。
- 態度
- (1) 人種・国籍・信条・性別・社会的身分などのいかにかわらず他人の権利や業績を尊敬する態度。
 - (2) 社会の一員としての自己の責任を自覚し、義務を果たすとともに、身分の権利が尊重されることを主張する態度。
 - (3) 自分と反対の見解や、他人の意見に対して広い心をもつて接する態度。
 - (4) 人々と協力して社会生活上の種々の問題解決に、みづから進んで参加する態度。
 - (5) 主権者としての自覚をもち、真理の追求と正義の実現に努力する態度。

(6) 外国の文化を尊重するとともに、わが国の文化をいつそう発展させようとする態度。

(7) 国際的教養とゆたかな情操を持ち、平和な生活を愛好する態度。

(8) 生活を計画的に営み資源や公共物を愛護活用し日常行動において礼儀正しくする態度。

(9) 問題を科学的継続的に解決しようとするねばり強い県民性の育成。
能力・技能

(1) 資料を科学的に処理し正しい結論を得る能力と技能。

(2) 書籍・雑誌・パンフレットなどから、あるいは観察・調査・面接などによつて、適切な資料を見いだす能力・技能。

(3) 地図・年表・歴史地図・グラフ・絵画などを解釈したり、作ったりする能力と技術。

(4) 新聞やラジオなどの報道機関を用いて社会生活上の問題を正しくとらえ、それを解決していく能力と技術。

(5) 社会生活上の種々の問題を見いだし、社会生活をよりよくする計画を立てる能力。

(6) 人々といういろいろな問題について討議したり、自分の考えをはつきり発表する能力。

(7) 恵まれない今日の社会条件に対処するたくましい実践的意慾と技能。

Ⅱ 各学年の目標

一年（われわれの生活図）

一年ではわれわれの衣食住の生活が自然環境とどのように結びつきまたどのように克服されて営まれているかを郷土・国土・世界という地理的視野において理解させようとするものである。またとくに各種の地図を用いて問題を解決する能力や技能を養うことをめあてとしている。

理解

(1) 新しい学校および家庭や地域社会における民主的生活の意義の理解。

(2) わが国諸地域の人々の生活が複雑な国土の自然環境に結びついて営まれていることの理解。

(3) わが国および外国との関連における本県の地理的特色の理解。

(4) 世界の諸地域における自然と衣食住の様式には相違点や共通点があることとの理解。

(5) 交通、通信機関の発達は世界を著しく縮少し、世界の人々の相互依存関係をますます深めてきたこととの理解。

態度

(1) 家庭や学校および地域社会の生活改善に協力する態度。

(2) 社会生活に必要な「な」道徳や礼儀を重んずる態度。

(3) 地方や外国の人々の生活を理解して郷土や国土を正しく愛する態度。

(4) 世界市民の一員としての自覚と平和愛好心の涵養。

技能

(1) 神奈川県・日本および世界に関する各種の地図を読んだり描いたり利用したりする技能。

(2) 歴史年表を用い日本・西洋・東洋の歴史時代を対比して学習する技能。

(3) いろいろな学習方法を用い能率的に研究を進める技能。

二年（近代産業時代の生活）

二年では一年の地理的基礎学習の上に産業革命を中心とした近代生活を展開して、その歴史的発展を理解させようとするものである。またとくに歴史年表を用いて問題を解決する能力や技能を養うことをめあてとしている。

理解

(1) わが国や外国の都市や村の歴史的発達と、その近代化にともなつて起つた諸問題の理解。

(2) 自分の住んでいる都市や村の役割およびその地理や歴史の概略についての理解。

(3) 近代工業の発達とその背景をなしている産業革命およびその影についての理解。

(4) 天然資源の分布や利用および開発についての理解と天然資源が社会進展の上になにに重要であるかについての理解。

(5) 社会生活の進歩にともない職業の性格が変り、種類も増加し、新しいいろいろな問題も生まれてきたこととの理解。

(6) 本県の発展上工業生産の向上と貿易の発達および観光事業の振興がいかに

に大切であるかの理解。

態度

- (1) 社会生活上の切実は「な」問題をとらえて、それを歴史的に考察して解決しようとする態度。

- (2) 日常生活においてあらゆる資源を愛護する態度と習慣。

- (3) 職業生活の意義を正しく理解し勤労を尊重し労働生活の改善に協力しようとする態度。

技能

- (1) 統計・図表・地図その他の資料を用いて問題を解決する技能。

- (2) 歴史年表や歴史地図を活用する習慣と技能。

- (3) 地域社会にある公共施設を利用したり社会の人々と面接したりして資料を集める技能。

三年（民主的生活の発展）

三年では民主主義の根本である人間尊重に関する理解を深めこの理解を基にして政治・経済・文化・国際社会などの民主化に協力する態度や技能を養おうとするものである。またくに新聞やラヂオなどの報道機関を用いて問題や解決方法を発見する能力や技能を養うことをめあてとしている。

理解

- (1) 世界の民主主義の発展と民主主義の諸原則についての理解。

- (2) わが国の政治の機構や機能およびその運営方法などについての理解。

- (3) 社会生活向上のために選挙が重要な役割を果していることについての深い理解。

- (4) 生産・流通消費に関係した経済上の知識と現代の経済生活上の諸問題についての理解。

- (5) 文化は時代とともに発展してきたものであること、また文化がわれわれの生活をどのように豊にしてきたかについての理解。

- (6) 世界の平和を築くことがどんなに大切であるかについての歴史的な理解。

態度

- (1) 自分の属している身近な社会の民主化を進める態度・習慣。

- (2) 政治に関心を持ち正しい選挙をおこなおうとする態度。

- (3) 日常の経済生活を計画的に営もうとする態度と習慣。

- (4) すぐれた文化遺産を尊重するとともに新しい文化の創造に協力する態度。

- (5) 身近は「な」問題を平和的に解決したり、生徒としてできる国際平和のしごとに協力したりする態度。

技能

- (1) 常に新聞を用いて社会や政治に関する資料を得る技能。

- (2) 会議を民主的にまた能率的に進める技能と習慣。

注 神奈川県教育委員会『中学校教育課程—試案—』（一九五三年四月）。数学科、理科、音楽科、図画工作科、保健体育科、職業・家庭科、英語科は省略した。

四 中学校卒業予定者の進学希望調査

神奈川県中学校卒業予定者の進学希望調査（昭和28年11月1日現在）

神奈川工	城東商	吉田島農高	城東工	→普 ←実業	大磯高	大秦野高	農林高（普）	山北高	城東高	城内高	小田原高	高等学校名		
470	352	74	99		42	・	66	99	34	-	424	男	学区内公立中より	普通課程高校への進学希望者数
3	33		・		110	126	3	133	195	542	6	女		
473	385	74	99		152	126	69	232	229	542	430	計		
7	1				1		1	1	2	・	22	男	学区外公立中より	
・	・				6	6	・	・	1	30	・	女		
7	1				7	6	1	1	3	30	22	計		
											14	男	私立中より	
						1				9	2	女		
						1				9	16	計		
477	353	74	99		43		67	100	36		460	男	公私立合計	
3	33	・	・		116	133	3	133	196	581	8	女		
480	386	74	99		159	133	70	233	232	581	468	計		
250	250	100	40		150	100	100	200	150	400	350	昭和廿八年 度の募集 定員B		
1.9	1.5	0.7	2.5		1.1	1.3	0.7	1.2	1.5	1.5	1.3	公立学校 進学希望 比率A／B		
415	443	105	98		177	125	123	251	226	570	442	(28・4・15調) 進学希望		
												昭和28年		

注 山北町教育委員会所蔵の簿冊「昭和二十七年十一月起 教育委員会関係綴 中戸川嘉賢」に収録されている。

三崎水産	横浜商校	商工の商	平塚農高	平塚工	商工の工
26	399	115	140	241	214
・	237	49	2	・	・
26	636	164	142	241	214
	15	5	1	7	10
	2	1	・	・	・
	17	6	1	7	10
26	414	120	141	248	224
	239	50	2	・	・
26	653	170	143	248	224
80	350	100	150	100	200
0.3	1.9	1.7	1.0	2.5	1.1
～	491	197	204	149	285

五 「学区制問題に対する実態」

学区制問題に対する実態

七月二十七日 各支部代表 同研究者

問題点

1. 小一中の際のもぐり入学

特に多い学校は N 中 S 中 D 中 である ここは他市、他教委より通学している

N 中はひどい時は三八％戸籍移動している 某市よりも相当入っている S 中においては今までは一八％は区外であつたが昭和二十九年度は区外よりはとらない方針をたて強行に実施した結果は同教委の強硬な実施とも相まち父兄側で断念された しかし若干は入っているもようである

D 中にも相当入学している しかし手続上は養子縁組 一家寄留をしてくるので許可せざるを得ない状況である 又 T 中の場合にも T 高に行くため区外より入る者が居る しかし本年は現に居住しなければ認めない方針で強行している

2. 小に入学する時 小一中の場合の学区制とは

法律に定めるものはない 法律ではきめられない したがつて居住地外の小学校或は中学校に行く事は出来るわけである この場合同一教委内 他教委の場合とあるが 受けいれる側の教委が拒否すればよいが 宜しいということであればかりに訴訟〔訴訟〕となつても父兄側に有利である したがつて申入れを受けた教委では其の理由となつて内容をも十分検討し妥当性について確認しなければならぬわけだ此の際其の人の属する教委に連絡協議するわけである

即ち小学校に入学する場合 小一中の場合に法律的根拠はないが慣例による事になるわけである 其の人の居住する学校に通うのが当然の事であるので法規にないといつても いつでも要求が容れられるわけではなく（地理上 交通上等々の場合が多いと思うが）妥当性のある理由がなければならぬ

3. 他学区通学者と市町村当局

養子縁組、一家寄留の形であるならば一応当然と考えられるが 事実上他

学区より通学しているものは住民税は納めていないわけである そこで市町村当局では税金に当る金額につき寄附をさせているらしい（学校では学定期は発行してない普通定期のはづ）

4. 小一中の場合 組合内部

小学校教師の中で 他学区の学校を選定する場合 又私立中学入学のため何等かの形で準備教育を行っている学校があるもよう

5. 小一中の際の学校差の問題

学区制が維持されるようにするためには学校差の問題を解決しなければならない

学校差とは施設教具備品等の差をなくすという点と共に人事面（特に一方の性にかたよらない）男女共学をも不可能にしている原因にもなっている

小田原において市内三校中に男子は小田原高のみ 横須賀において五校中男子は横須賀高のみ 大津高では男子は拒否しないしかし受けいれる体制をつくらうとはしない

この点は父兄啓蒙には大きな障碍となつている

6. 中一中のもぐり入学

殆んどの高校入学者中には他学区より入学している 所謂有名校にははげしい 中学校長が志願先高校に居住証明を提出するのであるが この際一家寄留養子縁組居住証明書をもつてこられるので許可せざるを得ない状況もある ある地区において実情調査をした所〇〇町〇丁目一番地とあり〇丁目はなくしかも一番地は交番であつたことがある

又定時制より昼間に編入或は実業コースに入り後普通コースに編入する場合の事実すらある

中郡二宮国府地区の A クラスは小田原へ 茅ヶ崎は江南或は湘南への傾向あり したがつて茅ヶ崎は B、C クラスの生徒のみとなる傾向をもつている

7. 現在の学区にも地理上無理な点もある

小田原高へ熱海より通っているもの（湯ヶ原より三島に行っているものもある）

津久井地区においては大部分東京にいつている（富裕な家庭の子が多い）

が)

8. 高校側教師の学区制の精神の分っていない人もいるのではないか

例 本校は大学に行くものだけの筈である (男子高校)(同一市内の女子高) 入学式にテニスをやりなさい 学校へきたら好きな事をやりなさい 高より大への入学率をのみ考えているのではないか 方針が全く異(な) っている 極論するならば完全に予備校化している高校がある

父兄の人たちの学校差の考「え」方の中には大学入学率の高い所という点が大きく左右している 特に有名校にあこがれるのは

以上の問題点を要約すると

学区制の問題の中には

1. 幼—小—中—高—大何れにも問題がある。

2. 父兄の考「え」方には新学区制の精神や 新しい教育への理解については大に啓蒙を要する点があり、特に学校差といつても施設の面ばかりではなく大学入学率の高い所という考「え」方が存在している。

3. 市町村当局において学区制を堅持するためにまだまだ大に趣旨徹底をはかり学区制破壊せしめないよう話し合「い」をもつべき問題がある。

4. 教育委員会においても権威ある態度と主体的態度堅持のためにはまだまだ問題がある。

5. 組合員内部の問題

自ら破壊することのない様小、中、何れにも問題があり、一致結束の力と徹底がなされなければならない。

6. 高校の施設人事面にも改善すべき問題がある。

神奈川県公立高等学校学区内外入学者数一覧表

資料 2

(但し、公立中学より公立高普通コース県内のみ)

1954.5.1

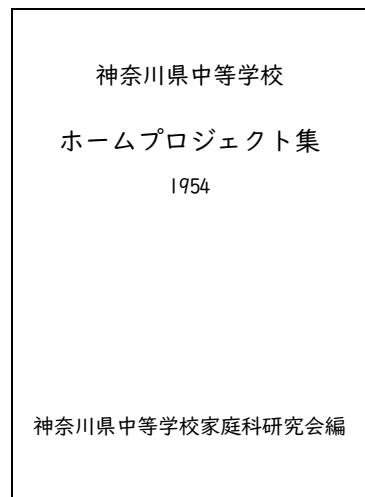
	入 学 決 定 者 数									志 願 者 数		
	男			女			計					
	内	外	計	内	外	計	内	外	計	内	外	計
県 鶴 見 高	169	1	170	99	1	100	268	2	250	310	4	314
・◎ // 翠 嵐 //	179	31 14.75%	210	105	13 11%	118	284	44 10%	328	306	46	352
・◎ // 希望〔ヶ〕丘//	100	56 35%	156	59	13 18%	72	159	69 31.5%	228	167	27	294
市 桜ヶ丘 //	121	8	129	135	18 11.8%	153	256	26 9.1%	282	285	27	312
・× 県 平 沼 高	128	12	140	148	63 30%	211	276	75 20.05%	351	343	79	422
・× // 緑ヶ丘 //	137	13	150	70	13 16%	83	207	20 11.2%	233	235	30	265
・◎ // 立 野 //	67	15 16%	80	49	8 14%	57	116	21 15.4%	137	137	21	158
市 金 沢 //	136	3	139	103	1	104	239	4	243	269	8	277
// 戸 塚 //	50	7	57	125	7	132	175	14 7.5%	189	188	16	204
・× // 南 高	45	12	57	107	26 19.6%	133	152	38 20%	190	165	54	219
◎ 県 横 須 賀	271	20 6.8%	291	28	5 15%	33	299	25 7.7%	324	308	25	333
// 大 津 高				295	10	305	295	10 3.3%	305	297	10	307
市 第 一 //				193	1	194	193	1	194	199	2	201
// // 二 //				153	1	154	153	1	154	182	1	183
県 川 崎 //	234	8	242	102	6	108	336	14 4%	350	358	15	373
市 川 崎 //	34		34	186	2	188	220	2	222	236	2	238
// 高 津 //				161	4	165	161	4	165	168	4	172
// 橘 //	103	2	105	45	1	46	148	3	151	194	3	197
県 江 南 //	98	2	100	156	2	158	254	4	258	2□□	□	2□□
・○ 県 平 塚 //	129	19 13.9%	148				129	19 12.8%	148	139	20	159
市 高 浜 //				189	12	201	189	12	201	196	12	208
県 茅ヶ崎 //	68	1	69	83	1	84	151	2	153	198	2	200
// 三 崎 //	31		31	88		88	119		119	157		157
・× 市 逗 子 //				79	14 15.2%	93	79	14 15%	93	82	33	115
○ 県 相 原 //	62	17 21.5%	79				62	17 21.5%	79	86	17	103
○ // 上 溝 //	14	3 17.7%	17	123	5	128	137	8	145	144	10	154
・○ // 秦 野 //	184	25 12%	209	3		3	187	25 11.8%	212	199	26	225

○ // 小田原 //	350	22 5.9%	372	5		5	355	22 5.8%	377	380	22	402
// 城 内 //				425	19	444	425	19 4.3%	444	481	22	503
// 城 東 //				165	3	168	165	3	168	205	3	208
// 大秦野 //				103	3	106	103	3	106	106	3	109
// 伊勢原 //	19	1	20	76	8	84	95	9	104	95	9	104
// 大 磯 //	48		48	100	9	109	148	9	157	166	6	172
// 吉 農 //	98		98	2		2	100		100	116		116
// 山 北 //	82		82	122	1	123	204	1	205	216	2	218
・○ // 厚 木 //	192	55 22%	247				192	55 22.3%	247	223	61	284
・× // 厚[木] 東 //				173	30 14.8%	203	173	30 14.8%	203	192	32	224
// 津久井 //	43	1	44	52		52	95	1	96	101	1	102
// 藤 沢 //				225	15	240	225	15 6.3%	240	254	15	269
// 鎌 倉 //	128	1	129	114	5	119	242	6	245	312	6	318
○◎ // 湘 南 //	282	30 11.7%	314	22	3 12%	25	304	35 16.2%	339	321	36	357
合 計	3,602	365	3,967	4,468	323	4,791	8,070	688	8,758	8,986	820	9,806
		9.2%			6.7%			7.9%			8.4%	

(註) 男○ 女× 両方◎ 全体として・

注 横浜市史資料室所蔵の「岡野の八年目(その一)」(長谷川雷助旧蔵資料)に収録されている。合計や割合の記載に計算の間違いと推測される数字が多数あるが、いずれも原資料のままにしている。

六 神奈川県中等学校家庭科研究会編『ホームプロジェクト集』はしがき・目次



(一) 松本喜美子「ホームプロジェクトの意義と使命」

ホームプロジェクトの意義と使命

松本喜美子

(県教委指導主事)

新学制の発足とともに、学習指導法の新しい形もさかんにとり入れられたが、プロジェクト法もその一つである。

この学習法は、一九〇〇年頃米国において提唱されたもので、あらゆる教育にとり入れられてよいものであるが、特に家庭科や農業科の指導法にピッタリするものである。

日本においては、従来から農業も家庭も、その学習指導法は、他の教科と同様にいたって注目的であった。教師の講義とその暗記、また実習にしても、教師の示範とその模倣といった学習形態がとられ、生徒の要求や興味がとりいれられることは少なかった。

戦後、農業も家庭も選択者が減ったのとあいまって、この教科の立て直しが、産業教育と結びつけて考えられるようになったが、同時に新しい指導法として、最も重要視されるにいたったのは、このプロジェクト法であろう。それはホームプロジェクトとよばれて、これらの教科の学習効果をあげるためには欠くことのできないものになった。

特に家庭科では、戦後の教科内容がいまままでの家事裁縫とは性格も範囲もちが

う生活的、主体的なものになり、目標も単なる技術の習熟でなく、家庭生活全般にわたる進歩と改善が要求されるにいたったので、在来の指導法のみでは、どうにもこれをみたすことができなくなった。加うるに、精神面からみれば、家庭内の人間関係の改善にまで到達しようとしているのであるから、どうしても、生徒の発達段階に即して、その要求と興味をとりいれつつ、自主的な学習活動をさせるをえないわけである。そして、こういう性格ないし目標にピッタリあった学習法といえば、ホームプロジェクトにおいて他にないといえるのである。

次にホームプロジェクトの手順についてのべてみよう。まず第一に問題を発見する。(学校で学習したことにてらして家庭内の、また身の改善しなければならぬことに気がつく。)第二に自分からすすんでこの問題を解決しようとして計画をたてる。(家庭の人々に相談し、費用や仕事を考える。自分でできないところは協力をたのむ。これまでの学習のように技術的習熟だけが目標でないから、ものによって全部を自分でする必要はない。)第三番目に実行する。(実行している間に詳細な記録をとる。これはこの仕事を自分一人のものとして、他へひろめるためである。)最後に反省し、評価する。(これは仕事をまとめ、責任をとると同時に家族や先生に批評してもらい、よりよい家族関係や人間関係の発展へもって行くためである。)

以上のような手順でプロジェクトを遂行するのだが、この仕事は、あくまで自主性を保ちながらも決して孤立せず、大勢の承認と協力のもとに行われるのである。そこには小さな個々の技術におわるものもないではないが、多くは、家庭生活全般にわたった(食物、被服、住居というだけに限定されるものでなく、その幾分野、もしくは全分野にわたるものさえあり、大抵のものは、少くとも、経済とか管理とか家族関係をふくんでいる。)学習がなされている。

しかして、ホームプロジェクトの使命は、どんな小さな問題でも、自分で計画し、実行し、なんらかの成果をあげることにあるので、単なる研究や実験におわってしまふべきものでない。そこに実生活に対するなんらかの貢献があり、実生活の幾分かの進歩がなければ、よいプロジェクトとはいえないものである。

ここに集録した本県、中学校、高等学校の生徒たちのホームプロジェクトが、この目標にてらして、果してよいものかどうかは、大方の御批評をまつより他な

だきたいと思うものである。

(二) 目次

ホームプロジェクトの意義と使命……………松本喜美子

中学校の部

母の二十四時間……………三年 高橋友紀子

弟妹によい習慣をつける工夫……………

二年 松浦 典子
二年 古川 和子
二年 津田紀久子

古セーラーを弟のジャンパーに……………三年 吉川 瑞代

弟の洋服……………三年 山下みどり

私の調査した弁当のおかず……………二年 秋田 侑子

私たち郷土の食生活改善について……………三年 中村 幸江

お茶の勉強……………二年 小林 富枝
二年 平田 照代

私の作った調理台……………三年 山口 優枝

米びつの移動と押入れの改善……………三年 内藤 礼子

押入れの改良……………三年 小林 智子

粉炭の取れる炭取箱……………三年 西田 清子

私の勉強室……………二年 須藤 和子

私の丸椅子……………三年 松原 和枝

出窓を利用しての折たたみ式机……………三年 大沢 幸子

さつまいもの肥培研究……………三年 田中 次郎

天候と稲の生育について……………三年 大貫 政直

農村の簡易納豆製造の研究……………三年 熊沢 弘

高等学校の部

療養中の父のために……………二年 遠藤 妙子

私の家庭……………一年 田浦 節子

私の家の会議……………二年 黒村 絹代

母の日課……………二年 小沢 君江

夏休み中の家事実習……………二年 飯泉 康子

楽しいピクニックの計画……………三年 伊藤 良子

楽しい我が家を……………一年 上原 睦子

被服費について……………一年 奈良 節子

郷土めぐり絵本の作成……………一年 富塚 正子

妹のしつけ……………二年 福寿 幸子

弟の知能テストをころもみて……………二年 伊藤 静子

幼児のしつけ……………一年 豊下 幸子

母の着物……………一年 元木とし子

古い編物の更正……………二年 清水美智子

私のワンピース……………一年 桜井 君子

祖父の膝かけ……………一年 村田千代子

アップリケのカーテン……………一年 吉田 輝子

袖のプレスに使うアイロン台……………一年 菅治 君子

私の一週間の献立実習……………二年 忍足 美枝

我が家の食生活を検討して……………三年 山本トミエ

昼食の改善……………一年 辰井 正恵

籠球部の合宿に協力して……………二年 真弓 享子

妹たちの学習環境の改善……………一年 習田 典子

私の家を少しでも広く使えるように……………一年 山口悠紀子

我家の冷蔵庫……………一年 小山 裕子

出窓の利用……………二年 間山貴久子

みかん箱利用の机……………一年 植田 博子

お風呂の配水の工夫……………二年 池田 叶子

風呂呂たき……………一年 杉山 陽子

あとがき……………

注 神奈川県立公文書館所蔵の神奈川県中等学校家庭科研究会編『ホームプロジェクト集』(一九五五年)。目次中のページ番号は省略した。

七 「中学校卒業生の高等学校への進学指導について」(通知)
二八教下収第一九〇号

昭和二八年三月五日

神奈川県教育委員会事務局足柄下出張所長

市町村教育委員会教育長

殿

学校組合管理委員会委員長

中学校卒業生の高等学校への進学指導について

右のことについては昨年は各通学区域に中・高等学校長をもって高等学校進学指導委員会を設け、高等学校への進学指導及び調整並びに他学区通学許可のことに
ついて種々御協力を願い相当の成果をおさめましたことに対しては衷心より感謝
いたしております。本年は昨年進学指導委員会を取り扱いました公立高等学校通
学区域のことにつきましては、今回神奈川県教育委員会規則第二号をもって去る
二月二十四日付公布されましたが、昨年までの成果より見て昨年の進学指導委員
会の実施事項中の「区域外就学許可願」の取扱手続以外は、昨年同様に通学区
域毎に中学校長の自主的運営と協力を必要と考えられますので、前記規則の運営上
万全を期するため各通学区域の公立高等学校長と中学校長は十分協力下さるよ
う貴管内中学校長に周知方御配慮願います。

注 箱根町教育委員会所蔵の簿冊「昭和廿八年一月 教育委員会書類 仙石原村教育
委員会」に収録されている。

八 社会見学実施計画の届（津久井郡青根中学校）

社会見学（日帰り遠足）実施届

今般左記実施計画に基き社会見学を実施したいと思いますので御届けいたします

昭和二十八年五月八日

神奈川県教育委員会津久井出張所長 伊従 博殿

神奈川県教育委員会津久井出張所長 伊従 博殿

実施計画案

学年	責任者	場所	期間	経費
一年	横山 一郎	与瀬	五月十五日	一人当り 二五〇円
在籍数	附添 教員名	青根―与瀬 往復バス利用	所要時間	頻数
三五	副校長 沖政男 講師 高橋悦子 全 小沼力ネ	与瀬、桂北中学校、電機博物館、 相模湖、嵐山植物園、発電所	出発午前七時 到着午後六時（計十一時）	本年度 予定一回
			参加 人員	捻出 法
三五	本人の貯蓄、 勤労所得 及積立		考 備	雨天順延
全 百分 比 上				
% 100				

並びにその処置	不参加者の理由	示 教 事 項
	不参加者なし	<div data-bbox="853 291 1428 616"> <p>○左の諸事情を事前事後、当日に於て指導研究、発表、評価を行う</p> <p>○交通機関</p> <p>1 バス 原動機</p> <p>2 汽艇</p> <p>○地方電力源</p> <p>1 ダム 起因と現況</p> <p>2 人造湖 産業への役割</p> <p>3 発電所</p> <p>○郷土観光の理解</p> <p>観光の意義使命</p> <p>観光地発展のための努力</p> <p>○団体行動と公衆道徳</p> <p>○むだ使いに対する指導</p> <p>有効な買物</p> <p>計画的な経済</p> </div> <div data-bbox="853 627 1428 672"> <p>要 概 程 日</p> </div> <div data-bbox="853 683 1428 1064"> <p>出発 五月十五日（金）午前七時</p> <p>帰着 全 午後六時（バス）</p> <p>(1) 与瀬町</p> <p>(2) 桂北中学校</p> <p>(3) 電機博物館</p> <p>(4) 嵐山自然植物園</p> <p>(5) 相模湖</p> <p>(6) 発電所見学</p> <p>(7) 与瀬遊園地</p> <p>(8) 与瀬発（バス）四時三十分</p> <p>青根着 六時</p> </div> <div data-bbox="853 1075 1428 1120"> <p>法 止 防 険 危</p> </div> <div data-bbox="853 1131 1428 1556"> <p>(1) 交通事故の種類と原因につき統計表を参照し、その防止に対する心構えを討議し具体的な防止方法を申し合せさせる</p> <p>(2) 集合、点呼、乗車、下車報告等につき事前に訓練して置く</p> <p>(3) 旅行、遠足等により易い病気についてその原因と予防処置をしらべ、或は教示する</p> <p>(4) 備付薬品の携行</p> <p>(5) グループ行動</p> <p>(6) 出発前数日間の健康状態に注意し、不審と思われるものは校医の診断を受けさせる</p> </div>

社会見学実施方認可申請書
今般左記実施計画に基き社会見学を実施いたしたいと思ひますので、御認可相成り度く申請いたします

昭和二十八年五月八日

神奈川県津久井郡青根村一、九二六番地

青根村立中学校長 横山一郎

神奈川県教育委員会津久井出張所長 伊従 博殿

実施計画案

学 年	責任者	場 所	期 間	経 費
三 年	横山一郎	横浜方面 神奈川県庁、横浜港南、横濱、横濱測候所、間門海岸 野毛山公園（動物園、遊園地）野毛町商店街（往復とも買切りバス利用）	出発 帰着 五月一六日午前六時 全日午後八時	一人当 金三五〇円也
在籍数	附添 教員名		所要 時間	捻出法
四四名	校長 横山一郎 教諭 山崎好男 講師 高橋悦子（三名）		一四時間	本人の貯蓄、 勤労所得及積立
参加 人数			宿泊なし	
全上百分比	教員一人につき 参加者人数	一五名	考 備	本年度予定一回
一〇〇%			雨天順延	

並びにその処置		不参加者の理由	
不参加者の理由		不参加者なし	
項 事 教 示			
<div>(1) 順路、地名、交通機関、特産物等を地図に記入、それぞれを調べて概念を作る</div> <div>(2) 県庁の機能、横浜港の役割機能について社会科と職業指導の面から研究する</div> <div>(3) 測候所の仕事、器具、設備のいろいろについて調査する（理科）</div> <div>(4) 潮の満ち干きについて調査する</div> <div>貝の生態、種類について研究する</div> <div>(理科)</div> <div>(5) 都会人の服装と色彩について考察する</div> <div>(図工、家庭)</div> <div>(6) 各種動物の種類と分類、生態を研究する</div> <div>(理科)</div> <div>以上（事前指導及当日の指導）</div> <div>尚エチケットに関する事項はグループ及学級の討議によって考える</div> <div>(1) 危険防止 (2) 公衆道徳</div> <div>(3) 男女の協力 (4) 団体行動</div> <div>(5) 調査研究の態度</div> <div>(6) レクリエーション</div>			
要 概 程 日			
<div>(1) 五月一六日午前六時青根発</div> <div>(2) 〃 〃 九時横浜着</div> <div>(3) 神奈川県庁</div> <div>(4) 南棧橋</div> <div>(5) 横浜測候所</div> <div>(6) 間門海岸（昼食）</div> <div>(7) 野毛山動物園</div> <div>(8) 野毛山遊園地</div> <div>(9) 野毛町商店街</div> <div>(10) 青根帰着午後八時</div> <div>(往復買切りバス使用)</div>			
法 止 防 害 危			
<div>(1) 過去の遠足の反省</div> <div>(2) 交通事故の種類と原因についての討議を行い対策を考える</div> <div>(3) 規律訓練</div> <div>集合点呼、報告、乗車、下車が迅速に行われるよう事前にしばしば練習する</div> <div>(4) 携帯食品について生徒に考えさせると共に父兄にも連絡する</div> <div>(5) 携帯薬品の種類を教示する</div> <div>(6) 出発前数日の生徒の健康状態を特に観察する</div> <div>(7) 前日の健康診断</div>			

社会見学（日帰り遠足）実施届

今般左記実施計画に基き社会見学を実施したいと思しますので御届けいたします。

昭和二十八年五月二十六日

神奈川県津久井郡青根村立青根中学校長 横山一郎

神奈川県教育委員会津久井出張所長 伊従博殿

実施計画案

学年	責任者	場所	期間	経費
二年	横山一郎	与瀬、八王子 多摩方面	六月二日	一人に付 参百円也
在籍数	附添 教員名	全コース貸切 バス利用	所要時間	頻数
四三名	副校長 沖 政男 教諭 中山 政孝 講師 高橋悦子	内郷古蹟、津久井ダム、 野鳥試験場 織染学校、聖蹟記念館	出発午前六時 到着午後八時（計一四時）	本年度 予定一回
参加 人員			考備	捻出法
三七名	教員一人に付 参加者人数			本人の貯蓄、 勤労所得 及 積立
全上 百分比				
八六%	約一二名		雨天順延	

注 相模原市立公文書館所蔵の簿冊「昭和二十八年 庶務書類 二種 青根村教育委員会」に収録されている。

並びにその処置	不参加者の理由	項 事 教 示	
		○左の諸事項を事前事後、当日に於て指導、研究、発表、評価を行う。 ○先人の遺蹟 1、古代の社会と文化 2、日本の歴史 3、文化遺産 ○地方電力源 1、ダム 2、人造湖 3、発電所 ○紡織、染色の概要 ○明治維新と大帝 ○団体行動と公衆道德 ○むだ使いに対する指導 ○有効な買物 ○計画的な経済	○起因と現況、産業への役割
登校自習	バスに酔うため	要 概 程 日	
		出 発 六月二日（ ） 午前六時 帰 着 青根発（バス） 午後八時 全 午 後 八 時	(1) 内郷村寸沢嵐 (2) 津久井ダム (3) 大ダルミ峠 (4) 野鳥試験場（昼食） (5) 織染学校 (6) 八王子市街（午後三時） (7) 多摩聖蹟記念館 (8) (7)を午後五時半発 一路帰村
		法 止 防 険 危	
		(1) 交通事故の種類と原因につき統計表を参照しその防止に対する心がまえを討議し、具体的な防止法を申し合わせする。 (2) 集合、点呼、乗車、下車、報告等につき事前に訓練する (3) 旅行、遠足等に起り易い病気について、その原因と予防処置とをしらべ、或は教示する。 (4) 備付薬品の携行 (5) グループ行動 (6) 出発前数日間の健康状態に注意し、不審と思われるものは校医の診断を受けさせる。	

九 アチーブメントテスト（一九五四年度）

（一）実施概要（案）

昭和二十九年 神奈川県中学校アチーブメントテスト実施概要（案）

一 実施期日

第一学年および第二学年は二月二十二日（火）、二十三日（水）の二日間

第三学年は二月十八日（金）、十九日（土）の二日間

一 実施教科目

第一学年および第二学年は国語、数学、理科、保健体育、図画工作、音楽、職業・家庭

職業・家庭

第三学年は国語、社会、数学、理科、保健体育、図画工作、音楽、職業・家庭

家庭

注 第一、二学年の社会科は教育課程の改訂により学習内容がまちまちであるので本年度は作成しないことにした。

実施上の注意

県教育委員会で作成する「神奈川県五四年式アチーブメント・テスト実施上の注意書」の注意事項を忠実に守り 全県一斉に実施のこと。

（二）運営委員会実施要項案

※横浜市、横須賀市、川崎市の各教育委員会および各教育

事務所は公立中学校長および公立高等学校長と協議し

昭和二十九年 神奈川県中学校第三学年アチーブメントテスト運営

委員会実施要項案

一 神奈川県中学校（神奈川県五四年式）アチーブメント、テスト（以下ア、テストという。）を厳正公平に行うため※神奈川県公立高等学校通学区規則による通学区（以下高等学校通学区という。）毎にア、テスト運営委員会をおき、その管理のもとに管理委員会及び採点委員会をおく。

（但し、一つの中学校の生徒が二つ以上の公立高等学校の通学区内にある高等学校に分れて進学する場合は、ア、テストの実施に限り、所属教育委員会と協議し、いずれか一つの通学区に当該中学校の生徒の全員が属するものとする。）

神奈川県内一円を通学区とする職業課程の高等学校は当該高等学校の所在するア、テスト運営委員会に所属するものとする。

2 ア、テスト運営委員会は高等学校通学区内所在の公立中学校の校長と、それと同数の高等学校の校長を含む教員をもって組織することを原則とする。

3 ア、テスト運営委員会に委員長をおく、委員長は中学校長の中から互選する。

4 ア、テスト運営委員会は、ア、テスト実施について、厳正公平に行われるためにあらゆる努力を払わなければならない。

5 ア、テスト運営委員会は、ア、テストの実施に必要な具体的事項を決定するため次の事務を行う。

(イ) ア、テスト実施のために教員の相互交換を行う中学校の決定。

(ロ) 交換教員（別に定める管理委員）の人員の決定。

(ハ) ア、テスト終了後、ア、テスト用紙を保管する採点会場の決定。

ただし、中学校、高等学校は採点会場にあてないものとする。

(ニ) ア、テスト採点委員の人数とその方法の決定。

(ホ) ア、テスト成績個人票の記載、保管、送付の方法決定。

(ハ) その他必要と認める事項。

6 県教育委員会への報告

各ア、テスト運営委員会の委員長は、当該所属のア、テスト運営委員会の構成および前記5.の事項について、決定次第すみやかに委員長所属の地方教育委員会を通じて県教育委員会教育長あて報告すること。

注 神奈川県立公文書館所蔵の簿冊「昭和30年（度） 神奈川県教育委員会 臨時会々議録 教、管理課」に収録されている（一九五五年一月二十九日の会議の資料）。

一〇 御所見中学校の教室不足

生徒数の増加による御所見中学校校舎の不足について

◇ 昭和28・29年度児童生徒数比較

御所見村教育委員会

学校	年度		昭和28年度	昭和29年度	増加数
	小学校	中学校			
	男	女	計	男	女
	31	17	48	11	36
	408	387	795	195	185
	377	370	747	184	149
	計	計	計	計	計
	95	1175	1080		

◇ 中学校学級編成

昭和28年度	昭和29年度	計
1年3	2年3	3年2
3	3	3
計	計	計
8学級	9学級	

◇〔説明一〕 現状と学級増から

1 女子部青年学級は、月水金の組と火木土の組の二組になつていて、生徒からみると三日制であるが、教室の上では毎日使用されている。中学の裁縫がない時は青年学級で利用できるが、ある時は入れないのでせまい準備室を使用するがそこへ入りきれないで廊下へはみ出している。生徒から青年学級の室を与えて貰い度いと強く要望されている。

2 来年度は中学生が約五十名増加し、一学級ふえるので、当然一教室ま「わ」さなくてはならない。右二つの事情から来年度は最低二教室の増設が必要である。

◇ 中学校教室数

普通教室（現理科室を含む）	七
音楽図画室	一
図書室 裁縫室 調理室、	各一
	三室
	八室

◇〔説明二〕 或一時間の授業を考えた場合

1 何曜日の何時間のこととしてもよいが、今かりに月曜日の第一時として考えて見る。来年度は九学級で授業の組が九つあるから（女子青年学級を入れると十になる）普通教室、図音室の八室では足りない。図書室が職員室で授業をやらなくてはならなくなる

2 更に困ることは、職業家庭と選択の時間には、学習グループ（組）が学級数よりも一つ多くなることである。一学年三学級のものがこの時は四つに分れて授業しなくてはならないのでこの時は学習グループが 3 + 3 + 4 計 10 になる。このような場合が一週間に二十四時間ある。

3 女子青年学級は右の場合裁縫室へ入ることにしても、中学の方に裁縫がある行き場がなくなる。

◇〔説明三〕 総時間数の上から

一週総時間数	生徒一人	三時
2 学年延時数（組単位）	一一一	（各学年共同）
3 全学年延時数（組単位）	三三三	

総時数 333

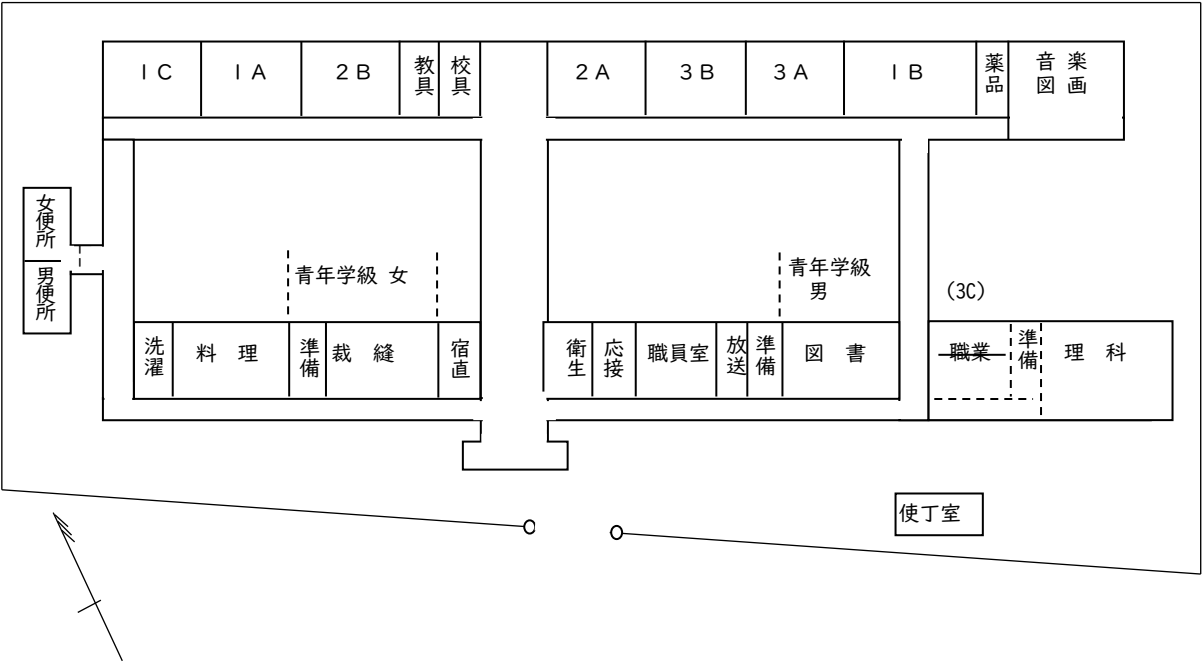
室外時数	体操	調理	農業実習
12	12	12	33

$$333 - 36 + 33 = 330 \quad 330 \div 9 = 36.7 \dots\dots 1 \text{ 教室一週間の時間数}$$

◎ 生徒各自の一時間の時間数は三十五時であるのに、九教室使用として一週三十六時以上ということは、九教室では不足であることを示している。

御所見中学校々舎配置図

1/600



議案第20口

昭和28年度 御所見村教育委員会歳出追加予算 原案

款	項	目	前回までの 累 計 額	追加 予算額	合 計	各 目 明 細		
						節	金額	説 明
5 教育費			2,719,165	161,300	2,880,465			
	1 教育委員会費		453,310	28,310	481,620			
		3 旅費	15,000	10,000	25,000	4 旅費	10,000	追加分 委員費用弁済4,000 普通旅費6,000
		4 諸手当	74,140	8,160	82,300	5 職員手当	8,160	追加分 教育長勤勉手当
		5 需用費	57,370	10,150	67,520	32負担金補助 費及交付金	10,150	追加分 高座郡地教委連協会 指導主事設置負担金
	2 小学校費		835,600	43,800	879,400			
		2 諸手当	127,950	13,200	141,150	8 報償費	13,200	追加分 国語実験学校指定講師手当
		3 需用費	391,000	23,600	414,600	11消耗品費	9,000	追加分 文具費
						13食糧費	4,600	追加分 国語実験指定賄費
						14印刷製本費	10,000	追加分 国語実験指定印刷費
	5 研修費	79,650	7,000	86,650	32負担金補助 費及交付金	7,000	追加分 優良校見学研修費	
	3 中学校費		1,000,255	7,990	1,008,245			
		2 諸手当	133,465	3,990	137,455	5 職員手当	3,990	追加分 使丁超過勤務手当
	4 社会教育費		430,000	81,200	511,200			
		1 委員報酬	6,000	500	6,500	1 報酬	500	追加分 委員1人年手当
		2 旅費	3,000	2,000	5,000	4 旅費	2,000	追加分 青年学級主事講師旅費
		3 諸手当	155,000	46,500	201,500	8 報償費	46,500	青級外来講師手当20,000 全 担当講師手当16,000 実習手当3,000保金手当4,000 使丁手当3,500
		4 需用費	135,000	21,200	156,200	11消耗品費	4,500	追加分 青年学級文具費
						12燃料費	3,500	追加分 青年学級薪炭代
						13食糧費	5,400	男子部開設費1,000 追加分 青年学級外来講師接待費2,000 運営委員会費2,400
						14印刷製本費	2,000	追加分 青年学級 用紙冊子印刷代
						15光熱費	2,800	追加分 青年学級 電気使用料
		25備品費	3,000	追加分 青年学級 参考図書2,000 印、印箱1,000				
	5 研修費	131,000	11,000	142,000	32負担金補助 費及交付金	11000	生徒就学費補助3,000 追加分 青年学級生徒研究費補助5,000 生徒研究発表会費3,000	
歳 出 合 計			2,719,165	161,300	2,880,465			
昭和28年8月 日提出 御所見村教育委員会委員長 長嶋喜治								

注 藤沢市教育委員会に所蔵されている。

生徒会活動の現状、問題点および打開策

▲主題設定の理由

昭和 29 年度
第四次教育研究第二分科会
生徒会活動について

佐野川中学校

六・三・三・四の学制が昭和二十二年施行せられてより既に七年を経過して来たが、新制中学校の歩んで来た道を顧みると、この七年間過渡期的な症状とみるべきものがあまりにも多かつたように思われる。

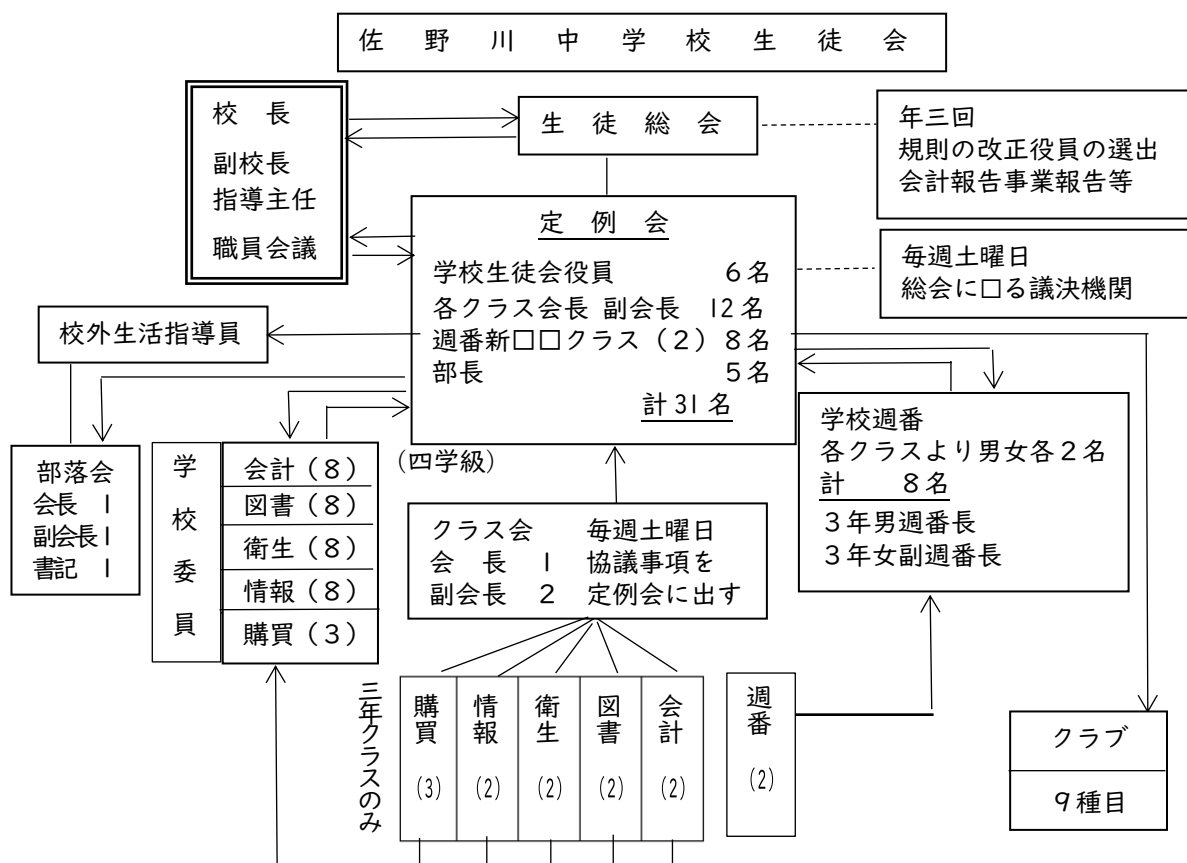
そこで本校も、またその中の一校であるが数年来実施してきた生徒会活動の実態を見極め真に中学校教育の目的に副うよう努めたい。

(本校の生徒会)

生徒会活動の目的

- (イ) 民主社会の生活様式に習熟させ奉仕と自主自律の生活を学ばせる。
 (ロ) 高い道德的水準をうちたてる。
 (ハ) 会議を開くために必要な多くの技術を習得させる。
 (ニ) 学校や社会における指導者を養成する。
 (ホ) 生徒がお互いを知り、理解しあう機会を作らせる。
 (ヘ) 学校活動全体のプログラムに従つて特別教育活動を十分に発展させる。
 (ト) 生徒の学力を総合的に向上させる。
- 以上の目的に向つて活動を続けて来たのであるが本校では特に（イ）項の「自主自律の生活を学ばせること」に重点を置いて来た。

2 生徒会機構



区分 \ 年度	昭和 26 年度	昭和 27 年度	昭和 28 年度	昭和 29 年度
成 功 点	<ul style="list-style-type: none"> 。学校生徒会長が非常に積極的に活動した 。話合いにより物事を決定してゆく習慣がついた 	<ul style="list-style-type: none"> 。学校との連絡がよく行われた 。生徒会幹部が積極的に動いた 。下級生がよく意見を出す 。自分達が出した意見に責任を感じるようになった 	<ul style="list-style-type: none"> 。性別に関係なく正しい意見に同調するようになった 。会議中における言葉が全般によくなった 。週番制度がよく実行された 	<ul style="list-style-type: none"> 。道路改修を自主的に行い警察署長より表彰された 。会議の運営態度がよくなった 。役員の選出に当って実力のある者をえらぶようになった
困 難 点	<ul style="list-style-type: none"> 。会議において男女の意見が必ず対立した 。部落的意識が強い 。学校との連絡不十分 。決定した事項も実行がともなわない 	<ul style="list-style-type: none"> 。未だに会議中において言葉の用法がまずい 。生徒会で決定したことは総て効力を持つと考える者が多い。 。生徒会のわく外まで口を出すことがある。 	<ul style="list-style-type: none"> 。生徒会役員は真剣にとりくんでいるが一般生徒の関心がうすい 。役員選挙において不真面目なものが若干いた 	<ul style="list-style-type: none"> 。自主自律の行動不十分 。一部の生徒は生徒会え[へ]の関心不十分 。決定事項の実行が不十分 。非協力がいる

3 運営について

図表のような機構によつて生徒会活動をつづけているのであるがその活動を始めた昭和 26 年度からの目立つた良否の具体例を次にあげてみよう。

クラス会及学校定例会議事録抜萃

昭和27年 6月27日 第3学年クラス会議議事		議長	
		大河原 幸子	植松 哲子
教師の助言	希望事項	来週の目標	今週の反省事項
1 議長は活発で良く出来た然しあまり議長が意見を述べないよう 2 目標は適当と思うが出来るだけ討論して決めること	1 窓ガラスをこすかないよう注意すること 特に野球をやる人達 2 放課後や日曜日に小さい子供をつれて来て教室へ遊びに入らな 3 いこと 4 生徒会で決定したことは掲示板に必ず書いてもらいたい	一生懸命勉強する (定期試験が近づいたので)	1 週番や生徒会役員が注意したらすなおにきくこと、又週番や役 2 員の人は責任をもつて注意すること 3 農繁休暇があつたのでみんな落つきが足りない。早く落ちつい 4 て一生懸命勉強し規律ある生活をするように努めること 5 新聞をよく見てホームルームの時間に話し合うようにすること 6 そろばんの授業中人の迷惑にならないよう静かにすること

昭和28年 10月31日 学校定例会議事		議長	
		小沢 行正	鈴木 八千代
教師の助言	希望事項	来週の目標	今週の反省事項
1 自分の意見をもつと主張すること。 2 出来るだけ多くの人が意見を出し活発な会議にすること。	1 昼休みにラヂオをかけてもらいたい(先生によく連絡して出来 2 るだけかける) 3 「良い行い」をした者を生徒会で発表してもらいたい(今後は 4 発表する) 5 週番の人に敬意を払うこと(一人一人の注意を喚起する)	一生懸命働き又勉強する (農繁期が近づいたので)	1 学校の道具を使ってかたづけられない人が多い 公共物は特に大切 2 にすること (一人一人に注意するよう徹底する) 3 放課後の掃除をもつと真剣にやること(週番長に必ず点検して 4 もらう) 5 昼休にはつとめて外に出て遊ぶこと(特別の用のある人は週番 6 長にことわる) 7 室内では帽子をかぶらないこと(生徒会役員や週番が注意する)

4 生徒会に対する生徒の関心調査（抜萃）

昭和29年9月15日実施

調査事項	質問事項	応答事項	比率 %	応答事項	比率 %	応答事項	比率 %	応答事項	比率 %
調査人員 123名 クラス会 について	クラス会が毎週いつあるか知っていますか	知っている	100	知らない	0				
	クラス会でいつも発言していますか	いつも発言している	26.4	たまに発言する	41.4	ほとんどしない	24.8	全然しない	2.4
	どうして発言しないのですか（全体の32.2%）	きまりがわるい	42.8	人に笑われる	4.0	ばからしい	2.2	発言することがわからない	5.1
	クラス会についてどう思いますか	クラス会が来たのがたのしみ	69.1	クラス会の来るのがいやだ	30.9				
	どうして楽しいのですか（全体の69.1%）	ふだん思っていることを言える	82.5	ただおもしろいから	17.5				
	どうしていやですか（全体の30.8%）	発言させられるから	34.9	議長に指名されるとこまる	20.1	おもしろくないから	45.0		
	クラス会議中どんな態度ですか	意見と出そうとつとめる	59.1	あまり意見を出そうとしない	38.3	全然出そうとしない	2.6		
	クラス会をよくしようと考えていますか	考えている	71.3	あまり考えていない	27.0	少しも考えない	1.7		
定例会 について	定例会がいつあるか知っていますか	知っている	98.4	知らない	1.6				
	学校生徒会にはどんな（だれ）役員がいるか知っていますか	知っている	80.2	知らない	19.8				
	定例会はうまくやっているといますか	よいと思う	21.8	大体よい	68.9	とてもだめだ	9.3		
	定例会で定めたことについてどう思いますか	よく守られている	3.4	大体よく守られている	65.8	ほとんど守られない	30.8		
週番に ついて	週番をやったことがありますか	ある	100	ない	0				
	週番をやった時どんなでしたか	協力してくれた	10.7	あまり協力してくれない	63.9	ほとんど協力しない	25.4		
	週番をやった時一生懸命しましたか	した	58.5	あまりしない	41.5	しない	0		
	週番をした時誰か〔に〕注意しましたか	した	94.1	しない	5.9				
	注意を受けた人の態度はどんなでしたか	すなおに従った	20.2	もんくを言った	57.9	全然きこうとしない	21.9		
	週番制度についてどう思いますか	週番がなければこまる	92.6	週番はいらない	7.4				
クラス会 及学校生徒会役員 に対する 調査 （調査人員16人）	今の役についたことをどう思いますか	うれしく思う	4人	とてもめいわくだ	4人	いやだ	8人		
	いままで自分の役についてどうしたらよいかわかっていますか	いつも考えている	6人	あまり考えない	10人	全然考えない	0人		
	今の生徒会がよくやっているといますか	よくやっていると 思う	1人	大体よくやっていると 思う	7人	思わない	8人		
	どうしてうまくやれないと思いますか（思わない人8人）	自分達の活躍が 足りない	6人	皆さんの協力が 足りない	2人				

以上の調査によつて

- 1 全般的に生徒会に対する関心はうすい
- 2 しかし生徒は生徒会の向上に努めていることが知れる
- 3 生徒会役員も不振の原因を自分達の責任として自覚しているものの真に学校を愛し自分を尊重する念に乏しいのが伺われる その原因を今後つきとめたい
- 4 週番制度において全員が体験し一般生徒の協力は足りないが週番制度の必要性はほとんど全員が認めている

5 父兄に対する生徒の実態調査（応答者 91 名）

質問事項	応答事項	比率 %	応答事項	比率 %	応答事項	比率 %
あなたの子供さんは毎日学校に出かける時どんなですか	たのしそうだ	84.6	あまりたのしそうでない	15.4	いやらしい	0
あなたの子供さんは中学生になつてから変りましたか	良くなつた	42.3	普通	53.3	悪くなつた	4.4
よくなつたと思う人（全体の 42.3%）どんな点がよくなりましたか	世話をかけなくなつた	40.8	自分の意見をはつきり言う	25.4	よく家事を手伝う	33.8
あなたの子供さんは学校のことについて話しますか	よく話す	32.2	時々話す	63.3	全然話さない	4.5
どんなことを一番多く話しますか	生徒会のこと	14.8	勉強のこと	35.9	友達や先生のこと	49.3

6 生徒会活動における問題点とその打開策

問題点

(イ) 本校の生徒会活動に於ける主要目的である自主自律の生活態度

が不十分で依然教師に対して依存性がつよい。

(ロ) アンケートに見えるように未だに一般生徒の生徒会に対する関心がうすい。

(ハ) 安易なことが徹底的に実行出来ない。

(ニ) 父兄に対するアンケート第3項に見えるように父兄は生徒の労働力を期待している。

村の文化水準低く経済状態逼迫し、それが生徒の性格や学校生活に深く困難性をもたらしている。

打開策

(イ) あらゆる機会を通して生徒の自主性伸長に努めるが特に作業を通し協力により自主自律の生活を学ばせたい。

(ロ) 生徒会の必要性重要性を全生徒に徹底させ向上を期したい。

(ハ) 生徒を通し父兄の教育への関心を高め、ひいては村の産業・文化の昂揚に貢献する学校になりたい。

以上により教師生徒、一体となり生徒会の活潑なる活動によつて初「所」期の目的達成に邁進したい。

注 相模原市立公文書館所蔵の簿冊「学事書類」中の「津久井郡第四次 教育研究大会要項」に綴じ込まれている。

[illegible]

會計係 各級四名

一三 計算力の実態調査

昭和30年藤沢市教組教育研究集会

第4分科会 算数・数学指導の問題と対策

II の一

本校に於ける計算力の実態調査

藤沢市立 ■ 中学校

本校に於ける数学教育の困難点の一つとして計算力の不足が考えられるので6月下旬一年より3年までの計算力を調査する目的で一応一年生の既習の範囲内に於て教科書及びドリル用の問題集より特によくあらわれる様な形の問題をとり出し20分間にて実施する。

(一)

番号	問 題	正 答 及 正 答 率				主な誤答及び率
		正 答	3 年%	2 年%	1 年%	
1	$58+46$	104	93	89	93	124 (2) 64 (2)
2	$0.25+7.41$	7.66	92	95	95	7.86 (3) 7.05
3	$14.2+1.35$	15.55	85	80	63	2.77 (6%) 27.7 (4) 277 (3)
4	$568-383$	185	87	95	85	165 (5) 175 (4) 225 (3)
5	$834-589$	245	83	80	75	255 (7) 235 (3) 345 (3)
6	$7.38-2.69$	4.69	78	83	80	4.79 (6) 4.68 (4)
7	$21.3-8.45$	12.85	73	73	58	13.95 (8) 12.95 (5) 12.75 (4)
8	618×28	17304	72	65	55	17204 (6) 17314 (4)
9	6800×370	2516000	72	75	63	2716000 (5) 251600 (5)
10	0.38×0.7	0.266	68	63	43	2.66 (9) 266 (3)
11	43.3×1.08	46.764	62	63	43	46764 (8) 467.64 (5) 49.764 (5)
12	$846 \div 18$	47	74	75	60	46.7 (3) 42 68 4.4
13	$871 \div 13$	67	78	80	65	4.7 (3) 63 (3) 71 7.4
14	$18.9 \div 0.3$	63	62	73	50	6.3 (25) 630 (5) 0.63 (5)
15	$0.92 \div 4.6$	0.2	58	55	45	0.02 (10) 2 (15) 20 (5)
16	$\frac{3}{4} + \frac{5}{8}$	$1\frac{3}{8}$	72	70	55	$\frac{8}{32}$ (10) $\frac{8}{12}$ (6) $\frac{11}{8}$ (6)
17	$\frac{2}{3} + 1\frac{1}{5}$	$1\frac{13}{15}$	66	65	53	$1\frac{3}{15}$ (9) $1\frac{3}{8}$ (6) $1\frac{11}{15}$ (5)
18	$\frac{3}{4} - \frac{1}{3}$	$\frac{5}{12}$	68	58	55	$\frac{2}{1}$ (8) $\frac{2}{12}$ (10) $\frac{2}{4}$ (5) $1\frac{1}{12}$ (3)
19	$3\frac{1}{2} - \frac{5}{6}$	$2\frac{2}{3}$	62	60	40	$2\frac{8}{12}$ (9) $2\frac{4}{6}$ (8) $2\frac{1}{6}$ (7)
20	$\frac{5}{6} \times \frac{2}{3}$	$\frac{5}{9}$	65	58	28	$\frac{11}{18}$ (11) $\frac{15}{18}$ $\frac{12}{15}$ (3)
21	$4 \times 1\frac{1}{2}$	6	62	40	40	$\frac{3}{8}$ (8) $5\frac{1}{2}$ (5) $4\frac{1}{2}$ (4)
22	$\frac{5}{8} \div \frac{2}{3}$	$\frac{15}{16}$	58	43	35	$2\frac{2}{5}$ (6) $\frac{4}{15}$ (3) $5\frac{1}{12}$ (2)
23	$6 \div 2\frac{2}{3}$	$2\frac{1}{4}$	53	20	3	$\frac{4}{9}$ (12) 16 (10) $2\frac{2}{18}$ (5) 4 (5)
24	$1\frac{1}{2} - \frac{3}{4} \div 1\frac{1}{2}$	1	42	10	18	$\frac{1}{2}$ (20) $\frac{8}{9}$ (5) $\frac{1}{3}$ (5) 6 (5)
25	$3+5 \times (16-10) \div 5$	9	34	15	38	9.6 (20) $9 \cdots 3$ (3) 9.8 (4) 45

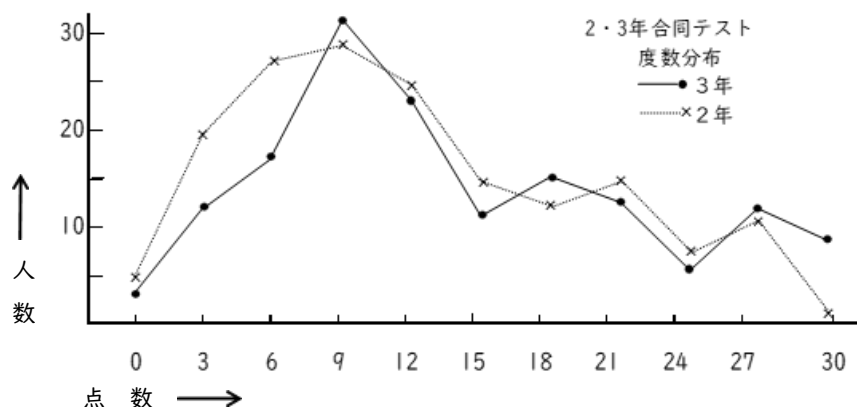
(二)

誤答に対する所見

1. 整数の加減法…暗算誤り、上位より下げる
とき、位が上る場合の誤り。
2. // 乗除法…途中計算の和と差の誤り、
特に乗法では計算の書き方乱雑による位の
まちがいが多し。
3. 小数の加減法…小数点の位置を考えず整数
同様に計算する。及び整数の計算の誤り。
小数の乗除法…乗法では位取りの誤り加減
法と同様にする、除法に於いては除数が少
数の場合の位取りに誤答多し。
5. 分数の加減法…通分せず分子分母を加法す
る、通分の場合、分子に掛けることを忘れ
る。
6. 分数の乗除法…約分をしない、帯分数を仮
分数になほさない。除法に於いて被除数を
逆数とする、共に逆数しなほし乗法をやる。
混合の計算…()、乗除先行の法を知ら
ず常に左よりやる。
- 7

Ⅱの二 2-3年 計算力テスト

問 題	正 答	正答率(%)		主な誤答 (誤答率)	所 見
		3 年	2 年		
① $(+12) + (-3)$	9	57	75	15 (30)、-9 (10)	正負の加減 異符号の加減では、絶対値の差をとることを知らず和とする同符号の場合は、乗除の場合と同様に全て+とする 減法では加法になおす場合、減法の符号を変えない 特に () をとった場合困難となる
② $(-7) + (-5)$	-12	62	62	12(21)、-2(8)、+2(7)	
③ $(-3) - (-8)$	5	62	50	-5 (14)、-11(15)、11(5)	
④ $(-1/2) + (1/3)$	-1/6	53	57	2/5 (13)、5/6 (10)	
⑤ $-5 - 5$	-8	45	65	-2(30)、8(8)、2 (13)	
⑥ $3 - 8 + 4$	-1	53	65	9 (22)、-9 (14)	
⑦ $(-2.2) - (1.3)$	-3.5	34	52	-0.9(30)、35(10)、0.9(8)	
⑧ $(+8) \times (-6)$	-48	55	60	48 (28)	正負の乗除 絶対値が簡単な場合は加減より成績良好、誤答は同符号は+ということしらず、符号の誤りが大部分、異符号の場合は特に誤答多し
⑨ $(-15) \div (+3)$	-5	78	75	5 (15)	
⑩ $-20 + (-8) + 15 \times (-3)$	-73	21	15	-33(9)、31(5)、39(5)	
⑪ $(-2-5) \times (-7)$	49	30	50	-2(25)、-49(11)、21(6)	
⑫ $(-8) \div (-4)$	2	73	75	-2 (16)	
⑬ 80 円の () は 9 円 60 銭	1 割 2 分	44	32	8 割 3 分 (23)、9.6 (8)	割合の計算 比の三角法理解がたりず歩合高と元高との区別に困難している。歩合、%を小数になおさない
⑭ 90 g の 20% は () g	18 g	42	25	4.5 g (20)、1800 (16)	
⑮ () km の 40% は 20 km	50 km	35	25	80 (18)、5 (8)	
⑯ $8 : 6 = 4 : ()$	3	74	70	2 (5)	比 分数との関係理解にとぼしい。分数の意味理解不十分
⑰ $20 : 15 = ()$	4/3	71	58		
⑱ $3a + 2a$	5a	68	87	$5a^2$ (31)	式の計算 同数項の理解不安定。文字がはいるとむずかしいものと先入観がある様である
⑲ $-10x \times 4$	-40x	73	85	$-40x^2$ (3)、 $6x$ (5)	
⑳ $-3a + 5 + 10a - 4a$	$3a + 5$	43	20	$8a$ (8)、 $5 + 3a^2$ (3)	
㉑ $-2/3x \times (-6) + 2/5y \times (-5)$	$4x - 2y$	23	15	$4x + 2y$ (5)	
㉒ $-4x - 3(1 - 2x)$	$2x - 3$	31	23	$2x(13)$ 、 $6x - 4(8)$ 、 $3x(8)$	
㉓ $a + 4(7x - 4y)$	$a + 28x - 16y$	28	25	$a + 28x - 4y(12)$ 、 $12a \times y$ (6)	
㉔ $a = 3$ 、 $b = -2$ 、 $c = 4$ $4a - 8b + 2c$	36	29	23	$36abc$ (18)、4 (9)	
㉕ $a^2 \times a^4$	a^6	70	80	a^8 (19)	指数 指数の和・差となるものを積・商とする、指数の意味の理解不足
㉖ $b^3 \times b^5 \div b^2$	b^6	68	57	b^4 (8)、 $b^{7.5}$ (6)	
㉗ $b^7 \div b^2$	b^5	67	68	$b^{3.5}$ (9)、 b^{7-2} (8)	
㉘ $x + 5 = 7$	2	85	90	12 (6)	方程式 未知数に係数のある場合特に誤り多し
㉙ $2x + 5 = 13$	4	59	40	8 (10)、6 (9)	
㉚ $2/3x - 5 = -17$	-18	20	12	18(6)、-33(13)、1/18(14)	



Ⅱの三

29年度 中学校数学 ア・テストについて

第一学年

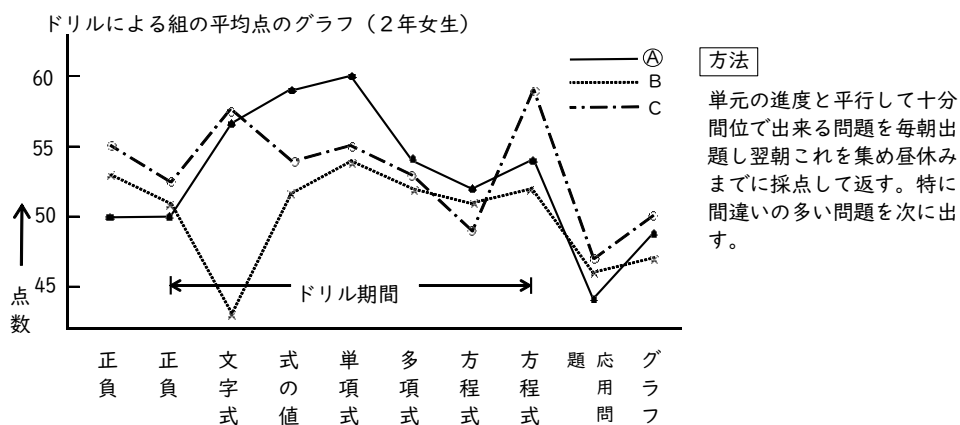
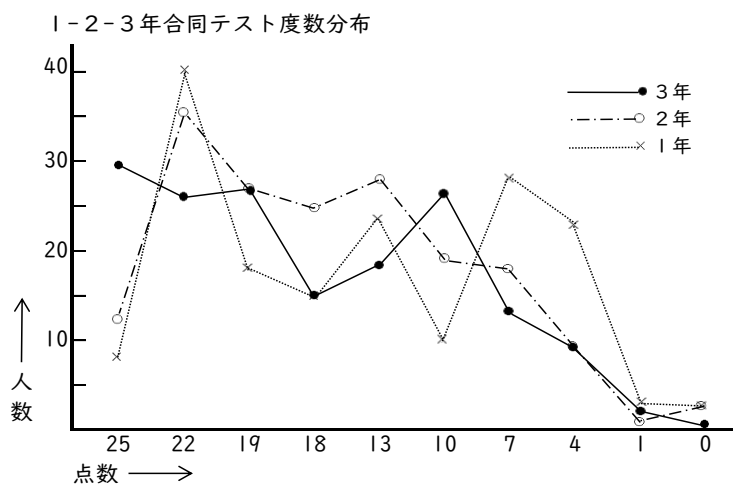
番号	問 題	正 解	正答率 %	空白 %	主な誤答例（その率%）
問一 I. 次の()の中に適当な数を書き入れなさい					
(イ)	$8 - 2 \times 3 = ()$	2	10	0	18(40) 12(5) 16(2)
(ロ)	$1.86 + () = 27.5$	25.64	68	10	15.64(10) 26.6(3) 0.79(2)
(ハ)	$() \times 0.2 = 0.3$	1.5	25	20	0.1(25) 0.15(6) 0.6(8)
(ニ)	$\frac{2}{3} + \frac{3}{8} - \frac{5}{6} = ()$	5/24	48	20	4/24(3) $1\frac{1}{24}$ (7) $\frac{1}{4}$ (5)
(ホ)	$6 \div \frac{4}{5} \times \frac{8}{15} = ()$	4	23	17	$\frac{32}{450}$ (13) $2\frac{52}{75}$ (18) $4\frac{1}{2}$ (9) 3 $\frac{2}{3}$ (12)
Ⅱ. 次の問に答えなさい					
(イ)	8日、10日毎の当番が再び一緒になる日	40	31	14	18(20) 80(22) 2(6)
(ロ)	男328、女312、先生24で等しい組を作	8	17	32	16(21) 2(8) 24(11)
問二 次の()の中に適当な数を書き入れなさい					
(イ)	$1052 = 100 \times ()$	10.52	62	15	1.052(12) 152(3) 105(4)
(ロ)	$3.4 \times () = 34$	10	69	5	100(7) 0.1(4)
(ハ)	$() \times 100 = 5340$	53.4	63	15	534(8)
(ニ)	$46 \div () = 0.046$	1000	58	20	0.001(9) 0.01(3)
(ホ)	$() \times 54 = 0.054$	0.001	53	15	0.01(12) 0.54(8)
問三 ある店で1200円で仕入れた服を15000円の定価をつけました。					
(イ)	定価は仕入れ値段の何割何分の利益か	2割5分	26	34	2割(18) 8割(16) 1割2分
(ロ)	定価の1割引きだと定価より何円安くなるか	150円	32	36	300(10) 250(8)
(ハ)	1080円で売ると損失の歩合はどれだけか	1割分	6	67	4割2分(8)
(ニ)	1380円に売ると利益の歩合はどれだけか	1割5分	7	70	1割2分(12)
問四 下の置時計について次の問に答えなさい。					
(イ)	組合せの立体の名前を選んで書きなさい	角錐台、 角柱、直 方体	39	0	
(ロ)	面Aに平行な面はいくつありますか	3	5	18	6(20) 2(15) 4(8)
(ハ)	面Aに平行な稜はいくつありますか	13	3	18	4(26) 3(12) 2(10)
(ニ)	面Aに垂直な稜はいくつありますか	12	1	20	2(30) 5(22)
(ホ)	台の部分の体積はいくらですか	864	32	24	884(12) 664(8)

問五 表は三校の学級数と生徒数です					
(イ)	生徒数の比を連比で表すと $A : B : C =$	$7 : 9$	7	68	$8 : 11(6) \quad 9 : 12(10) \quad 7 : 6$
(ロ)	$A : B = 5 : 3$ で $B : C = 2 : 3$ です $A : B : C$ を求む	$10 : 6 : 9$	5	72	$5 : 5 : 3(8) \quad 5 : 3 : 3(10)$
(ハ)	代表 200 人中 A 校からの出席者は何人か	80 人	0	66	66(18) 90(7)
(ニ)	記念品代一人 20 円です 全体でいくらで	22040	18	39	4000(8) 20080(12)
問六 27 年度の米麦の収穫高は下のとおりです それをグラフであらわしました					
(イ)	棒グラフの一目盛は何石か	2000000	0	12	2000(21) 200(31) 1000(8)
(ロ)	大麦のグラフを書け		51	34	
(ハ)	目盛のひどくまちがえているのを書け	F	54	20	E(14) B(6)
(ニ)	陸稲は約何万石か	165	8	31	
問七 図は正八角形の時計です。次の問に答えなさい。					
(イ)	い ろの角は何度ですか	135, 225	14	25	ろの角を 135 としたものが 18% もあつた
(1)	3 時のときの長針と短針のはさむ角	90	70	10	60(12)
(2)	5 時のときの長針と短針のはさむ角	150	36	10	120(18)
問八 横浜、沼津旅行の問題					
(イ)	横浜から湯河原まで何時何分か	1 時間 42	25	30	2 時 42' (15)
(ロ)	横浜、沼津間の平均速度は何 km か	42	5	54	58(12) 98(15)
(イ)	家族で無料の人は何人 半額は何人	1, 1	32	16	1, 2(30)
(ロ)	家族全体往復の運賃は何円か	1470	15	25	1050(20) 1740(12)
C	6 町は何メートルありますか	648	30	15	6480(18) 1080(16)
問九 生徒会予算の比率は表のようでした。					
(イ)	理科部の全体に対する割合を歩合で答えよ	1 割 4 分	32	27	1 割 3 分(8)
(ロ)	総額は 15 万円である。園芸部の予算を求む	6000	26	40	600(12) 345(14)
(ハ)	円グラフに書くと中心角の一番大なのは	6	58	20	7(10)
(ニ)	演劇部は中心角何度か	18	16	40	9(10) 5(8)
(ホ)	体育部の $\frac{2}{9}$ の庭球班は全体の何パーセントか	6	10	52	27(10) 22(8)
(ヘ)	社会科部は読書部の予算の何パーセントか	75	15	52	13(10) 750(10)
問十 学校の敷地は図の如くたて 150m、よこ 77m です。					
(イ)	実際の面積は何坪ですか	3500	15	50	350(20)
(ロ)	AC を 5 cm とすると縮尺はいくらですか	$\frac{1}{1000}$	5	40	500(20) 100(5)
(ハ)	一歩 45 cm として AB の長さは何メートル	81	5	50	810(10) 220(10)

Ⅱの四 中学校数学ア・テスト誤答調査

第二学年

番号	問 題	正 答	正 答 率 %	誤 答 (誤 答 率 %)
(1)	$5 - (+14) = (\quad)$	-9	53	$+9$ (32) $+19$ (5) -19 (8)
(2)	$(-21) + (-17) = (\quad)$	-38	61	$+38$ (26) $+4$ (5) -4 (3)
(3)	$(+13) - (-18) = (\quad)$	$+31$	46	-5 (34) -31 (12) $+5$ (4)
(4)	$(+\frac{2}{7}) + (-\frac{5}{7}) = (\quad)$	$-\frac{3}{7}$	49	-1 (27) $\frac{2}{7}$ (9) $\frac{3}{7}$ (3)
(5)	$(-\frac{8}{9}) + (-\frac{4}{21}) = (\quad)$	$-\frac{32}{189}$	45	$-\frac{32}{189}$ (6) $ \frac{15}{189} $ (5)
(6)	$(+\frac{5}{8}) + (-\frac{3}{10}) = (\quad)$	$-2\frac{1}{12}$	40	$2\frac{1}{12}$ (29) $-1\frac{1}{4}$ (5)
(7)	$5a - a - 5 = (\quad)$	$4a - 5$	36	$5a^2 - 5$ (18) $5a^2$ (10)
(8)	$3a^3 \times 2a^2 = (\quad)$	$6a^5$	43	$6a^6$ (18) $5a^2$ (10)
(9)	$a^8 \div a^4 = (\quad)$	a^4	47	a^2 (23) a^{32} (5) a^{12} (8)
(10)	$(a^3)^4 = (\quad)$	a^{12}	52	a^7 (31)
(11)	$-3(3a - b) = (\quad)$	$-9a + 3b$	34	$-9a - 3b$ (23) $9a - b$ (8) $-6a - b$ (5)
(12)	$5(a - 2b + 3) = (\quad)$	$5a - 10b + 15$	40	$5a - 2b + 3$ (14) $5a - 7b + 8$ (3)
(13)	$12x = 6$	$x = \frac{1}{2}$	28	$x = 2$ (43) $x = 6$ (10)
(14)	$\frac{1}{4}x = 16$	$x = 64$	30	$x = 4$ (28) $x = 8$ (6)
(15)	$38 = 15 - x$	$x = -23$	22	$x = 23$ (31) $x = 53$ (8)



注 藤沢市教育委員会に所蔵されている。学校が特定できる文言を「■」で表記した。

一四 「のぞましい生徒を育てる実践」

第八次教育研究 神奈川集会
第十分科会 報告書

のぞましい生徒を育てる実践
～学力向上と生活指導の調和～

藤沢市 ■ 中学校

(一) テーマ設定の理由

本校では今年度が三学年そろった新しい出発の年であり、今年度を第一期として学校教育全般にわたり、研究実践をつみ上げて行く意味で前出のテーマを選んだ。特に左の諸点から副題の「学力向上と生活指導の調和」に留意していきたい。

1. 進学希望者九〇％以上の本校では学力の向上が不可欠の課題となるが、入試的傾向の強まりをなるべくさけつつ、それを達成したい

2. 道徳科特設・新指導要領・基礎学力の向上・勤務評定問題等、戦後の「新しい教育」への再検討が進められようとする時、自主的 全校的に「新しい教育」の深めを行い、その正しい姿での向上をはかりたい。

(二) 生徒の現実と問題点

1. 環境

学校環境基本調査を七月末に行い（回収率八〇％）、次の諸点を得た。（別表（一）参照）

- A. 誕生地と生育地を異にする者が非常に多い。
- B. 父母の学歴は比較的ととのっている。
- C. 経済的水準も普通よりやや恵まれている。
- D. 学習環境も悪いとは言えない。（たゞ経済的水準に比較して、塾・家庭教育

師は少い）
E. 父母の「ものゝ考え方」
進学への配慮から補習・宿題等の強化を望む声が少くない）

2. 生徒の傾向

A. 学力

入学時の学力テスト、過去二度のア・テスト等それぞれ全国平均・県平均と比較して、成績は上まわっているが、各教科での長所・短所については研究中である。

B. 性行

イ. 長所

一般におとなしく、問題児といえるものはごくまれであり、生活を明かるく楽しむ傾向がある。

ロ. 短所

生活に特に苦勞のない者が多いだけに、労働の習慣が弱く、マス・コミの影響を受け易く安易な生活態度におちいりやすい。

3. 問題点

生活を楽しむ明るくすなおだが、「問題意識の低い」「考えの追求力を欠いた」「内面にエゴをひそめた」存在として、成長していつてしまう不安がある。

(三) 実践研究

1. 方針

A. 「学力の向上」は授業そのものを研究的に充実することによって図る。

B. 原則として補習を行わずクラブ活動を全面的に強化して受験主義へかたよるのを防ぐ。

C. 楽しい充実した行事をできるだけ行う。

D. ロング・ホームを強化して ものゝ考え方を深め、生活指導を充実させる。

E. 生徒に対しては行きとぎいた配慮をもって接し、「りくつ」よりは「ユーモア」を「しかる」よりは「はげまし」を大切にしてい

2. 組織

A. 教科研究部会 週一回

時間割を調整して午後同一教科の担任を一週一回あくようにしておく。部会の記録をとる。

B. 生活指導研究会 月一回

ロング・ホームの記録をとり、相互に問題点を発表し、随時ホームを公開する。

C. 学年会議 月一回以上

二回〜三回 普通ひらく。教科担任を学年別に別けておき連絡をよくとる。例えば一年の国語は一年のみ受け持つ。

D. 職員協議会 月一回以上

一回三〜五時間を予定して充分な話し合いをする。

3. 経過

A. 「学力向上」について

方針Aの線にそって、各教科毎に週一回の教科部会を行いその記録をとり、一人一研究をすすめている。研究授業は一人年一回とし、全職員による批評会をもつ。(別表(二)参照)

イ. 五月六日批評会より

授業そのものは、テスト向きの力を目標とせず、広く深いもの、じっくり物を考える態度をつみ上げ、ノーマルな高い水準の生徒をのぞむべきだ。

何を教えるべきか要点を整理してのぞみ、散漫化を防ぐ。

生徒のまちがった発表も傾聴してはげまし、どの子も楽しむ実質的授業をつくり上げることが必要。

ロ. 能力別学習

特に奨励はしないが三年の英語、数学のみ五時間の中一時間だけ能力別として、それぞれの力に適した授業を行う。

ハ. 月例テスト

月一回各教科のテストはまとめて二日間に行い、他の日にテストによって生徒をおびやかすことをなるべくさける。テスト毎に各教科各学年別の成績一覧表を作り、担任の反省資料とする。

二. 宿題

適当に出すが、過重負担をさけるため学年毎に調整する。

B. 「生徒指導」について

イ. ホーム指導

○学級日誌

従来のせまいわくをこえ、感想らんを重視して別表(三)のような内容のものとする。クラスによっては大学ノートを使用して 他に学級委員の日誌をもち、感想の量も一人約七〇〇字宛位である、

○ロング・ホーム

各クラス経過をとり 随時公開していく。学校全体のカリキュラムが作られているが参考資料として扱い 各クラスの独自性を生かす。

ロ. 生徒指導研究会

月一回会合を行い従来の事例研究会から生活指導全般を考え合い、特に生徒の一般的傾向、のぞましいものゝ考え方や行い方などの中に問題をさぐり方法を見出すようにする。

ハ. 問題児指導

カンセラーの新設が要望されたが、ごく一部の問題(全校で三〜五人)のため、各クラス担任、及び補助担任が特別指導していくように落ちついた。毎週一回会合を行い、特に「欠点ひろい」となることをさける。

ニ. 週番

ホ. 行事

方針Cの線によって、映画会(年六回)、写生会及び展覧会(年四回)、国語英語の各弁論会、クラス対抗各種競技会、校内キャンプ、各クラブ毎の社会見学をもつ。文化祭を新設し、体育会とともに■祭として行う。特に音楽と演劇の会では会場を普通教室とし、三回公演をもって、音楽には全生徒参加し個人競技を排した。体育会ではシヨウ(仮装)の是非について話し合いがもたれたが楽しい行事の一環としては認され好評であった。

ヘ. クラブ活動

社会・演劇の二クラブが新設され計十三クラブとなる

り、最低週一回から六回行われている。特に夏休み以外補習が行われなかったため、生徒は楽しみつゝ個性をのばしていった。

へ「ト」父母との結びつき

地区別懇談会 学級懇談会を通してその強化をはかったが、特に十月「お父さん」のための日曜授業を行い父母ともどもの関心を高めた。

月二回参観日を設け授業の公開をはかっている。

学年によって特色があり、一年は父母と教師の新聞「子らと共に」を出し、二年三年は学年懇談会を重視している。

(四) 影響

1. 生徒の傾向

以上の実践研究の結果、問題児の生徒の発生を防ぎ、校風として「おだやかな、あたゝかい」傾向を生み、受験的気風を最小限にとどめている。

特に教師と生徒相互の親和感と信頼感がたしかなものとなり、生徒を強くしかることは全くなく、お説教的なこともほとんど必要としない状態にある。

十月に「学校生活を楽しんでいるか、どうか」の調査を行い、別表(四)の結果を得た。

2. 学力向上

研究半年では未だ発表の段階に至っていない。たゞノーマルな方法だけでア・テスト等受験に有利な結果が得られるかどうか不安感が少くない。

(研究結果は年度末に発表の予定)

3. 各クラブの入賞

各クラブ活動を強化した結果、野球・バレー・ソフトボール・読売科学賞・読書感想文、各種書道展、図工展等、市及び県の各試合・コンクールでそれぞれ上位入賞を得ている。

4. 対父母の問題

学校主催の各種会合への参加が次第に積極的になって来、学校行事に対する協力がまわっている。学校側と父母との相互の理解が深まり、腹をわった

(五) 今後の問題

話し合いの空気が次第にできつつある。

1. 学力の問題

特にホーム指導を通して家庭学習の一層の充実を図る必要がある。又三年に対してはア・テスト前今までの学習事項の整理のために最少限の補習を必要とする考えが強くなっている。しかし、クラブ活動が影響を受けなような方法が考えられなければならない。

2. 生徒の傾向

教師が親切すぎて甘やかす傾向を生むのではないかという反省が起っている。今後、相互の信頼感、親和感をくずさずに「考え深い たくましい実践力」をもった生徒を育てる実践教育が行われる必要がある。特にロング・ホームでの考え合い、問題意識を高めるような読書、新聞、作文等の利用が考えられている。

3. 職員の勤務

研究的会議以外に、組合、P・T・A等諸種の会議が重なり、事務も煩雑となり労働過重となることが一学期の反省としてとり上げられた。九月は相当あらためられたが、さらに十月、十一月を実験期間として重点的に整理して行うことになっている。のぞましいものを、できるだけ多くでなしに、何を優先させて何を切っていくかが今学期以降の課題となる。

4. 父母の問題

各種の会合を通して教師と父母の親近感が増加しているが、子供達のために、相互が腹の底からぶつかり合い高め合う本当の場がつくられるのはこれからといえる。

特に環境調査の「父母のものゝ考え方」、十月の父母との話し合いを通して見られたことは、「新しい教育」への理解をすすめていく必要があるということであった。

以上

1 道徳教育		必要あり	329名	
なし		58名		
無記		69名		
2 家庭教育		きびしい体罰を加える	6名	
やむを得ない時だけ体罰を加える		204名		
絶対に体罰を加えない		181名		
無記		65名		
3 学校教育		きびしい体罰を加えてほしい	24名	
やむを得ない時だけ体罰を加えてほしい		222名		
絶対に体罰を加えないでほしい		144名		
無記		65名		
4 補習とクラブ活動		補習の方が必要である	104名	
両方必要である		235名		
クラブの方が必要である		34名		
無記		83名		
5 制服について		必要あり	179名	
必要なし		99名		
無記		178名		

別表一

基本調査抜粋 調査人員 456 名

	有	無	無記			
洋間	129 名	311 名	16 名	出生地	神奈川県以外で生まれたもの	193 名
洗濯機	208 名	240 名	8 名	生育地	神奈川県以外で育って来たもの	103 名
冷蔵庫	132 名	312 名	12 名	父の学歴	大学卒	138 名
電気冷蔵庫	68 名	373 名	15 名		高専卒	99 名
電話	99 名	347 名	10 名		中学卒	113 名
					小学卒	92 名
	有	無	無記		その他	7 名
勉強室	281 名	158 名	17 名		無記	6 名
勉強机	369 名	24 名	63 名	兄弟の数	0 人	42 名
スタンド	322 名	55 名	79 名		1 人	156 名
英話辞典	414 名	37 名	15 名		2 人	109 名
和英辞典	304 名	136 名	16 名		3 人	57 名
国語辞典	405 名	42 名	9 名		4 人	32 名
漢和辞典	336 名	105 名	15 名		5 人	30 名
百科辞典	146 名	256 名	24 名		無記	30 名
その他	473 名	62 名	21 名	姉妹の数	0 人	64 名
(辞典・図鑑・年鑑)					1 人	187 名
					2 人	104 名
					3 人	48 名
					4 人	10 名
					5 人	3 名
					無記	40 名
				家族の月収	10,000 未満	7 名
					10,000 以上～20,000 未満	40 名
					20,000 以上～30,000 未満	102 名
					30,000 以上～40,000 未満	126 名
					40,000 以上	119 名
					無記	62 名
				住居	自分のもの	338 名
					借家	102 名
					借間	6 名
					アパート	3 名
					無記	7 名
				敷地	自分のもの	189 名
					借地	229 名
					無記	38 名

(別表二)

本年度各教科研究テーマー

■■中学校研究部

(科目)	(方法)	(テーマー)
国語	個人研究	文学鑑賞 語彙力 新聞の読み方 生活記録を中心とした作文
社会	個人研究	統計図表(1年) 歴史の資料(2年) 経済的な見方(3年)
数学	共同研究	診断テストの作成 分数小数方程式連立方程式 展開、因数分解
理科	共同研究	ニ山カーブを消す方法 実験 レポート学習
音楽	個人研究	学校放送利用の現実的方法 読譜力と変声期対策のための器楽教育、その後
図工	個人研究	系統的な学習能力を生かす
保体	個人研究	体力の増進を内外より研究
職業(女)	個人研究	基礎的な素養について
英語	共同研究	ニ山カーブを消す方法
A V	共同研究	達夫の日記の利用について
図書	共同研究	図書館で本を読む態度の育成
生徒指導	共同研究	ロングホームの障害点

研究予定	10月下旬	第1次中間報告
	11月下旬	第2次中間報告
	1月上旬	第1年度研究完成
	3月下旬	第2年度研究準備

(別表三) 学級日誌の書き方(各クラスの日誌の表紙裏に添付)

みんなに書いてほしいこと (感想欄へ)

このごろ
または
この日に

ホーム や
学校 で

家 や
学校 で

新聞や や
ラジオ や
本 で

感じ考えたことの中から

たのしかった こと

おもしろかった こと

うれしかった こと

苦しかった こと

こまった こと

想[相]談したい こと

いいなと思った こと

みんなの為になった こと

なおして ほしいと 思う こと

みんなで考えたい こと

みんなで話し合いたい こと

第4章 中学校

別表（四）

調査「学校生活が楽しいか」 無記名 559人回答(在籍の99%) (注)%は調査人員に対する割合

(1) 楽しい 244人(43.9%)

(2) 中間 270人(48.3%)

(3) 楽しくない 45人(8.0%)

○学年別、男女別内訳

	一年 男82人 女63人 計145人			二年 男106人 女93人 計199人			三年 男98人 女99人 計197人		
	男 %	女 %	計 %	男 %	女 %	計 %	男 %	女 %	計 %
(1) 楽しい	34 (41.5)	24 (38.0)	58 (39.7)	56 (52.8)	28 (30.1)	84 (41.5)	47 (48.0)	49 (49.5)	96 (48.7)
(2) 中間	48 (58.5)	37 (55.2)	85 (56.9)	35 (33.0)	58 (62.4)	93 (47.7)	41 (41.8)	45 (45.5)	86 (43.7)
(3) 楽しくない	0 (0)	2 (3.0)	2 (1.5)	15 (14.2)	7 (7.6)	22 (10.9)	10 (10.2)	5 (5.1)	15 (7.6)

○理 由

(A) 楽しい理由

	全学年	一年			二年			三年		
	%	男 %	女 %	計 %	男 %	女 %	計 %	男 %	女 %	計 %
1 友人とーしょに何か できるから イ	282 (50.6)	54 (67.0)	39 (61.9)	93 (64.4)	59 (55.7)	46 (49.5)	105 (52.6)	41 (41.8)	43 (43.4)	84 (42.6)
2 ただ何となく チ	150 (26.9)	20 (24.4)	28 (44.4)	48 (34.4)	33 (31.1)	19 (20.4)	52 (51.5)	24 (23.3)	26 (26.3)	50 (25.8)
3 先生が親切に教えて くれる ロ	126 (22.5)	42 (51.2)	25 (39.7)	67 (45.4)	19 (17.9)	11 (11.8)	30 (14.8)	16 (16.3)	13 (13.1)	29 (14.7)
4 楽しい行事がある ホ	112 (20.1)	34 (41.5)	21 (33.3)	55 (37.4)	19 (17.9)	14 (15.1)	33 (16.5)	13 (13.2)	11 (11.1)	24 (12.1)
5 クラブ活動にはりが ある ハ	85 (15.2)	13 (15.9)	15 (23.8)	28 (19.8)	23 (21.7)	12 (12.9)	35 (17.3)	13 (13.2)	9 (9.1)	22 (11.1)
6 家庭に何の苦労もな いから ト	76 (13.6)	21 (26.0)	17 (21.7)	38 (23.8)	10 (9.7)	9 (9.7)	19 (9.7)	11 (10.2)	8 (8.1)	19 (9.1)
7 勉強がよくわかる ニ	54 (9.6)	24 (29.3)	7 (11.1)	31 (20.2)	9 (8.5)	2 (2.0)	11 (5.0)	10 (10.2)	2 (2.0)	12 (6.0)
8 テストが月一回にま とまっているから ヘ	53 (9.5)	23 (28.0)	6 (9.5)	29 (18.7)	8 (7.5)	8 (8.6)	16 (8.0)	5 (5.0)	3 (3.0)	8 (4.0)

(B) 楽しくない理由

	全学年 (%)	一年			二年			三年		
		男 %	女 %	計 %	男 %	女 %	計 %	男 %	女 %	計 %
1 友達や上級生にいやな人がいる (イ)	107 (19.1)	35 (42.7)	20 (31.7)	55 (37.2)	15 (14.2)	17 (18.3)	32 (16.2)	5 (5.1)	15 (15.2)	20 (10.1)
2 テストが多いから (ト)	95 (17.0)	23 (28.0)	21 (33.3)	44 (30.7)	9 (8.5)	17 (18.3)	26 (13.4)	13 (13.3)	12 (12.1)	25 (12.7)
3 クラブ活動がつまらない (ハ)	74 (13.2)	23 (28.0)	10 (15.9)	33 (21.9)	12 (11.3)	7 (7.5)	19 (9.4)	8 (8.2)	14 (14.1)	22 (11.1)
4 たゞ何となく (ル)	73 (13.1)	16 (19.5)	11 (17.5)	27 (18.5)	5 (4.7)	23 (24.8)	28 (14.7)	11 (11.2)	7 (7.1)	18 (9.1)
5 先生がきらい (ロ)	52 (9.3)	3 (3.7)	2 (3.2)	5 (3.4)	14 (13.2)	16 (17.2)	30 (15.2)	10 (10.2)	7 (7.1)	17 (8.6)
6 勉強がよくわからない (ニ)	51 (9.1)	13 (15.9)	3 (4.8)	16 (10.4)	14 (13.2)	9 (9.7)	23 (11.4)	[6] (6.1)	6 (6.1)	12 (6.1)
7 きらいな行事や仕事があるから (ホ)	37 (6.6)	6 (7.3)	0 (0)	6 (3.6)	6 (5.7)	8 (8.6)	14 (7.1)	10 (10.2)	7 (7.1)	17 (8.1)
8 宿題が多いから (リ)	30 (5.4)	6 (7.3)	7 (11.1)	13 (9.2)	8 (7.5)	1 (1.1)	9 (4.3)	4 (4.1)	4 (4.0)	8 (4.0)
9 勉強がきらい (チ)	24 (4.3)	5 (6.1)	2 (3.2)	7 (4.6)	10 (9.4)	3 (3.2)	13 (6.3)	2 (2.0)	12 (12.1)	14 (6.1)
10 家庭に面白くないことがある (ヘ)	21 (3.8)	3 (3.7)	1 (1.6)	4 (2.6)	5 (4.7)	2 (2.2)	7 (3.4)	7 (7.1)	3 (3.0)	10 (5.0)
11 経済的(服装、学用品、PTA会費など)にひきめを感じる (ヲ)	17 (3.0)	1 (1.2)	1 (1.6)	2 (1.4)	9 (8.5)	2 (2.2)	11 (5.2)	0 (0)	4 (4.0)	4 (2.0)

○この調査から考えられること

- 「学校生活が楽しい」と言い切る生徒が、学年がすすむにつれて増加していることは学校生活がノーマルな状態にあることを示していると考えられる。受験空気が強まればこの傾向は逆になるはずだからである。
- 楽しい理由の第1に「友達のこと」をあげていることは、第2の「たゞ何となく楽しい」という理由とともに、交友関係が全体として比較的スムーズにしていることを示し、その背景となる家庭、学校、ホーム、教師等の影響がゆがんでない結果をあらわしていると考えられる。たゞ「楽しくない」理由の第1がやはり交友の問題となり下級生になるほど%が増加していることは上級生の下級生に対する態度の指導の必要を示している。
- 「先生が親切に教えてくれる」という理由をはっきりあげた者が、4人に1人の割合あり、「勉強がよくわからない」が9.1%、「勉強がきらい」が4.3%にとどまっていることは、教師の指導が比較的行き届いている事を示してゐる。
- 「楽しい行事」「クラブ活動にはりあいがある」等の理由をはっきり出す生徒が相当数いることは、行事、クラブの重要性を示している。
- 「テストが多い」という理由をあげた者が17%になるが、1年生が最も多く、小学校と比較してそのように感じるものと考えられる。現行の中学校で3年生がこの理由をあげたのが12.7%である状態は止むを得ないものと考えられる。
- 「きらいな行事や仕事がある」「宿題が多い」「経済的ひきめを感じる」等の理由をあげたものがそれぞれ3～6.6%という数は学校教育そのものが比較的ノーマルな状態にある事を示している。
- 「学校生活が楽しくない」という生徒は全体の8%であるが、現行の制度下では止むを得ないとも考えられるが、今後一層その原因が追求されそのような生徒をなくすことに努力がはらわれなければならないことを示している。

注 藤沢市教育委員会に所蔵されている。学校が特定できる文言を「■」で表記した。計算が合わない箇所が多数ある(原資料の数字をそのまま掲載してある)。

一五 中学校第三学年アチーブメント・テスト実施要項（一九五五年度）

昭和三十年度神奈川県中学校第三学年アチーブメント・テスト実施要項

一、アチーブメント・テスト運営委員会

1. 県教育委員会は神奈川県中学校第三学年アチーブメント・テスト（以下ア・テストという）を実施するため、ア、テスト運営委員会（以下運営委員会という）と神奈川県公立高等学校通学区区域規則による通学区区域（以下通学区区域という）毎におく。

生徒が二つ以上の通学区区域内にある高等学校に分かれて進学する中学校に於ては所属教育委員会と協議の上いずれか一つの運営委員会に属するものとする。

2. 各運営委員会は県教育委員会が委嘱する次の者をもって組織する。

- (イ) 通学区内の国、公立中学校の校長
- (ロ) 各通学区毎に指導主事各一名

但し横浜市、川崎市、横須賀市においては当該市の指導主事又は教育委員会の事務局職員の内各一名。

3. 運営委員会は、委員の互選により委員長を選出する。

4. 運営委員会は、ア、テストの実施に必要な次の事務を行う。

- (イ) ア、テスト検査委員の決定
- (ロ) ア、テスト採点委員の決定
- (ハ) ア、テスト採点会場の決定
- (ニ) ア、テスト用紙の管理
- (ホ) ア、テスト成績個人票の記載、保管、送付の方法の決定
- (ヘ) その他ア、テスト実施に伴う必要事項の決定

5. 各運営委員会の委員長は当該所属の運営委員会の構成および前記4の事項について決定次第すみやかに委員長所属の地方委員会を通じて県教育委員会教育長あて報告する。

二、ア、テスト検査委員会

1. ア、テストを実施するために、国、公立中学校毎にア、テスト検査委員会（以下、検査委員会という）を運営委員会の管理の下に組織する。

2. 検査委員会は、当該運営委員会に所属する中学校相互において第三学年の

学級数と同数の他の学校の教員を以て各中学校に組織する。

3. 検査委員会には委員の互選により委員長をおく。

4. 検査委員会は当該中学校長と連絡し、ア・テスト実施に必要な次の事務を行う。

- (イ) ア、テスト受検の監督
- (ロ) ア、テスト用紙の保管
- (ハ) ア、テスト実施会場の整備
- (ニ) その他、ア、テスト実施に伴う必要事項

三、ア、テスト採点委員会

1. 答案採点のために国、公立中学校毎にア、テスト採点委員会（以下採点委員会という）を運営委員会の管理の下に組織する。

2. 採点委員会は当該中学校における検査委員をもって組織する。

3. 採点委員会には委員の互選により委員長をおく。

4. 採点委員会は採点に必要な次の事務を行う。

- (イ) 答案の採点
- (ロ) 採点会場の整備
- (ハ) 採点方法の手順決定
- (ニ) 成績個人票の記入
- (ホ) 得点分布表の記入（抽出校のみ）
- (ヘ) 答案用紙の保管
- (ト) 正答表の保管
- (チ) その他採点に必要な事項

四、ア・テスト実施細則

1. ア・テスト用紙等の配布保管

(イ) 県教育長はア・テスト実施の二日前までに左記の二日前までに左記のものを、横浜市、川崎市、横須賀市の各教育委員会（以下三市教育委員会という）教育長及び各教育事務所に送付する。

- (a) 「ア・テスト用紙」
- (b) 「ア・テスト実施上の注意」
- (c) 「得点集計分布表」（抽出校の分のみ）

(イ) ア・テストの監督は検査委員が当り他の者は関与しない。

(ロ) 検査委員はア・テスト開始（予鈴）三十分前に、テスト用紙の包装を開封

二月十八日(土)	二月十七日(金)	
予鈴	予鈴	9.30
社会	国語	9.40
休憩	休憩	10.30
理科	数学	10.50
昼食	昼食	11.40
予鈴	予鈴	12.40
図工	音楽	12.50
休憩	休憩	13.20
職・家	保体	13.40
		14.10

- (d) 「教科別正答表」
- (e) 「ア・テスト個人成績票」
- (ロ) 三市教育委員会教育長及び各教育事務所長は、ア・テスト実施前日までにア・テスト用紙を運営委員会の立会のもとに各教科別に包装封印して各中学校に配布しア・テスト開始の時まで保管を依頼する。
- (ハ) 三市教育委員会教育長および各教育事務所長は、ア・テスト実施の前日までに「ア・テスト実施上の注意」を各中学校長に学級数の一、七倍（小数第一位四捨五入）の部数を配布する。
- (ニ) 三市教育委員会教育長及び各教育事務所長は、ア・テスト採点実施の前日までに「ア・テスト個人成績票」「教科別正答表」を運営委員会の下に包装封印して各中学校に送付し採点開始の時まで保管を依頼する。
- (ホ) 三市教育委員会教育長および各教育事務所長は「得点集計分布表」を別に定める抽出校にア・テスト採点実施の前日までに送付する。
2. ア・テスト実施の検査場
- ア・テスト実施の検査場は、県内国、公立中学校生徒にあつては当該生徒の所属する中学校とし昭和三十年四月以前に県内の中学校を卒業したもののについては当該者の出身中学校とする。なお私立学校の生徒卒業生および県外からの志願者については別に定める。
3. ア・テスト実施期日 教科および時間割
- (イ) 日時 昭和三十一年 二月十七日（金）、十八日（土）
- (ロ) 教科および時間割

- (ハ) 検査委員は「ア・テスト実施上の注意」をよく読み、遺漏のないようにする。
 - (ニ) テスト終了後、検査委員は直ちにテスト用紙数に誤りのないことを確かめて包装封印して当該校長に保管を依頼する。
5. 採点会場
- ア・テストの採点会場は検査委員の勤務校とする。
6. 採点方法および採点後の処理方法
- (イ) 採点は「教科別正答表」および「採点基準」に従って行う。
 - (ロ) 採点後直ちに「ア・テスト個人成績表」を正副三通作成し運営委員会に提出する。
- (ハ) 得点集計分布表は抽出校のみ作成し二月二十五日(土)までに県教育庁指導課長に提出する。
- 他都道府県中学校からの昭和三十年度神奈川県中学校第三学年
アチーブメント・テスト受験者の取扱いについて
- 一 受験申込期間 昭和三十一年二月一日(水)から二月十日(金)まで
- 二 受験申込場所 各教育事務所および横浜市、横須賀市、川崎市の各教育委員会
- 三 受験申込手続
1. 受験希望者に、現住地(昭和三十一年三月三十一日までに居住する予定を含む)を管轄する教育事務所又は横浜市、横須賀市、川崎市各教育委員会に受験希望の旨を申し出させ、次の手続をとらせること。
2. 受験申込用紙(別紙様式一)に該当事項を記入させて受験会場校(学区内中学校)の指定をし、依頼状(別紙様式二)を交付して、当該中学校に出頭させ、諸種の指示をうけること。
- なお、その際、当該中学校から受験番号票を受け、当日これを会場に持参させること。

- 1. ア・テスト用紙は無償とする。
- 2. ア・テスト用紙は県教育庁において別途用意し、当該中学校に配布する。
- 3. 本受験申込書提出後受験希望者が入学志願先高等学校を変更したときは、直ちに変更届を文書をもつて当該教育事務所または三市教育委員会に提出させること。
- 4. 特別の事情により、申込期日を経過した時は、その事由を教育事務所または三市教育委員会に申し出させその手続きをとること。
- 5. 各教育事務所または三市教育委員会は受付名簿を作成し、受験申込についての事務処理をし、二月十一日（土）正午までに、県指導課に受験受付人員別男女の報告を電話でせられたい。
- 6. ア・テスト実施後の事務処理については、当該中学校の卒業者と同様に願いたい。

注 以下の要項は各教育事務所長並びに三市教育委員会教育長宛の依頼状の内容です。

（様式一）

昭和三十年度神奈川県中学校第三学年アチーブメント・テスト受験申込書

（氏名）

私こと

貴県の中学校第三学年アチーブメント・テストの受験を希望いたします。

昭和三十一年二月 日

右

（氏名）

神奈川県教育委員会教育長殿

記

受付番号	※	番	氏名	男女の別
現住所				
県内居住地				
志願先高等学校名				
在籍中学校名				
※検査会場校名				

※印の欄は各教育事務所又は三市教育委員会において記入すること。

（様式二）

昭和三十一年二月 日

〇〇教育事務所長

〇〇市教育委員会教育長

各関係中学校長殿

他都道府県中学校からの昭和三十年度神奈川県第三学年ア・テスト受験について（依頼）

このことについて左記の者は受〔験〕希望を申し出てきましたので、貴校に受験依頼をお願いいたしたく何分の御配慮をお願いします。

記

注 神奈川県立公文書館所蔵の簿冊「昭和31年（度）臨時会々議録綴
委総務」に収録されている。一月二四日の資料。 教

受付番号	番		男女の別
	氏名		
現住所			
県内居住地			
志願先高等学校名			
在籍中学校名			
検査会場校名			

一六 夜間中学校（中学校夜間学級）

（一）浦島丘中学校夜間学級

義務教育の学制ができて発足すると同時に、義務教育についての夜学もはじまっている。夜学は人々の経済的生活ときつてもきれない関係をもちつつ存続してきている。

横浜市では大正末年に一八校の小学校に夜学がおかれていた。当時の小学校数三八校とくらべてみると、半数の学校に夜学があったのである。昭和十年代後半には一二校の小学校に夜学がおかれていた。世の中の経済の動きにつれて夜学の数が増減していた。また、いつの時代になっても未就学者をなくすることはできないということあいまって、教育の現場ではどうしても夜学が必要なのであった。夜学に学ぶ生徒は、貧困によるもの、家庭崩壊によるもの、身体的理由によるものが集まってきている。

昭和三十九年度の神奈川県における未就学者（中学校教育を受けるべき年令層）は二、一三九名の多きに達している。この内訳は病氣九二七名、経済的理由一五五名、怠学一、〇五七名になっている。これらの子どもをどうしてやったらよいのかは、教育的課題だけではなく、社会的課題になっていると言っても過言ではないだろう。夜間中学校の存在はこのような子どもにとって、将来への指針の一助となつて重要な存在価値がある。

終戦までは子安小学校に夜間小学校が特設されていたが、終戦の混乱にまぎれて、全く機能を停止していたが、昭和二十三年になつて発展解消した形で、子安浜に二つの夜学が開校することになった。

「昭和二十一年、東京湾沿岸一帯は鰯の豊漁で、漁村は猫の手も借りたいという多忙をきわめ、収入は大きく黒字を示した。戦火に見舞われて、焼失した家屋も新築し得て立直つたのである。」「しかし、内湾の豊漁は僅か一年で終つてしまった。そして続いてくるものは一般生活者同様の苦しい生活であった。それは、内湾の沿岸工業が始まって、海水が汚染され始めたので、魚類は内湾から遠ざかつてしまったのである。」「乗船操業者は船頭一、乗子三、その中で、一名ぐらいは中学生が必ず乗り込んでいた。それは水揚げ高の配当は歩合制であるためと、船中の場所を取らないのと、船の運行にきわめて、経済的な好結果を得るという理由からであろう。」「（高山久男氏「東・西浜分教場創立の事情について」昭和四

十年十月「横浜市夜間中学校十五年の歩み」より）

労働資源を低賃銀の年少者に求める結果になり、自家の小中学生を船に乗り込ませたのである。また、関東北部、秋田、山形などから口減らしにでてくる年少者を雇つて相変らずの手ぐり操業が続けられた。

「筆者は郷土研究『漁村研究特に労働力』を調査中、ここに立寄つてつぶさにこの実状を知り、時の理事者、鈴木東一郎氏より懇談され非公式、非公認ではあるが、夜学開設せねばならない。この子安浜漁村の青少年救済は他に方法なしと考えられたので、時の地元、子安小学校長遠藤隆景氏、浦島丘中学校長宮原信夫氏、浦島小学校長倉沢晟哉氏の御指導、御協力を得て開設したのである。」「（同）時は、昭和二十三年二月四日（初午）、場所は、横浜市神奈川区子安通一丁目、漁業協同組合事務所において開校式が挙行されたのであった。集まつた生徒は、中学一年二十一名、二年五名、三年二十三名、計四十九名、小学五年十六名、六年十八名、計二十四名、小中学生総計七十三名であった。指導者は、小中学校教諭各四名計八名の先生であった。学級を作る上に東浜と西浜との漁業組合が話しあつて、それぞれの組合事務所に一学級ずつ設置することになり、ここに浦島丘中学校の分校が二校開設することになった。

この分校は法的に認められないものであり、あくまでも非公式なものであり、教師の奉仕的意味あいからできあがつていた。漁業組合ではさっそく、夜間学級PTAを組織して教師の謝礼を集めたり、教材の補助金を出したりするようになった。

昭和二十四年に日教組全国大会と、神教組、浜教組研究大会において、勤労青少年の不就学問題が取りあげられ、研究の対象となつたことから、夜間中学校問題が教育界に大きくクローズアップされることになった。このときにはすでに、本校では夜間学級の授業を開始してから二年経過していた。

昭和二十五年、市教育委員会条令「ママ」により、青少年指導対策委員会の仕事の 일환として、不就学生徒の救済の意味で夜間二部学級設置を認めることとなり、市内に十校設置された。文部省はこれを黙認するよりしかたがなかった。

「文部省もさることながら、なにしろ軍政部が反対だった。『日本人は法をきめておきながら自分の手でそれを破る。それは全くよくない。憲法で国民の生活を保障しておきながら、どうして社会保障でそれをやらないか。』』といって強く反対

され、いくら説明してもとうとうわかってもらえなかった。そこで委員会ではこの法の精神を生かすには、しばらくこの法を破るより他にないと思い、思い切った措置をとったわけである。しかし、夜学生はあくまでも許可にならないまま継続し、夜学といわず二部授業の延長として取りあつかった。それで、夜学を二部学級と呼んだ。」（遠藤要氏（当時の市教委調査課長））

こうして、昭和二十五年には、本校一、分校二の夜間学級が非公式ながら認められて正式に誕生し、教師の手当として五〇〇円支給されることになった。

こうした努力が効をそうして、昭和二十六年の在籍生徒数は八十九名に達した。生徒はおたがい励しい慰め合つて勉学にいそしみ、無事三年間の課程を終えて本校の生徒と共に晴れの卒業式に列席し、待望の卒業証書を授与される姿は多くの参列者の目を引いたものである。

昭和二十八年頃から、生徒がしだいに減少し始めたのである。その理由は、子安浜に工場が進出し始めたからである。そのために海岸には埋立がはじまり、工場からの排「廃」棄物は海水をますます汚染し、魚貝類の棲息を妨げ、水揚げ量は次第に減少してきた。したがって、漁場の生活はだんだんと追いつめられ、止むなく転業する者が出てくるようになった。分校の生徒数の増減は子安浜の必要労働力に左右されていた。昭和三十八年五月に西浜分校が閉校し、昭和四十年四月には東浜分校が閉校することにより、子安浜の夜間学級はここに終止符をうつことになった。残存生徒は本校の夜間学級に吸収されることになった。

浜の夜間学級の生徒は同一業態からの生徒であり、漁業組合が教室と生徒の指導面の面倒をみていたし、自分たちの生活の本拠で学習していたので、生活問題はあまりおこらなかった。が、本校の場合は、種々な生活問題をかかえている生徒の集まりであつたので、教師は学習面の指導ばかりではなく、生徒の生活の面倒をみるが多かった。就職の心配から家庭内のいざこざまで相談の相手にならなければならなかった。労働基準法が彼等の生活をおびやかすこともしばしばであつた。教育法と労働法からはみ出した場所で、自からの生活を発見しなければならず、現在、夜間学級に通学してきている生徒にも重くのしかかっている。

授業形態は複式学級として、昼間と同じ課程を進めてきているが、夜間であるため昼間と同じ時数の教科課程を取ることはむずかしい。それでも一日四時間の

授業を進めてきている。昼間とは異なつて生徒数も少ないので、教育本来の姿である個人の能力にあつた学習と個人指導がおこなわれている。この夜間中学校こそ「教育の原型」が失われずに存在しているとさえ言われている。生徒自身の問題としては学習もさることながら、生きるためにどんなリハビリテーションができるのかが重要なことになってきている。

市教委は昭和三十五年度から夜間学級に給食を実施した。また、全国の夜間学級の教師たちは、昭和二十九年全国夜間中学校教育研究協議会を発足させ、おたがいに情報のこうかんをし、関係当局と交渉をもちながら、夜間学級の充実につとめてきている。

夜間学級卒業生数

学級 年度	本 男	校 女	東浜 男	西浜 男	計
23					
24					
25	3	0	8	12	23
26	7	1	4	0	12
27	18	4	10	11	43
28	6	0	1	7	14
29	6	1	6	10	23
30	3	2	6	4	15
31	7	3	5	6	21
32	6	2	1	16	25
33	4	5	3	12	24
34	2	4	3	3	12
35	1	0	3	1	5
36	3	0	6	2	11
37	3	2	2	4	11
38	2	0	2	0	4
39	8	2	2	—	12
40	2	1	—	—	3
41	2	2	—	—	4

注 浦島丘中学校編『浦島丘中学校20年史』（一九六七年）三三～三五頁。

(二) 青少年問題協議会による中学校夜間学級に関する調査の結果

六三制の落し子

夜間中学生の実態

給食にも恵まれず

横浜、川崎両市に十三校

(著作権上の都合により省略します)

(著作権上の都合により省略します)

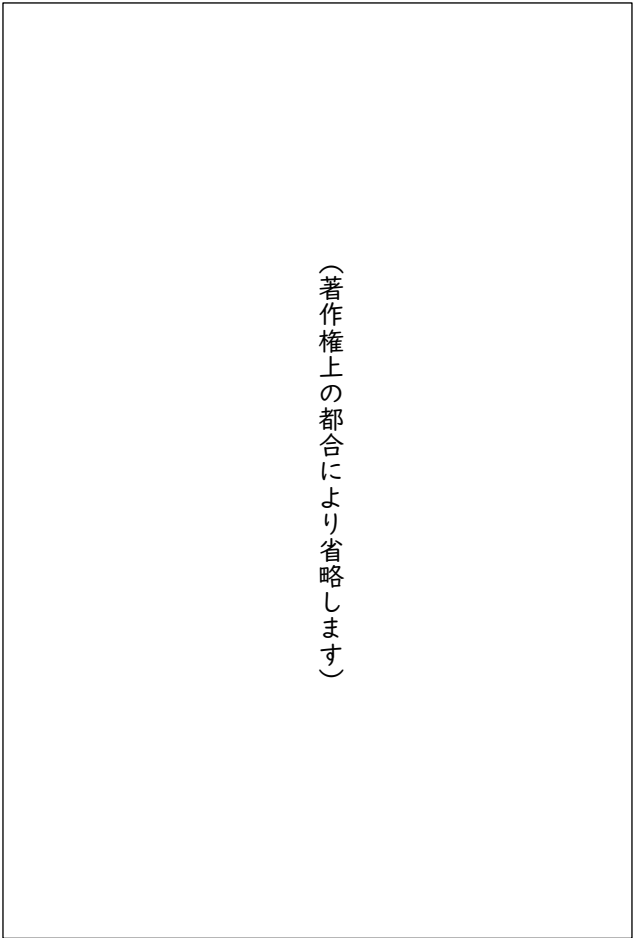
『神奈川新聞』一九五六年二月三一日(京浜版)。

(三) 第四回全国中学校夜間部教育研究協議会

ママッ子扱いの夜間中学生
きのう横浜で全国対策協議会
まず専任教師おけ
給食実施で就学の関心を



(著作権上の都合により省略します)



(著作権上の都合により省略します)

『神奈川新聞』一九五七年一〇月二六日。

(四) 「夜間中学生」の実情

新教育の“私生児”
夜間中学の現状

(著作権上の都合により省略します)

(著作権上の都合により省略します)

(著作権上の都合により省略します)

(著作権上の都合により省略します)

『神奈川新聞』一九五八年一〇月二九日。

一七 横浜市研究指定校

(一) 横浜市立金沢中学校

学校名 横浜市立金沢中学校

校長名 丸茂長英

研究主題 道德教育の研究

研究年度 昭和三十二年度 昭和三十三年

研究概要

昭和三十三年度においては、まず「道德とは何か」「道德教育とはどのようなものか」にはじまり、

(1) 道德教育における場と領域

(2) 道德教育のあり方

のテーマについて、研究をすすめた。

そして

(1) 道德教育における基本的な考え方

(2) 道德教育と生活指導との関係

(3) 道德指導の場による分類と目標

などについて見解をまとめ、生活指導の立場からホームルームを通しての道德指導について研究した。

三十三年度に入っては、前年度につづいて、道德教育研究の目標を、

(1) 教師の道德観の確立

(2) 生徒の道德観の調査

(3) 道德の地頭計画の作成

(4) 道德的習慣の形成

(5) 情操教育と純潔教育

において、研究を推進するとともに、本年一月道德の指導計画を作成して、実施にふみ出している。

(二) 横浜市立六角橋中学校

学校名 横浜市立六角橋中学校

校長名 倉林知恵

研究主題 道德教育の研究

研究年度 昭和三十三年 昭和三十三年

研究概要

まず生徒・父兄・地域社会の実態調査を行い、学校教育全体計画を再検討しながら、

(1) 道德教育の理論的研究

(2) 教育目標の検討 道德指導方針の確立

(3) 他の教育領域と道德教育との関係

などについて見解をまとめるとともに、ホームルーム指導を中心として、従来の学校としての歩みを反省した。

道德の時間設置に関する省令については、これがうけとめ方を研究討議し、「道德の時間を設置することを前提として、可及的すみやかにその指導計画を検討作成する」との学校としての方針を確認し、道德の時間の問題点を研究討議して、道德の指導計画を作成している。

注 横浜市史資料室所蔵の「研究指定校一覽(小中学校高校教科・産業教育振興関係其他)」から右の二校の記載を収録した。二校とも一九五七年度に指定を受け、研究期間は二カ年とされている。

一八 神奈川県教育委員会編中学校学力検査問題（国語）

国語 神奈川県教育委員会編

中学校国語学力検査問題

注意

- (一) 問題の答えはすべて、答案用紙に書くこと。
(二) 答えのらんをまちがえないようによく注意すること。

問一 次の文を読んで左の問に答えなさい。

人間はいじけたらそれまでだ。谷川がきわまって道がとまったと思っても、またその上流に道がある。志を立てることがなければ方向がきまらない。

方向がきまらなければしゅうせきした手腕のうりよくが發揮できない。千里の旅をするものはそれだけの旅装を整えねばならぬ。一志かくりつすれば、百の

障害も除かれる。「一志立つ、百邪しりぞく。」という古語を思う。クラークさんの「青年よ大志をもて。」は千古の名言である。

A. 次の漢字の読みがなを、ひらがなで現代かなづかいによって書きなさい。

- ① 発揮 ② 旅装 ③ 整え ④ 障害 ⑤ 除かれる

B. 次のことばにあたる漢字を下から選んで、その番号を書きなさい。

- ① きまらない (① 定まらない ② 決まらない ③ 規まらない ④ 期まらない)
② しゅうせき (① 収 ② 集 ③ 集 ④ 修 ⑤ 績)
③ のうりよく (① 農 ② 脳 ③ 納 ④ 能 ⑤ 力)
④ かくりつ (① 画 ② 確 ③ 拡 ④ 確 ⑤ 立)
⑤ しりぞく (① 進 ② 退 ③ 逆 ④ 随 ⑤ く)

問二 次の語の下につづけて、よく使われる語を下から選んで、その番号を書きなさい。

- ① 未 (① 力 ② 開 ③ 青 ④ 化)
② 具体 (① 心 ② 学 ③ 的 ④ 者)

- ① 非 (① 常識 ② 意識 ③ 感情 ④ 愛情)
② 適材 (① 一致 ② 適所 ③ 適当 ④ 発展)
③ 表現 (① 反応 ② 形式 ③ 階級 ④ 原因)

問三 次の文を読んで左の問に答えなさい。

人生には思いもかけずもの悲しい日が起きる。物に失敗した日、逆境にはまりこんだ日、人と争いをした日、人から苦しめられた日、あるいは健康をそこねた日などには、何ともいえぬわびしいものである。私はそんなときに色々のものを読んでまぎらすのであるが、あまりむずかしいものはピンとこない。そのとき啄木の歌を読むことがある。何しろ直情をズバリ、といったのけるのであるから、こちらの心のつかれたときなどには、鋭い小刀で心のもつれを切り開かれるような気がする。だからいい気持になれるし心の慰めになるのである。

ふるさとのなまりなつかし停車場の人ごみの中にそれを聴きに行く
ふるさとの山に向ひていふことなしふるさとの山はありがたきかな
友がみなわれよりえらく見ゆる日よ花を買ひ来て妻としたしむ
はたはたときびの葉鳴れるふるさとの軒端なつかし秋風ふけば
十月の朝の空気にあたらしく息吸ひそめしあかんば（赤坊）のあり

これらの歌を見ているとき、故郷の人に、故郷の山や家に、さては妻子に対しての感情がひたむきに流れていることがよくわかる。これは真情のほとばしりである。本能めいたものが多いかも知れぬが、それだけに強い心の流れである。

A 左の問の答のうち、正しいと思うものの番号を書きなさい。
① 次のことばはどういう意味ですか。

- ① ひとと意見が合わなくなるとき。
② 思うとおりにならない立ち場。
③ とりかえしのつかない立ち場。
④ ひじょうにおもしろくないとき。
① 正直ななさけ。
② 親身のなさけ。
③ つつみかくしのない心。
④ ほんとうの情景。

㊦ 次のことばの使いかたはどれが正しいですか。

㊦ そこねた

- ① 人と争いをそこねた日。
- ② 人の気分をそこねた日。
- ③ 食事をそこねた日。
- ④ 洋服を着たままそこねた日。

㊦ まぎらす

- ① 鉛筆をペンでまぎらす。
- ② きつねは人をまぎらす。
- ③ 赤と青の絵具をまぎらす。
- ④ さびしさを趣味にまぎらす。

㊦ 「それを聴きに行く」とは何をききにいくのですか。

- ① ふるさとのたより。
- ② 人ごみの中の話。
- ③ ふるさとのなまり。
- ④ ふるさとの駅夫の声。

㊦ 「本能めいたもの」といっているのは次のうちのどんなことをさしていますか。

- ① 故郷の山や家や妻子に対してのひたむきな感情をあらわすこと。
- ② ズバリ、といったのけて、すこしもかざりけがないこと。
- ③ おりにふれ、時にあたって、感じたことを思うままにあらわすこと。
- ④ 「いふことなし」「ありがたき」「えらく見ゆる」というような自分だけの感情をあらわすこと。

㊦ 「ふるさと」のなまり……「はたはたと……」の二つの歌について、これをよんだときの作者の位置は次のどれが適当ですか。

- ① 両方とも故郷にいる。
- ② 前の歌は故郷にいる、後の歌は故郷をはなれている。
- ③ 前の歌は故郷をはなれている、後の歌は故郷にいる。
- ④ 両方とも故郷をはなれている。

㊦ 「十月の朝の……」の歌はどんなときに歌った歌ですか。

- ① すがすがしい朝、あかんぼがすやすやねむっているとき。
- ② 十月の秋の朝、あかんぼが息を引きとってしまったとき。

- ③ すがすがしい朝、あかんぼがねむりからさめたとき。
- ④ すがすがしい秋の朝、あかんぼが生れた時。

㊦ この文の作者は、啄木の歌をどんな歌だと感じていますか。

- ① 本能めいたものが多いのがいちばん欠点である。
- ② 人間としての真情がほとばしり出ている。
- ③ 物に対する感情がやわらかくこまかく出ている。
- ④ あまりにズバリといったのけるのでおもしろみがない。

㊦ 啄木はいつごろ生れた文学者ですか。

- ① 江戸時代 ② 明治時代 ③ 大正時代 ④ 昭和時代

㊦ 啄木の歌集は次のうちどれですか。

- ① 若菜集 ② 田舎教師 ③ 一握の砂 ④ 土

㊦ 「あまりむずかしいものはピンとこない。」の文の中の「ない」はどの品詞ですか。

- ① 助動詞 ② 動詞 ③ 形容詞 ④ 助詞

この文にある歌は、文語体で書かれているため、語の活用や「かなづかい」が現代の口語文とちがっています。歌の中の次の語の語尾を、例にならって、口語のいい方になおし、または「かなづかい」を「現代かなづかい」にあらためなさい。

≪例≫

問	考へ	答	考え	問	努むる	答	努める
---	----	---	----	---	-----	---	-----

㊦ いふ

㊦ 見ゆる

㊦ 吸ひ

国語

正答・採点基準

問一	
B	A
Ⓐ	ㄱ
2	はっき
Ⓑ	ㄴ
3	りよそう
Ⓒ	ㄷ
4	ㄹ
Ⓓ	ととのえ
4	ㄺ
Ⓔ	しょうがい
2	ㄻ
(5点)	のぞかれる
	(5点)

問二
ㄱ
2
ㄴ
3
ㄷ
1
ㄹ
2
ㄺ
2
ㄻ
2
(5点)

問三	
B	A
Ⓐ	Ⓐ
いう	2
	Ⓑ
Ⓑ	3
見える	Ⓐ
	2
Ⓒ	Ⓑ
吸い	4
	ㄹ
(3点)	ㄹ
	3
	ㄺ
	1
	ㄻ
	4
	ㄼ
	4
	ㄽ
	2
	ㄾ
	2
	ㄿ
	3
	ㄿ
	1
	(12点)

(採点基準)
問一、Aの読みがなは「かたかな」でもよい。また拗音・促音は小文字でなくても文字が正しければよい。

注 神奈川県立公文書館所蔵の簿冊「昭和三十二年度 入学選抜に関する記録 神奈川県立川崎高等学校」に収録されている。

一九 横浜市教育委員会『中学校 道德教育内容検討資料』（まえがき）

中学校
道德教育内容検討資料

横浜市教育委員会

まえがき

この研究は、教育委員会における本年度の道德教育振興計画の一環として取り上げられたものであるから、まずその全貌について要点を掲げ、次に組織された道德教育内容検討委員会の条件や仕事の目やす、研究の経過を略記して活用に資したい。

I 昭和32年度道德教育振興計画

1. 立案の趣旨

新学制発足以来すでに10年、その間教育内容については数次にわたり実践と検討の結果に基づく改善が加えられてきたのはあるが、現在学校教育や社会教育を担当する者の立場から、道德教育について仔細に反省してみると、いろいろ改善を要する点があることを認めないわけにはいかない。また一面、社会各層の間でも、特に道德教育に関する幾多の主張が行われるようになった。

道德的価値観やその内容、道德的判断、行為等の認識などについての考え方や理解には、実に各種各様のものがあり、さらに道德教育の方法に至っては全くいろいろに工夫されているのであって、その評価に関する立場や観点、方法や場面や尺度こそさまざまであるが、十分でないという点では一致しているようである。しかしながら、教育が人間形成をめざすものである限り、道德教育の課題は教育そのものの課題に直接通ずるものであり、道德教育の方向は教育そのものの方向に由来するものと言えよう。従って、道德教育の改善に関し、その志向するものや内容方法についてよりどころを求めることについてはもち

ろん、実践の強化に関する方途についても、また慎重を期さねばならないと考える。そこで、本年度は、特にその基礎的研究に重点を置くとともに、現場における気運の醸成、理解の深化、方法の改善等をはかりたい。

2. 立案の立場

A 青少年への理解と愛情

道德は、社会理想を志向しながらも複雑な人間関係における行動実践の規範となるものであり、人生如何に生くべきかの命題にも直接つながる問題であるので、これを一義的に規定することはきわめてむずかしいが、もし、道德的ということ、自己の価値と尊厳とに目ざめて、正や善を求めて人間として意義ある生活を築いていくというような、内面的なもの、創造的なものと解するならば、今日の青少年は道德的に不健全であるとは言えないであろう。むしろ、戦後の新教育によって正常に育てられた青少年は、次第に新しい時代の倫理を身につけてきているとさえ言えよう。

道德の内容は、社会が変わるに従い、倫理観の進歩にもなって変わっていくものであるから、前代の道德を基準にして後代を律し、評価することは無理であるのは申すまでもないが、しかし反面、道德には多分に社会的連続性があり、多くの道德内容や道德的慣習は伝統的性格をもっていることもまた認めねばならない。ともあれ、権威に盲従する全体主義的な生活から自他の人権を重んずる民主的な生活へと、大きく転換してすでに12年になるにもかかわらず、わが国における道德の内容はいまだ確立されず、おとなたちは知識と主張だけの民主主義に低迷しているのが現状であると言ったら過言であろうか。大きな社会変革にともなう道德内容の飛躍が不可能で実現し得なかったところに、おとなの社会の不道德やみにくい混乱が生じていることは、まことに嘆ずべき日本の歴史的悲劇と言わざるを得ない。われわれは、このような道德的環境の社会に成長していく青少年を放置するにしのびない。常軌を逸した青少年の非行は、きわめて一部の者のことであって、もちろん教育上重大な問題ではあるが、この種の現象がわれわれの道德教育振興への契機ではない。一般の青少年の立場や考え方に深い理解と愛情とをもって、彼らに生き生きとした生活の理想を画かせるとともに、彼らがより正しい人間関係の見究めに努め、道德的行為の確立をめざして、より望ましい自己実現をするように期待するところに出発点を求

めたい。

B 道德教育のよりどころを求めて

a. 道德教育の内容とその構造

人間性に立脚して、基本的人権が尊重され、従って自他の生命が尊重されるところに道德の根源があると考えたい通念となりつつある。しかし、それならばそこからどのような道德内容が生み出され、それらがどのような構造をもつべきかについては必ずしも定説はない。近代社会の人間の理想像を画いて、画いた像の道德的要素を分析して必要な徳目を羅列してみたり、あるいは多数の人の自由に画く理想像が本来的にそなえると思われる道德内容をよせ集めて整理列挙してみたりしているような例はある。しかし、道德内容の構造は、単に理想像の分析だけでもまずいし、寄せ集めの徳目の思弁的構造づけだけでも足りない。さればと言って、現在の青少年の道德的意識や道德的行為を詳細に用心深く調査して、その結果の数的処理に基づいて検討を加えてみるもうまくいきそうもない。人は環境によって育てられ、同時に人が環境をつくりつつ成長するのであるから、これら環境との交互作用による人格形成の原理と内容とが究明されて、それらが道德教育内容の構造づけに寄与することも大いに考慮しなければならぬであろう。ともあれ、集約された大衆の生活意識と道德教育の系譜とを基盤として、理想像のもつ道德内容と児童生徒の道德生活内容とを柱として、教育社会心理学的に道德教育内容が組立てられないものであろうか。もちろんそれが紙に書かれてみても、全く一つの仮説に過ぎないであろうが、しかしそうしたいくつもの仮説や試案が提示され、意欲的に検討されつつ、自信のあるものから実践されることによって実証もされ改善も行われるのが望ましいのではなからうか。雑多であり、混乱しているからと言って嘆いたり、迷ったりしていたのでは始まらない。

b. 有効な方法の究明

一般に教育上の問題は、その目的原理が明らかになって、それに基づいて実際の目的が考えられ、目的に基づく目標が設定され、それにともなう内容が究明された後にそれらの性格や内容を満足するように方法原理や実践手段が究明されるのが定石であろう。道德教育についても、こういう労作が

多数の教育学者等の手によって試みられることをわれわれは望んでいる。同時にわれわれは、現在の教育内容組織の中で、現に教育活動を展開しているものであるから、すべて元が立つのをまっとうして道を生み出すように考えるのもまた固苦し過ぎると思うのである。現に獲得している目標や方法を土台にして計画的に実践を試みつつ究明することもまた可能であろうと考える。

現在設定されている教科内容の中でどのように行われたらよいかを吟味したり、実践したり、教科外活動や特別教育活動の中でどのように仕組まれるか等の究明や実践がそれである。今すぐに、概念と思维と観察とによつ「ママ」て別のコースを計画したり、実践したりすることは危険であろうとさえ考えられる。現在の実態を土台にして、研究と実践を重ね、どうしても別の構想が必要であるとの結論に達した時始めてそのように展開することが安心してあろう。むしろ、それらの過程で、具体の場面の指導に対する方法の研究、すなわち指導技術の研究がさらにきわめて重要な課題となるであろう。

一般に道德教育内容のよりどころは、それが道德そのものであれ、道德的慣習であれ、まず社会において健全に育てられ、確立され、やがて学校がそれを基礎として取り上げるのが順序というものである。子どもたちは、おとなを含めた社会の道德内容を身につけながら、次第に自分たちの倫理を創造していくのが常道ではあろうが、しかし今日のように道德的価値の体系が混乱しているような時代には、学校教育がその主導性をもって社会をリードしてもよいのではなからうか。

3. 研究実践のための方策

A 道德教育協議会（略）

B 道德教育のための基礎研究

a. 道德意識判断等の調査研究（略）

b. 道德教育内容の検討

C 学校における道德教育実践の推進

a. 研究指定校（略）

b. 生活指導のための研究集会（略）

c. 現場指導（略）

II 道德教育内容の検討について

1. ねらい

現在本市の学校教育において、その教育計画の中に道德教育内容がどのような姿で、どう組み込まれているかを抽出整理することにより、道德教育内容に関する問題点を探求し、道德教育計画改善のための基礎資料とする。

2. 道德教育内容検討委員会

A 検討作業の目やす

- a. 本年度は小中学校の教育内容を対象とする。
- b. 現行の教育内容の構造をそのままよりどことする。
- c. 各教科と教科外活動並びに特別教育活動を検討の対象領域とする。従って、給食・清掃・自由時間等の指導内容は予想するけれども委員会は設けない。
- d. この場合、道德教育内容を、学習指導要領および本市教育課程に記載されたものに限定することを原則とし、学習活動についてはそれ自体を取り上げるのではなく、これを予想して考える。
- e. 各教科等の一般目標・具体目標（単元目標・活動目標・理解目標・学年目標）経験要素（指導内容・学習内容・題材・教材・能力表・段階表）等について調査抽出整理する。
- f. 検討についてはもちろん、その結果の整理の仕方についても構成された委員の意見主張を尊重する。
- g. 結果は簡潔な表現をするように努める。

B 研究の経過

○7月3日の委員会全体の会議をもってこの仕事の趣旨・性格・目標等について協議した。終って各部門から選出された代表委員の会で全体研究の日程を組んだ。

○7月18日代表委員会を開催して、すでに各部門ごとに樹立した検討計画を発表し合い、情報交換を行うとともに検討上の問題点について討議した。

○7月下旬から8月末にかけて各部門ごとの検討や同一教科の小中学校連絡会等が強行された。

○8月29日代表委員は各部門の素案を印刷してもちよった。代表委員会は、話し合いによってお互いの理解を深め、他部門の内容を知って自己反省をした

り、形式を整えようと協力したりする機会とすることとし、内容の性格や解釈について決議をして各部門を制約するという方向をとらないことにした。これから9月の中旬にかけて、代表委員会はお数回開催されたが、討議の過程で特に問題になった主なことがらを列挙する。

・道德教育内容というが、その場合道德とはどういう社会観によるものか、性格はどうか、質や内容構造はどうか、領域はどこに限界があるか、道德以外のことがらとのつながりはどうか、生活指導との関連は、等々道德そのものへの解釈や理解に関する問題。

このことについては誰かの理論や主張を柱にするという立場を避け、代表委員がお互いに解釈や意見を述べ合うことにとどめ、形式的な統一をしないこととし、研究の結果に全委員の道德観や道德への認識がにじみ出るように努力することにした。

・横浜市教育課程・学習指導要領に記載されたものに限定するという検討の原則は最後まで問題になった。

第一は、字づらに忠実にといっても、文章の質的な解釈には境界がないのでどこまで取り上げるのかむずかしい。

第二に、道德教育という視点から各教科等の目標や内容が記述されていないので、どこで切つ「ママ」たらよいのか、どう整理したらよいのかむずかしい。特に、行為につながる表現がしてなければいけないという考えと知見・理解だけでも取り上げた方がよいとする考えとがあった。

第三に、教育内容表現の字づらから、指導方法や学習活動を完全に切り離すことは至難なので、字づらの解釈に甚だしい困難を感じた。

第四に、どの教科でも全学年を通じて培う態度内容は下学年で一度記載されると上学年ではもう出てこない。従って、字づらに忠実に整理すると実際指導の内容とは異ったものになるが、これは記載されている通りにすることとした。

・量の多い道德教育内容をどういうスコープで整理するかという問題。

・美的情操と道德との関係。

・文章内容と行為との関係等々。

いずれの問題についても、結局それぞれの部門で工夫をこらし、部門ごと

の意志や解釈を結集して整理することにしたので、一覧表に記述された内容はそれぞれの部門の委員の道徳に関する考え方や理解に裏づけられた表現とみてよい。なお、検討してみた結果、道徳教育内容ということからみて、各教科ごとに、

①その教科全体として問題だと考えられることがら。

②教育課程内に配列された内容について問題と思われることがら。

③計画に記載はされていないが、指導方法や学習活動に関連して問題となったり、是非やりたいと思われることなどが等は、それぞれ問題点として記述することになった。

○9月中旬から約1カ月半を各部門ごとの吟味検討仕上げの期間として12月上旬に各部門から原稿が提出された。

C 道徳教育内容検討委員

〔国語科〕 土佐孝三（浜中） 加藤 勇（本郷中） 蕪木直行（教委）

〔社会科〕 工藤五郎（日吉台中） 江島正雄（松本中） 山本健次郎（平楽中） 小林喜一郎（港中） 長沢竹治（大島中） 大川兼二（浦島丘中） 玉岡三男（教委）

〔数学科〕 藤田元夫（六角橋中） 笈川 博（生麦中） 山崎運吉（教委）

〔理科〕 渡辺 陵（老松中） 笠原賢次（蒔田中） 足立勇三（教委）

〔音楽科〕 永井良徳（保土ヶ谷中） 天野丑之進（吉田中） 松井 力（教委）

〔図工科〕 九里 保（岡野中） 福島竹雄（日吉台中） 山口 実（教委）

〔職業・家庭科〕 松尾広知（生麦中） 阿部 功（鶴ヶ峯中） 鈴木与也（栗田谷中） 沼田武彦（金沢中） 定岡鶴代（神奈川中） 松本芳治（教委）

〔保健体育科〕 三原秀友（汐田中） 小野田裕誉（岡野中） 三浦甲子蔵（教委）

〔英語科〕 梶野英夫（大綱中） 長谷川 進（瀬谷中） 井上 肇（教委）

〔特別教育活動〕 二見 清（保土ヶ谷中） 大島政兼（瀬谷中） 橋倉利男（市場中） 荻谷信富（平楽中） 木村清吉（六浦中） 岩

沢慶尚（谷本中） 松本芳治（教委）

〔企画委員〕 中島利信 玉岡三男 井上 肇 松本芳治 井上 庄平

注 本文では各教科と特別教育活動における道徳教育の内容案が記述されている。

二〇 平塚市立大洋中学校『学習指導の改善（小中の一貫性）』

平塚市教育委員会委託研究

学習指導の改善
（小中の一貫性）

平塚市立大洋中学校

はじめに

小中学校の学習内容においても、指導法においても、一貫性を持たせて児童生徒の実力を養成したいと念願することは、斯の道にたづさわる者の夙に考えてきた問題であるが、校種別に独立していることや他のいろいろの条件があり、希望するとおりに実施されてきた学校は、比較的少なかつたように思われる。

本校においても、創立以来鋭意此の点についても想も練り努力も傾けて参つたのであるが、時に小中一貫した教育という面において十全でなかつたこともある。ことは他の多くの学校の実情と相似た姿であろうかと思われる。校種の相違によつて止むを得ないと云えばそれまでであるが何とかして小中学校の間に一貫性を持たせ、教育の効果を挙げたいと考え草山前校長も教育方針にこの問題を取り上げ研究を進める態勢を基礎づけられた。

この動機づけが芽をふき追い追い生長して二ケ年に亘る本校のこの研究となり今日に到つたわけである。

研究の過程もまた成果も拙劣であり未熟であり取るに足らぬ程度のものであるが、本校職員はこの研究と真剣に取り組んで来たつもりである。

過程においては、溢〔隘〕路や障害もあり順調な進捗を期待しながら幅〔幅〕轉する諸事務の中に研究を進めなければならない実状におかれたので職員の苦勞も一人なものがあった。

然しこの研究の結果が姉妹校である港小中学校の教育と学習内容や指導法の面で更に一貫したものを求めて進む力となるであろうことは予想に難くなくこの面においては大きい収穫であつたと思つてゐる。

一貫性の問題に関心を有せられる諸賢の知識と経験を披歴願つて斯の道の向上に御支援と御協力を賜わるなら幸甚に存じます。

昭和三十四年十一月

校長 中丸 寿郎

平塚市教育委員会研究委託「小中一貫性保持の学習指導の改善」

目次

はじめに	学校長 中丸 寿郎	1
一、テーマ設定の意義			3
二、研究計画			3
三、研究組織			4
四、本校をめぐる家庭的、社会的環境			4
五、学習指導の能率化と一貫性			9
六、国語科指導における一貫性			11
七、社会科指導における一貫性			49
八、数学科指導における一貫性			103
九、理科指導における一貫性			135
おわりに			174

一、テーマ設定の意義

近時教育内容について、小、中、高の一貫性が強く叫ばれ、其の必要性を痛感するものの、とかく学習内容の緊密なる連絡がとれず、小、中、高、夫々分離し、独自の計画で、教育の能率をあげるべく努力を重ねてはおるが、結局は、教育効果の面に、最大の効果を期待する事は出来ないのみが、学習面において、しばしば非能率的な場面に直面する。この事は生徒の躰の面、広く言えば道德教育面においても同様の事が言える。

学習の能率化をはかり、基礎学力の充実を先ずはかるには、何んと言つても、小、中の一貫性が考えられてくる。学習指導面における不必要な重複や無意味な繰返

しをさせ、重点的に指導上の共通せる障害点、問題点を両者相まつて、解決し学習の効果をあげることが理想であり、又本研究の目標でもある。

この点において、当学区における生徒の実態に立脚し、小、中一挙させる学習内容の改善をはかり、小、中、協力の下に最大の教育効果をあげるべくこの問題に着手した訳である。

二、研究計画

1. 研究目標

当学区における生徒の実態に立脚し、小中、一貫せる学習内容の改善をはかり、系統的指導の下に学習の能率化をはかる。

2. 計画

① 第一年次計画——a 研究の目標

小中協力による研究体制の確立とカリキュラムの検討に重点をおき、学習指導の改善につきその対策をねる。

b 研究の内容

① 小、中、校の共同研究体制の確立

② 小、中、校の共同研究着手

小中合同会議

小中合同研究

研究授業の相互参観——各教科別

③ 小、中、カリキュラムの検討

教科指導委員会

各教科別研究会

○ 小中教科書内容の研究

② 第二年次計画

a 研究の目標

小中生徒の学力の実態を知り、小中協力指導により、学力の向上と指導上の能率化をはかり、学習指導の改善につき其の対策をねる。

b 研究内容

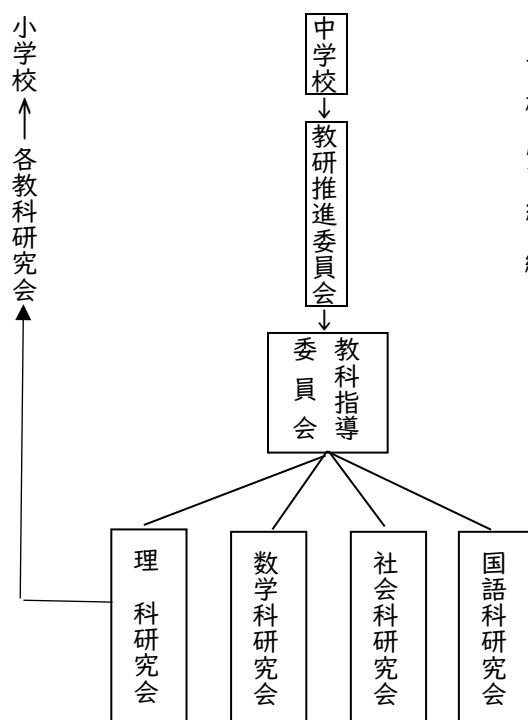
① 小中生徒の学力の実態調査（小学校六年、中学校一、

（国語科、社会科、数学科、理科）

② 指導目標の樹立（四教科）

③ 当学区における学習指導上の改善策（小中合同研究会）

三、研究組織



四、本校をめぐる家庭的、社会的環境

1. 学区の大観から

平塚市の東端を流れる馬入川が相模湾に注ぐ所、北を東海道線に境し、西は平塚駅南口正面の直線大通りを境に浜岳学区に接し、相模湾の海岸線を南の境として、劃然と区劃の出来る須賀地区、これが本校ならびに姉妹校港小学校の通学区域である。

海岸からの強風による塩害を受け、樹木の成長に悪影響を齎すこともあり、時には枯死に到らしめることもあるが、先づ清浄な海風に直接に接するし、又地区内に著るしい騒音を発する大工場も殆んどなく（工場は約十）常時騒音をたてものは全くない。

従って地域の学習環境は自然的条件からは良好と言うべきであろう。殊に学校所在地は小中学校に県立高浜高校と、三校鼎立の状態にあり、学習の場として

二、三年

は学区内でも最も静寂な一角に位置し市街地の学校としては稀にみる好条件の場所であると言ひ得る。そのうえ、地域の砂丘は直接海浜に連り、所謂海あり、川ありの条件に恵まれ、利用の方法によつては自然的な環境として、頗る恵まれた部に属する場と見るべきで、近くに湘南平を含む高麗山あり、行楽の地としての利用度も高く、植物の学習その他社会科学学習からの利用度も高い。遠くに富士、箱根連山、丹沢、大山とその美しさも、目前の海岸一帯の防砂林の緑に映えて、雄大な景観を展開している。

2. 地域の生活経済の上から

○特記すべきものとしては河口を利用し築造した舟着き場（須賀漁港）の条件に恵まれているためもあつて、相模湾における近海漁業が活発に行なわれ、この面に関連する収入が（昔日の比ではないらしいが）他の地区に比して特殊な収入源ともみられよう。従つて漁ろうやこれに関係した業に携わる父兄も比較的多く見られる（別掲）ことも地域社会の特徴といえよう。その他の職業分類は格別の特徴があるとも思われず、大凡は他の旧市域並みとみてよからうかと思われる。

唯無職となつてゐる生徒の家庭数が意外に多く六十五を数え約十パーセントにのぼることは、農村は勿論市内の他の地区に見られない高率を示す実態ではなからうか。消費経済の上からみると現在尚区劃整理事業の進行中で道路の拡幅整備と俟つて、続々と家屋の新築が行なわれ、相当膨大な経費の支出がなされているとみられる。

○区劃整理によつて、着々と新家屋の建築も進行してはいるものの、戦災の痛手は癒えず未だに焼トタン、バラツク建の家屋もあり、若しくは之に近い状態の住居に生活する生徒もあり、食卓を利用して机に振り替えての学習を余儀なくされている生徒も相当数にのぼり、それさえも出来ず設備のない家庭に在る生徒が約四十名程はあろうかと推定している。

○その他、建築業（土木建築）、織糸業等も特殊なものではあろうが、取り立てて地域の経済事情に大なる影響を与えるものとは考えにくい。

○市営競輪場の問題があるが、過去において父兄の一部にも悪影響があつたことは他の競輪場の場合と同様であろうが、現在では比較的冷静な態度でいるようである。然しながら開催中は終日火花が打ち上げられ基地の子供の悲哀

を思わせるような騒音に悩まされるし、また開催中は附近の住宅にも所謂すりめいた事件も発生したりして恐れられてゐるとも言われている。

斯る面からみると競輪場の存在は環境上思わしくなく、寧ろ無いことが望ましいと考えるが、然し一面この収入が市の重要財源の一つになつてゐることや、直接ここに雇われて立ち働らく父母の人達も相当数にのぼり、収入源の一翼を担つてゐること等を思い合わせると全く痛し痒しといった現象がここにもみられる。

更に開催中はこのためにPTAの会合等にも出席いたし兼ねるという会員もあるというのが学区の現状で総会は開催中を避けるという特別の考慮を払つてゐるのが実状である。

○他方在家庭六二九世帯中、生活保護法の適用を受けてゐるもの三二、準援護を略、同数とみても凡そ十パーセントの家庭がこれに当り、教科書購入費や修学旅行費補助の法の対象となつてゐる生徒の数も市内の他の学校に比較して著しく高率を示してゐる点等も学区の生活経済を窺う一資料とも言えよう。

○之等の諸条件が生徒の日常生活の態度や学習態度に影響すると考えられる点もあり問題もあると考えられるし集金の際の状況が予想外に困難であることもこれ等の諸条件の及ぼす特別の現象であらうかと思われる。

3. 地域社会の気風の上から

交流という面から見れば、勿論須賀地区から出る人あり逆に来る人ありで、他の土地との人間交流も多分に行われているのであるが、土着の世帯が比較的多いように観察されるのは、市域として特徴的な傾向かと思われる。これは馬入川によつて、東との交通が阻害されていた関係で、一応「東の果て」との觀念からか、地域内の婚姻も多く行なわれたように考えられる。従つて現実の問題として学区内の姻戚関係が多くみられる。斯る点の関連かどうかは詳らかではないが、協同の精神に富んでいる。このことは利己的で自己本位に処理しようとする近來の考えと比較し、ゆかしさと頼もしさを感じさせる。が然し一面この考え方が自然身についたものか、生徒間の問題にしても、他の過失や思わしからざる行動についても教師には之を覆いかくし、それによつて友人を庇護したと考えるような誤つた友人愛の芽生えも感じられる。

計	女	男	
五六四	二七四	二九〇	両親ある者
七八	三七	三九	母のみ
一四	八	六	父のみ
七	五	二	両親共にないもの
六六一	三二四	三三七	在籍計

Ⅰ. 両親

真に友人を思う親切心という点からみれば望ましくない考え方で、気風の上から来る地域社会からの影響と言えるかも知れないし、この考えが強調されれば、誤った親切心が助長され、不幸な地域社会の弊風を醸成するおそれもある。良い面でありながら考え方の方向によっては感心しない結果となるおそれを含む気風であると言えよう。

これに要するに生徒をめぐる社会的、家庭的な物的精神的環境の大略である。――勿論大切な点の見落としもあるかも知れないが。――経済的にも余裕ある家庭の子弟も多いが、恵まれざる生徒が市内における他の学区に比較して其の数が多いと感じられる。

次に保護者の職業分類、両親の有無、前年度卒業生の進路状況等、結果を表にまとめて掲げ、環境考察の資料に供したい。

計	13・無業	12・その他	11・会社員	10・学校職員	9・公務員	8・工員	7・自由労務	6. 行商		5. 自宅商		4. 運輸業	3. 工業			2. 水産業			1. 農	
								その他	魚	その他	魚屋		その他	機械	木工	漁夫	加工	船主		
104	10	12	23	2	2	9	10		6	8	1	5	2	4	3	2	3	1	1	I
111	10	18	19		9	14	5	1	2	11	2	3	3	5	3	2	1	1	2	II
104	11	8	22	2	5	99 [8]	5	1	7	15	3	4	3		6	3				III
319	31	38	64	4	16	32	20	2	15	34	6	12	8	9	12	7	4	2	3	計
111	4	9	28	2	7	14	4	1	9	17	2	11	3	2	1	6	1			I
79	10	10	20		9	2	4		6	5		3	2	1	2	2	1	1	1	II
117	20	8	20	1	5	11	5	3	9	11		6	3		4	6	1	3	1	III
307	34	27	68	3	21	27	13	4	24	33	2	10	8	3	7	14	3	4	2	計
626	65	65	132	7	37	59	33	6	39	37	8	22	16	12	19	21	7	6	5	

2. 保護者職業分類

B

G

卒業生の動向

	高校入学	就職	その他	計	備考
男	公立 43 私立 35 定時制 7	68	0	153	
女	公立 45 私立 31 定時制 4	54	2	136	
計	167 [165]	122	2	289	

高校入学状況

		公立高校	男	女	計		私立高校	男	女	計
全 日 制	普 通	江 南	6	6	12	普 通	京浜女子大附属		4	4
		平 高	9		9		相 洋	7	5	12
		大 磯	6	10	16		日 大 藤 沢	5		5
		高 浜		28	28		藤 嶺 学 園	7		7
		大 秦 野	3		3		藤 嶺 女 子		1	1
	職 業	平塚（工業）	5		5		逗 子 開 成	1		1
		横 浜 商 業	1		1		武 相	1		1
		平 塚 農 業	1		1		三 浦	1		1
		鶴 見 工 業	1		1		北 鎌 倉 女 子		2	2
		川 崎 工 業	6		6		白 百 合 学 園		1	1
		神 奈 川 工 業	2	1	2		法 政 二 高	2		2
		城 東 （商 業）	2		3		荏 原	2		2
		焼 津 水 産	1		1					
定 時 制	普 通	平塚商業（普）	1	1	2	職 業	相 洋（商業）	1	2	3
		湘 南		1	1		旭ヶ丘（家庭）		5	5
	職 業	平塚商業（商）	4	2	6		藤 嶺 女 子 （商 業）		5	5
		神 奈 川 工 業	1		1		藤 沢 商 業	2		2
							鎌倉学園（商業）	2		2
							平塚学園（商業）	2	6	8
							東京高等電気	1		1
							芝 浦 工 業	1		1
						定 時	電 機 学 園	1		1

就職状況

種 別	男	女	計	備 考
製 造 業	52	33	85	
店 員	16	17	33	
運 輸				
公 務				
女 中		4	4	
計	68	54	122	

五、学習指導の能率化と一貫性

1. 学習指導の能率化

学習指導が円滑に行われしかも能率的に最大の効果をあげるには、先づなんと言つても能率的なカリキュラムが作成されていなければならない。

能率的なカリキュラムとは、指導の目標が具体的に地域化されていること。学習活動が適切に選択されていること。学習活動が、組織化されていること。指導の時期や期間や時間が適切に配当されしかも、弾力性をもっていること。誘導の計画が考えられ、評価の計画が具体的、且つ継続的になされていること。等があげられている。

尚 カリキュラムと並行して環境の整備の問題も大きな問題であり、学習形態の問題、個人差の問題、指導技術の問題等が、総合的に考えられてくる。特に能率的な学習を考えた場合は当然、小中一貫したカリキュラムを必要とする。カリキュラムにおける一貫性の問題について、カリキュラムを構成する場合左の点に特に配慮しなければならないと言われており、又そのことが、小中学校の一貫性をうち立てる上に最も根本的な考え方とされている。即ち、学年毎の内容教材配列は、相互に有機的関連をもつてまとまりをもつ次の学年への発展を含むものであり、又学年毎の構造間に、無駄な重複や断層などをなくした成長的発展性を意味するものである。

2. 小中の一貫性

小中学校を通ずる教育の目標、内容、活動を合理的に配列して教育の経済化、学習の能率化を図ることが一貫性の問題であり小中一貫の教育を確保するにはまず、その教育計画の間に一貫性が保たなければならない。そして、教育計画の一貫性を考える場合、少くとも、教育目標の一貫性、教育内容の一貫性、教育方法の一貫性教育評価の一貫性等が考えられてくる。

小中学校の教育計画に一貫性をもたせるには其の目標と内容と方法と評価に一貫性をもたせることが、どうしても必要だからである。我々が、小中学校教育の一貫性を問題とする事は、各段階における教育の無駄や障害をとり除き、その能率を高めようとするにある。即ち、小学校から中学校への転換に注目し、二つの学校段階において目的や内容や方法や評価に急激な変化や無用な重複や不当なギャップや、まさつがないようにしようとするにある。更

に言えば、小中学校の教育を全体として眺める各段階がきりはなされた部分ではなく、有機的に一体化されるためには、小中学校はそれぞれ、いかにあるべきか、又、相互に如何に関連をはかるべきかが一貫性の大きな、しかもむずかしい問題でもある。

指導目標の一貫性をはかるためには、その内容、素材を、即ち、内容的との面から見た小中の関連を考えなければならない。其の場合、次の点に注意しなければならない。まづ必要な重複はどこか。不必要な重複はどこか。断層になっているものは何か。他地域、他教科との関連事項は何か。等である。小中一貫性の問題として、大別すると次のようになる。

① 教科の面 ———— 学習指導・・・(教科指導)

② 道徳の面 ———— 生徒指導

③ 特別教育活動 ———— クラブ活動

即ち、一貫性は、小学校の基盤の上に中学校がのり、中学校の基盤の上に高等学校があらねばならないのは勿論だが、其の前に小学校の一年から六年までの一貫性がまず大切であるし、六、三、三の全学年を通した発展的一貫性でなければならない。

〔六九略〕

おわりに

小中九ヶ年教育の一貫をはかることは、いかなる角度から考察しても必要性のあるしかも重要な問題である。それだけにまた言うは易くして行いは難い問題でもある。同一地域社会にある小中ではあるがなかなか困難な問題である。

本校がおよばぬながらも、この問題と取り組み、その研究の結果をまとめたのであるが、もとより幾多の欠陥があり、その目的の万分の一にもいたらなかつたことは誠に残念である。しかし、わずかながらも、この研究を通して小中一貫という考え方について前進してきたことを何より嬉しく思っている。なお、この研究は今後に残された問題が多々あるので年を追つて研究の歩を進めて行きたいと念願している。

注 平塚市立太平洋中学校に所蔵されている。一九五九年一一月発行。

第三節 一九六〇年代の中学校

一 公立中学校卒業予定者進路希望調査の結果

公立中学校卒業予定者の進路希望調査の概要

この調査は、昭和36年3月県下公立中学校を卒業する予定のものについて昭和35年11月1日現在で卒業後の進路希望を調べた結果をまとめたものである。

(1) これによると、本年度卒業予定者は1,032人となっており、前年度卒業者数より8,181人少なく、昭和30年度以来最低の卒業者数となる見込みである。この卒業予定者数のうち、進学を希望するもの（高校通常・定時・別科）は27,058人で卒業予定者数の65.9%（男66.7%、女65.1%）（進学希望率）を占め、前年同期の63.5%より2.4%高くなっている。また、就職のみを希望するものは12,699人で30.9%を占め、前年同期より1%低い。これに定時制課程に進学しつつ就職をも希望するものを加えると就職希望者総数は13,868人で卒業予定者数の33.8%を占めることになる。

(2) 進学希望者は通常課程

く25,688人（94.9%）、定時制課程く1,252人（4.6%）、別科く118人（0.4%）という希望数になっている。

通常課程進学希望者

25,688人のうち、その81.3%の20,889人が県内の公立高校を希望し、13.6%の3,494人が県内の私立高校を希望し、残りの1,305人が県外の高

A 表

年 度	卒業予定者	進学希望者	就職希望者	その他
35.11.1	41,032 人	27,058	12,699	1,275
	100.0%	65.9	30.9	3.1
(前年度) 34.12.1	100.0%	63.5	31.9	4.6

B 表

通常課程進学希望者				
年 度	計	県内公立	県内私立	県外公私立
35.11.1	25,688 人	20,889	3,494	1,305
	100.0%	81.3	13.6	5.1
(前年度) 34.12.1	100.0%	77.7	17.4	4.8

校を希望するものとなっている。（B表参照）

この割合を前年同期の割合と比較するとB表にみられるように県内の公立高校に進学希望するものは前年同期より3.6%高くなつた反面、県内の私立高校に進学希望するものは逆に3.8%低くなつてあらわれた。

しかし、例年の傾向から推測すると、入学志願をする時期までには県内の公立高校志願者は15~18%程度減ることが予想され、その分が県内の私立高校、県外の高校等へ廻るので、この学校種別間の割合は大きく変動するものと思われる。

(3) 次に県内の公立高校進学希望者24,383人について普通課程と職業課程別の希望者に分けると（C表参照）その70%が普通課程へ、30%が職業課程へ進学することを希望している。このうちから私立高校進学希望者数を除いた公立高校進学希望者数は統計表第1表、第2表に掲げてあるとおり、普通課程では14,677人、職業課程では6,212人である。この公立高校進学希望者数を募集定員（昭和35年度募集定員から臨時増を除いた数）の上からながめると、普通課程にあつては総数で定員の1.29倍に当り、これを学区別にみると、最も高いところは相模原学区で、1.65倍の希望者数を示し、低いところでは津久井学区の0.56倍がみられる。

C 表

県内公私立通常過程進学希望者		
計	普 通	職 業
24,383 人	17,022	7,361
100.0%	69.8	30.2

次に職業課程は総数で定員の1.59倍である。学科課程別には学科間の差が大きい。即ち、工業科が2.04倍、商業科が1.67倍、農業科、水産科、家庭科が定員以下という倍率がみられる。

(4) 就職希望者総数は、13,868人（就職のみの希望者12,699人、定時制課程に進学しつつ就職をも希望するもの1,169人）で卒業予定者総数の33.8%を占め、前年同期の35.0%よりみると約1%下つたが、これらのものが希望する仕事の産業は製造業が11,344人で、全体の80%になつており、他は卸売小売業、サービス業において僅かに4%みられる程度である。

学区別通常普通課程、学科別通常職業課程、定時制課程等の希望者数は次のとおりである。

第1表 学区別通常普通課程進学希望者数

学区名	定員(A)	計(B)	男	女	倍率(B/A)
計	11,400	14,677	6,372	8,305	1.29
横浜地区	3,450	4,349	2,158	2,191	1.26
川崎地区	1,500	2,124	937	1,187	1.42
横須賀三浦地区	1,550	1,719	448	1,271	1.11
鎌倉湘南地区	1,150	1,799	961	838	1.56
平塚大磯地区	900	1,269	530	739	1.41
秦野伊勢原地区	500	605	270	335	1.21
足柄上下地区	1,350	1,615	563	1,052	1.20
相模原地区	300	495	174	321	1.65
愛甲高座中部地区	550	618	294	324	1.12
津久井地区	150	84	37	47	0.56

(注) 募集定員は昭和35年度募集定員から臨時増を除いた数である。

第2表 学科別通常職業課程進学希望者数

課程名	定員(A)	計(B)	男	女	倍率(B/A)
計	3,910	6,212	4,700	1,512	1.59
農業	560	266	250	16	0.48
水産	120	49	49	—	0.41
工業	1,750	3,578	3,528	50	2.04
商業	1,300	2,165	873	1,292	1.67
家庭	180	154	—	154	0.86

(注) 募集定員は昭和35年度募集定員による。

第3表 定時制課程進学希望者数

課程		計	県内	県外
公立	普通課程	543	533	10
	職業課程	669	663	6
私立	普通課程	17	12	5
	職業課程	23	14	9
計		1,252	1,222	30

注 『教委時報』第13号(1960年12月15日)。

二 一九六〇年度第3学年学習検査実施要綱・実施要領

昭和35年度神奈川県中学校第3学年学習検査実施要綱および同実施要領について

このことについて、県教育委員会は、12月15日づけ35指第298号により各教育事務所長、ゆかり、秦野各養護学校長、横浜市・横須賀市・川崎市各教育長、県学事文書課長、横浜国立大学横浜、鎌倉各中学校長、各都道府県教育長あて教育長名をもつて次のとおり通知し、この実施についての協力を依頼した。

なおこの学習検査が昨年度と異なる点は、英語を新たに検査科目に加えたことである。昨年度は県教育委員会が英語検査を行ったが、これまでの経過もあり日時、取扱い等が他の学習検査科目とは異なり、その結果は指導要録に記入せず入試選抜の資料とはしなかった。本年度は検査上の取扱いも国語、社会、数学、理科等と同じとし結果は要録に記入し、入試の資料とすることになっている。

昭和35年度神奈川県中学校第3学年学習検査実施要綱

Ⅰ 受検者

(1) 昭和36年3月中学校卒業見込みの者

(2) 学校教育法施行規則第63条各号の一に該当するもの (注)

(3) 昭和35年3月または、それ以前に中学校を卒業した者

2 検査科目

国語、社会、数学、理科、音楽、図工、保健体育、職業・家庭および英語

3 問題作成者 神奈川県教育委員会

4 検査日時 昭和36年1月25日(水)および26日(木)

5 検査会場

(1) 本県内の国・公立中学校を昭和36年3月卒業見込みの者は、その在籍する中学校

(2) 昭和35年3月または、それ以前に本県の国・公立中学校を卒業した者はその出身中学校

(3) 県内私立中学校および県外の中学校からの受検者は、県教育委員会の指定する検査会場

6 検査委員会および採点委員 中学校の教員

7 採点会場 検査会場に同じ

8 この要綱に定めるもののほか必要な事項は、県教育委員会が別に定める。

昭和35年度神奈川県中学校第3学年学習検査実施要領

Ⅰ 学習検査管理委員会

(1) 県教育委員会は、本学習検査を実施するため、学習検査管理委員会（以下「管理委員会」という。）を各国・公立中学校におく。

(2) 管理委員会は、次の者をもつて組織する。

イ 当該中学校長

ロ 当該中学校検査委員

ハ 当該中学校採点委員

(3) 管理委員会の委員長は、当該中学校長とする。

(4) 管理委員会委員長は、学習検査の実施に必要な次の事務を行なう。

イ 学習検査検査委員の指定

ロ 学習検査採点委員の指定

ハ 学習検査採点会場の決定

ニ 学習検査用紙の管理

ホ 学習検査成績個人票の記載、保管、送付の方法の決定

ヘ その他、学習検査実施に伴う必要事項の決定

(5) 学習検査検査委員は、学習検査実施に必要な次の事務を行なう。

イ 学習検査受検者の監督

ロ 学習検査用紙の保管

ハ 学習検査会場の整備

ニ その他、学習検査実施に伴う必要事項

(6) 学習検査採点委員は、採点に必要な次の事務を行なう。

イ 採点会場の整備

ロ 採点方法の手順決定

ハ 答案の採点

ニ 成績個人票の記入

ホ 得点集計表の記入（抽出校のみ）

- へ 答案用紙の保管

ト 正答表の保管

チ その他、採点に必要な事項

2 学習検査用紙等の配布保管

(1) 県教育委員会教育長は、学習検査実施の2日前までに、各教育事務所長ならびに横浜市、横須賀市、川崎市の各教育委員会（以下「三市教育委員会」という。）教育長に下記のものを送付する。

イ 学習検査用紙

ロ 学習検査実施上の注意書

ハ 得点集計表（抽出校のみ）

ニ 正答表

ホ 学習検査成績個人票
- (2) 各教育事務所長ならびに三市教育委員会教育長は、学習検査実施日の前日までに学習検査用紙を各管理委員立会いのもとに、各管理委員会委員長（中学校長）に配布し、学習検査開始のときまで、保管を依頼する。

(3) 各教育事務所長ならびに三市教育委員会教育長は、学習検査実施の前日までに「学習検査実施上の注意書」を各管理委員会委員長（中学校長）に学級数ずつ配布する。

(4) 各教育事務所長ならびに三市教育委員会教育長は、学習検査採点実施日の前日までに「学習検査成績個人票」「正答表」「得点分布表（抽出校のみ）」を各管理委員会委員長（中学校長）に送付し、採点開始のときまで保管を依頼する。

3 学習検査実施期日、教科および時間割

(1) 日 時 昭和36年1月25日(水)および26日(木)

(2) 教科および時間割

1月25日(水)		予鈴	9.30
		音楽	9.40 10.10
		休憩	
		数学	10.30 11.20
		休憩	
		保体	11.40 12.10
		昼食	
		予鈴	13.00
		職・家	13.10 13.40
		休憩	
		英語	14.00 14.50

1月26日(木)		予鈴	9.30
		国語	9.40 10.30
		休憩	
		理科	10.50 11.40
		昼食	
		予鈴	12.30
		社会	12.40 13.30
		休憩	
		図工	13.50 14.20

- 国語、社会、数学、理科および英語 各50分
- 音楽、図工、保健体育および職業・家庭 各30分
- 4 採点方法および採点後の処理方法
- (1) 採点は、「正答表」および「採点基準」に従って行なう。
- (2) 採点後直ちに検査会場校は「学習検査成績個人票」に記入し、正副三通を作成する。
- (3) 得点集計分布表は抽出校のみ作成し、2月4日（土）必着で県教育庁指導課長あてに直送する。
- (注)
- 1 外国において、学校教育における9年の課程を修了した者
- 2 文部大臣の指定した者
- 3 その他高等学校において、中学校を卒業した者と同等以上の学力がある
と認めた者

注 『教委時報』第一三号（一九六〇年二月一五日）。

昭和36年度中学校学力調査

学力と教育条件

その1 統計表

神奈川県教育委員会

Ⅰ 学校規模と学力 —その1 学級数と学力—

学級数の階級別5(4)教科の階級平均値

区 分		3 学級以下	4～9	10～15	16～21	22～27	28～33	34～39	40 学級以上
平 均 値	5 教科	(6)	(42)	(45)	(31)	(36)	(28)	(7)	(11)
		54.2	55.4	55.4	57.7	61.4	59.1	58.9	59.6
	4 教科	28.8	28.1	28.3	29.5	30.1	29.7	29.5	29.9

(注) () 内は学校数を示し、4教科の場合も同数とする。

都市・農村別・郡別の平均学級数

区 分	都 市						農 村					
	5 教科			4 教科			5 教科			4 教科		
群 別	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
学 校 数	17	85	14	15	79	22	11	36	16	10	43	10
平均学級数	27.6	25.0	23.2	25.7	25.2	24.7	11.4	10.3	8.0	10.9	10.3	7.3

地域類型別・学級数別階級平均値

区 分	3 学級以下	4～9	10～15	16～21	22～27	28～33	34～39	40 以上
工 業 市 街		(1) 55.8 28.5	(2) 57.6 30.7	(9) 55.1 28.6	(12) 57.1 29.0	(8) 60.2 30.2	(1) 54.4 28.2	(2) 59.0 30.0
商 業 市 街				(1) 66.1 31.7	(4) 57.5 29.5	(5) 58.4 30.0	(1) 56.5 29.0	(3) 60.1 30.1
住 宅 市 街			(3) 62.5 28.5	(8) 59.8 30.5	(14) 62.3 31.2	(10) 60.5 29.9	(2) 62.2 30.8	(5) 59.8 29.7
その他の市街	(1) 60.0 32.4	(3) 58.1 30.8	(10) 55.9 28.7	(1) 59.7 29.1	(2) 63.6 31.2	(4) 53.8 27.6	(3) 59.1 29.3	(1) 58.9 30.3
準 市 街	(1) 61.8 29.7	(6) 54.2 28.5	(13) 54.5 28.6	(3) 58.9 30.9	(3) 58.9 30.1	(1) 60.5 30.7		
都市近郊農村		(5) 51.8 27.0	(4) 50.5 26.8	(4) 51.5 27.8	(1) 49.8 26.5			
普 通 農 村		(14) 55.7 27.9	(13) 55.6 28.5	(4) 60.7 29.6				
農 山 村	(4) 50.9 27.7	(13) 52.5 28.0		(1) 56.8 29.7				
全 県	(6) 54.2 28.8	(42) 55.4 28.1	(45) 55.4 28.3	(31) 57.7 29.5	(36) 61.4 30.1	(28) 59.1 29.7	(7) 58.9 29.5	(11) 59.6 29.9

(注) () 内は学校数を示す 平均値の上段は 5 教科 下段は 4 教科を示す

—その2 1学級当たり生徒数と学力—

1 学級当たり生徒数別階級別5(4)教科の階級平均値

区 分		29人以下	30～39	40～44	45～46	47～48	49～50	51～52	53～54	55人以上
平均 値	5教科	(1) 55.8	(16) 53.9	(44) 54.6	(28) 56.3	(47) 58.0	(54) 59.0	(13) 59.4	(2) 56.8	(1) 57.4
	4教科	29.3	28.6	28.3	28.5	29.9	29.4	30.0	28.3	30.1

注 () 内は学校数を示し、4教科の場合も同数とする。

都市農村別得点階層別1学級当たり生徒数

区 分	都 市						農 村					
	5教科			4教科			5教科			4教科		
群 別	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
学 校 数	17	85	14	15	79	22	11	36	16	10	43	10
平均1学級 当り生徒数	49.4	48.2	47.6	48.7	48.3	48.3	42.0	42.8	40.9	40.6	42.5	40.8

地域類型別Ⅰ学級当たり生徒数別学校平均得点

区 分	1～29	30～39	40～44	45～46	47～48	49～50	51～52	53～54	55人以上
工 業 市 街				(4) 58.1 (4) 29.1	(12) 56.5 (12) 29.9	(13) 57.2 (13) 28.7	(5) 59.1 (5) 30.0	(1) 55.4 (1) 27.9	
商 業 市 街				(2) 56.8 (2) 28.9	(5) 59.5 (5) 30.0	(7) 59.3 (7) 30.2			
住 宅 市 街				(5) 59.8 (5) 28.6	(10) 61.5 (10) 31.1	(20) 61.6 (20) 30.5	(5) 60.8 (5) 30.6	(1) 58.1 (1) 28.6	(1) 57.4 (1) 30.1
その他の市街			(8) 55.7 (8) 29.5		(6) 60.0 (6) 30.1	(8) 49.7 (8) 28.4	(3) 57.6 (3) 29.0		
準 市 街		(1) 56.9 (1) 30.2	(12) 55.5 (12) 28.7	(6) 56.0 (6) 28.9	(7) 56.4 (7) 29.5	(1) 64.4 (1) 31.6			
都市近郊農村		(1) 52.1 (1) 28.6	(3) 50.4 (3) 26.7	(5) 50.3 (5) 26.9	(2) 52.1 (2) 27.8	(3) 52.7 (3) 27.1			
普 通 農 村		(3) 58.9 (3) 29.3	(16) 55.3 (16) 28.1	(6) 57.3 (6) 29.1	(4) 54.9 (4) 28.1	(2) 59.8 (2) 27.5			
農 山 村	(1) 55.8 (1) 29.3	(11) 52.5 (11) 28.2	(5) 50.6 (5) 27.1		(1) 56.8 (1) 29.7				
全 県	(1) 55.8 (1) 29.3	(16) 53.9 (16) 28.6	(44) 54.6 (44) 28.3	(28) 56.3 (28) 28.5	(47) 58.0 (47) 29.9	(54) 59.0 (54) 29.4	(13) 59.4 (13) 30.0	(2) 56.8 (2) 28.3	(1) 57.4 (1) 30.1

注 () 内は学校数を示す。 平均値は、上段は5教科、下段は4教科を示す。

2 進学希望率と学力

進学希望率階級別 5 (4) 教科学校平均得点

区 分		39% 以下	40～ 44	45～ 49	50～ 54	55～ 59	60～ 64	65～ 69	70～ 74	75～ 79	80～ 84	85～ 89	90% 以上
全 県	5 教科階 級平均値	(25) 54.2	(10) 52.3	(13) 53.1	(21) 54.8	(15) 54.4	(26) 56.5	(28) 57.5	(29) 59.4	(19) 60.7	(12) 61.7	(6) 63.7	(2) 69.1
	4 教科階 級平均値	27.9	27.5	27.6	28.4	28.1	29.4	29.2	29.9	30.7	30.7	31.3	33.0

(注) () 内は学校数を示し 4 教科の場合も同数とする。

都市・農村別、得点階層別進学希望率

区 分	都 市						農 村					
	5 教科			4 教科			5 教科			4 教科		
群 別	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
学 校 数	15	81	14	14	75	21	11	36	16	10	43	10
平均進学希望率	82.3	67.5	64.4	77.8	68.9	64.0	68.2	49.8	41.1	64.9	50.6	37.9

地域類型別進学希望率別学校平均得点

区 分	39 以下	40～ 44	45～ 49	50～ 54	55～ 59	60～ 64	65～ 69	70～ 74	75～ 79	80～ 84	85～ 89	90 以上
工 業 市 街	(1) 55.8 28.5		(1) 55.9 27.8	(5) 56.3 28.1	(5) 55.7 28.1	(5) 58.3 29.9	(7) 56.1 29.3	(7) 60.6 30.5	(3) 55.3 29.9		(1) 58.9 30.4	
商 業 市 街							(6) 58.3 29.5	(4) 56.6 29.5	(2) 56.8 29.1	(1) 66.7 33.2		(1) 68.6 32.9
住 宅 市 街	(3) 63.5 29.9			(1) 55.3 27.9		(7) 57.7 29.5	(6) 59.7 30.0	(11) 59.5 29.7	(5) 62.8 31.3	(4) 63.7 30.9	(4) 68.5 32.8	(1) 69.6 33.0
その他の市街	(2) 60.3 30.3	(1) 57.1 30.8	(1) 54.9 28.7	(3) 57.8 30.4	(3) 49.9 26.9	(3) 58.1 30.1	(4) 57.7 29.0	(3) 57.7 28.2	(3) 60.1 29.6	(2) 58.6 29.8		
準 市 街	(3) 56.1 29.0		(4) 50.2 27.0	(3) 53.9 28.3	(1) 48.9 26.3	(6) 57.2 29.1	(2) 54.4 29.9	(1) 56.9 30.2	(4) 62.3 31.6	(3) 60.2 29.7		
都市近郊農村	(4) 50.6 26.8	(2) 49.5 26.9	(1) 57.1 27.4	(3) 50.5 27.1	(1) 50.9 28.2	(2) 51.5 27.2	(1) 53.0 28.2					
普 通 農 村	(6) 50.0 25.7	(3) 55.6 28.3	(4) 55.6 28.4	(5) 55.1 28.1	(3) 58.6 29.1	(1) 59.4 31.8	(2) 58.7 26.1	(3) 63.1 30.8	(2) 63.3 31.7	(1) 62.7 32.1	(1) 49.6 26.5	
農 山 村	(6) 52.8 28.3	(4) 50.0 26.3	(2) 49.9 26.5	(1) 51.5 29.0	(2) 56.3 29.5	(2) 50.5 28.9				(1) 60.8 30.6		
全 県	(25) 54.2 27.9	(10) 52.3 27.5	(13) 53.1 27.6	(21) 54.8 28.4	(15) 54.4 28.1	(26) 56.5 29.4	(28) 57.5 29.2	(29) 59.4 29.9	(19) 60.7 30.7	(12) 61.7 30.7	(6) 63.7 31.3	(2) 69.1 33.0

(注) () 内は学校数を示す。 平均値の上段は5教科、下段は4教科を示す。

3 教員構成と学力 —その1 教員1人当たり生徒数と学力—

教員1人当たり生徒数の階級別5(4)教科学校平均得点

区 分		1～ 19人	20～ 21	22～ 23	24～ 25	26～ 27	28～ 29	30～ 31	32～ 33	34～ 35	36～ 37	38～ 39	40人 以上
平均 値	5教科	(13) 55.0	(4) 54.9	(2) 52.3	(13) 55.4	(18) 53.2	(20) 55.4	(34) 55.7	(39) 58.3	(42) 59.9	(18) 59.3	(2) 55.3	(1) 64.5
	4教科	28.9	28.9	27.2	28.6	27.8	28.6	28.9	29.6	29.7	30.3	28.8	31.6

注. () 内は学校数を示し、4教科の場合も同数とする。

都市農村別得点階層別1教員当たり生徒数

区 分	都 市						農 村					
	5教科			4教科			5教科			4教科		
群 別	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
学 校 数	17	85	14	15	79	22	11	36	16	10	43	10
平均1教員 当たり生徒数	33.2	32.9	32.2	31.5	33.1	33.0	26.3	26.5	23.9	25.1	26.4	23.8

地域類型別教員1人当り生徒数別学校平均得点

区 分	1～ 19	20～ 21	22～ 23	24～ 25	26～ 27	28～ 29	30～ 31	32～ 33	34～ 35	36～ 37	38～ 39	40 以上
工 業 市 街						(1) 58.0 28.4	(6) 56.3 29.3	(9) 54.1 28.1	(13) 59.8 30.1	(5) 58.4 29.7	(1) 54.1 28.1	
商 業 市 街							(3) 57.6 29.6	(3) 57.3 29.4	(3) 57.8 29.2	(4) 62.9 31.3	(1) 56.4 29.4	
住 宅 市 街	(1) 68.6 32.9					(2) 57.6 28.8	(4) 58.9 31.1	(10) 63.3 31.1	(17) 60.6 29.9	(7) 59.7 30.3		(1) 64.5 31.6
その他の市街	(1) 60.0 32.4			(3) 55.9 30.1	(3) 54.4 28.8	(1) 54.7 27.0	(3) 57.4 29.2	(5) 58.4 29.3	(7) 59.1 29.3	(2) 54.0 28.4		
準 市 街	(1) 61.8 29.7			(2) 55.7 28.9	(5) 52.5 27.7	(7) 55.8 29.3	(6) 57.4 29.0	(5) 56.5 29.5	(1) 64.4 31.6			
都市近郊農村				(1) 49.2 27.6	(4) 51.0 26.8	(1) 51.9 27.1	(5) 50.6 27.0	(3) 53.0 27.6				
普 通 農 村	(1) 46.3 24.7	(1) 65.0 31.8	(1) 55.6 29.1	(5) 57.9 28.9	(4) 56.7 27.4	(8) 54.6 28.3	(6) 53.5 27.8	(4) 61.7 31.0	(1) 56.8 22.8			
農 山 村	(9) 53.1 28.4	(3) 51.6 27.9	(1) 49.0 25.2	(2) 51.1 26.1	(2) 50.9 29.0		(1) 56.8 29.7					
全 県	(13) 55.0 28.9	(4) 54.9 28.9	(2) 52.3 27.2	(13) 55.4 28.6	(18) 53.2 27.8	(20) 55.4 28.6	(34) 55.7 28.9	(39) 58.3 29.6	(42) 59.9 29.7	(18) 59.3 30.3	(2) 55.3 28.8	(1) 64.5 31.6

注. () 内は学校数を示す。平均値の上段は5教科、下段は4教科を示す。

—その2 I 教科専任担当者率と学力—

I 教科専任担当者の階級別 5 (4) 教科学校平均得点

区 分		10% 以下	11～ 12	21～ 30	31～ 40	41～ 50	51～ 60	61～ 70	71～ 80	81～ 90	91～ 100
平均 値	5 教科	(10) 54.4	(13) 53.3	(9) 55.7	(9) 54.8	(14) 54.4	(14) 54.8	(9) 53.7	(28) 58.5	(43) 57.6	(57) 58.5
	4 教科	28.3	27.6	28.5	28.5	28.6	28.3	27.9	29.8	29.3	29.6

注. () 内は学校数を示し、4 教科の場合も同数とする。

都市・農村別 得点階層別 I 教科専任担当者率

区 分	都 市						農 村					
	5 教科			4 教科			5 教科			4 教科		
群 別	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
学 校 数	16	84	14	14	78	22	11	35	16	9	43	10
平均 I 教科 専任担当者率	91.1	84.4	86.1	81.4	87.7	80.8	52.9	48.6	35.0	54.3	48.1	28.9

地域類型別Ⅰ教科専任担当率別5(4)教科学校平均得点

区 分	10 以下	11～ 20	21～ 30	31～ 40	41～ 50	51～ 60	61～ 70	71～ 80	81～ 90	91～ 100
工 業 市 街	(1) 0							(4) 56.3 28.7	(16) 57.5 29.5	(14) 57.5 29.3
商 業 市 街								(3) 61.1 30.5	(4) 63.1 31.8	(7) 55.7 28.6
住 宅 市 街	(1) 0		(1) 60.1 30.1					(7) 61.4 31.8	(6) 58.0 29.1	(27) 61.6 30.3
その他の市街	(1) 0	(1) 58.4 30.3		(1) 57.1 30.8	(2) 56.8 29.2	(2) 55.1 28.3	(1) 52.9 29.1	(3) 59.0 29.7	(7) 57.6 28.8	(7) 57.0 29.0
準 市 街	(3) 55.2 28.3		(5) 58.0 29.5	(1) 61.8 29.7	(2) 51.9 27.6	(4) 52.7 28.8	(2) 54.9 28.7	(4) 59.2 30.6	(4) 55.8 28.3	(2) 60.6 30.7
都市近郊農村				(3) 51.3 26.8	(1) 49.2 27.6	(3) 52.5 27.1	(2) 52.2 27.5	(3) 50.3 26.6	(2) 51.0 27.8	
普 通 農 村		(7) 55.4 27.4	(2) 51.4 27.0	(3) 56.9 29.0	(5) 55.3 28.9	(4) 58.2 28.4	(2) 54.9 27.3	(4) 59.0 28.9	(4) 57.3 29.5	
農 山 村	(4) 53.7 28.4	(5) 49.5 27.3	(1) 49.0 25.2	(1) 50.3 29.0	(4) 54.7 28.7	(1) 56.8 29.7	(2) 53.3 27.4			
全 県	(10) 54.4 28.3	(13) 53.3 27.6	(9) 55.7 28.5	(9) 54.8 28.5	(14) 54.4 28.6	(14) 54.8 28.3	(9) 53.7 27.9	(28) 58.5 29.8	(43) 57.6 29.3	(57) 58.5 29.6

注。()内は学校数を示し、平均値の上段は5教科、下段は4教科を示す。

—その3 担当教科専攻者率と学力—

担当教科専攻者率の階級別5（4）教科学校平均得点

区 分		60% 以下	61～65	66～70	71～75	76～80	81～85	86～90	91～95	96～ 100
平均 値	5教科	(22) 53.1	(8) 54.4	(13) 55.8	(17) 57.3	(24) 57.1	(21) 55.4	(24) 55.6	(37) 59.5	(40) 59.1
	4教科	(42) 28.6	(7) 28.6	(15) 27.6	(17) 28.7	(16) 29.1	(24) 29.4	(24) 29.4	(32) 29.2	(29) 30.0

注 （ ）内は学校数を示し、4教科の場合も同数とする。

都市・農村別、得点階層別担当教科専攻者数

区 分	都 市						農 村					
	5教科			4教科			5教科			4教科		
群 別	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
学 校 数	17	85	14	15	79	22	11	36	16	10	43	10
平均担当教 科専攻者率	91.7	87.5	89.4	84.8	84.8	82.0	78.3	71.1	68.1	72.0	59.8	68.6

担当教科専攻者率別、地域類型別 5. 4 教科平均得点

区 分	60以下	61～65	66～70	71～75	76～80	81～85	86～90	91～95	96～100
工 業 市 街			(1) 58.4 (1) 30.7	(1) 62.3 (2) 29.4		(4) 55.3 (7) 29.0 29.0	(7) 56.1 (8) 29.7	(11) 59.7 (9) 29.4	(11) 57.6 (4) 28.7
商 業 市 街		(2) 56.3 (3) 28.8	(1) 59.7 (2) 31.5	(2) 63.1	(3) 56.6	(1) 56.4		(2) 55.5 (3) 28.3	(3) 63.1 (5) 31.2
住 宅 市 街		(1) 56.8 (3) 28.7	(2) 59.9 (1) 34.3 (2) 30.2	(5) 62.3 (2) 30.5	(1) 58.8 (3) 31.3	(3) 60.8 (10) 30.0	(4) 61.5 (3) 30.0	(11) 63.0 (9) 30.8	(15) 59.8 (9) 30.2
その他の市街	(1) 54.9 (3) 30.1	(1) 52.9	(3) 55.2 (1) 28.7		(4) 58.3 (2) 29.2	(4) 56.6 (4) 29.7	(1) 59.8 (3) 30.1	(4) 58.9 (4) 29.8	(7) 57.6 (5) 28.7
準 市 街	(2) 54.8 (8) 29.5		(2) 54.1 (2) 30.7	(3) 52.7 (3) 28.5	(7) 59.4 (2) 28.3	(4) 50.2 (2) 27.9	(5) 56.1 (6) 29.0	(3) 60.2 (1) 26.2	(1) 64.4 (2) 31.7
都市近郊農村	(1) 51.9 (1) 27.1		(1) 51.3 (3) 26.3	(1) 49.8 (1) 26.7	(3) 51.3 (1) 26.5	(1) 50.7	(4) 49.9 (1) 27.4	(3) 53.3 (5) 27.5	
普 通 農 村	(8) 54.5 (13) 27.9	(2) 52.5 (4) 28.3	(1) 53.7 (3) 29.7	(3) 55.0 (3) 28.2	(5) 56.5 (4) 28.5	(4) 56.2	(2) 52.2 (2) 28.4	(3) 61.6	(3) 58.3 (3) 31.0
農 山 村	(10) 51.6 (11) 28.2	(2) 54.1 (1) 25.2	(2) 54.7 (1) 26.0	(2) 50.5 (3) 29.0	(1) 57.1		(1) 51.5		
全 県	(22) 53.1 (42) 28.6	(8) 54.4 (7) 28.6	(13) 55.8 (15) 27.6	(17) 57.3 (17) 28.7	(24) 57.1 (16) 29.1	(21) 55.4 (24) 29.4	(24) 55.6 (24) 29.4	(37) 59.5 (32) 29.2	(40) 59.1 (29) 30.0

注. () 内は学校数を示し、平均値の上段は5教科、下段は4教科を示す。

4 私費教育費と学力

私費教育費の階級別 5 (4) 教科学校平均得点

区 分		1,000 円 未満	1,000～ 1,999	2,000～ 2,999	3,000～ 3,999	4,000～ 4,999	5,000～ 5,999	6,000 円 以上
全 県	5 教科	(8) 57.2	(82) 57.8	(97) 56.4	(11) 58.1	(5) 56.7	(1) 54.1	(2) 57.5
	4 教科	29.4	29.5	28.7	29.6	30.2	26.7	28.9

注. () 内は学校数を示し、4教科の場合も同数とする。

都市・農村別 得点階級別私費教育費

区 分	都 市						農 村					
	5 教科			4 教科			5 教科			4 教科		
群 別	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
学 校 数	17	85	14	15	79	22	11	36	16	10	43	10
平均生徒 1 人 当り年間私費 支出額	1,829	2,234	2,350	1,987	2,159	2,432	1,655	2,185	1,813	2,000	2,034	1,840

地域類型別生徒1人当り私費教育費別5(4) 教科学校平均得点

区 分	999 以下	1,000～ 1,999	2,000～ 2,999	3,000～ 3,999	4,000～ 4,999	5,000～ 5,999	6,000 以上
工 業 市 街		(8) 57.8 30.0	(23) 56.8 29.0	(4) 59.5 29.5			
商 業 市 街		(7) 59.4 30.3	(6) 58.3 29.7				(1) 59.7 29.3
住 宅 市 街	(1) 58.4 28.8	(13) 63.6 31.7	(25) 60.3 28.5	(3) 57.0 29.2			
その他の市街	(1) 60.7 30.7	(12) 58.9 29.9	(9) 55.0 28.4	(1) 55.2 27.5	(1) 60.0 32.4	(1) 54.1 26.7	
準 市 街		(15) 57.0 29.3	(9) 54.5 28.4	(1) 57.3 32.3	(2) 58.0 29.3		
都市近郊農村		(1) 51.1 27.3	(12) 51.2 27.0	(1) 52.1 28.6			
普 通 農 村	(5) 57.9 29.9	(16) 55.5 27.7	(9) 55.8 28.3	(1) 65.4 31.5			
農 山 村	(1) 49.1 26.0	(10) 52.8 28.3	(4) 50.7 26.9		(2) 53.9 30.0		(1) 55.3 28.4
全 県	(8) 57.2 29.4	(82) 57.8 29.5	(97) 56.4 28.7	(11) 58.1 29.6	(5) 56.7 30.2	(1) 54.1 26.7	(2) 57.5 28.9

注. () 内は学校数を示す。平均値は、上段は5教科、下段は4教科を示す。

5 設備と学力 —その1 図書の保有率と学力—

図書保有率の階級別5(4)教科学校平均得点

区 分		39% 以下	40～ 49	50～ 59	60～ 69	70～ 79	80～ 89	90～ 99	100～ 109	110～ 119	120～ 139	140～ 159	160 以上
平均 値	5教科	(15) 59.3	(14) 55.8	(13) 56.2	(22) 58.0	(15) 55.6	(25) 56.5	(17) 57.2	(15) 58.2	(10) 58.0	(27) 57.1	(17) 56.8	(16) 57.1
	4教科	29.5	28.5	28.9	29.6	28.2	29.3	29.4	29.3	30.8	29.0	29.9	29.2

注. () 内は学校数を示し、4教科の場合も同数とする。

都市・農村別 得点階層別図書の保有率

区 分	都 市						農 村					
	5教科			4教科			5教科			4教科		
群 別	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
学 校 数	17	85	14	15	79	22	11	36	16	10	43	10
平均図書保有率	84.4	81.7	69.8	91.0	84.0	61.5	123.0	118.5	125.8	129.3	116.6	132.7

地域類型別 図書保有率別 5 (4) 教科学校平均得点

区 分	39 以下	40～ 49	50～ 59	60～ 69	70～ 79	80～ 89	90～ 99	100～ 109	110～ 119	120～ 139	140～ 159	160 以上
工 業 市 街	(3) 56.0 28.5	(4) 53.7 28.3	(1) 53.3 28.4	(9) 57.2 29.2	(5) 56.8 28.6	(3) 60.0 30.2	(3) 58.9 29.4	(2) 61.1 30.6		(4) 58.2 30.4	(1) 58.8 30.1	
商 業 市 街	(1) 57.1 29.2	(1) 59.7 29.3	(2) 55.8 29.0		(2) 55.8 28.7	(3) 61.0 30.9	(1) 56.5 29.0		(1) 68.6 32.9	(1) 66.1 31.7	(2) 55.5 29.5	
住 宅 市 街	(5) 63.7 30.5	(5) 59.0 29.5	(3) 58.1 29.9	(7) 61.1 32.1	(2) 60.9 29.6	(6) 59.6 29.9	(4) 58.7 31.0	(4) 61.2 29.4	(1) 68.6 32.9	(4) 65.8 31.9		(1) 59.8 30.1
その他の市街	(3) 57.1 29.4	(1) 59.8 29.8	(4) 55.0 28.0	(2) 55.5 28.1	(3) 55.9 27.8	(2) 56.6 30.4	(1) 58.8 31.3	(2) 58.4 29.8	(2) 59.5 29.0	(1) 52.9 29.1	(3) 59.8 31.1	(1) 62.1 30.2
準 市 街				(1) 49.1 27.4		(5) 53.9 28.6	(3) 56.7 28.5	(4) 56.5 29.0	(1) 58.7 30.6	(1) 56.5 29.0	(5) 56.9 29.9	(2) 60.7 30.2
都市近郊農村	(1) 51.9 27.1	(3) 50.7 26.5	(1) 51.1 27.3	(1) 51.3 26.7	(2) 50.5 26.9	(2) 50.4 27.2			(1) 57.1 27.4	(2) 51.4 28.0	(1) 49.2 27.6	
普 通 農 村	(2) 61.3 30.1		(2) 60.3 30.3	(2) 61.1 32.0	(1) 48.1 26.6	(3) 52.9 28.4	(3) 56.0 28.8	(1) 61.4 29.6	(4) 51.9 25.8	(6) 55.5 27.1	(3) 60.6 30.7	(4) 55.6 26.8
農 山 村						(1) 49.5 27.0	(2) 53.8 27.8	(2) 50.8 27.7		(3) 50.5 26.7	(2) 50.2 28.3	(8) 47.5 28.8
全 県	(15) 59.3 29.5	(14) 55.8 28.5	(13) 56.2 28.9	(22) 58.0 29.6	(15) 55.6 28.2	(25) 56.5 29.3	(17) 57.2 29.4	(15) 58.2 29.3	(10) 58.0 30.8	(27) 57.1 29.0	(17) 56.8 29.9	(16) 57.1 29.2

注. () 内は学校数を示す。平均値は、上段は 5 教科、下段は 4 教科を示す。

—その2 理科設備不足率と学力—

理科設備不足率の階級別理科の得点

区 分	20% 以下	20～ 29.9	30～ 39.9	40～ 49.9	50～ 59.9	60～ 69.9	70～ 79.9	80～ 89.9	90% 以上
平均値	(3) 63.5	(3) 59.9	(2) 59.5	(35) 58.4	(76) 57.8	(64) 55.3	(12) 55.9	(8) 53.7	(3) 59.6

注. () 内は学校数を示す。

都市・農村別 得点階級別理科設備の不足率

区 分	都 市			農 村		
群 別	上	中	下	上	中	下
学 校 数	16	84	14	11	36	16
平均理科設備不足率	53.1	58.9	60.5	54.7	60.4	64.2

地域類型別理科設備不足率別理科学校平均得点

区 分	20 以下	20～ 29.9	30～ 39.9	40～ 49.9	50～ 59.9	60～ 69.9	70～ 79.9	80～ 89.9	90 以上
工 業 市 街			(1) 59.5	(8) 56.6	(14) 58.0	(10) 56.9	(1) 54.1	(1) 58.4	
商 業 市 街				(1) 56.5	(10) 59.5	(1) 59.3		(2) 57.3	
住 宅 市 街	(2) 63.1	(1) 58.8		(6) 65.4	(12) 62.1	(15) 58.7	(5) 59.7	(1) 59.5	
その他の市街				(5) 59.0	(12) 56.9	(5) 56.2		(1) 52.9	(2) 60.3
準 市 街	(1) 64.4		(1) 59.4	(10) 56.7	(7) 56.7	(7) 53.8	(1) 57.3		
都市近郊農村				(1) 57.1	(4) 51.5	(7) 50.4	(2) 50.7		
普 通 農 村		(2) 60.5		(2) 53.4	(13) 57.0	(9) 55.5	(2) 55.0	(2) 47.8	(1) 57.6
農 山 村				(2) 58.1	(4) 52.6	(10) 51.8	(1) 49.5	(1) 48.9	
全 県	(3) 63.5	(3) 59.9	(2) 59.5	(35) 58.4	(76) 57.8	(64) 55.3	(12) 55.9	(8) 53.7	(3) 59.6

注. () 内は学校数を示す。

6 週間授業時数と学力

教科別、授業時数別、階級別学校平均得点

区 分	国 語			社 会		数 学			理 科		英 語	
	11～ 13	14～ 16	17～ 19	11～ 13	14～ 16	11～ 13	14～ 16	17～ 19	11～ 13	14～ 16	11～ 13	14～ 16
平均値	(5)	(159)	(42)	(134)	(72)	(111)	(94)	(1)	(194)	(12)	(147)	(59)
	64.2	62.2	61.4	52.1	54.9	57.2	56.8	53.8	51.8	53.5	59.4	65.2
区 分	音 楽			図 工			保 体			職 家		
	3～4	5～7	8～10	3～4	5～7	8～10	5～7	8～10	11～13	8～10	11～13	
平均値	(1)	(203)	(2)	(1)	(203)	(2)	(6)	(199)	(1)	(170)	(36)	
	24.6	28.7	29.6	36.0	33.7	36.6	25.9	26.7	30.5	27.4	26.7	

注. () 内は学校数を示す。

都市・農村別 得点階層別週間授業時数

区 分	都 市						農 村					
	5 教科			4 教科			5 教科			4 教科		
群 別	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
学 校 数	17	85	14	15	79	22	11	36	16	10	43	10
平均週間授業時数	67.2	66.9	66.4	30.3	30.4	30.4	71.9	67.8	66.1	30.5	30.9	30.8

週間授業時数別（3ヶ年通算）学校平均得点

区 分	国 語			社 会		数 学			理 科		英 語	
	11～ 13	14～ 16	17～ 19	11～ 13	14～ 16	11～ 13	14～ 16	17～ 19	11～ 13	14～ 16	11～ 13	14～ 16
工 業 市 街	(3) 64.1	(29) 64.1	(3) 62.8	(27) 52.1	(8) 52.0	(19) 57.5	(16) 57.1		(35) 52.6		(25) 59.6	(10) 62.8
商 業 市 街	(1) 61.5	(8) 64.7	(5) 67.4	(9) 55.0	(5) 55.9	(10) 58.0	(4) 57.0		(14) 53.2		(12) 61.6	(2) 68.5
住 宅 市 街		(36) 66.3	(6) 65.5	(26) 57.5	(16) 55.8	(26) 61.4	(16) 62.0		(40) 54.5	(2) 55.8	(27) 63.6	(15) 68.8
その他の市街	(1) 68.0	(20) 62.4	(4) 60.0	(19) 53.2	(6) 53.2	(14) 58.1	(11) 56.9		(24) 52.2	(1) 57.4	(16) 59.6	(9) 62.4
準 市 街		(21) 61.4	(6) 60.4	(18) 49.9	(9) 57.9	(11) 56.2	(16) 56.3		(26) 51.3	(1) 48.2	(20) 58.6	(7) 62.6
都市近郊農村		(12) 56.4	(2) 59.0	(10) 46.8	(4) 47.7	(10) 50.6	(4) 51.3		(14) 46.9		(14) 54.7	
普 通 農 村		(24) 58.0	(7) 61.0	(15) 50.9	(16) 54.9	(10) 56.7	(20) 54.5	(1) 53.8	(25) 51.2	(6) 52.0	(19) 56.3	(12) 67.1
農 山 村		(9) 50.2	(9) 57.6	(10) 46.0	(8) 54.3	(11) 49.4	(7) 56.1		(16) 46.4	(2) 56.4	(14) 55.6	(4) 61.5
全 県	(5) 64.4	(159) 62.2	(42) 61.4	(134) 52.1	(72) 54.9	(111) 57.2	(94) 56.8	(1) 53.8	(194) 51.8	(12) 53.5	(147) 59.4	(59) 65.2

区 分	音 楽			図 工			保 体			職 家	
	3～ 4	5～ 7	8～ 10	3～ 4	5～ 7	8～ 10	5～ 7	8～ 10	11～ 13	8～ 10	11～ 13
工 業 市 街		(34) 28.2	(1) 29.6		(35) 34.5		(1) 27.1	(34) 26.8		(28) 27.6	(7) 27.3
商 業 市 街		(14) 30.3			(13) 34.7	(1) 34.9	(1) 25.5	(13) 27.4		(11) 28.4	(3) 27.5
住 宅 市 街		(42) 30.5			(41) 35.0	(1) 38.3		(42) 27.3		(38) 28.6	(4) 27.7
その他の市街		(25) 28.6		(1) 36.0	(24) 34.3		(3) 25.8	(22) 26.9		(22) 27.3	(3) 28.4
準 市 街	(1) 24.6	(26) 28.2			(27) 34.7		(1) 25.6	(26) 26.6		(26) 27.2	(1) 28.5
都市近郊農村		(14) 26.3			(14) 31.5			(14) 25.3		(10) 25.7	(4) 22.8
普 通 農 村		(31) 28.2			(31) 31.0			(30) 26.4	(1) 30.5	(26) 26.8	(5) 28.0
農 山 村		(17) 27.0	(1) 29.5		(18) 32.3			(18) 26.3		(9) 26.2	(9) 25.6
全 県	(1) 24.6	(203) 28.7	(2) 29.6	(1) 36.0	(203) 33.7	(2) 36.6	(6) 25.9	(199) 26.7	(1) 30.5	(170) 27.4	(36) 26.7

注. () 内は学校数を示す。

注 神奈川県立公文書館所蔵の簿冊「昭和 37 年 臨時会会議録 総務課」に収録されている。12 月 13 日の会議の資料。

四 公立中学校第三学年学習検査

公立中学校第三学年の 学習検査おわる

昨年より八点高い平均点

さる一月二十四・二十五日に神奈川県公立中学校第三学年学習検査が実施された。検査の対象は公立中学校第三学年の生徒だが、それ以外に特に希望して受検したものもあった。

受検者数は公立中学校三年生が七八、〇二四名、それ以外は横浜国大附属、ゆうかり学園中学部、秦野養護学校中学部の各三年生が計三二五名、それに県外の中学校と私立の中学校から計一、〇六〇名、総計して七九、三〇九名で、昨年より約二万二千名の増加となっている。

ことしの中学校の三年生は、一年の時から新しい教育課程によって学習してきた最初の生徒たちなので、出題にあたっては、各教科とも基本的なものに主眼をおき、基礎知識や応用力をためすことに留意し、指導要領の改訂によってレベルの高くなった教科では、なるべくむづかしい問題はさけるようにした。なお偶然に正答となることもある〇×式をやめて十分に内容が分らなければ解答できないような問題にし、また、実技を伴う技能教科については、実技や実習を通してでなければ身につかないようなものをできるだけ出題するようにした。

検査の結果

検査の結果は集計され、各教科ごとの平均点、偏差値、品等段階表などがまとめられた。その大要は次の通りである。

集計の資料としては、無作為抽出によって二十一校を選び、その学校の中からさらに各一学級を任意に抽出した。生徒数は一、〇一一名である。

各教科の平均点は第二表の上段の通りで、これを昨年の平均点と比較すると、国語が七・八一、数学五・三七と大巾に上まわったのははじめとして、理科三・七〇、保健体育三・二四、英語〇・一三が上まわったが、社会、音楽、美術（昨年は図工）、技術・家庭（昨年は職業・家庭）の男女双方、は下まわっている。全教科の合計点の平均はことしの方が約八点近く高い。

各教科の得点の分布状態を示したのが第二表の下段の部分と右のグラフであり、各教科の素点と品等段階との関係は第一表に示した通りである。

得点の分布状態において注意すべきものは、数学と英語である。

第一表 品等段階表（要点との関係）

段 階	1	2	3	4	5
評 語	最 下	下	中	上	最 上
国 語	0～16	17～25	26～35	36～43	44～50
社 会	0～11	12～20	21～30	31～39	40～50
数 学	0～ 5	6～12	13～26	27～42	43～50
理 科	0～11	12～19	20～29	30～38	39～50
音 楽	0～12	13～19	20～27	28～34	35～50
美 術	0～13	14～22	23～33	34～43	44～50
保 体	0～19	20～26	27～34	35～41	42～50
技・家(男)	0～11	12～19	20～27	28～35	36～50
技・家(女)	0～15	16～21	22～28	29～34	35～50
英 語	0～11	12～21	22～34	35～44	45～50

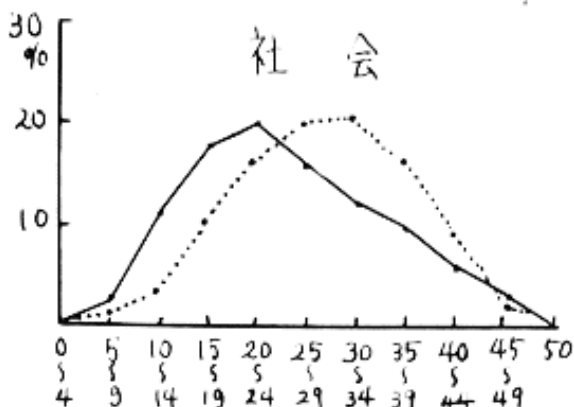
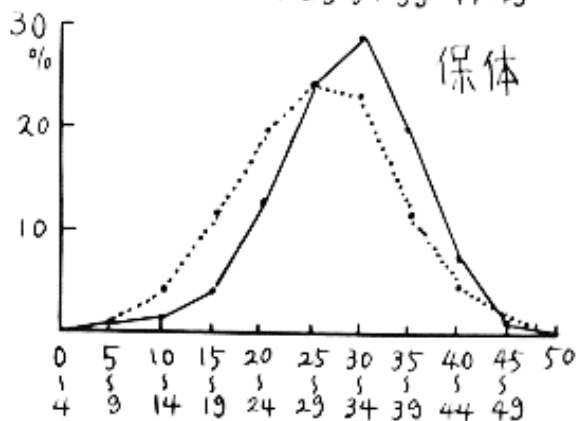
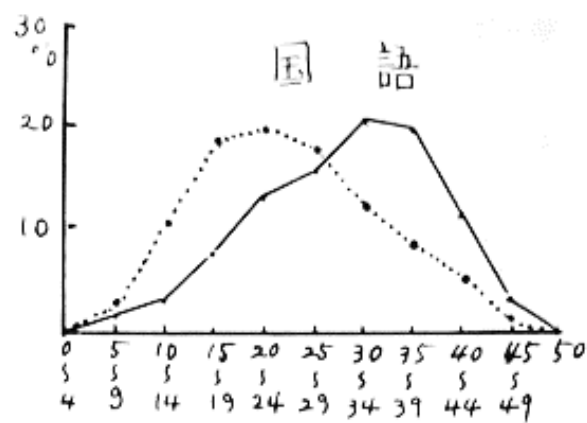
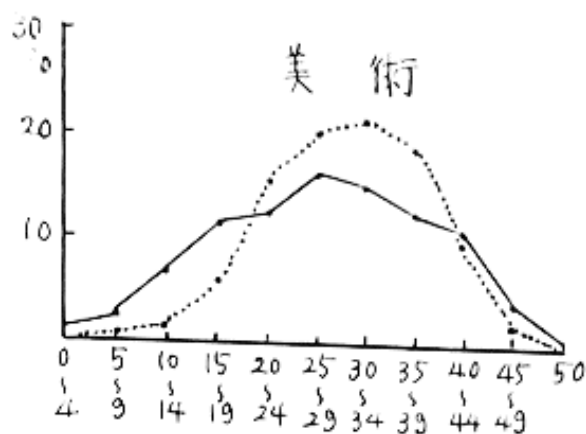
数学では、分布は得点の低い方に偏より、5点～19点のところに全体の四割以上のものが集中し、しかも0点～4点の者が6%ある。これは全体的に数学のレベルの低いことを示しているのは言うまでもないけれども、昨年、0点～4点が24%もあり、グラフも対称型（山型でなく逆J型（ナダレ型）であり、平均も約16点であったのに比較すれば、次第にノーマルな状態に、近づきつつあると言えるよう。

英語では、15点～19点、25点～29点、40点～44点のそれぞれを頂点とする山が三つあり（即ち20点～24点のところと、30点～39点のところの二つの谷がある）、学力の高いグループと中位のグループと低いグループとが混在していることを示している。

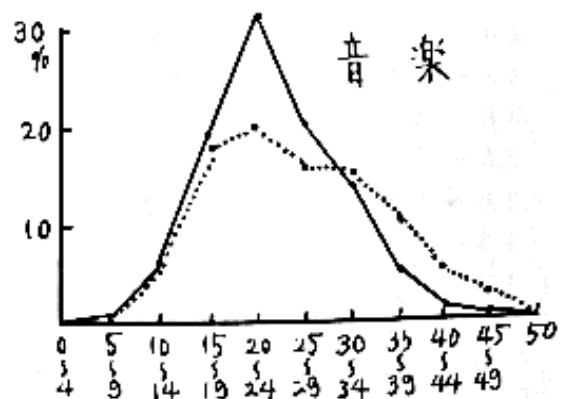
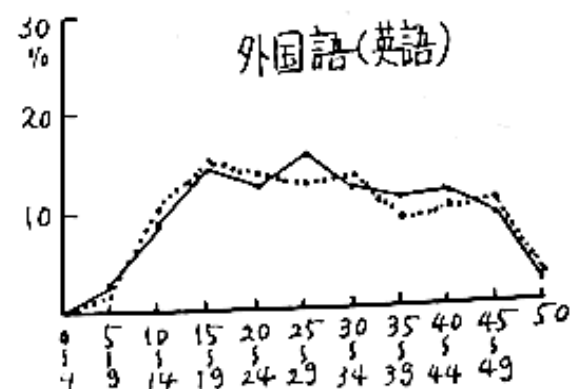
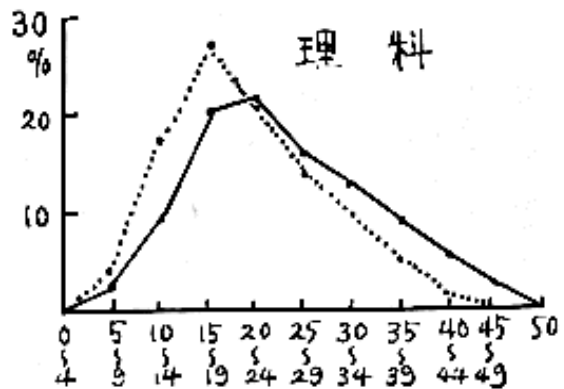
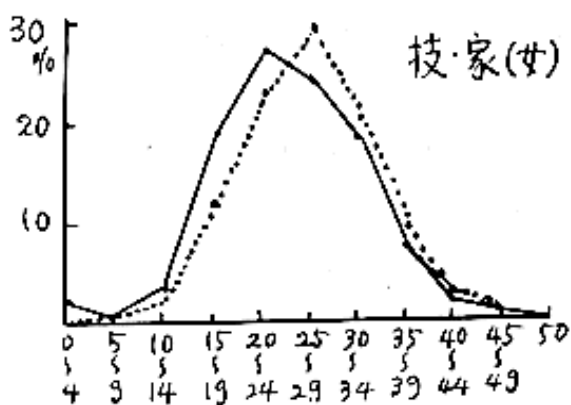
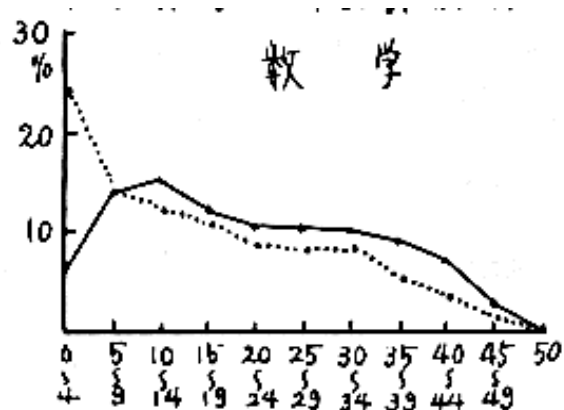
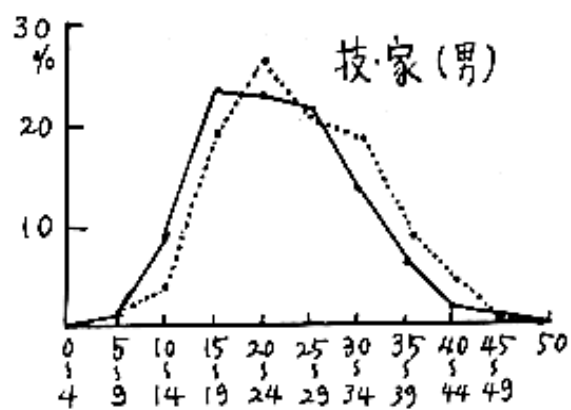
昨年の分布状態も同じ様な三つの山型であったが、ことしは中の山が高くなったので、昨年よりも中位のグループに属するものが多くなってきたことがわかる。この傾向が進んで行けば次第にノーマルな状態になるであろう。

第二表 平均および得点分布

	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保体	技・家 (男)	技・家 (女)	外国語 (英語)
満点	50	50	50	50	50	50	50	50	50	50
37年度 { 平均	30.33	25.21	21.60	25.05	23.83	28.48	30.50	23.57	25.24	28.55
{ 標準偏差	9.20	9.80	12.45	9.40	7.07	10.59	6.85	7.80	6.79	11.55
38年度 { 平均	22.52	29.29	16.23	21.35	26.32	30.68	27.26	25.44	26.62	28.42
{ 標準偏差	9.10	9.10	12.30	7.85	8.93	7.90	7.60	7.45	5.65	11.80
点	%	%	%	%	%	%	%	%	%	%
50	0	0.1	0.1	0.1	0	0.6	0	0	0	1.3
45~49	3.4	3.4	2.6	2.7	0.3	4.6	0.8	1.0	0	9.2
40~44	12.3	6.1	7.5	5.7	1.8	12.7	7.9	1.7	1.8	11.9
35~39	20.1	9.9	9.3	9.6	5.2	13.8	20.0	5.6	7.5	11.1
30~34	21.9	12.5	10.4	12.7	14.0	15.6	28.9	13.5	18.2	12.2
25~29	16.2	16.0	10.6	15.4	20.1	16.9	23.9	21.7	23.9	15.2
20~24	13.6	20.2	11.1	22.3	31.6	13.4	12.8	22.6	26.7	12.4
15~19	7.8	18.2	12.6	20.6	19.6	12.0	4.4	23.2	18.8	14.5
10~14	3.3	11.2	15.4	8.7	6.6	7.5	1.1	9.1	2.8	8.9
5~9	1.4	2.5	14.4	2.2	0.7	2.4	0.2	1.6	0	3.0
0~4	0.2	0.1	6.0	0.1	0.2	0.7	0.1	0	0.2	0.2



注 神奈川県教育委員会『教育月報』一九六三年一月号。



五 中学校における進路指導の強化方針

中学生の進路指導
県教委で対策強化
父母研修会を拡充
新しくII会場で移動相談



(著作権上の都合により省略します)



(著作権上の都合により省略します)

『神奈川新聞』一九六四年九月四日。

六 横浜市立岡野中学校の教育方式（「岡野方式」）

一、まえがき〔略〕

二、岡野方式の歩み〔略〕

三、岡野方式の一般構造

試みに教育関係者におききする。「先生の目はどこを向いていますか。」と。

岡野の先生なら、「何をくだらないことをきくのか。生徒に向かっていきまわっている。」と答えるであろう。この端的なことには二重の意味がある。「生徒を見る」と「生徒の立場から見るとである。生徒を見るのが岡野の教育である。生徒を守る位置から凡てを判断するのが岡野の運営で、所謂岡野方式である。あたりまえといえは全くあたりまえ、平凡といえは全く平凡だが、それに徹底したのである。抽象的観念、手段的見方、主観的情念、世俗の攻〔功〕利を断絶したのである。

岡野では人に見せる教育をしない。父母のためには授業は常時公開であるが、他に向かつて教育を売り物にしない。但し秘密にしたのでもない。来る者は拒まず、去る者は追わず、ただわが道を行くのみ。権威に屈せず名利におもねらず、時流に溺れず、ただ生徒のためになすあるのみというのが岡野の行き方である。随分愛想のない学校の顔であるが、実はつきつめた真実を追う姿であったのである。

例えば修学旅行である。教育の目的目標と学習内容、生徒の発達段階、諸条件を照合して行き先をきめる。教師の好みによる選択はとりあげない。さて旅行の目的達成と生徒の安全を守るため先生方は百万研究を重ね、綿密な計画を立て準備万端をととのえる。そして出発する。先生の目は一瞬も生徒の上を離れない。と同時に生徒の身をかばって八方に目をくばる。それが瞬間に統合され無事帰るまでつづくのである。

これは学校活動のあり方のたとえでもある。正真正銘な正直なあり方なのである。

生徒について「き」 সেই指導し、世話をするのが教師であり、生徒のための立場から研究、計画、準備、連絡組織、実践の体系化、後始末をするのが運営であるからである。

学校の全体が生徒に向いている。父母の目はもともとわが子に向いているから、

その多くの目が普遍妥当性をもつように視角を調整し視点を合わせてもらう。教育行政も生徒に向いているものとして純粋に学校は受け取る。地域の関心も正当に整理し協力的に歩調を合わせてもらう。

生徒に向いているとは、生徒の現実―可能態に向いていることである。現実の内容をなすものは諸々の事実である。それを教育的に認識し、構造化し、組織する。そして可能性をひらき生徒の発達を助成するプロセスを守るために学校は運営される。

生徒の発達の達成を通し、生徒自身に、父母と社会に奉仕する公的責任において学校は運営される。

このような現実性、事実性、目的性をより高度に実現するために学校の運営はねられるのである。岡野方式とはこういうものに外ならない。

何よりも先に生徒があり、教育活動がある。それを守るための運営活動がある。

以下目的構造、組織構造、運営構造の次第によって略述する。

(1) 目的構造

教育の目的は社会がつくり、目的に達する方法は教師が工夫するというのが岡野方式の基本態度である。教育の目的は生徒の身心に形成されるもので、将来の生徒の人間自体である。それは社会の主体の育成である。だから目的の達成は現実の生徒から人間的、社会的価値の可能性を発見しその発達を図るもので、現実の事実を外にして手をつけることはできない。ここに発達の段階、法則、条件性がある。教育の目的について目標系列、基本的方法論（教育方針）、教育課程、生徒の組織、環境構成、用具教材の整備、父母地域の協力組織、職員の活動組織が順序づけられるのである。

(2) 組織構造

学校内の職務活動組織に二様の立場がある。一は法に基いて学校の組織編成に密着する校内人事で、学年学級教科保健指導、職業指導等の担当組織と校務執行上の組織であり、他は教員が教育の効果を高めるための組織である。前者は所謂ライン組織で、後者はスタッフ組織に相当する。後者はまた二つに分けられる。ライン内スタッフ即ち学年会教科会等であり、他は学校教育全般のためのスタッフ即ち各種委員会研究会の類である。この外別に学校運営のためのスタッフに運営委員会がある。全職員はラインに属すると共にライン内スタッフに属し、全般

のスタッフに参加し運営委員会に代表者を送る。

ラインは終局的に個人責任を負うて実践に従い、スタッフは集団思考と集団責任を負う。ラインとスタッフは相補して機能し合う。ライン、スタッフ、ファンクションの円環的運営が図られている。その中心乃至頂点に職員会議がある。

教師は受持学級、教科をよくするために学校全般をよくしなくては到底目的を達し得ない。学級教科をよくしなくては全般はよくならないといえるが、全般の比重は大きい。学校は教師団の協力によらなければ動かないし、各種の条件の整備充実を待たなければならぬからである。

故に教師は学校教育全般に関心を持ち、学校運営に参加する本務上の義務がある。

職員会議は全職員の統一的意志形成の場である。広汎にして最高次元の運営会議である。職員は生徒のよりよい発達の保証のために会議に臨む。参加は義務であるとともに権利でもある。

故に全職員の提案権は尊重され、発言の自由は平等の権利として保証される。時に緊迫、時に厳烈なるも概ね和気藹々、常に誠意を以て一貫され、客観的一致に導かれる場合が多いが、再審議に付され、原案さしもしの如き場合もある。必ず資料を整備し、事実に基づいて明確に判断されるのが例である。最後に公教育の合法性適法性が確かめられ、校長の管理権、運営代表権の承認を経て実施に移される。職員会議の決定事項は最高に尊重され、生徒の教育と学校運営上の基準となる。

ラインへの配置は校長の法による組織権に属し、スタッフの組織改編は全職員の公的自由に任せられる。リーダーシップは全員に要望される。リーダーシップは「集団の目的設定とその達成に貢献する個人が集団の中での貢献である」からである。最初から特定人物を役職的リーダーとせず、自然に任ずるのが岡野方式の行き方である。無主任制の発生根拠はここにある。

もちろん校長はライン組織において教師の年令性別経験性格等各般の条件を考慮し、宿老、実力者、推進役、目付役、新参、問題の教師等をくみあわせ、個性を発揮できると共に集団の調和と力が高まるような配慮に全力を尽している。

そこには色合いの異なる不特定多数のリーダーが予想されるし、中心リーダーも自然に出てくるものである。

教師は組織の末端に位置するという考え方は、教育的発想上から逆倒している。そういう考え方は古い官僚統制の思想から出たし、また経営学的組織論から企業体における最下層をなす作業層にみたてるなどは無思慮の比擬で、凡そ教師の職能を正當に評価し位置づけたものではない。教師は科学的専門職で、且つ人格的影響が仕事の内容となるものである。その活動が仕事の全体目的である生徒に密着しているのである。業務の最終目的に直接触れている活動が末端にあるはずがない。

然し集団活動体である以上、計画樹立、組織設定、手段蒐集、指揮統制、権限、過程、機構、仕事の序列等は存在する。そこで学校でも教師の階層構成が考え易いが、前の如く管理者は別として一般教師団を階層化する「ことは適当でない。それは教育機能の性格と現下の諸条件にもよる。後者については別に考案するであらう。

(3) 運営構造

そこで教育と運営とを円滑ならしめるため問題となるのは、「権限」と「指揮統制」である。権限の根拠は法規令、行政機関の指示にある。更に根源的には国民の主権、人権、教育権に基く。教育的見方によれば教団上の事実実態の客観的認識を内容とするもので、学校の統一的意志がそれである。

校長は法による管理権によって学校の公共性、目的性を完全に維持し、外部への運営代表権をもち単独責任を負う者である。教師団は常にそれを尊重し、協力し、かりそめにも侵さないのが岡野方式の公的骨格である。校長は法による職権によって所属職員を監督するが、教育上の細部に干渉しない。監督は法に準拠し、客観的で公正なることを岡野方式は要望する。思い付きや主観的感情的なし方は妥当でない、それは非合法なし方として受けつけられないのである。

教師は学校教育の一部分を分担するが、同時に学校の教師として学校教育全般の向上について努力する職能がある。学校運営に参加する義務が必然的に生ずるのであって、かかる立場から必要な職権の部分的委譲を受ける。また学校の集団意志によって仕事の委託をうけるのを立「建」前とする。

所謂学校行事の指揮統制は、ラインに準じて担当の係を校長が委嘱する。無主任制の学年行事等はいかに行なうか。教師集団の担当する教育の実践過程上の指揮統制は、岡野方式においてはライン内スタッフの統一意志である。話合いにお

いて形成された客観的統一意志―その内容をなす手段方法に従って活動する。ただ實際上必要がある場合は会合が役割をきめ、一定の人に委任する。恒常的に特定の人が全般の指揮統制に当るわけではない。即ち集団統制で根源的には公的自己統制である。

四、岡野方式の基礎的認識 [略]

五、岡野方式の評価 [略]

六、補遺 [略]

七、あとがき [略]

注 桐谷政次『学校運営における岡野方式―その私的ノート―』の「三、岡野方式の一般構造」。本書は私家版で、奥付がなく「七、あとがき」の最後に「昭和卅九年五月五日 擲筆」とある。著者の桐谷は岡野中学校創立以来同校に勤務してきた教師。同校の初代校長は神奈川県校長会、全国中学校長会の創設に加わった長谷川雷助。

七 ア・テスト実施についての運営要項

昭和四十一年度 ア・テスト実施についての運営要項

平塚秦野学区学習検査運営委員会 四二・一・一一

一、平塚 大磯 二宮及び秦野 伊勢原 中井 寄両地区内の中学校長をもって運営委を組織する。

1. 運営委員会には正副委員長を置く——長 山田校長 副 草山校長
2. 運営委員会において検査委員・採点委員を決定する。
3. 検査委員 採点委員は各校職員を以て之にあてる。
- 二、学校長の責任 学校長は運営委員として当該ア・テスト会場の最高責任者である。

三、検査委員会 採点委員会

1. 検査委員は一月十九日午前九時（厳守）までに指定校に到着し、学校長の確認をうける。
- 各自封印のための認印と正確な時計と弁当を持参すること。
2. 委員は検査委員会・採点委員会を組織し 委員長を互選する（学校長はその幹旋をすること。）
3. 委員に故障が生じた場合は遅滞なく交代者を出すこと。
4. 採点結果についてはみだりに口外しないこと。

四、テストの実施

1. 委員長及び各委員は学校長と緊密に連絡しつづき要項及び注意の各事項を正しく守ること。
2. 会場の整備についてはテスト開始前に確認しておくこと。
3. テスト用紙分配の便宜のため三年の学級別男女別生徒数を検査委員室に標示しておくこと。

↑	○	○	科
	○	○	中学校
	三	年	組
約 12 cm	在籍生徒数	名	
	受験生徒数	名	
	欠席生徒数	名	
	検査委員名	印	
↓	備	考	

4. 各学校においては答案用紙厳封のための大封筒を学級数の九倍以上用意し、その上面に下図のような符箋を貼りつけておくこと。

5. 各学校においては別に配布する採点表（出席簿を兼ねる）を学級数だけ用意すること。（出席簿番号を会場の机の右隅に記入しておくこと。）
6. テスト終了五分前にその旨を口頭で伝える。

五、採点

- 1 採点会場は各委員の勤務校とする。
2. 採点期日はその日の全テスト終了後より開始。
3. 採点のための委員と同数の補助員をおく。
4. 採点は正答表を忠実に守って誤りないよう正確に行なうこと。
5. 正答表は勤務校に配布されたものを使用すること。
6. 疑義は一月二十日、二十一日各九時までに国府中へ届出る。（文書）
7. 疑義の回答については一月二十日、二十一日十時 地区代表が教育事務所からうけとること。

六、個人票及び照合

1. 採点委員はア・テスト成績個人票にア・テストの結果を正確明瞭に記入すること。数字は算用数字とする。
2. 採点委員は一月二十四日（火）午前九時 各自の検査会場に答案用紙及び個人票を持ちより、当該学校正誤の訂正は採点委員長、学校長立会の下に行なわれなければならない。（訂正印は採点委員長印、運営委員長印を必要とする。）

3. 抽出校担当の採点委員は得点集計表・分布表を作成し、抽出学校長は中教育事務所へ一月二十四日十時までに届ける。
4. 照合完了後は答案用紙及び採点表は各々の中学校長に返却する。
5. 個人成績票は採点委員長及び運営委員長の確認印を得 偏差値、品等段階の記入をして完成したものとす。
6. 個人成績票は完成後、その正票を各学校長に、副票一を教育事務所に、副票一を運営委員長に提出すること。

七、偏差値品等段階の記入

1. 偏差値品等段階表が送付された時は 各採点委員長に連絡し、個人票にそれぞれを記入する事務を行なう。
2. 記入は二月一日（水）午前十時から浜岳中学校において五学級以上は四人

四学級以下は二人の記入要員により記入する。
八、備考

1. 文字数字の記入は楷書で明確に行ない 誤記の起らぬように注意する。
2. お茶菓子是一日一人五十円のこと。
3. 事務用品は会場校より支給をうけること。
4. テストに当たっては無地の下敷は使用できるものとする。
5. カーボンは青を使う
6. 校名はゴム印で入れておく
7. 氏名は複写でかく（検査員）

注 大磯町立図書館所蔵の簿冊「昭和42年1月起 会議関係等綴 大磯町教育委員会」に収録されている。

八 受験準備の補習授業の廃止

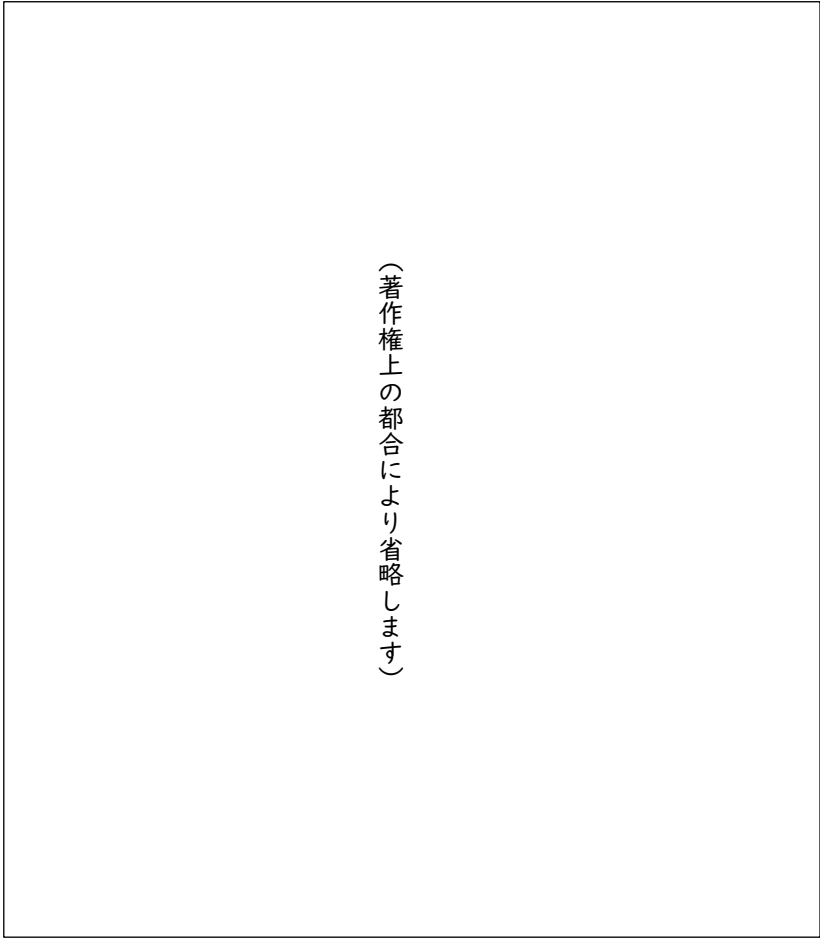
中学校 補習授業を全廃
入試教育は避ける
校長会と神教組が通知



(著作権上の都合により省略します)

(著作権上の都合により省略します)

『神奈川新聞』一九六六年七月一七日。



九 一九六八年度ア・テスト実施要項

昭和四十三年度 ア・テスト実施要項きまる

― 公立中学校一・二年を対象 ―

昭和四十三年度神奈川県公立中学校第一学年及び第二学年学習検査実施要項がつぎのとおりきまった。なお、この学習検査は、神奈川県公立中学校における日ご「ろ」の学習の成果を全県同一の問題を用いて測定し、その結果を学習指導、観察指導等に役だてようとするものである。

実施要項

一 学習検査の対象者は、原則として県内公立中学校第一学年及び第二学年在学者とする。

二 学習検査の教科は、国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健体育、技術・家庭、外国語（英語）の九教科とする。

三 問題作成は、県教育委員会があたり問題用紙は検査を実施する各公立中学校長（以下「中学校長」という）に配布する。

四 学習検査の実施、採点等は、県教育委員会の指示に従い中学校長が責任をもつて行なうものとする。

五 問題用紙等の受領後の保管責任者及び検査実施後の答案等の保管責任者は中学校長とする。

六 学習検査の実施期日は昭和四十四年三月十三日（木）及び同十四日（金）の二日間とする。

七 学習検査の会場は、特別の場合を除き各公立中学校とする。

八 学習検査の対象外の者で、この検査の受験を希望する者の「ママ」取り扱いについてはつぎのとおりとする。

(一) 受験申込みの受付期間・受付時間・受付期間・昭和四十四年二月十二日（水）から同十八日（火）まで

受付時間・毎日午前九時から午後五時まで。ただし土曜日は正午まで
日曜日は受付けない

(二) 受験の申込みは、横浜国大附属中学校の在籍者については、当該中学校の校長が学年別、男女別の受験者数を県教育委員会教育長（以下「県教育長」という）に報告する。その他の者は、本人（又は保護者）が直接、横浜市、

横須賀市および川崎市の各教育委員会教育長（以下「教育委員会教育長」という）または高座三浦、中、足柄上、足柄下、愛甲および津久井の各教育事務所長（以下「教育事務所長」という）を通じ、受験の申込みをし、

必要な手続きを行なう。なお、受験の申込みに必要な用紙は、上記の各教育委員会および各教育事務所に用意する。

(三) 教育委員会教育長および教育事務所長は、受験を申し出た者に対しては、所定の様式による申込書により処置する。なお、県外からの受験申込者に対しては、事情やむを得ない場合に限って、在籍（又は出身）中学校長の認印を省略することができる。

(四) 教育委員会教育長および教育事務所長は、受験希望者数を検査会場別、学年別に二月二十一日（金）までに県教育長に報告する。

注
神奈川県教育委員会『教育月報』一九六九年一月号。

学 習 検 査 関 係 の 日 程

期日	曜	実施事項	方 法 等
3月12日	水	問題用紙配布	県教委 { 3市教育委員会 } 中学校長 { 6教育事務所 → 教育委員会 }
同 13日	木	} 検査	} 時間割のとおり
同 14日	金		
同 15日	土		
同 16日	日	} 採点	
同 17日	月		
同 18日	火		
同 19日	水		
同 20日	木		
同 21日	金		
同 22日	土	抽出校資料提出	抽出校の資料は、正午までに指導課長に提出（秘）

学 習 検 査 の 時 間 割

3月13日 (木)	時 刻	9.40	10.50	11.40	12.10	13.10	14.20
	教 科	10.30	11.20	12.10	13.10	14.00	14.50
	所要時間	国 語	技術・家庭	音 楽	昼 食	理 科	美 術
		50分	30分	30分		50分	30分
3月14日 (金)	時 刻	9.40	10.50	11.40	12.40	13.30	
	教 科	10.30	11.40	12.40	13.10	14.20	
	所要時間	社 会	数 学	昼 食	保健体育	外国語	
		50分	50分		30分	(英語) 50分	

一〇 企業進出と校舎改修

超デラックス校舎完成

第一生命進出の大井町湘光中

“日本一”と折り紙

大食堂

収容五百人

浴室まで完備

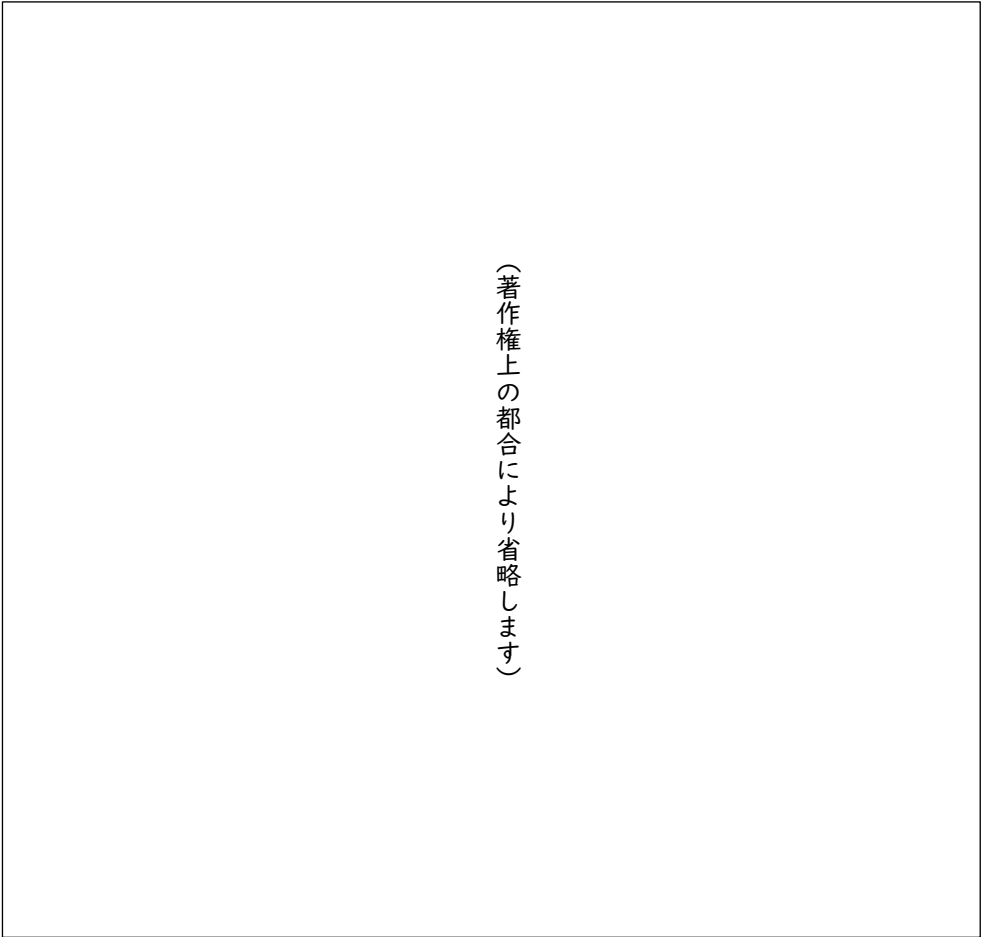
(著作権上の都合により省略します)

(著作権上の都合により省略します)

『神奈川新聞』一九六八年二月二二日。

一一 丸刈り強制の校則

いまだき丸坊主なんて…
『不自然で異様な姿』
共進中だけ新入生から緩和
丸刈りきらい越境も



(著作権上の都合により省略します)

『神奈川新聞』一九七〇年三月三〇日。



(著作権上の都合により省略します)

一二 背広スタイルの中学校の制服の登場

新入生から背広姿で
上菅 田中
スマートな制服、好評
時代の流れて学園にも新風

(著作権上の都合により省略します)

(著作権上の都合により省略します)

『神奈川新聞』一九七〇年四月一三日。

注 リード文で紹介されている電算機のプログラミング講座についての記事は第六章に収録した。

『現代中学生気質』とは
横浜市立岩崎中のアンケート調査から

(著作権上の都合により省略します)

(著作権上の都合により省略します)

(著作権上の都合により省略します)

『神奈川新聞』一九七二年二月七日。

注 「教育 かながわ広場」欄に掲載されている。

一四 神奈川県公立高等学校入学者選抜方法改善委員会の報告

中Ⅰ ア・テスト
調査書 は選抜資料とせず

― 四十八年度高校生入学者選抜方法改善される ―

県教育委員会はかねてから神奈川県公立高等学校入学者選抜方法改善委員会（委員長、中村康治元横浜国立大学長）を設け、入学者選抜方法の改善について調査研究を依頼してきたが、さる五月十八日、四十八年度ただちに改善すべき点について報告を受けた。

改善点は、①中学校一学年における学習検査（ア・テスト）および調査書（学習の記録）は選抜資料としない。②現行選抜方式の順位算定式

$$DII(a+pb)+abc$$
のP、qの値を、それぞれ〇・一下げ〇・五とする、の二点である。

よって来年度（四十八年度）はこの改善報告に基づいて入学者選抜が実施されるが、四十九年度以降については、さらに検討を継続したうえで別に報告を受けることになっている。

現行の選抜方式は四十二年三月の「神奈川県公立高等学校入学者選抜制度調査会」の報告に基づいて、四十三年度から実施されている。施行当初は、全国的にもユニークな神奈川方式として高く評価され、それなりの成果もあげてきた。しかし、最近になって「選抜の方法が、中学校教育の正常な運営を妨げず、むしろその充実に役立つことを志向する」といった施行当初の期待を継続させることが困難となった。すなわち、中学校入学当初から学習検査（ア・テスト）を含めた受験勉強に過熱現象が生じ、中学校教育の正常な運営が妨げられる恐れが生じたり、進学指導のゆきすぎの事例など、ひずみがみられるようになってきた。さらに、四十七年度からは中学校の学習指導要領および生徒指導要録が改められ、学習検査のあり方や調査書の内容なども検討する必要がでてきている。

そこでこの四月、「神奈川県公立高等学校入学者選抜方法改善委員会」を設け①調査書（学習の記録）②学習検査（ア・テスト）③学力検査（高校入試）の三点から選抜制度改善を検討してきた。

その結果、中間報告として次の解〔回〕答を得た。

(1) 中学校一学年の学習検査および学習の記録を選抜の資料とすることは、低学年から受験勉強にはいる恐れがあり、中学校教育の正常な運営を妨げることになる。少なくとも一年生の段階では受験を考えないで伸び伸びと勉強させる必要がある。

(2) 現行選抜方式の順位算定式については、中学校の格差は認めないという前提にたつて、調査書をより重要視する方向へもっていく。すなわち学習検査は、学習指導上の資料を得るといふ本来の目的にもっていくべきであり、学力検査は生徒の負担を軽減すべきであるということから、調査書の指数は従来どおりとし、学習検査、学力検査の比重を〇・一ずつ下げて〇・五とする。

以上の改善報告に従って、四十八年度の入学選抜が実施されるわけだが、今度の改善により、調査書の入学選抜制度に占める割合はいっそう大きくなる。選抜が適正に行なわれるための最大の要件は、公正な調査書の作成ということであり、これは、高等学校側の信頼を得るためにも、また、父兄の側に不安を与えないためにも必要なことである。

注 神奈川県教育委員会『教育月報』一九七二年五月号。

一五 一九七一年度ア・テストの結果

昭和46年度学習検査（ア・テスト）の結果

望まれる基礎的事項の取得と創造力の育成

三月十五・十六日の両日にわたって、公立中学校一・二年全員を対象に学習検査（アチーブメント・テスト）が行なわれたが、その結果がこのほどまとまった。内容は、各教科の成績の概要、ならびに各教科別の平均点、得点分布等を集計したものであり、次のような趣旨でまとめられている。

- (1) 各教科について、全体的な結果と比較して、生徒個々の成績を診断する。
- (2) 教師が生徒の学力の実態を把握し、今後の学習指導の資料とする。

集計は学習検査を実施した公立中学校二五〇校のなかから任意抽出により三三校を選び、当該中学校からさらに、学年ごとに一学級ずつ任意に抽出して行なわれた。集計対象生徒は一年生一、三七九人、二年生一、三八四人である。

このテストの結果は、「中学校における学習指導」ならびに県教育委員会の「学習指導上の努力点」を参考にして今後の指導に活用していただきたい。

【学習検査の結果】

《総評》

各教科とも平均点からみると、前年度に比べ多少のおうとつはあったが、出題のねらいからしてみれば、一年では数学、理科、美術、技・家（男）の四教科、二年では国語、理科、技・家（男女）の三教科がそのねらいに近づきつつある。このため今後の学習については、基礎的事項の習得と創造力の育成とをあわせて、次のようなことが望まれる。

- (1) 広い視野に立つての見かたを養う
- (2) 現象面から本質的な問題を見いだす能力を養う。
- (3) 目的に応じて結果を検討し、処理する能力と態度を養う。
- (4) 鋭い見通しと、的確な判断の能力を養う。

《各教科の結果》

（注）％の数字は正答率を示す

国語

第一学年

文章理解、語句、語法、読字、書字の各領域を通して考察すると、全般的には

好成績を示している。領域的にみると次のことがいえる。

○文章の全体的な読解については、六〇～七〇％を示しているが、細部の読解については五〇％以下のものもみられる。

○文脈中の語句の意味や用法については良好で、七六～七七％を示している。

○接続語については七六、七％を示し、良好であるが、主・述・修の関係については三七～六〇％にとどまっている。

○読字・書字については、日常よく使われている漢字についても「省いた。策略。届ける。」を除いてはいずれも五〇％以下であった。

以上のことから今後細部に留意して読みとることや、日常生活の中で正しい語法や漢字が適切に使われるように慣れることが大切である。

第二学年

広い範囲からの出題であったが、全体的にはまずまずの成績であったといえる。これを領域別にみると次のとおりである。

○文章を全体的に読みとる力は比較的高く、特に鑑賞の面はよくできていた（五〇～八五％）。

○文章の中の語句の意味と用法を確実にとらえていかなければならないような問題は二四～三四％と低かった。

○文脈の中での主述の関係のとらえ方、文章を書く立場での接続語の使い方については六四～六六％の正答が得られた。

○読字・書字については日常使われていることが出題されたが、ともに正答率の大きいものと小さいものとの格差が目立った（八〇％以上～二〇％以下）。総じて書字の力は劣るが、読字・書字ともに限られた字数のわりには正確な理解に欠けているようである。

以上のことから、基礎的な力を日常生活の中での確に身につけていくこと、必要に応じて細部を正確に分析していける読みの力をつけるようにすることが望まれる。

社会

第一学年

基礎的事項についての知識・理解は、おおむねよいが、資料を読みとり活用する力がやや劣り、類推的に考える力も弱いように思われる。

○日本の農業については、おおむねよいが(五四・七%)工業はやや弱く(三三%)、都市・鉄道は劣る(二九・八%)。

○世界の農業はおおむねよいが(五八・七%)、工業はやや弱い(四六%)。また貿易はおおむねよい(五四・四%)。

○五万分の一地図の読みとりは、おおむねよいが(五六・五%)、その中で断面図の読みとりは弱い(三二・一%)。

○事象を地図上の位置と関連づけてとらえることはやや弱い。

第二学年

基礎的事項についての知識・理解はおおむねよいが、時代の特色をとらえたり、時代の移り変わりやその間の因果関係をとらえることはやや弱いように思われる。

○日本の土地制度、政治・経済・社会についてはおおむねよいが(六五・四%)、文化の特色についてはやや弱い(二六・三%)。

○世界の古代(四九・二%)および近代(五六・七%)はおおむねよい。

○因果関係については、日本の古代・封建時代のもはやや弱い(四〇・一%)、近代のものはい(五六%)。

○歴史的なことがらを地図上の位置と結びつけてとらえたり、年表に位置づけてとらえることはおおむねよい(五八・八%)。

数 学

第一学年

平易な計算問題の処理は大体できるが、累乗の混合算や統計数値の計算などになると計算力の不足が目立ってくる。また整数を構成的にながめて処理したり、関係を文字式で表わしたりする理論的な能力に乏しい。

○簡単な方程式および不等式の解法についての理解がやや不足している(四〇・五〇%)。

○関係を文字式で表わす能力に乏しい(一五・三〇%)。

○関係式とそのグラフについては大体よく理解されている(六〇・七五%)。

○三角形の合同に関連する平面図形の基礎事項の理解はおおむねよい(六七・七五%)。

○弧の長さや円すいの体積などの計量問題は意外にできが悪かった(二五・四〇%)。

○統計に関する問題(ヒストグラム・代表値)および集合の基礎事項についての理解は、良好であった(七〇・九〇%)。

第二学年

得点分布の状態は、低得点者が比較的多くなり、変則的なグラフとなった。ある程度は学科の特質でもあろうが、出題の方法および学習指導の両面からのいっそうの検討が必要である。

各領域別にみると、

○数・式の計算および方程式、不等式の解法はだいたい習得されている(四五・七〇%)。しかし文字式の計算力の不足が目立った(二九・四%)。

○文字を含んだ関係式の変数、定数およびそれらの関係の識別力が乏しい(四・二〇%)。

○一次関数とそのグラフについての理解度が案外低かった(三二・三七%)。

○移行措置事項である順列および確率については大体よく理解されていた(六〇・六五%)。

○平面図形の基礎知識・論証能力および立体図形に関する相似比と面積比についての理解度はややふじゅうぶんのようである(三〇・六〇%)。

理 科

第一学年「ママ」

全体としては、平均二七・一%であったが、それぞれ小問ごとの正答率をみると、最高は問四(ウ)の八二・九%で最低は問二(イ)の一五・六%である。さらにいくつかの小問については、

○問二(イ)はグラフの形から融解熱の最も大きい固体を選ぶのであるが、正答率が一五・六%と低い。グラフの見方について指導が望まれる。

○問四(ア)実験装置に関する問題は八二・四%、(ウ)気体の識別について八二・九%、また問五(ア)の分類に関する問題は八〇・九%とできがよかった。

○問七(ア)(エ)は星座の移り変わりを示すモデルから推論するのであるが、それぞれ二七・二%、二三・四%と低く、今後力を入れていく必要がある。

○問八(ウ)は、二四・六%と低い。仕事、まさつ、ばねの伸びなど仕事を中心として総合的に理解させることが必要である。

第二学年

全体としては、平均三〇・四％であったが、それぞれの小問ごとの正答率を見ると、最高は、問四（イ）の八七・五％で最低は問八の二〇・三％である。さらにいくつかの小問についてみると、

○問四（イ）は、気温と気圧の記録から推論するのであるが、よくできていた。

○問二（イ）の実験方法については八三・〇％、問三（ア）キロワット時（ kWh ）という基礎知識についても八五・〇％とよくできていた。

○問八の実験事実からの推論については二〇・三％と低い。まさつ力、力の分解などの総合的理解が必要である。

音楽

第一学年

歌唱、器楽の領域に比較して、基礎、創作、鑑賞の領域には正答率の低いものが目立つ、比較的正答率の低いものとしては、

○歌唱共通教材「わかれに」に関する問題のうち、弱起のリズムについて（三四・五％）。

○「ローレライ」に関する問題のうち、変口長調の和音について（三三・三％）

○合奏譜の和音について（三三・三％）

○創作に関する問題のうち、動機を組み合わせて一部形式（a a）の曲にまとめるもの（三五・四％）また、日本の音階（陽音階）について（三六・八％）

○鑑賞共通教材に関する問題のうち、「チゴイネルワイゼン」の曲名、作曲家、演奏形態楽曲の特徴その他について（二九・七％）
などがあげられる。

第二学年

比較的正答率の低いものとして

○「眠りの精」の楽譜についての記譜（三一・四％）

○低音部譜表とけんばん図とを結びつける問題（二九・五・三七・二％）

○ホ短調の調合についての理解（二二・三％）

○合奏譜に関して、旋律に対して正しく和声づける問題―和音の理解―（三四・三％）

○創作に関する問題のうち、日本の音階（陰音階）の旋律進行の不自然な個所を発見させる問題（二二・五％）また一部形式についての理解（三九・〇％）

○短い旋律を組み合わせて、二部形式A（a' a'）B（b' b'）の曲にまとめる問題の④（二五・二％）
などがあげられる。

以上のことから、知的理解の指導についてはできるだけ表現・鑑賞の実技と関連づけて系統的に実施すること。特に、聴取・読譜記譜については、その内容が各領域共通の基礎的事項であることから、その徹底を図ることが大切である。

美術

第一学年

二年にも共通していえるが、形式化した内容や表現の問題は比較的よくできるのに、ほり下げた内容や構成的な処理などが劣り、このためには基礎的学習としての発想力や構成力などが、より豊かに深められる学習となるように考えていきたい。

○絵画領域では単純な構図でも表現上の関連がつかめないものが多く、写生などの指導の場にこれらを留意していききたい。問二の鑑賞を含めた問題では「象徴的」「愛らしい」という意味について迷ったほかはよくできている。

○彫塑（そ）領域問三では「流し込み成型」の経験がないためかきわめて劣るが、そのほかはよい。材料経験の時間が少ないので、発展的に扱って指導していききたい。

○基礎練習問四は技法的处理とデザインへの結びつきをみたが、技法過程での区別の差が少ないものではあまりよくない。問五は比較的よいが、問八の折り曲げでの直感的な形体のは握と、空間的に展開できる力など、やや複合的な内容はあまりよくできていない。

○デザインの領域問六では、総合されたアイデア力をみようとしたが、全般に低調で、発想面の学習がさらに望まれる。問七のポスターは全般によい。

第二学年

問題ごとの難易がみられ、領域によっては要素の複合された問題があまりよくない。

○絵画領域問一・問二は作者の個性的な特徴から技法的・表現的な面をみたが、構図的な面など、外面的なとらえ方からの間違いが多い。問五の鑑賞を含めた問題は非常によい。

○彫塑領域問七の石こうによる塑像技術では、石こうがよく使われているわりにはあまりよくない。

○基礎練習問三のジョイントでは、平面から立体への展開と、構造的な処理をみたが、折り目を図示しなかったため全般に低調である。

○デザイン領域問八のカレンダー・パッケージでは、機能としてのデザイン力が劣っている。合理性を求めて思考、創造をしていくデザインの学習の面も考えて指導していきたい。デザイン知識としての問四では、一般的な内容のためよくできている。

保健体育

第一学年

各運動領域、体育に関する知識とおおむね好成績を示しており、全般に基礎的な指導がゆきとどいているものと思われる。

○器械運動、陸上競技および球技などの運動領域においてはおおむね六〇％以上の正答率を示している。

○体育に関する知識は非常に好成績を示している。

○女子のダンスにおいてもおおむね各問とも五〇％以上の正答率を示している。

○全体の問題数三〇数問に対し五〇％以下の正答率は一〇問以内である。

しかし、徒手体操に関する正しい理解と、男子選択問題のうち器械運動にみられた一つの運動技能を、全体的には握する能力を育成する必要があると思われる。

第二学年

各運動領域、体育に関する知識および保健とおおむね好成績を示しており、全般的に基礎的な指導がゆきとどいているものと思われる。

○徒手体操、器械運動、陸上競技および球技とおおむね六〇％以上の正答率を示している。

○体育に関する知識は、非常に好成績である。

○保健では、傷害の防止、疲労と作業の能率、心身の発達と栄養および環境の衛生などとおおむね良好である。

○男子、女子とも各問に五〇％以上の正答率を収めたものが、それぞれ全体で七〇％以上を示している。

以上、全体として好成績を示しているが、男子では器械運動のうち鉄棒運動の

実践を通じて種目の連続のさせ方と、女子のダンスにおける表現の基礎的理論の把握が必要である。

技術・家庭 (男子向き)

第一学年

製図、木材加工の各領域とも好成績を示し、全般的には基礎的な指導が行きとどいていると思われる。

○図面の製図と読図を通して、投影法の理解は七三％。

○製図意図の的確さは四六％。

○木材の性質と加工法との関連については四六％。

○金属製品の設計と製作を通して、塑性加工の特徴についての理解・応用力は六七％という結果となったが、今後は特にくふう創造の能力を育成することが必要と思われる。

第二学年

木材加工、金属加工、機械、電気各領域とも正答率が高く、技能や応用力の伸長ならびに安全作業の心得など、指導がゆきとどいていると思われる。

○木製品の設計と製作を通じて、荷重と材料及び構造との関係についての理解は六二％。

○金属製品の設計と製作を通して、切削加工の特徴についての技能ならびに理解は五二％。

○電気回路のしくみについての理解は七二％。

という結果であったが、今後は特に技術と生活との密接な関連の理解と技術面からのくふうが必要と思われる。

技術・家庭 (女子向き)

第一学年

全般的には各領域とも基礎的事項の理解が比較的良好であった。正答率が低かったものは、食品に含まれる栄養素の理解(二六％)、米を炊飯する場合の、米の吸水性と浸水の必要および適切な火かげんの理解(一九％)である。これは食品の調理上の性質を理解するための調理実習活動が乏しいためと思われる。また家庭機械のうちミシンの取り扱いに対する理解が低かった(二七％)。

第二学年

全般的には各領域とも基礎的事項の理解が比較的良好であった。正答率の低かったものは、かんでんの浸水による膨潤と、かんでんの濃度についての理解（二三％）、被服製作におけるボタンの穴かがりの手順の理解（一六％）である。以上のことから、実習活動が乏しいために、知識・理解が抽象的なものにとどまり、確かな理解になっていないといえよう。

英語

第一学年

すべての領域にわたって、ほぼ良好な結果がみられ、日ごろの指導がゆきとどいているものと思われる。

○音素の発音に関しては六一％。

○文のくぎりについては七八％。

○問いと答えの関連が六九％。

○語順に関する問題が四六％。

○語を書くことについては五二％。

○物語の理解に関するものが六七％。

を示している。今後も、なおいっそう各領域間の調和を保ちつつ指導を進めることが大切である。

第二学年

一年生よりやや進んだ言語材料を扱う二年生としては、おおむね良好な結果を示している。

すなわち

○音素の発音に関しては三五％。

○文における強勢については七八％。

○問いと答えとの関連が七八％。

○語順に関する問題が四九％。

○日本語にわたる英語を書く問題が二五％。

○物語の理解に関するものが五八％。

を示している。聞くこと・話すこと・読むことおよび書くことと相互のバランスのとれた指導がよりいっそう望まれる。

学習検査得点平均点の推移

年度 学年 科目	第 1 学 年			第 2 学 年		
	44 年	45 年	46 年	44 年	45 年	46 年
国 語	27.9	29.8	29.7	28.5	28.8	29.3
社 会	21.0	27.1	24.0	26.1	27.7	27.5
数 学	22.4	26.6	27.1	23.3	28.6	23.4
理 科	24.9	23.5	27.1	20.2	21.6	30.4
音 楽	30.1	26.9	24.7	28.0	24.6	23.9
美 術	31.5	25.7	26.6	40.0	36.5	28.7
保・体(男)	33.5	34.3	30.0	27.1	36.4	33.4
保・体(女)	30.9	31.0	31.3	28.2	37.2	31.2
技・家(男)	26.9	28.1	34.5	28.9	30.9	32.7
技・家(女)	28.5	29.6	30.9	30.0	28.4	30.6
外国語(英語)	30.0	33.5	32.2	27.7	27.1	24.0
男	27.6	28.4	27.9	27.0	29.1	28.3
総 合						
女	27.4	28.1	28.7	27.2	28.9	27.5

注 神奈川県教育委員会『教育月報』一九七二年五月号。

一六 久里浜中学校の校内暴力事件

なぜ起きた久里浜中事件

(著作権上の都合により省略します)

(著作権上の都合により省略します)

(著作権上の都合により省略します)

『神奈川新聞』一九七二年一月二十九日。

注 「発言 かながわ広場」欄に掲載されている。

一七 中学校給食実施をめぐる賛否

賛否真つ二つ 中学生の給食
普及率（6.8％）低い本県
父母「ぜひ…」神教組「負担増に…」

（著作権上の都合により省略します）

（著作権上の都合により省略します）

(著作権上の都合により省略します)

『神奈川新聞』一九七二年二月二八日。

注 「教育 かながわ広場」欄に掲載されている。